

---

# ひどい人・改

闘神自殺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひどい人・改

### 【Nコード】

N0499BA

### 【作者名】

闘神自殺

### 【あらすじ】

他のサイトでも投稿しています。

北朝鮮のエース「トシ・アキ」と南朝鮮の怪人「パク・サンス」、二人の理不尽な主人公を中心に物語は様々な視点で描かれています。

## 発進する異常者

某月某日。

息を潜めながら密林を抜け、敵の陣地ももう間近。足幅もおぼつかない崖の狭路を先行して駆け抜け安全を確認し、後続の兵士たちが渡ろうとしたところで、なんとなく対面から榴弾投擲。爆煙と血臭にまみれ混乱しているところを狙い、なんとなく殿から順に機関銃で八チの巢にしました。

たかがそのくらいで、自分は裏切り者扱い。

死ぬ裏切り者と罵られ、味方は血走った目で一斉に反撃してくる。このくらい、同盟政府だったら誤射で済ましてくれるのに、ほんと最近の人達は心が狭いです。凡百の兵士なんて使い捨て用員ですよ？ どうせ敵陣に乗り込んだら九割は帰らぬ人になるんです。エースの自分がストレス発散に五、六人殺したところで、それは許されてしかるべきことですよ。

足を引っ張られないように間引いてやったと言うのに……ぶつぶつ。

2

某月某日。

山岳地帯に隠されていた敵のミサイル基地を叩くことに成功した自分。追撃から逃れるために切り立った渓谷を抜ける。

敵の伏兵や巧妙なトラップに苦しみながらも八km先の連絡地点までどうにか逃げ切った。あとは支援爆撃を要請し、敵の部隊を分断すれば作戦成功である……ところがどっこい。エースの自分を差し置いて兵士たちが「やったぞ！」とか「逃げ切ったぞ！」とか、喜び勇みながら自分の前を先行する愚挙に。

これでは新兵たちに示しがつかないと思った自分。

ヘリの到着を待つ兵士の輪の中心目がけ、榴弾を放る。

どか〜ん！

爆発に巻き込まれ、爆発の中心に居た不逞者たちが一瞬にして木っ端に。肉片に。するとどうだ。ぶつとばされながらもかるうじて生き残った数名の兵士たちが「この裏切り者がっ！」と絶叫し、その凶弾を振るって来た。

……エースですよ、自分は？

奴らが先行していいのは地雷原ぐらいなもんで、断りもなく勝手に自分の先を走るなど万死に値します。敵陣に潜入したとき、射線の邪魔になるからって五人ぐらい撃ち殺したのをまだ根にもっていませんですよ……まったく。ぶつぶつ……。

某月某日。

任務を終えて凱旋帰国　かと思えば、誰がチクつたのか軍法会議。

なんででしょう、この扱い。

エースですよ、自分は？

一度の戦闘で百人以上の敵兵を殺傷し、味方はその倍ぐらい殺傷したけど、英雄中の英雄　英雄王の名にふさわしい勇者ですよ？ それを……たかが軍糧や医療品を売っぱらって味方を餓死させたり、気晴らしに偽の命令書偽造して、部隊を敵陣に突っ込ませて孤立させたぐらいで。

軍法会議では裁判官も陪審員も申し合わせたかのように左寄りだし、傍聴人は自分が何かしゃべろうとすると狂ったように騒ぐし、お陰で結果は有罪。半年間の営倉入りです。あの裁判官きつと、皮を剥いだ犬を庭先に放り込んだのをまだ根にもってるんですよ……まったく。ぶつぶつ……。

某月某日。

入倉前の健康診断で精神に異常があると診断され、いきなり無罪

になった自分。

は？ 異常？ 誰が？

自分はエースですよ？

全ての人の範であり、全ての人の指針であり、全ての人の指標である。それが自分。モノにたとえるなら聖書バイブルですよ。自分・IS・バイブルです！！ 聖書に対しておまえが間違っているとか埒外なんですよ。異常者はむしろ医者であると思いました。

そんなわけで、是が非でも自分が正常であることを解らせようと医者に殴りかかり、骨を三本折って片目を失明させたのですが、何故か結果は変わりませんでした。

有刺鉄線と電流に囲まれた、邪道・オオニタ所長が指揮する人格矯正施設 『インフェルノ』。自分はそこに収監され、レクタ―博士なみの嚴重な監視の下、不当に拘束され、食事や用便もままならない生活を送っています。あのヤブ医者、奥さん以外の派手な交際履歴を自分がネットで公表したから根にもっているんですよ。まったく、あの少年愛好者が。

某月某日。

矯正施設に放り込まれて一カ月もしたでしょうか、行き届いた連日の教育（洗脳）や体罰（指導）で大分身体が参っていたとき、ピザデブの看守が血相を変えて監房に駆け込んで来ました。

「宇宙人だっ！！」

トドのような幾重にも垂れた頬肉を歪ませ、監房の鉄格子にしがみ付いて、看守殿はそのような妄言をおっしゃいました。

自分は正直、「はア……？」って思いましたね。宇宙人なんか存るワケないじゃないですか。あんなの、ちょっとヒロポン効かせ過ぎた人が見間違えただけの幻ですよ。

確かに、向こうの薄暗い廊下からヒタヒタ歩いてくる銀色のヤツは居ますが、それは単に眼が吊り上ってて頭がでっかいたただの人です。おもちゃのような銃から虹色の光線出して看守達や患者を次々

に分解してますが、それは単に科学が発達したところから来た外人です。断じて宇宙人ではありません。

日中からそんな寝言言うヤツに矯正施設の一端を任せているなんて、この国の病理も随分根が深いです。経済制裁されたぐらいで逆恨みして、ミサイルガンガン飛ばすし。

しかしそんな自分の憂いなど知らず、デブの看守は宇宙人が来たの一点張りでヒートするばかり。

近い将来この国を導く首席として、普段目の届かない場所の見識を深めておきたかったのですが……それはどうやら正解だったようです。ああいった腐った輩を一匹残らず駆逐するのが急務だと実感しました。

矯正施設が何者かの襲撃を受けて壊滅。移転先を散々たらい回しにされた後、自分は郊外の寂れた収容所に送られました。

あの騒動の後、生き残ったピザデブが事情聴取の席で「宇宙人だよ!!!」ムー”に載っているような銀色の宇宙人が空から攻めて来て、透明な水色の銃で、虹色の輪っかの光線出して、みんなを煙みたいに消したんだよ!!!」とか言ったらしいので、彼も自分と同じ場所に収容されたようです。

不思議なことに、この国が世界に誇る(この国は誇っている)広範囲の防空レーダーに、あの銀色のヤツらはかすりもしなかったそう、政府の方々は自分の証言もピザデブの証言も取り合ってはくれず、結局あの襲撃事件は仮想敵国である南の某国の仕業だということが決着が着きました。

しかし、自分が見た”アレ”の正体は判らず仕舞い。

なんだったんでしよう、アレ? 銀色だし。病気?

移転先の新居は、八畳一間に十二人がスシ詰め状態のタコ部屋でした。備え付けの汲み取り式トイレからは絶えず悪臭が漂い、密閉された部屋にムンムンと熱気が籠る。三十cm四方の窓枠に収まっ

ている針金で補強された擦りガラスからは口々に陽も射さない。裸電球の橙色の薄明かりの下、蛆やゴキブリが我が物顔で徘徊している。自分が遙々やって来たトコは、そんな素敵なお部屋。

こんな場所でも例によってヒエラルキーが存在し、親分が居て、取り巻きが居て、虐げられる者が居ます。彼らは新入りの自分を無遠慮にジロジロ値踏みし、どの程度なのか見定めていらっしました。

高貴な出自の自分が部屋の惨状に戸惑っていると、取り巻きのチビ1人が歩み寄り、親分に挨拶しろと言ってきたので、とりあえず顔を殴っておきました。

「ひゃがぶっ!？」

リストを利かせた裏拳で鼻骨を砕いたので、水溜りに落としたムシケラのように悶絶する殴られた人。それを見て一瞬にして、彼らの興味が殺気に変わりました。

「……やれやれ」

こうなつては戦うしかありません。正直、あまり近接戦闘は得意ではないのですが……まあ、そこはエース。それなりに軍隊格闘術マイシャツ・アーツを修めているので、街の腕利きやチンピラが束になったところで対応出来ます。百八十秒後には、身体はどこかしらが永久に機能不全に陥った人々の骸が数えて六人。あとの六人は戦意喪失。ケツ穴でも開きそうな勢いで畳に額をこすり付けています。自分はどうか危機を脱しました。

牢名主として君臨した翌日のことでした。

「宇宙人だっ!!!」

二部屋隣のピザデブの牢獄からそんな悲鳴が。

時刻は丑三つ時。濃密な夜の帳が下り、冷たい夜気が肌を濡らし、耳が痛くなるほどの静寂が辺りを包み、十五歳は盗んだバイクで走り出す。そんな深夜のことでした。

何度も言いますが、宇宙人なんて存るワケありません。そりゃあ、

超能力者は存ますし幽霊も存ます。地下深くの秘密の研究施設では遺伝子を組み替えた半人半豚が闊歩してますし、空の上には天空文明が、海の奥底には旧文明のアトランティス大陸が存在します。だからと言って、宇宙人はいないでしょう？

確かに、前の施設で見た銀色のヤツ複数名が廊下をヒタヒタ歩いて来て、触るものみな分解してますが、あれは単に南半島の諜報員です。音も無く空に静止する円盤も、南の新しい航空兵器だけです。宇宙人なんて誇大妄想もいいところですよ。

結局、数時間による襲撃者の攻撃で施設は半壊。明け方になってまで生き残っていたのは、例によってピザデブと自分だけでした。

某月某日。

事情聴取の席でピザデブは「宇宙人だっ！ 本当なんだよ！！」とやや錯乱気味に喚き散らし、聴聞官は終始眉根をひそめていました。自分も見たとおりのことを喋りました。また別の施設に移送されるそうです。

「何故だ……何故なんだ……解らないよ」

「洩蛇虫<sup>モルダ</sup>、あなた疲れているのよ……」

数時間にも及ぶ綿密な事情徴収を終え、聴聞官の男女二人組が重い足取りで帰って行きました。

人格矯正施設でのファーストコンタクトから振り返り、自分は微に入り細に入り銀色の連中の情報を洗いざらい喋らされました。人格破綻者……または精神異常者として扱われている自分とピザデブの証言と現場検証の結果は完全に一致し、昨晚の襲撃事件の発端が妄想や夢の類では無いと結論付けられました。

聴聞官の方々は自分らの食い違った証言を言質に、人体消失や多数の目撃証言が取れた謎の円盤の不可解な存在をX-FIELD扱いにしてしまう魂胆だったようですが、それはどうやら徒勞に終わったようです。



結局、銀色の連中の正体は分らず終まい。なんなんでしょうねえ、あの人たち。どっかで見た様な気がするんですが。

三日後、十一回の受け入れ拒否を経て、どうにか新移転先に収監された自分。ついでにピザデブ。拒否られる前に事前連絡とかしなかったのかと不満もありますが、まあ百%襲撃を招く囚人なんてどこでも御免でしょう。

今度の新居は、前の場所よりも随分新しく、乾きたてのペンキの匂いがまだ残っています。新築ではなく一部を増改築したらしいのですが、清潔感があるのは好ましい限りでした。

この施設はある種の実験的な場所らしく、慣れるまで少々戸惑いました。

特に厳しい規律も無く、外出を除けば部屋の出入りは自由。二十一時の消灯前なら中庭で運動をすることも出来ますし、図書室で読書やゲーム、インターネットまで嗜むことが出来ます。食事は三食、栄養士がきちんとカロリーを計算したものが出されますし、お茶やお菓子も持ち出し自由ですし、清掃は三日ごとに業者が替わりにやってくれますし、自分たちは何もせず、ただボ〜つと過ごすだけ。なんだか申し訳ないぐらい居心地がいい場所でした。

「宇宙人だっ!!!」

そんな幸福の日々も長くは続かず、誰かが叫びました。

時刻は五三つ時。時計の秒針と囚人のイビキだけが支配する夜の世界。お隣のピザデブは前回の尋問じみた事情聴取ですっかり大人しくなり、もうどこでもいいやといった感じで息をひそめています。さすがに自分も、ここまでナメられたら黙ってはいられません。幸い部屋の扉は開いているので、今までのように黙って待つだけではありません。

さあさ、我が”キル・ゾーン”へようこそ。

【前回まのであらずじ】

転居先を狙ってしつこく襲撃してくる謎の敵とついに対峙し、退治することになった自分。

敵は胎児を銀色にしたような不気味な存在。人体をケムリにしてしまふ光線銃も厄介だ。

さあ、ここが鏢際。天王山。

いま”タイジ”って何回言ったっけ？

断末魔の悲鳴が通り過ぎた一瞬の間隙を縫い、自分は逡巡無く廊下に飛び出しました。上手くいけば背後を取れる。戦闘開始です。

数回の襲撃の間に、解ったことがあります。

それは、例の光線銃が人体にのみ有効であり、周囲の壁や天井には傷ひとつ付かなかったこと。消失した被害者の衣服や装飾品、歯の詰め物などはそのまま残されていました。光線銃の正体は、遮蔽物をものともせず人体のみを殺傷する ” 中性子爆弾 ” みたいなモンでしょうか？

まあそういうワケで、光線にさえ直接触れなければ、奴らは敵じゃないということです。

「キュピッ」

前列から離れて殿を歩く1体が、前触れもなく振り返り、自分を認識しました。……気配は完全に殺していたのに。

銀色のヤツは小鳥を絞めたような嫌な奇声を上げ、手にしていた銃をこちらに向けて構えます。常夜灯の薄明かりが、不気味な襲撃者の輪郭を露わにしました。

電球を思わせる異様に肥大した頭部。

意思を感じさせない作り物めいた黒の双眸。

病人のように痩せコケた頬。骨ばった細い手足。

とても人間には思えない風貌でした。

襲撃者の十八番を奪うバックアタックの目論見が開始早々破れ、

自分は内心焦りました。距離が離れすぎていて、素手のままでは明らかにこちらが不利。敵から眼を離さないようにしながらジリジリと後退していると、ケムリにされてしまった看守の衣服にまで辿り着きました。

銃か何か……この際、警棒でもありがたい。

確実に歩み寄ってくる不気味なプレッシャーに襲われつつ足の裏で衣服を掻き分けていると、足の親指に盗難防止用のチェーンが引っかかりました。

自分は「しめた」と思い、チェーンを引っ掛けた親指を一気に引きます。かわいいネコちゃんの写真が収まった定期入れが飛び出しました。

飛び出てきたのはネコちゃん。生後間もないつぶらな瞳のヌコ。終わった……死を覚悟した瞬間、自分の死神となるはずであった”銀色”が、不意に側面からの凄まじいマズルフラッシュを浴びて細切れに四散しました。

壁際にへばりつきドス緑色の内臓を晒す死骸。明らかに即死……しかし、機銃の閃光は止むことなく、わずかに原型を留めた上半身をも冷酷に引き裂きます。

「撃ッ!!!」

自分の背後から力強い号令が発せられました。殺戮の命を受け、兵士たちは生き残っている前方の”銀色”どもに向け、再び機銃の斉射を開始します。天井から、窓から、廊下から、都市迷彩に身を包んだ数十名の兵士たちが銃器を携え、一糸乱れぬ連携で廊下を制圧。抵抗の暇を与えず、銀色どもを緑色のミンチに変えていきます。なんぞこれ？

突然のことに驚いた自分は、近くにいた指揮官らしき男にネコちゃんの写真を見せ、顔が緩んだところをブン殴り、腰に提げていた拳銃を奪って背後に回り、銃口をこめかみに押し付けました。

「……っ!!!?」

予想外の間から指揮官を捕獲され、一気に浮き足立つ兵士たち。

この程度で戸惑うとは錬度が足りません。彼らへの戒めのため、自分分は手近の兵士の太腿を拳銃で撃ち抜き、なんか邪魔だからとつとと帰れと怒鳴りつけました。

「責様正気か……？　こんなことしてタダで……」

タン！

ぶつくさ言って邪魔だから、指揮官の頭を弾きました。

廊下に響く乾いた銃声。側頭部の頭蓋の一部が砕け、指揮官の脳漿が水鉄砲のようにピューツと噴き出し壁に掛かりました。

「~~~~ツ！！」

自分を口汚く罵る怒声と共に、数十もの銃口が一斉に向けられました。無数の銃口を中心に晒された自分は、さながらトゲトゲが生えたウニのよう。ピンチではありませんが、身を引き裂かんばかりの彼らの悲痛な憎悪が心地よくもありました。

しかし、強襲部隊にしては研鑽が足りません。

狭い廊下に不向きな長大なライフル。少数の敵勢力に対して必要以上の人員。波頭に揺れるゴムボールのように浮き沈みする未熟な精神。敵を前にして強大なるエースに叛意を見せる非合理性。カタカタと小刻みに揺れる銃身が彼らの動揺を物語るようです。

「ぐあがつ！！？」

彼らは背後の銀色を忘れてたのでしょうか。光線を背中に受けた兵士の一人が蒸発しました。皮膚が溶けてピンク色の筋肉が露出し、マーブル模様の筋肉が泡となって消え、骨格だけとなった体すら跡形も無く完全に蒸発して、衣服や銃火器などの無機物を除いた全てが煙と化す。その間、わずか三秒弱の出来事でした。

「すみません、犠牲になってください」

ちゃんと謝ってから、自分は背を向けていた兵士の尻を蹴り飛ばしました。蹴られた勢いで人垣を押し分け、水の中をもぐくように手をバタバタさせて最前線に飛び出す兵士。ガケの先端でつんのめるようにして止まった瞬間　彼は光線の餌食に。

「ひ、ひいい！！？」

「う、うわ・・・わあああつ！！！」

恐慌状態に陥った兵士達が我先に逃亡を図ったり、ヤケになって敵に立ち向かおうとしました。その噛み合わない行動で、あつという間に陣形がグダグダになってしまいます。長尺なパレルのライフルが、ライフルを支える為に銃底に伸ばした手が、肘が、堅く張った肩が、大きくスタンスを広げた両足が、怯え昂ぶる心が、全て仇となってぶつかり合い、重なり合い、それが狭い廊下一杯に密集してダンゴ状態に。

「ぎゃああつ！！？」

身動きが取れなくなった兵士達は絶好の的。銀色から、もしくは自分から、前後からの挟撃を受けて阿鼻叫喚の地獄になりました。

自分は隙を衝いて仰角を付けて床を撃ちました。銃弾はリノリウムの硬く滑る床に弾かれ、兵士の足元を抉ります。

先ほど人質の頭を弾いたときに気付きましたが、連中は愚かにも携帯する拳銃に兆弾対策を考慮した弾頭を使っておらず、弾は水面を切る小石のようによく跳ねます。狙いもつけず出鱈目な連射でもこれだけ密集していれば必ず誰かの足に当たりました。

「た、たすけて！！！」

彼らはアワ食って反射的に反撃の姿勢を取りますが、仲間が邪魔でまともに銃が構えられません。判断のいい1人が腰の拳銃に手を伸ばしますが、自分はその隙を見逃さず即座に頭を撃ち抜きました。

タタンッ

吐く息が混じり合い、体臭が鼻梁を掠め、互いの心臓の鼓動が聴こえそうな超近距離での銃撃戦。 ”GUN道”。至近距離で最大限の力を発揮します。自分は壁を蹴って密集地帯から上空に飛び出し、兵の頭上から銃を構えます。

「すげえ……あのおっさん、落ちながら戦ぐぎゃつ！！？」

余計なことを口走った兵士を射殺しました。

ひよんなことから、友軍相手に”ガンカタ”（リベリオンで調べてみよう！）の真似事。おそるべき殺人光線の前に立ちはだかつ

た彼らの挺身を……自分は忘れません。

「ああん、もう!! 邪魔ッ!!」

タンタンッ!

迂闊にも射線に入って来た愚鈍な兵士。自分はその頭部を迷わず撃ち抜きました。真に恐るべきは使えぬ味方。やむを得ない犠牲です。

「ぐぎやああッ!!」

「ひぎいいいいッ!! こんなの入らないッ!!」

敵の殺人光線の威力は凄まじいばかり。味方は半数以下に激滅し、このままでは自分を守る盾(兵)が居なくなってしまう。

こんなところで死んだら……。

こんなところで死んだら、自分がおもしろ半分に殺してきた仲間達に顔向け出来ません。自分は……自分1人だけの身体ではなく、この半島に無くてはならない、唯一無謬の存在なのです。

「戦略的撤退!」

背筋が凍りつくような身の危険を感じ、自分は直感に従い、敵に背を見せて遁走。武器を捨ててスタコラ逃げ出しました。

「な……っ!？」

残った人員で防衛線を張っていた兵士達がザワめきます。

素人はこれだから駄目です。

今のはエースだからこそ出来る勇退。鋭い判断力が光ります。

「退いてください」

一緒に逃げようとした逃亡兵の背中を突き飛ばし、その頭を踏み越え、自分はわき目も振らず長い廊下を駆け抜けました。

「ばるさー……!……ん!!」

残してきた兵士達が気がかりで仕方が無いです……しかし、この国の未来のために、今はこの場を去ります。

さようなら。また逢う日まで。

勇気ある撤退から数日後。あの事件で全滅した兵士たちの葬儀が

雨の中、しめやかに行われました。

喪服に身を包み、悲しみに暮れる家族達。

息子の棺にすがり付き、激しく慟哭する母親。

悲しみの空気に触発され泣き叫ぶ幼子。

地面に両膝を着き、呆然と天を仰ぐ老婆。

多くの遺族たちの嗚咽がいつまでも聴こえました。

三十六名もの合同葬儀だというのに、国に献身を尽くした彼らの遺体は一つとして無い。棺には、彼らがこの世にいたという痕跡だけが詰められていました。

実は自分、逃げた後でちょっと後ろめたくなって、後でこっそり覗きに戻ったんです。

耳鳴りがするほど静かな施設内から銀色の連中は残らず消えていて、残っていたのは廊下に散乱した大量の衣類と銃器。むせ返るような硝煙と血のニオイ。

「うはっ、死ぬかと思った!」

あと、トイレから出てきたピザデブ。

誰も居ない静謐なまでの空間。長い長い廊下は、天窓から差す陽射しを受け眩いばかりに白く輝き、まるで昨晚の襲撃が嘘だったような光景でした。

私は目に涙を湛え、供養の意味も込めて財布からお金を抜いたり、拾った金歯をチヨロまかしたりしたのですが、彼らを救えなかった慙愧の念は、いつまでも自分を強く責め立てます。ピザデブはトイレの中で瓦礫に埋もれてまんまと生き残ったというのに、なぜ愛すべき兵士達が死なねばならなかったのでしょうか？ まったく……まったくもって残念です。本当に無念です。

献花を終えると、御遺体の代わりにわずかな遺品と人数分の人形が茶毘に伏されます。ポツポツと振り続ける小雨の中、灰色の曇り空へと昇る細く小さな煙。

自分は身代わりとなつて果てた英霊を悼み、墓穴に百円放り込んで拍手を打つたら、顔を真っ赤にした遺族のおじさんに胸グラを掴まれました。

「あ、あの……？」

彼が何故怒つたのか解りませんが、あからさまに敵意を向けられたら、自分は身を守らねばなりません。襟首を握る手首を掴んで外側に軽く捻り、体を入れ替えるようにおじさんの身体が前のめりになったところを狙つて、肘を支点に腕をヘシ折りました。

「ぶぎいいッ！！！」

おじさんは豚を屠殺したような下品な悲鳴を上げてうずくまります。その光景を見た遺族達が驚き、慌てて駆け寄つて来ました。

「やめてください！ 何をするんですか!?!」

激痛に呻くおじさんを介抱しながら、ご遺族の若い女性の方が非難するような眼をこちらに向けて来ます。

「何をするのか」……それはこちらが尋きたいくらいでしたが、きっと彼らは身内の急逝で大分参っているでしょう。自分にとってはとても理不尽なことですが、これ以上ここに留まることはお互いのためにならないと思いました。

亡くなつた兵士たちに……そして遺族達に短く一礼し、自分は急いでその場から踵を返しました。

葬儀が無事に終わった翌日、未だ事件の渦中に置かれていると判断された自分は、事実確認のため本部に呼び出しを食らいました。

工具でこじ開けた車庫からお借りした日本車で首都に入り、久しぶりのシャバの空気と街の活気に当てられつい、あちこち歩き回り、大型チェーンのゲーセンで格ゲー筐体に張り付いている小学生を散々力もつてから予定到着時刻の四時間遅れで本部に出頭すると、電気が消えた薄暗い部屋の中央で、司令官殿が頬杖を付いて佇むように待っておられました。

「……遅かつたな」



「申し訳ありません」

素直に謝ると、司令官殿の顔が一瞬、引きつったような気がしました。

アメリカ人とのハーフである司令官殿は齡六十を数える白髪のお兵ですが、未だ現役の一線で戦いをこなす生粋の戦士で、その双眸には怖気のような静かな蒼い光を湛え、凄まじい戦歴を物語るかのように、口髭をたくわえた面長の顔には余すことなく無数の切り傷が刻まれています。

自分は、司令室の中央に鎮座する立派な黒檀の机の前にまで進み、司令官殿の胸ポケットからライターを拝借してタバコに火を点けました。

司令官殿は大の嫌煙家です。自分は彼の好き嫌いを正そうと足しげにタバコの煙を吐きに来るのですが、今日は兵士を助けられなかった後ろめたさもあってか、“セブンスター”から“セブンスター・ライト”に銘柄を替えておきました。

「ゴホ……ゴホ、ゴホ……！」

「司令殿、用件をお聞きしたいのですが」

煙の軽いタバコに替えたというのに、司令官殿は喉を押さえて苦しそうにしていらつしゃいます。施設に送られて日課を怠ったから煙への耐性が薄れてしまったのでしょうか。申し訳なさと胸がいつぱいになってしまいました。

「ゴホゴホッ！ ゲホッ！」

激しく咳込む司令官殿。肺か喉を患われていらつしゃるのか、その鬼気迫る苦悶の表情に、僭越ながらもお体を心配してまいります。

「司令官殿、お気を確かに」

新しくタバコに火を点けながら、苦しさのあまり奇妙な奇声を上げ始めた司令官殿をたしなめ、椅子に腰深く座らせて差しげます。

この国を牛耳る首席とブサイクな息子達の放蕩が国家の屋台骨を揺るがし続ける昨今、さらに連日の激務に加え重責を背負っておられる。この方がいらつしゃなければ、この国はとうに中華連合か西

洋列強にでも支配されていたでしょう。どうか、ご自愛頂きたいのですが。

「司令官殿、お加減が優れないご様子ですので、今日はこれで失礼させていただきます」

「ま……まて、何のために呼び出し……」

震える手で退室を制止する司令官殿。

なんと気丈な。その溢れんばかりの愛国心に頭が下がります。

この方こそ半島を背負うに相応しい人材。

自分は銜えていたタバコの火を司令官殿の手の甲に押し付け、無理にでも休息を取って頂こうとしました。しかし、司令官殿はそんな自分の制止を振り切り、何度も何度も咳込みながら何かを必死に伝えようとしておられました。

「グエ……ムル」

”グエムル”……確かにそう聞こえました。

「グエムル……ですか？」

「なあ……その押し付けてるタバコ、そろそろ離して欲しいんだけど……」

今ここでタバコを離せば、司令官殿は病んだ身体に無理を強いても職務を果たさそうとなさるでしょう。とても心配です。だがしかし……この御方の死をも厭わぬ克己心を、いったい誰が止められるというのでしょうか。

「チツ」

司令官殿を救えぬ自分の無力に舌打ちし、手の甲にグリグリ押し付けていたタバコを不承不承銜え直しました。司令官殿は涙目になりながら、焼け焦げた手の甲を押さえ、息をフーフー吹きかけていらっやいます。自分は……本当に無力です。

「おい司令、とつとと用件をYeah。こつちは座ってるだけのアంతと違って暇じゃないんツスよ」

「あ……ああ、すまん」

任務のために立ち上がった司令官殿の御心に水を注すような真似

は死んでも出来ません。自分はワザと慇懃無礼な強い口調で司令官殿を鼓舞しました。

「まずは、これを観てくれ」

司令官殿はそう告げると、机に内臓されていたプロジェクターを起動させ、壁に掛けてあるスクリーンを顎で差しました

”グエムル”

地下水道を駆け抜ける巨大な黒い怪物。

ナメクジを想起させる、生理的嫌悪を催すような不気味なフォルム。

そいつは逃げ惑うアジア系の男女数名に襲いかかり、それを貪欲に捕食する。

外見の鈍重さからは想像も付かない高機動力。食欲旺盛にして獰猛。天井知らずのタフさで銃撃をもともせず突進する。

しかしこれは……。

「パトレ」

「黙れエエツツ!!!」

怪物の姿がパトレイバーに出てくる化け物と酷似していると口にしようとした途端、司令官殿は物凄い剣幕で掴み掛かって来ました。普段の温厚な御姿からは想像も出来ない苛烈な怒声に驚き、自分は反射的に金的を放ってしまいそうになりました。というか放ってました。

「……ぐはっ」

司令官殿は肺の中の空気を全部吐き出したような声を漏らし、股間を押さえてその場に崩れ落ちます。

「すみません、ワザとではありません」

「~~~~~」

自分の弁明が聞こえていないのか、司令殿は丸くなってプルプル震えながら呻いていらっやいます。どうにか謝罪の意を汲んで貰おうと腹部を爪先で蹴り上げ、身体をくの字に浮き上がらせてから、耳を引っ張って強引にこちらを向かせ、謝ろうとしましたが、もの

凄く怖い眼で睨まれたので止めました。

グエムル打倒。

それが、とつとと出て行けとおっしゃられた司令官殿より課せられた任務でした。

我が祖国と仮想敵国である南半島は、同じ島国にありながら三八度線を隔てて南北に別たれています。二つの国は互いに干渉せず長らく冷戦状態が続いていましたが、とうとうその宿敵が隠し持った牙を剥いて来た……。

今回の映像は、その南半島より瀕死の諜報員が持ち帰ったという極秘情報。後に、あの映像と一緒に観た生体工学の権威であるキリコ女史は「どー見てもCGです」とわざわざ司令官殿に進言してくれたのですが、良くも悪くも堅物で昔気質の司令官殿は、あの荒唐無稽な存在をすっかり信じ込んでおられる御様子。

「グエムルを倒せッ!!」  
蹴撃された股間を氷囊で冷やしながら、司令官殿はおっしゃいました。

祖国・北半島。

痩せ細った国土に資源は少なく、交易もほとんど廃れ、我が国は荒廃の一途を辿っています。人口に比べて生産能力がまったく足りず、首都から数百mも歩けば、樹の皮を剥がして飢えを凌ぐほどの飢民が数十万人も溢れ返っています。そんな嫌が応にも厭戦感が漂う状況で、疲弊した国民の失われ欠けている戦意昂揚を図るため、司令官殿はあのグエムルを倒し、持ち帰れとまでおっしゃる。

「ご冗談を……」

このときは本気でそう思いました。

しかし、自分に向けられている司令官殿の巖のようなご尊顔に、一点の曇りもありません。

グエムル討伐……存もしない怪物を探しに、自分は南半島へと送

り込まれる破目に。

屏風の虎を退治するような無理難題を押し付けられ、トボトボと本部を後にした自分。ちよつとした腹いせに、通りかかった村の井戸に水銀混ぜたりしましたが、気分は一向に晴れません。一縷の望みを賭け、コレクトコールで尊敬するガチャピン師匠に悩み相談の電話を掛けましたが、「今すぐPCを窓から放り捨てて、首を吊るんだ！」と酷いお言葉。

八方塞の暗中模索。

泥濘に足を取られたような絶望に駆られます。

しかし、どんな理不尽な要求にも応えるのが兵隊の宿命。グエムルの存る存ないに関わらず、自分は緩衝地帯を抜けて国境を越え、南半島へと赴かねばなりません。

「アキ……トシアキなのか？」

「……？」

土手で不貞寝していると不意に、誰かから声を掛けられました。

「誰だろう、殺すぞ」と思って首を後ろに傾けてみると、そこには

上弦の月光の下に立つ……カレーパンマンの姿が。

「シモンキン……？ シモンキンじゃないかつ！！」

一瞬カレーパンマンに見えた怪物のような男は、自分が心より信頼する戦友、シモンキンに他なりませんでした。

五年前 共に出兵したアジアの最大を誇る中華の魔大陸で、彼は敵軍の地雷を踏んで顔をズダズダに引き裂かれてしまった。瀕死の重傷を負い、ヘリでただちに病院に搬送され、医師たちの懸命な治療によってかろうじて一命を取り留めたのですが……その顔は整形しても元通りにはならず、彼は哀れにもカレーパンマンのような顔になってしまった。顔中に発疹が出て皮膚の色が黄色になってしまったのは、医者が言うにはホルモンバランスの異常らしいです。ねえよ。

夜空を見上げ、途方に暮れていた自分の前に現れたのは、断金の友”シモンキン”。

シモンキン！ シモンキンじゃないか！

再会はいつも突然に。

「なつかしいなあ！！ こんなところで何してるんだよ？」

「いや、まあ……いろいろと」

極秘任務中なので、たとえ友人であろうと悩みを打ち明けることは出来ません。でもそんなことより、こんな絶望的な状況で思いもかけず親友に出逢えた僥倖を、今は噛み締めていたい。

「そうか？ ……近くの村の井戸の前で、人が大勢死んでいた。みんな大騒ぎだったよ。ああっ……畜生っ！！ きつと、また南の連中の仕業だ！ アイツら、女子供でも容赦しやがらねえから！！」

「へえ……そんなことが？」

さっきの水銀。  
尻ポケットに収まっている小瓶に思わず手が伸びそうになりました。

シモンキンは顔に似合わず義侠に溢れた男なので、無辜の民が苦しんでいるのを放つてはおけない。あの抜群のタイミングへの合点がいききました。

シモンキンが自分と出遇ったのは偶然や奇跡などではなく、水銀に汚染された村の惨状を聞いて駆けつけたのでしよう。その帰り道に自分と……。

「村人は無事でしたか？」

「七人……亡くなったよ」

この国の民草など放って置いても日に数百人は死んでいるのに、たった七人を助けられなかったぐらいで、まるで身内が亡くなってしまったかのように沈んだ顔を見せる。シモンキン……きつと彼は戦争に向かない人なのでしょう。

それから少し談笑を交わし、自分達は元の生活に戻りました。

つかの間の日常。

つかの間の安息。

平凡な安らぎはうたかたの夢。

そう言えば、気晴らしに彼の弟を偽造命令書で敵陣に突っ込ませたこともありました。まだ生死不明らしいですが、まあ友達じゃないんで別にいいです。

実はシモン・キンと別れた後、少し気になって腹いせに水銀混ぜた村を覗きに行きました。

この辺りの貧しい村では毎日何人も餓死者を出すので、とても葬式などやる余裕はありません。ですが遺体を放っておくと虫が湧き、様々な病原菌の苗床となるので、腐敗する前に遺体を速やかに火葬して、死者を土に還すのです。

シモンキンが心痛めていたこともあって、その代理として彼らの共同の墓穴にとりあえず百円放り込んで拍手を打ったら、血相変えて駆けつけた遺族達とまた喧嘩に。

どうもこの国の貧しい人々は、お金を貰うと暴力に訴えるらしいです。

力には力。理不尽には理不尽で対抗する。それが自分の信条

なのですが……今はとても喧嘩する気分ではないので、イチヤモンをつけて来た村人たちの膝を銃で撃ち抜き、泣き叫ぶ彼らを片っ端から墓穴に放り込み、その帰り際、ポケットに余ってた水銀を全部井戸に捨てて来ました。

そんなこんなで首都に戻ったのは明け方のこと。しばらくは帰れなくなるので、故郷の繁華街をゆっくり観て回り、お昼になったので小飯店で昼食を摂ることにしました。

「牛丼」

「えっと……何でしょうか？」

席に着いて注文すると、注文を取りに来た若い女性が訝しげな顔をしました。

やれやれ……困ったものです。

どうやら田舎者は”牛丼”も知らないらしいです。首都といつても、こういう蒙昧無知なオノポリさんは結構居るらしい。……仕方が無い。

「いいですか？」

牛丼というのは、質が悪くて安全性に問題の多い外国産牛肉を甘ダレに漬けて煮たものをドンブリに載せた究極至高の料理。そう教えて差し上げた十分後、こはんの上に上等の牛肉を載せたものが出されました。

真の牛丼はこんな上等な肉を使っていません。

これは侮辱です。

牛丼に対する赦し難い侮辱です。

自分は怒りの形相で猛然と席を立ちました。

ドストドストドス！！！！

丼を手に厨房へと続く廊下を大股に歩く自分。困り顔の店員が後を追って来ます。

袖を掴んで引き留める店員を強引に押し退け、暖簾を潜り、自分は厨房へと押し掛けました。

「この牛丼を作ったのは誰だ!？」

「なッ……お客さん?」

「何か不都合でも……!!?」

「この牛丼を……」

戸惑う料理人どもを睨めつけ、興奮冷めやらぬまま憤然と厨房を見回し、目に付いた丼を手掴みでムシャムシャいく自分。

「まずい!」

「いや、それは……中華丼です」

「では、この牛丼を作ったのは誰だッ!」

「わけがわからねえ!!?」

先ほど牛丼を用意した女性店員がツッコみました。

しかし、ワケが解らないのはこっちです。牛丼を持って怒鳴り込み、中華丼を勝手に食べて酷評するなどキチガイの所業です。



「もう御代はいいから、とにかく出て行ってくれよ！ しつこいと警察を呼ぶぞ！」

「この辺りの警察には賄賂を贈っているから、そんなの平気です！」

「何なんだアンタ!？」

この都市の腐敗具合を調査するため、自分は極秘裏に私財を崩し、賄賂を繰り返していました。この警察署長とはかなり懇意にさせて貰っていますし、この街で犯罪を犯しても大概はスルーされます。「もうよせ、トシアキ」

「シモンキン！ シモンキンじゃないかっ！」

突然現れた黄色い面の男に騒然となる厨房。料理人たちは彼の名を叫び、揃って驚愕の表情を見せました。ホルモンバランスの異常とか言っただけでありえねえ発色ぶりのシモンキンは、彼らと知り合いなんでしょうか？

「シモンキン、何故ここに……？ 皆さんは彼と知り合いですか？」

「いや、まったくの初対面だが……？」

みなさん、なにゆえ彼の名前を……？

「トシアキ、俺がここに居るのは偶然だよ。仕事でちょっとだけ街に立ち寄っただけ。……しかし、料理に何か不手際があったのか知らないが、厨房にまで押し掛けるなんて少し大人気ないんじゃないか？」

シモンキンが自分の肩に手を置き、まるで子供を諭すよう、ひとつひとつ丁寧に言います。普段なら骨を折るなり眼球を突くなりして対処するのですが、どうもこの人とは相性が悪い。とてもそんな真似をする気にはなれません。

「ほらっ、ちゃんと謝るんだ」

「ごめんなさい、頭が真っ白になってまして」

シモンキンからは見えない位置で中指を立て、自分は下郎どもに頭を垂れました。

「あ、ああ、まあ……」

姿勢こそ謝っているが、ピンと天を指す中指を見て、店員達は非常に複雑そうな顔。彼らの顔はすっかり覚えたので、後で店先にダンプ突っ込ませてやろうと思いました。

清浄なる世界のために。

「被害があつた村で……また同じ事件があつてな」

自分と一緒に店を出たシモン・キン。水銀に汚染された村の水質調査を終え、近隣六つの村の井戸の無事を確認したばかりなのに、また被害の報告を受けてUターンして来たそうです。

「汚染された井戸から時間を掛けて他所に毒が移つたと思うだろうが、それは最初の検分で既に調査済みだし、被害にあつた井戸と他の井戸との水脈には硬い岩盤が仕切りに入っていて、まず混じりようが無いんだ。誰かが意図的に撒く以外は」

「酷い話ですね」

確かに”非道い”村人でした。恩を仇で返す痴れ者に明日は必要ありません。心貧しき悪漢どもは正義の名の下に粛清しましたが、中間管理職である友人にその累が及ぶとは……世の中上手くいきません。

「事件が起きた場所や時間からみて、犯人はこの都に潜伏していると思うんだ。何の罪も無い善良な村人を狙うなんて卑劣だ！ 犯人のヤツいつたいどんな神経してるんだ……ッ！」

「まあ落ち着いて。もし……犯人を見つけたら、どうするつもりですか？」

「……どうすると思う」

シモンキンは抑揚の無い声でそう言いました。振り返ったときに見せた、憤激のあまり凍り付いたその面は、全ての感情を混在させたような……怖気のする狂気が宿っていました。

「わかりませんね」

親友が抱いていた激しい憎悪を目の当たりにして久方の動揺を覚えていたのも束の間、橋を挟んで向かい側の大通りから、鯉のよう

な髭を生やした禿頭の大男がやって来ました。

「シモンキン！ シモンキンじゃないかッ！」

大男はこちらを認めるなりパツと顔を輝かせ、野太い声で親友の名を叫びました。

「ライデン？ ……ライデンかッ！」

「そうだよ！！ 久しぶりだな！！」

熊並みの体格をした大男は丸太のような腕をブンブン振り回し、大はしゃぎでこちらに駆け寄って来ます。自分はちよつと生理的に受け付けないタイプだったので、シモンキンの後ろにソソと隠れつつ尋ねました。

「知り合いですか？」

「ああ、アイツは幼なじみの”ライデン”だ。管轄は違うが、ライデンも俺と同じ警官だぞ」

”幼なじみ”という単語には、何かこう……甘酸っぱいものをよく感じさせられたものですが、あのようなヒゲのむっさいおっさんがその”幼なじみ”とは……なんかヤです。

「こんなところで逢えるとはな。なかなかの奇縁じゃないか？」

「ハツハツハ……そうだな……」

二人が並ぶとまるで熊と人間の対比でした。旧友との再会に破顔するライデンはシモンキンの手を両手で包み込むように握手しました。

「ン……どうした？ 浮かない顔じゃないか？ ……ああ、そうか。ひつとして、お前も例の事件で駆り出されたのか？」

むむ……シモンキンの微妙に沈んだ表情からその心境を察するのは、なかなかどうして、見た目どおりの熊男ではないようです。

「それを知っているところを見ると、ライデン、おまえもか？ 気が滅入る事件だよな。いつもそうだ……被害に遭うのは弱者ばかりで、俺達は無力で、事件の後始末しか出来ない。こんなことばかり続くと、警察つてなんなんだろうって思っちまうよ……」

「そう悲観するな。おまえのように真面目に考えるヤツがいるから、

警察だつてまだまだ捨てたもんじゃないって思えるぜ。犯人の顔を見た村人から情報を得て、もう人相描きが方々に出回ってるはずだ。必ず俺達の手で捕まえ　あゝ、ところで。その後ろのヤツは誰なんだ？」

ちい。とうとう見つかりました。というか、自分はシモンキンよりも背丈があるので発見かつて当然なのですが。

「どうも初めまして」

「ああ……どうも」

握手する間、無遠慮で不躰で品性に欠けたおぞましい視線が自分に向けられました。ライデンのギョロリとした眼球が、自分の頭から爪先を舐る様に容赦なく見回します。

気持ち悪い。まったく、お里が知れます。

そつえば、シモンキンも同郷でしょうか？

「すまん、紹介が遅れたな。紹介するよ、兵役時代に同じ部隊に居たトシアキだ。頼りになるヤツだよ」

「……ああ」

なんででしょうか？　このライデンとかいう男、握手するときも舐めるように人の顔を覗き込んでいました。この山猿に身の程を知れと言いたいです。

「どうした？　アキの顔に何か付いてるのか？」

「いや……なんか、どこかで会ったような気が……それも、ごく最近に……」

ライデンは割れた大顎をさすり、腕を組んで何かを思い出すように深く考え始めました。若年性の健忘症でしょうか。哀れな。馬鹿の考え休むに似たりです。

そのとき、自分はふと気づきました。

水銀入れた〃自分。人相描き〃自分。

「確か、手配書の人相描きに……」

ライデンは思い出したかのように懐を探り始めました。あそこに自分の人相描きが収まっているのでしょうか？ あれ？ なんですかこの窮地？

「おお、こいつだこいつだ！！ え〜っと……」

「知っているのかライデン？」

ライデンが懐より取り出した人相描きをシモンキンが横から覗き込みます。焦る気持ちもありましたが、自分も釣られて覗き込んでしまいました。

「ん〜……この顔は……」

「……はっ？ なんですこれ！？」

自分は横から人相描きを取り上げて、思わず憤慨しました。ありえないです。人相描きにあったのは、本人とは似ても似付かぬ恵比須顔。これが証言を元に行っているというなら、信じられない抽象画です。いや、中傷画です。正さねばなりません。

「なんですかこれ？ 犯人はもつと美しい顔をしていますよ」

「ど、どうしたんだ急に？」

自分が急に怒り出したのでシモンキンが眼を丸くして尋ねて来ますが、ここは敢えてスルー。それよりも不実を正すが先決。

「ああ、ここ！ 眼をもう少し引き締めて、眉は細く！ 顎の輪郭をもつとシャープに！ こんなダンゴ鼻じゃありません！！」

「何か知っているのかトシアキ？」

「ウム！」

とてもよく知っています。本人ですから。ライデンがものごっつう不審者を見るような眼をこちらに向けていますが、ここで退くわけにはいきません。

「ほら、これっ！ ちゃっちゃと直す！！」

「……え？ あ、ああ……」

戸惑うライデンに、近くの店先で買った筆を手渡し、自分は内容に細かくチェックを入れていきます。ライデンは訝しげな顔をしながらも、受け取った筆で言われたとおりに人相描きを描き直してい

きます。

三十分後……ついに完成。

細部にまでこだわった完璧な似顔絵。本人が監修した、これは素晴らしい逸品です。それを受け取ったライデンは、自分と人相書きを見比べ

「どうした？ 何か思い出したのか？」

「いや、勘違いのようだ」

出来上がった似顔絵は、自分にそっくりな美青年でした。人相描きと自分を交互に見たライデンは何か勝手に納得したようで、安堵の表情で懐に人相描きを戻しました。

「はあ……」

かつてない窮状を脱し、安堵の息を吐いたのも束の間でした。大通りの方から喧騒が沸き上がります。

高らかな笛の音と優美な歌声に導かれ前方より迫るのは、天を衝くような巨大な神輿。大勢の踊り子を引き連れ自分らの視界を汚すのは、目にも眩い、ねり歩く朱色の巨塔。

「シモンキン、知っているのか？」

「ああ……あれは、首席の御子息が乗っておられる神輿だ。乗っていらっしやるのは、次男の”ホジャエサイ”様だな。最近のことだが、あの御方は月の初めと半ばに、あの神輿で首都の視察始められたのだ」

「ほうっ」

ライデンの問いに簡潔に答えるシモンキン。さすが優秀な男。エースの友です。

「ケッ！ このご時世に、ご大層な身分だぜ！ 連中、外の現状が解ってるのか？」

「首都を取り巻く外壁を抜けたら、そこはもう別世界だ。あの御方の無邪気な笑顔を見てみる……業が深い。自分のゆきすぎた贅が人々を飢えさせているなんて、露ほども知らないだろう……」

二人はどうやら、文句があるのに胸にしまっているようです。

この国では絶対君主に等しい首席と息子達。その果て無き道楽が国の衰退を招いていると彼らは知っている。ですが……しょせん人など、自分のことさえ良ければ他人など飢えようが苦しもうが関係ない。性悪説を提唱する自分には分かります。人の本性は、皮肉にも人が云うところの”悪”そのものなのですから。

「なんかムカつく！ えいつ！」

センスの悪い豪華な神輿が通り過ぎるのを見た自分は、足下に転がっていた掌サイズの石を投げつけてやりました。

この一石……これこそが民意…… ツツ！！ 全体の意思…… ツツ！！

ガスツ！！

「ぐほおあつ！？」

でたために投げた石がみごとにホジャエサイの後頭部を直撃。中腰で愚民を見下ろしていたドラ次男は、西部劇で撃たれた人みたいに神輿から放り出されました。

「おま……っ！？ な……なんてこと……！！！」

「なんだ？ ホジャエサイ様に何か遭ったのか！？」

ライデンは自分の一挙手一投足を見ていましたが、騒音の中神輿に注目していたシモンキンは見ていらっしやらなかった御様子。驚愕するライデンとそ知らぬ顔で口笛吹く自分を交互に見て戸惑うばかりです。

「グウ……だ、誰だ！！ 余に石を投げたのはっ！！ 出て来いッ！！」

顔を真っ赤にした愚息が喚き散らし、銃で武装した数十人もの兵士が民衆を乱暴に掻き分け、犯人を捕らえようと血眼になっています。

ウハッ、こりゃ面白い。司令官殿と張る。

「キサマか！ キサマか！！」

「と、とんでもないです……そんな大それたこと！！」

「おい、キサマがやったのか!!」

「知りません!! 本当です!!」

もう全員が犯人みたいな取調べ。逃げ惑う市民を銃で牽制し、両腕を頭の後ろに組ませ、その場に蹲らせてしまいました。まったく、独裁国家ですか？ 独裁国家ですがね。

爆竹に火を点けたような、天を裂く激しい威嚇射撃。人々は悲鳴を上げながら、恭順と無抵抗を示すため必死に両手を後頭部に当て、兵士達の怒声に怯えながらうつ伏せにされる。辺り一面に白煙と刺激的な硝煙臭が漂い、恐怖に駆られた人々のか細い嗚咽だけが、耳鳴りの中で微かに聴こえました。

「犯人はまだ判明せぬか?!? 正直に名乗り出ればチョウチャクだけでカンベンしてやろう!! 余は寛大じゃ!! たかが一羽の小鳥の囀りに目くじらを立てるほど狭量ではない!! さあ名乗り出よ!! 出ぬのか……? 名乗り出ぬのなら、余の目に付く全ての民を同罪とみなし、射殺するぞ!!」

いやはや、よく口の回るボンボンです。

弱い犬ほどよく吠えるといいますが、体現者ですな。

しかし……さすがはあの”怪物”の息子といふべきでしょうか。一見無防備に街の人々の間を歩いているようですが、常に一定数の兵士に周囲を警護させ、決して自分前に出ようとはしません。今、冗談でちよつと命狙ってみたけど、そんな隙はまったく窺えませんでした。

さてはて、このままでは埒が明きません。任務も控えていますし、とりあえずこの辺でケリを着けましょうかね。

「こいつです」

「え……?」

自分は右隣に居た知らないおじさんを指差しました。それを聞きつけ、六十mほど離れた場所でボンボンが目を剥きました。

「むう!! キサマかつ!!」

「い……いいえ!! と、と、とんでもございませんッ!!」



冤罪着せられたおじさんは、ちょっと面白いくらい動揺し、両手も首もブンブン振って否定します。ライデンがマジかよという顔で自分を睨みますが、マジです。

あのときみんな、石でも投げてやろうと思ったはずです。

民草の嘆きに振り返らず馬鹿騒ぎしてるボンボンを見て、引きつった作り笑いの仮面の裏で、己を押し殺して、冷めた笑いの下で、奥歯をかみ締めながら……思ったはず。

そう考えれば、石を投げたのはこの辺に居た全員です。

「ウソだっ！！ ちがうっ！！ 私じゃないいいっ！！！」

恥も外聞も無く泣き叫びながら連れて行かれるおじさん。銃で頭をド突かれてもなお喚き散らします。密告されるまで口をつぐんでいたのだから、まあチヨウチャクじゃ済まないでしょう。良くて死刑。最悪、一族郎党皆殺しともあります。その有様を遠い目で見送っていると、ライデンが憤怒の形相で食って掛かってきました。

「おめえ……何考えてんだよ……」

「何……とは？」

主への投石を許してしまった兵士たちは、どうにか己の失態を取り戻そうと、必要以上にハリきつてスケープゴートを打ちのめします。首席縁者を守護する兵は特殊訓練を積んでいるとは云え、所詮は人の子。その焦りが目の前の真実を見誤らせた。

……まあ、それはさておき。

信号機のシグナルみたいに顔色を変えて凄む山猿ライデン。並外れた巨軀に抛った気迫はそれなりのものではありませんが、しかし、威嚇や恫喝はその対象にとつて脅威で無ければ成立しないもの。つい今しがた、ただ呆然と自分の行為を見過トシアキごしてしまったような張子の虎の視殺に、いったい何が宿っているというのでしょうか。

「……お前の軽率な行動の所為で、何の関係も無い人が捕まったんだぞ！」

「やれやれ……この偽善者が」

「な……っ！」

自分が刹那に見せた鋭い眼光に、ハツと息を呑む山猿どの。朱の差していた顔に青味が加わる。

「罪の無い方が連れて行かれるのをただ黙って見ていたクセに、兵隊が遠ざかった途端に強気じゃないですか？」

「そつ……それは……」

「振り上げた拳の先の下ろし先、間違っているんじゃないですか？」

やれやれ、仕様の無い人です。

まあ、敢えて責めはしません。これが凡人の反応です。

巨悪には尾を振り、その悪行には見てみぬフリ。

そして……その知らぬフリの代償行為として、手折れてしまいそうな己の矮小な自尊心を満たすために、害が及ばない安全な範囲で代わりに糾弾すべき存在を求める。卑小な心を悟られまいと。臆面も無く。醜い心を打ち消すように。とても声高に。

「俺は……」

「アナタは立派です。でも……銃は怖いでもんね。傍観してたのはアナタに限ったことじゃないですし、特に責められる理由にはありませんよ。発奮する場所が無い鬱積した義憤の矛先を、つい誰かに向けてしまうのも仕方が無いですよね？」

人は弱い。

その脆弱極まる心の隙を衝き、如何様にも容易く掌握出来る。

彼が自分に怒ったのは義憤というよりも……許されようとしていたから。

助けられなかった。でも仕方が無い。でも仕様が無い。どうしようもない。

単に体裁を取り繕うポーズ。

相手は自分が仕えるべき公権であり、逆らうなど出来はしない。

仕方が無いと……心の片隅に感じながら。

「自分は怖くて震えことしか出来なかったのに、面と向かって理不尽に怒れるアナタを尊敬しますよ」

偽善者さんを扱うとき、その些事加減が難しいです。

演技過剰になれば相手はそれを敏感に感じ取り、心を閉ざしてしまいます。

腫れ物の触れるように扱いが難しい。

角が立たない程度に調節して、敵の強大さをやたら誇張して、周りの人間たちの弱さを強調して、これこれこうだから仕方が無いのですという逃げ道を造り、自然の流れの内にそこへ導き、最後に彼の行いが間違っていないことをアピールする。山猿が思い描く自分の理想像……そのハードルをちょいと下げてやるだけで、彼の心は迷うことなくそちらへ向かうでしょう。自然の流れの内に。水が高きから低きに流れるように。

「そ、そうだな……そうかも知れない」

「こおの軟弱者がアアアツ!!」

肩を落とし絶望するライデンの横つ顔を、なんかムカツイタのでグーでおもいつき殴りました。インパクトの瞬間に肘を返した強烈な左フックは、ライデンの顎を確実に捉え、奥歯をヘシ折ります。「ぐはあああああ〜っ!?!」

いきなり殴られたライデンは鯉のぼりの如く滑空し、十m近くも吹き飛ばされ五m以上も転がりながら砂埃を巻き上げた。

「がはっ! な、何しやがるっ!?!」

砂塵に塗れながらも即座に立ち上がり、口から血をダラダラ流しながら怒鳴るライデン。馬をも昏倒させる自分の一撃をノーガードで受けたというのにケロリとしたもの。彼の獣性は、脳ミソ以外に肉体にも活かされているようです。

「いつまでもウジウジと……悩むぐらいなら行動なさい!!」

「何だとお!?! さっきと言ってることが違う!?!」

「なんだよ!?! 急にどうしたんだ!?!」

いきなり乱闘を始めたので目をシロクロさせるシモンキン。

折れた歯から大量の血を溢れさせるライデン。その顔をもう一回殴る自分。肘で。

グアギャツ！！

NIKEマークの軌跡をなぞり、下方死角から放たれた絶妙なタイミングでの肘打。着弾の瞬間ライデンの顎肉が弾け、顎骨がひしやげる歪な音と手応えを感じました。

「がふうっ！！」

さすがにこれは効いたか、難攻不落とみられたライデンは白目を剥き喀血し、膝をガクリと落としました。

「うりゃ」

だがこれで終わっては末代までの恥。気合一閃。懐に飛び込み、一気に畳み込みます。苦し紛れに伸びたライデンの手を掻い潜り、両脇を手刀で突き、ビクリと上半身が反射的に後ろに跳ね上がった刹那を衝いて、回転の遠心力を利かせた絶技　肘打ち。

「うふっ！！」

鳩尾に深くめり込んだ肘は確実に内臓を抉り、パンパンに膨らんだ口内に溢れる吐遮物混じりの血を盛大に吐き散らかし、巨人は轟音と共に砂道に沈み……そして沈黙した。

「いよっ」

「いや……」いよっ」と言われても……」

友の壮絶な死に、シモンキンがうろたえています。

「……死んでねえ」

二割くらいの力で捻じ伏せたにも拘らず、もう瀕死のライデンが浮上しました。

今のアレで倒れないとは、彼も完全に人間の域を超えている。

「尊敬します」

自分は振り向き様、爪先でライデンの顔面をブチ抜きました。

「ひぎゃびっ！！？」

折れた歯のカケラが頬肉を突き破ってポップコーンのように飛び出します。

厚さ六mmの金属で補強された特別性の靴。機動力をギリギリ殺さない範囲で採用した恐怖の六mmが弾き出す破壊力　肘打の比

ではありません。岩盤に穴を穿つそれを、自分は何度も何度も執拗にライデンの顔面目掛けて打ち込みます。

「ごはあつ！ ぐふふあつ！！？」

「わかりましたか！？ 声に出さぬ自分の憤りがッ！！」

愛の鞭。愛の鞭でした。

顔面が変形しようとも、骨が砕けようとも、最悪死ぬことになるとも……キミを殴ることをやめない。

顔面の骨という骨を煎餅のように蹴り砕き、踏み躪り、破壊の余韻に浸る。一面に漂う血臭に、子供のように無思慮な悲鳴に、股間を衝き上げるような性的衝動に、笑いが込み上げて来ます。裂けた頬を踏み抜いたとき赤い肉が弾け飛び、脳内麻薬がパンバン飛び出しました。眼底を砕いて右の眼球がポンツと飛び出した時、脳髓が電極を巻き付けた釘にでも貫かれたようにイッてしまいました。

「ハア…… ツ！ ハア…… ツツ！！」

眼が血走り、鼻腔の奥が血の二オイで充満しています。唇が自然と喜悦に歪み、快樂のままに暴威を奮った筋肉が激しく脈打ち、熱を発し、膨張を続けています。

周囲の空気との隔絶などどこ吹く風か。

冗談で人ひとり殺す鬼が一匹、天に唾棄するが如くゲラゲラと晒い声を上げています。

「トシアキ……」

血の気の失せた顔が、独白しているかのように小さな声で、自分の名を呼びました。

「……シモンキン？」

又チャ

散々踏み荒らした、原型を留めぬ顔面から足を抜き、自分は自嘲気味な顔になります。

ああ……またやってしまった……と、後悔に勝る興奮の内にそう思いました。

「アキ……何故……？」

シモンキンはヨロヨロとおぼつかない足取りで、変わり果て横たわるライデンの許へ。自分はそれを制し、殴る蹴るする前に用意しておいた言い訳を使います。

「ホジャエサイ様！！ この者こそが真の逆賊ッ！！」

一度大きく天に振り上げた指先を、微動だにせず這いつくばるライデンに振り下ろして叫びました。

「逆賊……？」

「どういうことだ……？」

風雲急の事体に直面し、周囲の雑音が勝手にあらぬ想像を膨らませています。

「ちょ、ちょっと待って！ 続きが気になるから、殺すの待った！」

「え〜？ ……しょうがないなあ」

腸を引きずり出され手足をチョン切られたおじさんが、刃先で目を抉り出そうとしている衛兵に処刑の延期を求めました。そんな願いを聞き入れ、不承不承刃物を引っ込めてくれる衛兵。いい人です。

そんな胸が温かくなるような光景を見守りつつ、注目が最高潮に達するのを待つ自分。

ホジャエサイの神輿が間近に来たとき、自分は絶妙な”機”を感じました。

「今この場にいる皆様にも是非、お聞き入れ頂きたい！！ この者 え〜っと……シモンキン、こいつのフルネームって何でしたっけ？」

「さ、サンメンケン・ライデン」

「ありがとう」

気を取り直し、再び口火を切ります。

「この者、サンメンケン・ライデン！！ この者は自分の友の知人であり、栄えある警察官！！ だがしかし、今回の投石事件の真の犯人にございます！」

一息に言い切ると、周囲からうおお……というザワめきが立ちま

した。ホジャエサイは神輿から身を乗り出し、シモンキンはライデ  
ンと自分を交互に見て、信じられないといった顔で呆然としていま  
す。

「この痴れ者は、その内臓出てるおじさんに冤罪を着せてしまっ  
た罪悪感からか、私にだけ密かに事の真相を打ち明けました！！  
自分はこの半島の秩序を遵守する者として彼の者を断罪し、おもし  
る半分に打ち据えた所存でございます！！」

「……そんな馬鹿な」

「え……？ そいつが犯人なのかよ？」

「あのお……もしかして、俺って無罪だったり？」

内臓出ちゃってるおじさんが震えながら兵士に尋ねました。

「ああ……まあ、本当なら無罪……かな？ あっ！ やっべ！ お  
い、こいつの内臓戻せ戻せ！！」

「砂ついでるけど！？ 斬っちゃった手とかどうすんの！？」

漣のようなザワめきは波紋のように伝播し、あっという間に騒動  
に発展します。

不満、疑念、恐怖、失望、嫉妬、怒り……圧政に苦しみ続けた人  
々が溜め込んできたモノは相当なものでしょう。自分の言葉は、国  
というダムに打ち込んだ楔。穿たれたわずかな穴目掛け、不満を抱  
えたした人々は冤罪という免罪符を楯に、裁きを下した者に我先に  
と殺到します。

「無関係の人間を裁いたのかっ！！」

「この人殺しイ！！ 殺人鬼イ！！」

「この野郎！ 神輿から引き摺り下ろせ！！」

赤信号、みんなで渡れば怖くない。

ほんの些細な契機を得て、死んだ眼をしていた民衆は怒り、叫び、  
血道を上げます。

民衆とは、ほんに便利な道具です。

「やっちまえー！！！！」

「うわあああーっ！！！！」

天に木霊する怒りの咆哮。数十、数百……いや、数千もの足音が地鳴りを上げ、ホジャエサイの神輿目掛けて突き進んだ。

ダダダダダダダダダダ！！！！

「うあつ！？」

「ひいひい！！」

獲物を手に津波のように押し寄せる民衆の足元目掛け、機関銃の掃射が行われた。

「カイカン……」

薬師丸風の恍惚に打ち震えながら、掃射中に何人が引つ掛けて殺す衛兵。とたんに泣き叫びながら反転し、蜘蛛の子散らすように逃げ惑う人々。所詮はクズども。駄目駄目です。

タタタタタン！！

「逃げるなっ！！ 貴様らに後退などない！！ 戦うんだ！！ こはスターリン・グラードたっ！！」

さすがに自分でも良く解らないことを口走ったと思いましたが、恐怖に負けて駆け戻る民衆に再び火を点けるため、隠し持っていた拳銃で近くを走る三人の頭部を素早く撃ち抜きました。

「うわっ！！」

「ぎゃあ！？」

「ちくしょう！！ ちくしょおおお！！！！」

仲間が撃ち殺され多少は動揺したようですが、多数の機関銃を前に銃一丁では歯が立ちません。それに悲鳴や銃声で威嚇射撃が全員に伝わらないのでしょうか。だから民衆を三人や四人や五人や六人七人や八人や

タタタタタタン！！！！

九人や十人や十一人、オール・ヘッド・ショットで撃ち殺したところで焼け石に水。構わず逃げ惑います。

「タタタタン！ ノンタタン！」

マガジンを交換していると、ちびっ子から常時点滴射たれてる老人にまでお茶の間で大人気のネコ・ノンタタンが、銃声の中、びよ



こぴよこ小躍りしながらニコニコやってきます。

「タンタンタン、ノンタタン！」

「キモっ！」

ノンタタン！！

「ノンタターーーー！！！！！！」

あまりに薄気味悪いので、目の前の白い化粧物を撃ち殺しました。白い毛皮を真っ赤に染めて、断末魔までノンタタン！！

さらばノンタタン！ 高視聴率！！

「みんな待て！ ここで逃げたら思う壺だ！！ 勇気を出して立ち向かうんだ！！」

民衆を奮起させようと逃げ惑う老婆を取り押さえ、こめかみに銃口を押し付けました。

「……ひ、ひいい」

「お、おばあちゃん！？」

熾りのように震える老婆。それを見て絶望する縁者であろう少女。パニックを抑えるために敢えて汚れ役を買った自分でしたが、理性も倫理も失い、狂騒に駆られた民衆の前では無力でした。

「ちいっ！！」

タタン！

憤りと歯痒さのあまり舌打ちひとつ。目の前が真っ赤になりました。人質としての価値を失った老婆と、ついでに少女を射殺し、今度は、母親に手を引かれながら懸命に逃げる、ぬいぐるみを抱えた幼い少女を、母親に体当たりして奪取しました。

「あう……っ！！」

「ママ……！！」

握っていた手を離し、激しく砂道に投げ出された母親。自分それに構わず抱え上げた子供からぬいぐるみをひったくり、こんな状況で顔色ひとつ変えない豪胆なぬいぐるみの野郎の額に銃口を突きつけてやりました。

「おまえら、このぬいぐるみがどうなってもいいのかッッ！！！！」

「あ……あつうー!!」

「ミミちゃん!!」

呻く母親と少女の悲痛な叫びによって明かされた、ウサギっぽい名前のブタのぬいぐるみ。さすがにこの人質には戸惑ったか、半数近くの民衆が地面に縫い止められたように歩みを止め、絶望的な表情で固唾を吞んでいます。

「……ようし、動くなよ!」

しかし、これだけの大人数。中には協調性の無いヤツもいます。目立たない程度に、ジリジリ距離を詰める男が1人。

ほらっ、映画とかでよくいるじゃないですか。

犯人が警察官とかの前で人質取ったとき、アイツら必ずちよっと動きますよね?

動くなっつってんのに……。

ターン!

「あ……撃っちゃった」

聞き分けの無いムカツク警察官を妄想してつい、引き鉄に掛かった指先が動いてしまいました。

「ミミちゃん……んっ!!」

どう考えてもありえない名前を絶叫する少女。

「ちいっ!」

タタン!

自分の迂闊を呪いながら、過ちを修正するべく即座に少女と母親の頭を撃ち抜いて射殺する。鼻面をフツ飛ばされたぬいぐるみは、引き裂かれた穴から粉雪のような綿を舞い散らせています。

「ひ、人質! 他に人質はっ!?!」

ブタを撃ち抜いたが最後、それがヨーイドンの合図。喉から血を吐き出さんばかりの壮絶な絶叫。それと共に波及した

”赫怒”。

それは大いなるうねりとなって自分に向かって来ます。

「ちいっ!! こうなったら奥の手で……っ!!」

自分が秘めている最後の切り札　いよいよ発動の時。

蒼穹に向け力強く突き上げた拳が、その最後の切り札召喚の合図。瞬きの間に全てを灰燼と化す、エースと呼ばれる存在のみが使用を許された、究極最強の力。

それを今 得手勝手に使用するツツ!!

「もう、もうよせ……アキ!!」

「……ッ!!」

絶えず狂奔する世界の中、唯独り目前に立ち塞がりしは……シモンキン。絶望の淵で立ち尽くし、黄色い顔を蒼白に変えて今の今まで我を失っていた友。

……正気に返ってくれましたか。

「シモンキン、お加減は大丈夫なのですか……?」

「俺がこうなつた原因の九割にお前の影が見え隠れするのだから……いや、言うまい。それはもういい。何をしようとしているのかは判らないが、お願いだから止めてくれ。人が沢山死んだ。友達も。もう嫌なんだ……こんなこと……もう沢山だ!」

シモンキンは泣いていた。

自分に、銃を向けて。

一つ一つ漏らすように語る彼の胸の内は、痛切に自分の心を揺るがす。

「止めてください……銃を向けるな。自分は訓練されています。敵愾心に反応して……誰であろうと反射的に引き鉄を引く訓練を……」  
何が間違っていたのだろう。

何故、自分は唯一無二の親友と銃口を向け合っているのか。

声にならぬ嗚咽に歪んだ友の顔が、自分の、全てを否定するよう  
にゆっくり振られた。

終わりなのか。こんなことで。もう御仕舞いなのか。

「 仰角、プラス38度」

友の顔が全てを物語っていた。もう御仕舞いなのです。  
迷っていました。

今まで逡巡などしたことはない。だが迷っていました。

殺傷行為に並ならぬ快楽を感じ得ている自分が初めて経験する……殺しへの戸惑い。多くの犠牲者を出し、最後の親友をも失った今、何を糧に自分は行動すればいいのか迷っていました。

狂信とも云える自己への信奉。

愛すべき故国を窮地から救い出す為、憂国の士となってこの国を制圧する。

誰が真似出来るのか。自分の偉業を。苦難と孤高の道を。

親兄弟の生死をも天秤に架ける、神にも等しき分別と合理性を持ち合わせた超人類。

それがエースで自分。

真に良き為政者は孤独です。

怨み、蔑まされ、歴史上類をみない殺戮者として名を挙げるだろう自分を、自分は受け入れた。

運命だ。選ばれた者が成すべき運命なのです。

ゆるやかに荒廃してゆくこの国を救い民衆を導くのは運命なのです。

……がしかし。がしかし……それは過ちでした。

「……大好きな大虐殺でしたけど、やめることにしました。ごめんなさい」

銃を下ろし安全装置を掛ける。

静寂が訪れた。大勢の安堵の息遣いが聴こえる。

友のため、身命を賭した運命を放棄したが、心は何故か晴れやかな気分でした。

「シモンキン、もう止め」

そう言っつて顔を上げた瞬間、銃声が響き渡った。

静寂を引き裂く凶弾は広場で反響し、数秒間も聴こえ続けた。

「かつ……かは……っ！」

ゆっくりと落ちてゆく。熱と音。血溜まりへ膝を着く。声が出ない。

何故だ……あれほど……言ったのに。

「撃つなと言ったんだ、自分は……ッ！」

硝煙を燻らせた銃が手からこぼれ落ち、張り詰めた友の顔が地面に沈んで消えていく。

シモンキンは、自分<sup>トシアキ</sup>を撃ちました。

引き鉄を引く瞬間が鮮明に脳髓に焼き付いています。

自分は考えるよりも速く反射的に銃を構え……遅れたにも拘わらず銃声はほぼ同時。シモンキンの銃弾は肩を掠め、自分の放った弾丸は狙い変わらず腹部へと吸い込まれていきました。

生兵法の警察官とエースとの違いが出た一瞬の出来事。シモンキンは内臓を傷つけてしまつて……恐らく、いや確実に助かりません。

「仰角、プラス38度 距離182.721km 誤差修正  
……無し」

全て終わった。あとは深き哀しみと共に、煉獄をこの世界に顕現するのみ。

現在地より東南180km地点に位置する沿岸に繋留中の 絶  
対私有巨艦ヤシロ。米英をも裏社会で牛耳る秘密結社”ヴェイン”  
との個人的技術提供&個人的共同研究で開発が進められた最新鋭防  
空機構”イーリス・システム”は地球軌道上で周回する衛星と常時  
リアルタイムでリンクし、搭載された大陸間弾道兵器を以て450  
0km以上離れた蟻の巣を正確に捉えることが可能である。

敵の攻撃を受けた際には周囲六十km圏内をほぼ完全にカバー。  
そして3000m圏内での迎撃率は99.999978%という驚  
異的な数値を叩き出している。

世界最強の無人砲撃艦。

中華魔大陸での戦場で重要文化財に私掠の限りを尽くして得た、  
最大の結晶。

軽度の天候不順や電磁波干渉を一切受け付けぬ最大射程370km、  
ヤシロ・三連電動リニア・レール式・二千六百インチ砲”イグ

ジクス”は今、主からの最後の号令を待つばかりである。

「……死後の世界なんか無い。天国も無いし地獄も無い。死ねば平等に、ただ土に還るだけ……ですが」

自分は自嘲的な笑みを止め、最後の理性で銃を下ろしました。もうこんなもの要りません。

「この世に地獄はありません」

終劇の時は近い。

大都会は落日の刻を迎え、どこまでも広く続く空は薄いオレンジ色を湛え始めている。全てが終わるまで瞬き2つ。

艦上中央より斜めに突き出した二百六十mの超長距離発射台から高速回転を得て射出され、紫電を孕みつつ滑走し天空に飛び立つのは 二千六百インチ超巨大砲弾”アイデリット・クライデン四百改”。

この砲弾の特徴は、如何なる迎撃をも一切受け付けない無骨な外殻にある。電磁レール台による亜音速射出に耐え、戦術核による直撃をも意に介さぬ堅牢強固な炭化アルコニウム合金性の外殻。それによって護られた内核は用途によって様々な威力を発揮し、自分が発射を命じた中央二番の砲弾に内臓された炸薬は、腐食性の毒ガス P P D X 9 半径40km圏内を完全に灰燼に帰す悪魔のような砲弾です。

「衆愚ども、残らず消えてしまいなさい。この世は自分が新たに創世するッ!!!」

新世界の王になる。

そこでふと気付きました。

砲弾が半径四十kmを洩れなく腐食するというなら、その最大の渦中に置かれた自分はどうなるのか。

「や、ヤバイです……!!! 自分が一番ヤバイです!!!」

「アホかぁッ!!!?」

ホジャエサイが脳幹を切らんばかりに怒鳴りました。

「ちよ……っ!!! タンマ!!! その爆弾待った!!!」

指令を送るも発射完了。迎撃不可能。おまけに電磁干渉受け付けない。直撃まで、およそ十分足らず……！

「イーチ抜けた！」

自分は脱兎のごとく逃げ出しました。

さすがエース。咄嗟の判断力が光ります。

破壊の範囲は半径40kmですが、その効果が端々に行き渡るまで三十分は要するはず。今は無風状態ですし、風があるなら風上に走ってさらに時間を稼げたでしょうが……着弾までの時間と効果範囲が来るまでの時間があれば……なあに、自分の脚ならなんとかなります。

民衆はまるで事の重大さを理解出来ていないようで、走って逃げる者などほとんどいません。嫌われ者が世に憚るのか、悪魔的な勘の冴えか、ホジャエサイが神輿に乗り込んで自分の後を追ってきます。

「爆弾じゃと!? 爆弾じゃと!? 余に弓を引くのか、このクズがつ……！」

「あゝ、ウソですから。そんなに急がなくてもいいですよ」

「じゃあ、何故そんなに必死に走るのじゃ!?」

「運動運動」

「微笑みつつ時速50kmぐらい出してはいまいか……?」

「そういうアンタこそ、そんな中小企業のビルぐらいある神輿担がせて、時速50kmで走る自分と並走するなんて非常識ですよ!」  
権力者の中には稀に動物的な勘が働く人間がいます。北半島を数世紀以上にも亘って支配し続けてきた一族の息子ですし、命の危機にそれが発現さたとしても驚くことはないでしょう。ないでしょうが……。

「やっぱりその神輿はありえないです! そのスピードだと慣性で倒壊しますっ!」

「えっほ、えっほ!」

「選りすぐりの歓び組みじゃっ! こんな朝飯前じゃて!」

人類の限界をちよつぱり超えてしまつてゐるこの超鬼脚……持ち堪えてくれるならばギリギリ助かる可能性がある。希望的観測が脳裏に過ぎつたそのとき、耳穴に潜ませている小型通信機を通じて連絡が入りました。このタイミングでの連絡は良い予感がしません。

『“屍喰らい”、吉報ナリ』

感情の乏しい機械的な女声の声。”無人”砲撃艦に搭載されたイルカさんからの連絡です。正確には、太平洋の洋上で捕獲したイルカさん達の脳髓を生きのまま抉り出し、溶液に漬けて生かしているモノですが、その脳髓十三個を並列処理し、一個の巨大な意思として統合し、艦の運行や火気管制制御を担つて頂いてます。

『屍喰らいとは人聞きが悪い。この非常事態に何事ですか？』

『先日、二号弾の改良が済んだので、そのご報告。ギリギリ間に合つて良かったナリよ。着弾してから毒が拡がるんじや効果薄だと思つて、その短所を補つため空中散布に切り替えたナリよ』

『……………』  
辺りが真つ暗になるほど眩暈がして、思わず脚が止まりました。

『しかも、効果範囲は30%増！』

『何やつとんじやいつ！！！！』

さすがにブチキレてしまいました。ブチギレ金剛です。耳穴に指つつこんで通信機を穿り出したい衝動に駆られました。

『何をそんなに怒つてるナリ？ せつかく喜んでもらおうと黙つてたのに……』

『黙つてるなよそんなこと！！？ せつかく一筋の巧妙が見えてきたと思つたら、より深い絶望が待つていたですかよっ！？ どん底から這い上がったたら、仲間に裏切られて奈落に突き落とされやがりましたですよ！！？』

『落ち着くナリよ！ 日本語が変ナリよ！！』

『うるせえ！ ここは北半島なんだよ！！ おまえの語尾の方がよっぽど変だよ！ コロツケ大好きかテメエ！？』

もし生きて帰つたら、奴らのクサレ脳ミシ残らず掻き出して、新



しいのに取り換えてやる……ッ！！ 遙かなる天を仰ぎ、自分は心の底からそう誓いました。

「おぬし……何を一人で悶えているのだ……？」

事情を知らないホジャエサイが、可哀相なものを見るような眼。

前傾に傾いて疾走する神輿は、相変わらず非常識なスピードを出しています。

タンタンタン！！！！

「うがつ！？」

「つがつ！？」

腹いせに神輿の脚の部分……数十名の歡び組の内、二人を撃ち殺してやりました。

「何をする！？」

脳天を撃ち貫かれ絶命する筋肉質の男2人。それを見てホジャエサイは仰天し、顔を朱に変えて噛み付いてきますが、自分はそれを無視して、仲間が殺されても気持ち悪いぐらいの笑顔を見せて走る喜び組を片っ端から射殺していきます。

「死ね！ 死ね！ キモチワルイ奴らっ！！」

顔面の筋肉が硬直したような笑みのまま死んでいく歡び組。本人の意思ではなく常にその顔を強要させられているそうですが、自分の知ったことではありません。

タンタン カチッ！ カチッ！

弾切れ。換えの弾は無し。喜び組はまだ二十人以上も残っています。

「チイっ！」

舌打ちをしてから銃を投げつけてホジャエサイにぶつけてやり、自分はさらに加速しました。遠ざかっていく神輿。振り返らずとも判ります。

脚の半数近くを失っては、まともに機能しないでしょうから。

走る。走る走る……走るッ。

息継ぎも忘れ夢中で駆け抜ける。上着と靴を脱ぎ捨て、ズボンの

裾を膝下までめくり上げ、次第に走りに特化してゆく。

酷使している内蔵機能を補うため脳内に送られる酸素が不足しているのか、目の前が真っ白になり、光の渦の中を走っているような錯覚が視え始めています。でも、ただ闇雲に走っているワケじゃありません。まだ勝算は残っています。

首都南西地区に位置する中央官邸　その地下深くに存在すると噂させる”政府要人専用・核シエルター”。ここ数年で行われている核実験の頻度から鑑みて、”ある”と思う方が自然なのでしょうが、確証の無い”賭け”であることは間違いありません。

シエルターがあつたとしても、本当に官邸の地下にあるのか。実は自分が掴んでいるのは作爲的に掴まされた偽の情報で、まったく別の場所に造られているのではないか。そんなネガティブな考えが脳裏を過ぎります。

「どけどけエツッ！！　ムシケラどもオオツツッ！！！」

林立する商業ビルが密集した首都中央区に入り、多くの車が行き交う広い路には、迫り来る危機など何も知らない人々がのんきにひしめいています。

「どけっ！！　カスどもツッ！！！」

呆けている人畜どもを両肘で押し退けながら、自分は目指すべき南西地区へと奮走します。女、子供、老人、障害者、交通弱者、誰が誰であるかが構わずハツ倒して直進する。

押し倒され、殴られ、怒りを露にした人々の罵倒と怒声が激しく背中を突付いてきますが、どうせ彼らは死ぬんです。死ぬ命に憐憫をかけるなど感傷に過ぎません。銃があれば皆殺しにしてもいいくらいです。

『糞イルカアツッ！！　仰角24度・”香砲”放てッ！！』

血の様に赤い空を、大気が震えるほどの凄まじい轟音が貫いた。

このままでは間に合わない。そう感じた瞬間、わずかでも起爆を延ばすための悪足掻きに、単体破壊を目的とした貫通力の高い速射

砲を二号弾に向けて発射させました。

『了解ナリ!!』

香砲はマツ八十二。後発の負債を差し引いても充分オツリが来ます。

ヒインツ!

巨弾の頭上を駆け抜けた音速穿弾。

黄昏の夕空に”香”が閃く。

「2…… 2.6…… 誤差修正1.4……」

常人なら視認不可能な音速閃光。エースの獰猛な双眸が二号弾との距離を精密に捉えた。エースの特殊能力のひとつ、全空間把握能力。

空間に存る物体の速度と寸法を完全に掌握する能力。二号弾と香弾との相対距離を瞬時に分析し、楕円運動を取る二号弾が大気摩擦によって偏差する速度と位置関係を即座に計算…… 回答を導き出し、次弾発射の命を告げます。

『香砲、第二射! 仰角19.6 続いて第三射、0.3秒後 仰角18.1 撃ツ!!』

イルカとの通信タイムラグを差し引き、第二、第三の砲撃命令。やや斜め上に撃ち出されし螺旋描く香弾は見事に命中、巨弾の上っケツを跳ね上げた。

バギンツ!!!

爆裂したような快音を響かせ重金属が力チ合っ。

耳をつんざく悲鳴のような音に驚き、人々の視線が鮮烈な空へと向けられ…… その間にも香の第三射が失速した巨弾に猛追。重装甲に護られし手負いの悪魔を完全に射抜いた。

腹を見せた瞬間に射抜かれた巨弾の外郭が扇状に展開し、初期予想落下地点の七km手前で爆散 黄砂をより色濃くしたような腐食性猛毒を一面に撒き散らした。

彼方に薄モヤのような稜線を描く、厳冬を越えて枯れかけた裸山林。上空472mで拡散し猛威を奮う腐毒が、それらを瞬く間に喰

らい尽していく。

突然の惨劇に動転して眼を見開き、愚民どもの行き交う足が止まる。超邪魔ですッ！！

『香砲オオッ！！』

怒りの咆哮に遅れること数瞬、行く手を塞ぐ醜悪な”モノ”どもを木っ端微塵に蹴散らす螺旋の閃光。

戦車七輦を軽々と突破する貫通力を備えた香弾は、人体を紙切れ同然に引き裂く魔弾。

愚民どもが密集する大通りを突貫し、圧倒的貫通力で路を切り拓く香なる光。

遮る者には容赦なく、黒き螺旋の尖頭に射抜かれた数十の血袋どもは、赤い細切れの挽肉となって辺り一面に飛散し、自分の征くべき路の景観をとても素敵な血の海に変えてくれます。

『香砲斉射ッ！！』

十二中全残弾八の香砲同時展開。横一列の等間隔に撃ち出された八発の凶悪な貫通撃を止める者など居はしなく、痛みを感じる間も無く、人々は巨大なミキサーに放り込まれたようにグズグズの血肉と化して血の雨を降らせ、大通りを凄惨に彩る。

ざつと百人強の死体が織り成す阿鼻叫喚。ビルの壁や上空に飛散した内臓が下卑た音を立てて地面に落散する。それでも自分は征くだけ。赤黒い肉片の緋毛氈を踏みしめ、ただ征くだけ。

「屍喰らいッ！！」

辿り着いた白亜の官邸中央 天にも届きそうな巨大な鉄の門扉の前に、自分の路を塞ぐ白髪美しい少年が1人。向かい合った瞬間、それが誰なのかを認識する。

「迫撃の王かッ！！」

アジア圏最強最古の集団徒手空拳” 饗乱”<sup>（タキラン）</sup>の使い手。

この国でエースの称号を許された、自分以外のエース。

して饗乱とは……迫撃の王ソレインを頭脳とした、完全なる統率の下に敵を殲滅する集団戦闘術。子供1人相手にでも三十人掛りと

いう、ちょっと卑怯じゃね？ と恐れ販される彼らには、微塵の隙もありません。

「決着を着けたかったぞ、屍喰らい!!!」

エリートの特特殊部隊に着用が許された白い軍服に身を包み、透けるような白髪的美少年は激しく猛る。

ちなみに自分が”屍喰らい”と呼ばれるのは、仲間殺しで享樂を得る超変人だから……だそうぞ。

通り名付けた人、殺しますよ？

【ソレイン】

トシ・アキ……最初に遭ったときは、ヤツが一方的に強かった。

特殊強襲部隊が集う修練場、そこでの一対一の模擬戦闘。

それがヤツとの遭遇い。

俺はまだ十五歳の餓鬼だったが、十代以上続く良家の家柄と中華魔大陸での武功を取り立てられ、最上級の兵士である称号を持つヤツと同じ目線でモノを見ていた。つまり”エース”だ。この国に十人といない怪物の証。

負け知らずだった。自信があつた。自惚れていた。自分より強く賢い人間などこの世には居ないと天狗の鼻を伸ばしていた。だがそんな幻は、見る影も無く無残に打ち砕かれるのだった。

「が…がぐう……っ!!」

倒されては引き起こされ、俺は血溜まりの中にいた。蒼白い肌的病的なほど痩せた不気味な男の手によつて、出鼻で顎先を砕かれたからだ。俺は朦朧とした意識をかううじて繋ぎ止めているだけの、首のすわらないくたびれた人形と化していた。

俺に興味を失ったヤツの横顔は今でも忘れない。

まるでゴミでも見るような虚ろな瞳。

俺は恐怖した。恐怖のあまり命乞いをした。

身動きの取れない俺はサンドバック同然で、鍛え上げた技の一切がヤツにはまるで通じなかつた。腕の骨を折られ、鎖骨も脇腹の骨

も両膝の皿も割られ、殴られ続けた顔面は赤黒く腫れ上がり、抵抗らしい抵抗も出来ずに満身創痍。大勢の衆人観衆の中、俺は意識を失うまでヤツに弄ばれ続けた。

二年後……そして今日より一年前……俺とヤツは互角だった。

トシアキは天才だった。俺ももちろん天才だが、それでもヤツの足元にも及ばなかった。敗北から半年はヤツと眼を合わせることも出来ず、PTSDの影響で寝小便を漏らし、夜中に悲鳴を上げて飛び起きたりもした。心俺の力に憧れて集まっていた取り巻きは蔑みの眼で俺から離れて行き、俺は集団の中で孤立していった。

最後の模擬戦闘……俺は自分を取り戻すためにヤツに挑んだ。旧家から伝わる秘伝の徒手空拳……あまりに卑怯だったので頑なに伝承を拒否していたのだが、俺は敢えてその誓いを破る。恐怖に立ち向かうために。己に打ち克つために。

「来いっ！！ 殺してやる、屍喰らい！！」

「はぁ……身の程を知った方が得ですよ？」

そして現在。一年前とは比べ物にならないほどの実力を身に着けた俺の挑戦を、ヤツは人をナメ切った態度で応じている。

阿呆が、隙だらけだ。瞬きの間に殺してやる。

「八陣……」  
ストリング「ストリングプレイ・スパイダーベイビー” ツツ！！”」

弦の使い手であり妖々の狂師でもあるナカムラに師事して会得した集団戦闘術奥義。蜘蛛の巣状に展開した兵士が完全なる布陣にて敵を駆逐する、究極最後で必殺無敗の奥義。今日初めて使うこの技から逃れたものは……未だかつて誰もいない。

勝利を確信し、ほくそえんだその時、俺の咽元を鋭い銀光が駆け抜けた。

【トシアキ】

雑魚が……っ！！

憎悪の面で吐き捨てました。内心の焦りと心臓の動悸は気力で押し殺しました。

立ち止まった瞬間にドツと押し寄せる疲労。開いた毛穴から汗が噴出す。ギチと音を立てるほど眼球が怒りに震えます。

ソレインとの間合いは直線距離にして47m12cmと3mm。

これは向こうも把握しているでしょう。エース故に。

山林を蹂躪し、街になだれ込んで来るガスが、ここに到達するリミットは二分弱。助かる道は、エース級のソレイン坊に速攻で仕掛けて、瞬殺で仕留める以外に道はない。それも無手にて。

「スパイダーベイビーツツ!!!」

ほんの数秒の思索がフル回転する灰色の脳髓を奔り回っていた時、焦れたソレインがいきなり必殺を仕掛けて来ました。

伝説の名人ナカムラの芸術的なストリングプレイを模した、究極にして完全なる布陣。勢いよく左右に展開した、黒い道着を着たほぼ同等の背格好の男どもが、よつてたかつて自分を取り囲みます。

が、甘いです。

現在六つあるエースナンバーの内、最高最速の機動力を誇る自分。「カアアアアツツ!!!」

三十とプラス一、計六十二の視界から一瞬消え失せるほどの鬼脚で硬い石畳を踏み抜き、絶対包囲完成の瞬間を縫い、遙か後方で勝利を妄信するソレインとの肉薄を果たす自分。レーザーでメタル・コーティングされた奥の手の左五爪を、緩みきった美顔を支えるその白つ首め掛けて振り上げました。

「もらったあーっ!!!」

貰いました。ソレインの視線すら未だ、自分の元いた場所に向いている。死角からの斬撃は絶対に避けられません。その他にもいろんな意味で貰ってます。命は当然として、ソレインのズボンの左ポケットに手をつっこんでサイフを失敬しています。首に掛かった銀製のロケットも頂きました。ロケットを開くと、椅子に腰掛けて膝の上に手を重ねている上品な女性が微笑んでいます。お金にはな

らないので写真は捨てます。あ、右のポケットに金の懐中時計発見。腰に差した美しい装飾の短剣もお金になりそうです。支給品じゃない磨き抜かれた上等な黒い革靴……これも死んだら貰いましょう。よし、物色終了。死ねエエ!!!!

勝利を確信した次の瞬間、その目論みはずれ、自分の顔が驚愕に満ちていくのを感じました。

「……………ぐう!!!」

斜めから切り裂く手刀は、ソレインの喉元のわずか数ミリ手前  
空中で止められています。

「チイッ!!!」

思惑をはずされ、奥歯を噛み潰さんほどに歯噛みする自分。腕を  
押そうが引こうが、見えない糸に目取られたかのように動きません。  
肘から先の手の皮が搾られるように締め上げられ、裂け、血の玉  
が浮き上がってきました。感覚での判断ですが、自分の腕を締め上  
げているのは不可視の銀糸。ミリ、ミクロ、ナノの世界の見えざる  
鎖。糸は切り裂くより絞める方に特化しているのか、紫色に鬱血し  
た左手の骨が軋みます。

「視える……貴様の残した足跡を辿る日々だった俺が、今ハッキリ  
とッ!!! 視えているぞ!!! 差は詰めた! 埋まった! ……  
いや、凌いでいる!!! この眼に、この眼に貴様が映っている……  
!!! 苦痛と屈辱に呻く道化師の赤ら顔が、くつきりとなッ!!!」  
「あぐ……っ! は、放しなさい……汚ならしい下衆が、エースに  
対してエエッ!!!」

に、肉が削げ……折れ……痛っ……耐えられない……反撃……殺  
さないと……香砲!!! 香砲オオオ!!!  
『いつ、いつ、イルカアアアッ!!!』

『次弾装填まで四十二秒ナリ』

絶望に喘いだ瞬間、左腕の碎ける壊滅的な音が体中を伝った。

腕の筋繊維がプチプチ音を立てて千切れ、糸の圧力によって締め  
上げられた筋肉が骨を押し碎き、折れた骨の先端が筋膜や皮膚を突



き破って露出した。

「　　つがあッ！！！」

肉を削ぎ落とされた左腕は糸の束縛から擦り抜けることが出来ましたが、粉々に砕かれた骨やボロボロに引き裂かれた鮮血に塗れし腕は、とても正視に耐えぬ有様。脳天を突き抜けるような激痛と鈍痛に耐えかね、自分は敵を前にして不覚にも膝を落としてしまいました。

「ああ……あひ、あひいい……ッ！」

我が腕の絶望的な損壊に眼を剥いた。唇が小刻みに震え、大量の失血による寒気と恐怖で歯がカチカチ音を立てた。宙で煌く銀糸が大粒の血の玉によって浮き上がり、それが滴り落ちてブトウの果房のように硬い石畳を黒く彩る。

「　　……ハハ、ハッハッハ……！　ハッハッハッハッハッ！！！」

しばらく自分を呆然と見下ろすソレインは、信じられないような陶酔したような面持ちで歓喜に打ち震えている。獲物を捕らえた蠅螂のように折り曲げられし指先は、硬直したように示威的な形を取り続けている。

まったく……こちらは泣き真似までしてやっているというのに、この坊やにはまったく隙が無い。無意識下にまで戦意が刷り込まれている。会わなかった一年の内に何があったかは知りませんが……獲得した二番のエースナンバーは伊達ではないようですね。

「ハッハッハ！！　ストリングプレイの陣形に気付いていなかったようだな！！！」

「　　……」

左腕の肩口を千切った袖で結び止血していると、勝利の余韻でやたら饒舌になっている御方がおっしゃいました。

「如何に集団で取り囲もうが、貴様が陣形を突破してくる事は分かっていた！！　子飼いの無駄飯食らいの烏合の衆が幾ら集まろうが、貴様には何の役にも立たたと分かっていた！！！」

視線を感じて後ろを振り返ってみると、とても不満そうな顔をし

た三十人がいました。陣形の完成に戸惑っていたので気になっていましたが、彼はどうやら人望に欠けるようです。そしてその少年の舌禍は、さらに続きます。

「だが、棒や石ころも使い様！ 陣形を敷き、向かって来る場所さえ特定……限定できれば、俺の腕でも十分に貴様を捉えることが出来る！！ 俺の頭脳プレー！！ 俺が考えた！！ ゼロナンバーのエースを倒した俺が最高の男だ！！ 俺が偉いんだ！！ 俺が最強なんだ！！ やったよパパン！！」

「ファザコン……！」

「やったよポチ！」

「愛犬家……！」

「やったよピーコ！」

「愛鳥家……！」

「やったよテコンV！」

「愛カルトロボ家……！」

「やったよボルボックスRX30K9！！」

「なにそれ？」と思つたら、ソレインの足元で蠢く子犬ほどの黒い煙のような物体が、甘えるように彼にすり寄っています。……いや、ホント、なにそれ？

肉を削がれた左腕は、生々しい鮮紅色と象牙のような白を覗かせています。見ているだけで「うわ……！？」て顔になってしまふ凄まじい裂傷。朽木の枝先のように力無く垂れた指先から血の雫が止まらず、ポタポタ流れ落ちていきます。

「~~~~~！！！」

呼吸が激しくなり、全身が強張り、めっちゃくちゃ痛いです。縫い合わせる肉自体がどうしようもないので、整形とか不可能でしょうし、ナメック星人やトカゲとかじゃないので腕を千切っても再生なんか出来ませんし、なまじ出来ても、いきなり腕がにいと生えるような、質量保存の法則とかその他モロモロの物理法則を無視してトンデモ小説になってしまうのはカンベンです。

しかも、残り時間もわずか。

「ハハ、よせよ、ボルボックスRX30K9!!」

「モコモコ・・・」

黒い煙ボルボックスは、足元から蛇のように巻き付いて遭い上がり、夕差しに透けて透明に煌くソレインの白髪の上にヒョッコリ載った。アフロ完成。グラデーシオンを背に、アフロ降臨の瞬間である。

「あ……あうう……」

自分は一瞬痛みも忘れ、その神々しいまでの姿に魅入ってしまった。豊かで大らかなアフロ。まごうかたなきアフロ。その姿はまさにアフロ。ソウルフル。侵略者に虐げられし原住民の熱き魂の情念が、ソレインの頭頂で不本意ながらも甦る。

「そ、それは……っ!!」

「クク……解るかい？ さすがは、トシアキさんだなあ……」

ソレイン……いや、アフロが、両腕を脇に当てる悠然と微笑んだ。地平に沈みゆく紅の逆光の所為で、膝まづいた格好ではほとんどシルエットしか窺えなかったが、張りのあるその声と無意味に偉そうなポーズで、どんな嫌な笑みを浮かべているのか想像に難くない。腹が立ちます。だがそれも、あと数秒の我慢。香弾の装填が完了します。

「さて、そろそろ始末してや」

『 香砲ッ!! 』

大気を切り裂く烈空閃弾。

艦上から官邸までの長距離間に置かれた膨大な遮蔽物を、白銀のライオット・チタニウム合金が怯むこと無く穿ち抜く。

悲鳴のような唸りを上げて襲来する無慈悲なる重金属の白狼が、目前の勝利に陶醉した少年の咽下を今まさに食い破らんと、立ち塞がる全てを蹴散らし突貫して来る。

大気を焦がすほど十分な加速と旋回の合力を得た香砲は、地表二m内の超低空発射。地表のわずかな起伏や樹木の壁をも撃ち抜き……

…辿り着いた場所は自分の背中。そしてその先には、ソレインの喜  
悦に歪んだ姿があった。

音の壁を超えた時に発生する衝撃波。ソニック・クプーム

その威力たるや、低空を疾駆する七十mmの香弾ですら首都を瓦  
解させるに足る。

直撃すれば人間など風船のように弾けて飛ぶ。触れもせず窓硝子  
が粉々に砕け散る。レンガや土塁を巻き上げ、重厚な鉄筋コンクリ  
ートを粉碎し、広い路の両端に整然と並ぶ電柱を根こそぎ倒壊させ  
る。

来た。

背中を圧迫する凄まじい衝撃。圧力で眼球が押し出される感覚に  
慄き、指で目蓋の上から眼を押し込んだ。遙か彼方の後方で旋回す  
る香なる暴威に、全身の肌が粟立ち、痺れ上がる。

衝突の瞬間、自分は最後の力を以て真横に飛び退いた。

跳んだ瞬間に両耳の鼓膜が破裂し……世界の音が掻き消えた。

「ッ」

ソレインが白き光波に呑み込まれた。だが勢いは止まらない。衝  
撃波に遅れて香弾が疾って来る。堅牢な鉄の門扉が熱融解したプラ  
スチックのようにひしゃげ、正門を突破した焰を纏いし音速の旋弾  
は、官邸中庭でサークルを描く白いレンガや、ロココ調の巨大な噴  
水や、花壇の草花を根こそぎ抉りながら突き抜け、狙い違わず正面  
玄関へと吸い込まれていく。

「ぐう……っ！」

自分は受身も取れず地面に投げ出された。転がる度に傷ついた左  
腕が悲鳴を上げたが、構ってなどいられない。

衝撃波が掠めただけで体内の血液が沸騰したかのように騒ぎ出し、  
背中はまるで焼きゴテを押し付けられたように熱く……呼吸が……  
出来ない。眼の奥が焼けるように熱い……熱い。

残り時間は三十八秒。いや……三百秒強か。

首都の中央付近まで席捲しつつある高濃度の腐食ガスは、衝撃波によって左右に押し退けられ、幾分かは空中で分散した。また、破壊された建造物の大量の瓦礫が防風林や防砂林のように毒を遮るだろう。毒ガスのその猛威が我が元へ届くには、今しばらくの猶予がある。地下シエルターを探し退避する猶予が。

「……………」

衝撃波が来る前に記憶した官邸までの道。迷うことなく一気に駆け抜ける。だがしかし、先の衝撃波でレンガ敷きの中庭がところどころ盛り上がり、足が取られてイメージどおりには走れない。音も無い。眼も見えない。三半規管もグワングワンに揺れまくっている。滑車の中を走るハムスターのように、世界がグルグル回り続けます。

ほっほっのていで玄関に辿り着いたときには……残り時間……。

うず高く山積した瓦礫を踏み越え、いよいよ官邸に潜入する。まだ眼は開かないが、肌に触れる微小な温度差で周囲の明暗ぐらいは判別出きる。

電柱の倒壊で街の灯は落ちているはずが、官邸内の高いアーチ状の天井には、燦然と光が満ちていた。おそらく外界とは独立した電源の元があるのだろう。となると……やはりシエルターの存在が濃厚になってくる。

「……………」

大量の失血で途切れそうな意識が攪拌する。一步ごとに精神が磨耗してゆく。裂けた耳朶からも血が溢れ、内臓は衝撃によってその機能を激しく減衰させていた。

今、誰か来たら……終わる。

カラッ

音が聴こえたワケではない。だが何かの気配を感じた。息が止まり、背筋が硬直した。

砂礫と共に小石が廊下を転がり落ちたのを感じた。  
誰かが背後に存る。

【ソレイン】

衝撃波が不意に襲って来た刹那、瞬時に回避が不可能だと判断した俺は、咄嗟に石畳に向けてストリングプレイを解放した。地面を貫いた銀の十糸は硬い石畳を持ち上げて前方を覆い、その即席の壁が衝撃波の直撃を上方に逸らした。だが……。

「……おのれ」

全てを逸らすことは不可能だった。

血が沸騰したように熱い。全身がダルい。眼が利かない。大量の鼻血が呼吸を妨げ、思考が纏まらない。激しい耳鳴りがして、揺らぐ足下が三半規管が不調を訴えている。この状態、死に至るほどではないが……戦闘は難しい。

「殺してやる……このままじゃ済まさないぞ」

この負傷は俺の驕りが招いた。自分の不始末は自分が着ける。雑魚の数に恃んで心の研鑽を怠った……自分の責任。もはやトシ・アキを殺す以外、己の取り戻す方法などありはしない。

「ブチ殺す……ブチ殺す…バラバラに引き裂いてやる……!!」

痛みなどどれほどのものか。

俺の屈辱に比べれば瑣末な出来事。

決着を着ける。敗北の過去に決着を着けてやる。

「誰だ？」

「……!!?」

彷徨い歩くうちに、俺はヤツと遭遇した。

声は聴こえない。眼も見えない。だが、体の何らかの感覚が確かにヤツを捉えていた。高低差三mの瓦礫の下で、ヤツもこちらを感じている。

【トシアキ】

振り向くと同時に、互いが最大の必殺技を発動していた。

「ストリングプレイ　大瀑布ツツ！！」

「香弾第十四射……外殻解放……ツツ！！」

白亜の宮殿に舞うソレイン銀系銀麗が天井高くにまで伸び、鋼鉄をも寸断する単分子の弦がアーチ型の天井を豆腐のように切り裂き、周囲の壁をも巻き込んで総重量数十tもの大崩落を引き起こした。

それに対して、香弾の先端　弾頭に位置する部位を覆うライオット・チタニウム合金の外殻を切り離し、爆発的スピードを生み出す原動力となる内核を露出させ、制御不能なまでに倍加するそのスピードと破壊力を迷うことなく実行する自分。通常弾が一点突破を目的とするなら、大気摩擦や内核炉の熱冷却を担う外殻を解放したブラスト・タイプは……煉獄そのもの。七千度の灼熱を纏い、この世に遍く全てを焼き尽くす地獄の劫火。

「香砲ブラストツツ！！」

巻き添え覚悟の、単体殲滅目的を大幅に超越した破壊を敢行する解放された香弾の速さは想像もつかない。圧倒的熱量を孕み白熱したフレイム・ヘル。何もかもを獰猛に喰らい尽くし、この世に地獄を顕在化する。

そこに在る全てを薙ぎ払い灼華する究極無比の灼撃。

万死殲滅の烈光。音速の螺旋が紅き焰を巻き上げる。大量の酸素を得たそれは、やがて灼熱の爆炎となりて一条の尾を引く。まるで流星のように荘厳に。

「カアアツツ！！」

白く霞んだ音の無い世界で、快復の兆しを見せる自分の左眼が、元の顔の判別がつかぬほど激怒に歪んだソレインの唇を微かに読み取った。

## 信濃川ノア

ヴェイン

「……ハ？」

その言葉の意味に気付く前に、まさに不意を衝くようなタイミングで天井から大量の瓦礫が襲って来た。

鋭利に切り分けられた、一塊が数百Kgを超えそうな巨石が山のように降ってくる。

眼の水分が蒸発するような爆炎の気配を感じ、大慌てで自分は空中で体を捻り、近くにあった瓦礫の影に飛び込んだ。間を置かずして、瓦礫が破碎する轟音すらも呑み込み、煉獄の炎が全てを完全に染めた。

「ひ……ぎぎ……ッッ!!」

一呼吸で肺腑が灼ける。閉鎖空間の酸素を根こそぎ熱エネルギーへと転化して、死に繋がる白き閃光が一気に弾けた。

炸裂したブラストの尾に掠められたソレインが、光に溶けて昇華していく。

光に包まれた巨石群は、宙で静止したまま粉々に砕けて散った。身を守る瓦礫が瞬く間に崩壊して、体が光りに吞まれ……そこで自分の意識はブラックアウトした。

【信濃川ノア】

わたしは、信濃川ノア。

日本人の父と韓国人の母を持つハーフで、どこにでもいる女子中学生だ。といっても、アジア系同士の婚姻で産まれた子供なので、顔立ちや皮膚の色にこれといった変わりなどないのだけど。

わたしは中学二年まで日本で暮らし、父が事故死したので、中学



三年の今現在は母方の家族が居る韓国で暮らしている。

母さんはおっとりしているけど生活能力あるし、マンションの一室で日本語教室を開いてそれなりに上手くやっている。父さんが生きていた頃みたいな贅沢はできないけど、母娘が仲むつまじく暮らしていくにはそれで充分だった。

ソウル市内の中学校に編入したわたしは、しばらくして問題に直面した。

クラスの陰険な男子が、日本人の血を引くわたしをスパイだとか、裏切り者だとか言い出したのがキツカケだった。なんとまあ下らない、幼稚な発言だろうと、そのときは特に相手にもしなかつた。口々に知りもしない人間を何故そんな風に悪し様に言えるのか理解に苦しむ。

でも連中はわたしが無視していることをいいことに、次第にイジメをエスカレートさせ、その被害は母さんにまで及んだ。

「えいや」

母の悪口が許せないわたしは、イジメの主犯格が独りのときを狙って、学校の階段から突き落としてやった。その翌日のことだ。そのことでわたしは母さんが職員室に呼び出されるハメになったのは。

「うちのポクちゃんが足の骨を折る大怪我を負ったザマス!!! 一体お宅では、娘さんにどんな教育をしてらっしゃるザマスか!!!」

職員室に入るなり、トイレの芳香剤のニオイをプンプンさせた金縁眼鏡のケバいおば様が視界に入った。彼女は、息子でありイジメの主犯格の容疑を掛けられているチョムヒを擁護し、先生方を相手に大弁舌。噛み付かんばかりの勢いだった。

「まあまあ、奥さん落ち着いて……」

現場を直接見ていない担任の先生は、おば様の迫力に圧されタジタジ。とりあえず当たり障りの無い笑みで奥様をなだめる。その後では、クラスに根回してわたしを悪党に仕立て上げた肥満の男児

チヨムヒが、ドツカリ椅子に座り、腕組みをして、わたしを見てしてやったりと鼻を鳴らしていた。

ちい、野郎が。

いい加減イラツときたわたしは前に出て、おば様のキャンキャン喚く声が息継ぎで止まる一瞬を狙い、口を挟む。

「ちよつと待つてください。あのデブが先に悪口を言ったんですよ？ みんなの前でわたしの母さんが　だとか、わたしを×××だとか言つて侮辱したから、つい、階段から突き落としましたんです。頭打つて気絶していることをいいことに、服を全部脱がして焼却炉に放り込み、髪型をハーケン・クロイツ・カットに刈り上げて、額に油性ペンで「ミート」と書いたんです。そして彫刻刀で、本人の名前と卑猥な落書きを刻み込んだ机を女子トイレの前に放置して、なおかつ　」

「……普通にイジメじゃねえか？」

頭頂を見事な鉤十字に刈り上げられたチヨムヒが、トラウマ満載の沈痛な面持ちで床の一点を見つめているのを横目に見て、先生は思わず本音を漏らした。

「よ、よくも……いけしゃあしゃあと……！！」

「今どき「いけしゃあしゃあ」はないよね、母さん」

「そうだねえ……いやいや、反省なさい！！　額に肉とか書いちゃ駄目でしょう！！」

「母さん母さん、ミートだって」

「ミートでもニートでも、どっちでもいいザマス！！　この始末をどう付けるザマスか！？」

過保護なおば様は愛息をキズものにされてヒートするばかり。説得を諦めて譲歩したわたしが、「このクソババア死ね」と宥めるような声で言つても、厚化粧の白面を真っ赤にするばかり。

「無闇に藪を突つけば大抵何か出るモンなんですよ。愚息さんは自業自得。他人を非難する前に、息子さんの不躰をどうにかするべきじゃないですか？　あと、ババア死ね」

「ババア言うなザマス！！ ウソをつくんじゃないザマス！ ウチのポクちゃんアナタが言うような汚らしい事は言わないザマス！！ してないザマス！ クラスの子たちも皆そう言ってたザマス！ ねえ、先生！！」

「え……？ はい、そう言っただけですが……。うん……証拠も無いですしねえ……」

「先生は生徒の言うことが信じられないザマスか！？」

それを言うなら、同じクラスのわたしの意見は信じられないのか……ということにもなるが？ 所詮はババア理論か。

わたしはやれやれと肩を竦め、頃合とばかりに詰めに入る。

「……クラスの皆が言っていた というのは間違いないですか？」

「ええ。モチロンザマスよ！！」

ふふん、言ったな と、わたしが勝利を確信していると、頬に手を当てた母さんが困った風に首を傾げて、

「参ったわねえ……。あ、そろそろ午後の授業あるから帰っていいかしら？」

「母さん自重。保護者なんだから少しだけ待っててよ、そろそろ片つけるからさ」

「何かアテがあるの？」

母さんは私を端から信頼していた。ババアのような盲目的な信頼ではなく、確固たる信念の下に信じてくれていた。学校に呼び出しを食らっても慌て騒がずおっとりして、必要以上に口を挟まず、私のサポート役として背景に徹してくれていた。もうこれ以上馬鹿騒ぎに付き合わせたくない。

「ばば……おば様がいい具合に踊ってくれたし、いい塩梅だわ。見てて、今からとても解かり易く決着を着けるわ」

「先生、いい加減にして下さい！！ 私たちは、この親子に謝罪と賠償を請求するザマス！！ 文句無いザマスね！？」

「あの……、そのナチ野郎が私たちを侮辱していないって、おば様は確かそうおっしゃいましたね？」

「ポクちゃんの髪型をナチにしたのはあなたザマしょっ!? さつきも言ったとおり、ポクちゃんは潔白ザマス!!」

「ハッ!」

私は心底呆れた風に息を吐くと、手提げカバンから小型レコーダーとノートブックを取り出し、机に並べて置いた。ノートを起動させてからレコーダーのスイッチをON。すると、文章ですら書けないような悪辣極まりない単語の羅列が再生される。その声はクラスの間々に始まり、チョムヒの声もばっちりだ。

いや、便利な世の中になったものだ。動かぬ証拠というヤツだ。おば様方はネット上でID晒されたかのように青ざめた顔で黙りくり、ナチ党院となった少年は非常に気まずそうな顔で視線を下に向けている。

「こ、こ、こんなの捏造ザマス!!! に、日本人が考えそうなことザマス!!! 先生、信じて下さい!!! ウチのポクちゃんはこんな卑猥な言葉は口が裂けても言わないザマス!!!」

「いや、俺に言われなくても……」

先生の胸ぐら掴んで唾をシャワーの如く浴びせるおば様。

まったく、引き際を誤った人間とはこうも見苦しいか。

「ハイ、ノートパソコンに注目して下さい。最近では便利なツールが巷でも簡単に手に入りましてね。ほらっ、この重なり合う赤と青の線が見えますか? 青がナチの声紋。赤が、余分なノイズを取り除いたテープの声紋です。ほぼぴったり合致してますね? これって客観的な証拠能力としてかなり高いと思いますけど?」

「……」

さすがにこれには黙った。みんな黙りこくった。さらに突っ込んでくるなら動画のデータもある。

嘘つき相手には騙されたフリをしている。そうしていれば嘘つきはさらに大きな嘘を吐いてくるから……と、昔の偉い人はおっしゃいました。

情報を小出しにして相手の嘘をなるたけ引き出し、二度と歯向か

う気が起きないように徹底的に潰すのがわたしの流儀だ。想像以上に良いカウンター入ったみたいだけど。

「あ……ということ、ご納得戴けましたでしょうか？ 問題がなければこれで手打ちということをお願いします」

裁定者として駆り出された先生は双方の対立の経緯と意見を自分の中で慎重に討議し、ババアサイドには嘘をついていた件に関して謝って貰うが、その代わり、わたしたちにはケガをさせた医療費を支払って貰う（謝罪込みで）ことで落ち着いた。

衆人環視の見守る中、わたしは諦めたように嘆息し、荒んだ目でババアどもを睥睨しながら「このカスどもが……ごめんなさい」と、顎をしゃくりながら素直に謝意を示した。

「謝ってない！！ 謝っていないザマス！！」

「うっせえなあ、プロ市民が。どうせ金が欲しくてゴネてんだらう？」

「ちよつとノア、言い過ぎよ。あの、本当に……本当に娘がすみませんでした。でも、嘘吐いてたことをまず謝れよクソ虫どもが」

母さんは壊れたメトロノームのようにペコペコ頭を下げたが、その最後に、その場の全員が凍り付くドスの利いた啖呵を切った。とてもスカツとはしたが、わたしたち親子の立場は最悪なものに。

「覚えてらっしゃい！！ この学校に居られなくしてやるザマス」

「やってみるババア！！」

「ババア言うな！！」

母さんと同様、わたしも威勢良く啖呵を切ったが、その数日後、

ババアが言ったとおりの事態になった。

わたしの行為や発言は保護者会で吊るし上げを喰らい、つい頭に来て「厚顔無恥な大人たちに都合のいいだけの保護者会なんか潰すべきだ。学力が下がる」と吐き捨ててしまい、学籍剥奪寸前までに追い込まれてしまった。

証拠がどうあれ、動機がどうあれ、理由がどうあれ、教師や生徒を含め学校に居る全員が敵になったらどうしようもない。学校に

わたしの居場所は無くなった。

わたしは母さんに心配かけないように、学校に行くと言って毎朝定時に家を出て、下校時間まで街をブラつくようになった。

夕方になり、街を歩く制服が珍しくなくなった頃、いつの間にか見知った顔がポツポツと増え始めていた。

「ちいっ！」

気付いたときには遅かった。

誰かがクラスの全員に根回ししたのだろう。面識の少ない他のクラスの人間も居る。連中はわたしを見て、ニヤニヤとイヤらしい笑みを浮かべる。

わたしは捕まらないように人通りの多い場所を選び、早足に迂回を続けたが、大通りの道を封じられ路地に入り、まるで誘導されているように徐々に追い詰められ、とうとう五人ばかしのクラスの男子に囲まれてしまった。

遠くで街の雑音が聴こえる。

冷たく薄暗いビルとビルの挟間。酒瓶のケースやゴミ袋が雑多に散乱した薄暗い狭路。前後を挟まれ逃げ道は無い。狭間から見上げた空がとても高くに思えた。

「キョツキョツキョツ！！ おまえ生意気なんだよお！！」

深い藍色の忍者服を着たチビが不気味な哄笑を上げ、両手に構えた鎌で壁をガリガリと傷付け威嚇してくる。

「……ちよつと、どういう格好よ？」

「フシユラシユラ……ここが teme の墓場だ」

「どういう笑い方よ？ アンタら女一人に五人掛かりって、恥ずかしくはないの？」

青銅の甲冑に身を包む見上げるような大男が地響きと共に現れ路地に入れないので手前で立ち止まる。他にも、暴力が支配する荒廃した世紀末にでも出てきそうな筋肉の巨人達が、恥知らずにも弱い少女一人を取り囲んでいる。

「っーか、ほんとにアンタら中学生？」

「安心しろ、俺1人でやってやるよ」

あまりの戦力差に怯むわたしの前に、そう言って出て来たジャンパーとGパンの男子は クラスメイトの『ジャメイ』だ。

彼はクラスの裏のまとめ役的存在で、白く脱色したモヒカンの頭、殺し屋のように冷酷な瞳をしている、

立ち姿に雰囲気がある。かなり喧嘩慣れしているのだろう。

身長は平均より少し低いくらいだけど何か鍛えているのか、均整の採れたバランスの良い体つきをしている。

「……アンタが？」

「ああ、生意気なクソ女のおしおき役つてワケだ」

おしおきつてアンタ、そりゃ自業自得じゃないか。

十分後。

「うぐ……てめえ、汚ねえぞ！！いきなりナイフなんか使いやがって……！！」

全身をナマス切りにされた不良少年が地べたに這い蹲り、涙目になりながらわたしに怒りを訴えた。

「大丈夫だよ、ちゃんと皮だけ切ったから。刃物関係は素人じゃないしね」

と言いつつ、指と指の間で薄刃のナイフをクルクル回す。素人にはまったく見えないスピードで。

「それにしても、獲物持つてソツチから仕掛けてきたクセに、ちょっと切られたぐらいでもう恨み言？ 馬鹿じゃないの？ 死ぬの？」

学校の腕自慢。くだらない。

わたしはジャメイの泣きっ面に、唾を吐き捨ててやった。

ナイフはわたしの一部だ。他ならぬ自分の肉体を傷付けて知り得た肉と鉄の感触。一体感。死と生の境界。苦痛と快樂の混合。袖から引き出した、掌に隠せる刃渡り五cmのオモチャのような暗器を、わたしは手足と同等以上に扱える。

そして肌着の下には、刃物で切り刻んだおぞましい自分の肢体が

隠されている。これは望んで行ったことだった。

誰にも理解されないだろうけど、わたしは刃物が皮と肉の間を切り裂く感触に興奮を覚えるのだ。一度、刃物が肋骨まで到達したときにはもう、快感で痛みがまったく感じられないほどだった。

わたしは、とてもとてもおかしいのだ。

わたしは痛みをほとんど感じない。

悦びにしか思えない。

だから、誰かが傷付き、悲しみ、どうなるうとも、まったく気にも留めない。他人の痛みに興味がない。

「ひい…… や、やめる!!」

ナイフでベルトを寸断し、ズボンとパンツを脱がして靴下だけ履かせたまま表通りにでも放り出してやろうとしたら、ジャメイは駄々っ子のように抵抗した。

「うるさいなあ…… もう死ねよ」

必死に脚に縋り付いてくるジャメイの手の甲を裂いて、蹴り剥がし、顔を踏み付け壁面に後頭部を何度も打ち付けてやった。何度目かで大人しくなった。

「もう…… かんべんしてくだ…… さい」

「…… あゝ」

ジャメイの醜態は目に余った。なんかめんどくさくなってきた。

あんまりやりすぎりとまた母さんに迷惑がかかるし、多少は溜飲下げられたら適当なところで引き揚げたいんだけどな。こいつ反応がベタで面白くないし…… なんかもういいや。

「おい、そこで傍観者ヅラしているオマエら」

「な、なんでしようか!？」

モヒカン頭に全身プロテクター、火炎放射器や棍棒などを持った、あきらかに世紀末気分と同級生どもに睨みを利かせ、ちよつとこつちこいちゃと指で指図した。

「はい、これ」

モヒカンの男子に血糊が付いたナイフを手渡し、そのまま肘関節



を押さえて強引にジャマイの首筋にまで誘導する。

「はい、激写激写」

「……？」

わたしはその場からパツと離れ、携帯でその様子を撮影する。

画像を確認してからデータを圧縮し、それをオンライン上のパス付き無料UPローダーに上げる。

よし、偽装証拠GET。勝てば官軍。

ナイフを握ったままモヒカン男は固まっている。怖いというより、何が何だか解かっていない顔だ。ジャマイはお漏らしでズボンを濡らしてしまうほど過敏に反応しているけど。

「はい！ 今、暴行の証拠をネット上に保管しました。アンタ達は今、わたしに金玉握られてるの……わかった？ じゃっ、いいわね。

「今日のことは無かった。同じクラスの女子とは会っていない」…

…はい、復唱」

「え……？」

モヒカンがキョトンとした顔をするので、わたしは御自慢のトサカを鷲掴みにし、顔面に膝を叩き込んだ。

「ひでぶ！？」

鼻から血の帯を引いて転倒するモヒ。わたしは軽やかに着地し、腕を振り払うようにして袖に仕込んだ刃物を射出し、それを左掌に収めた。

「まったく……。もし怪我のことを訊かれたら、知らなかったって言えばいいのよ。わたしとの関連を言及されたら、会ってないと言いなさい」

喉下に刃物を立てられ、モヒは百面相のような豊かな表情で承諾した。頷いたら切れてしまっし。

わたしは不良どもを徹底的に叩きのめし家路に着いた。

「ただいまー」

と玄関で元気良く言っても、自宅には誰も居ない。母さんは上の

フロアで語学を教えている最中。昼間は従業員の谷口さんがレッス  
ン講師を勤め、母さんは午後の十四時から夜間にかけての教室だか  
ら、終わるのは二十二時ぐらい。

わたしは照明を点けて、カバンをリビングのソファに放る。留  
守録の着信ランプが点滅していたので確認して　そこでデジタル  
表示の異変に気付いた。

「およ……521件？」

いつもは生徒さんのも含めて20〜30件程度なのに、いくらな  
んでも多過ぎる。再生するまでもなく、こりゃクラスの連中のイタ  
ズラだろうなと思った。

中には必要な伝言もあるだろうから全録音をイチイチ確認しなけ  
ればならない。そう思うと溜息が出る。　　ったく、殺すぞ！　こ  
ろころするじゃなくて殺すぞ！？

再生メッセージから流れる口汚い罵声と嘲笑の伝言を聴きながら、  
わたしはやり場の無い殺意に燃えていた。

「しかし、学習しないなあ……」

再生機に収納されているテープを自室のパソコンに繋いでデジタ  
ル変換して取り込み、それらの音声を各個人ごとに分離してフォル  
ダに分類する。

『フォルダ名　馬鹿その1』

とりあえず声の特徴のあるものから当たりをつけ、分離した周囲  
の音を再生する。

まず車が頻繁に行き交う音。それに混じって街頭のセールスの声。  
少し遠くの方で電車の音。などなどのピースを一つの情報として念  
頭に入れ、PC画面上に地元の地図を起ち上げ、公衆電話の分布図  
を地図上に重ねる。

「電車の音だけ大きくして……駅名は……と」

おっと、携帯電話隆盛のこの時代に何故、衰退著しい公衆電話を  
発信元に疑うのかって？

答えは簡単だ。

ウチの学校は結構な坊ちゃん校で、甘やかしーというか、過保護な親が多い。そんなワケで、学生にはGPS機能の付いた携帯電話が学校から支給され、いつでも居場所が特定できるよう外出時の携帯が義務付けられている。

ま、表向きは犯罪防止とか聞こえの良いことを言っているが、要は子供の首に縄と鈴を付けたいという親教師どもの歪な愛情だ。だからイタズラ電話なんて違法行為を行うと即、個人特定されてしまっうわけで……学生の仕業だとすれば、発信元は自宅の電話か公衆電話以外に無いのだ。そして、周囲の雑音のクリアっぷりからすれば公衆電話しか無いのだ。

「おしつ、場所は判った」

わたしの家と反対側だ。時刻からいって今日の放課後。この様子じゃあ明日もやるな。ようし……明日、現場を押さえて刻んでやろう。殺すじゃなくて惨殺してやろうと、わたしは凶悪な笑みを浮かべながらそう思った。

翌日の十五時、ファーストフードHELLEにて。

イタズラ電話の報復をしてやろうと早朝に出掛けたわたしは、昼前から向かいのファーストフードの二階窓際に陣取り、バリューセツトでチマチマで粘りながら目当ての公衆電話をマークしている。もちろん、わたし自身が直接見張っている電話BOXも含め、ノートパソコンから不正アクセスして、付近にカメラが設置されている周辺三十六の公衆電話も同時にリアルタイムで監視している。

「あ、すみません。カツ丼ひとつ」

「お客様、当店はファースト・フードでございやがりま〜す」  
店員の、お下げて眼鏡のお姉さん呼び止めて追加注文したが、断られてしまった。

カワイイ人だったけど、丁寧なんだか罵倒してるんだかよくわからない言葉遣いだった。

「来ないな……」

誰も来ない。時間だけが経つ。

いまだき公衆電話なんて誰も使わない。数時間の間におっさん一人とOLが一人利用したくらいだ。十六時四十五分……壁時計が指す時間をチラツと見て、そろそろノートパソコンのバッテリーを交換しようか思案した。そのときだった。

どかん

四段九列の三十六分割された画面上の一番左隅……No.1番のカメラがいきなり真っ白になった。数秒間ノイズが走った後、そこに映っていたのは、フレームが融けた飴のように歪みグシャグシャになった電話ボックス。

「おいおい……」

爆発でも起こったのだろうか。辺り一面に立ち昇る粉塵と白煙で一番カメラはもうほとんど役に立たない。

徐々に晴れて来た煙の隙間から、皮を剥いた猿のような赤黒く斑色に成り果てた悲惨な被害者が、割れた電話ボックスにブリッジするように引っかかってピクピクと痙攣していた。

「酷いな……」

さすがのわたしも息を呑んだ。

他のカメラの中継をカットして1番を中心に画像を拡大する。音声拾えないから詳しい状況は判らないが、被害者は呻いているようにも見える。もう死んだ方がマシだろう。この熱傷ではとても助かる余地などない。安楽死すら勧められるレベル。衣服も髪も燃え、徹底的に損壊した肉の塊は、まさに生き地獄を味わっているだろう。

「……ふうん」

常人と感覚や嗜好が激しくズレているわたしは、しばらく陶然としながら画面に見惚れていた。すると突然、被害者の頭がいきなり不自然にブレた。

「……！？」

薄煙に紛れてフレームの外から側頭部を銃弾が一撃。

撃たれた……？

心臓が跳ね上がった。背筋に電流が走る。

画面の外に何か居る。爆発を起こした犯人か。人間を躊躇いも無く必殺。ガンアクションに固執しただけのチープな映画のようなワンシーン。冗談のような現実がそこにはあった。

わたしは半ば放心状態で画面を凝視していると、遠くから聴こえるサイレンの音に紛れて人影がフレームインしてきた。

「おおっ？」

つい身を乗り出して画面に注目する。代わりに店内での注目もちょっぴり集める。誰だろう。男……だろうか？ 厚手のトレンチコートを羽織り同じ柄の帽子を目深に被っている。爆風の影響でカメラが妙な位置で固定されていて、周囲に相對出来る物体が無い所為でよく判らない。

とりあえず、コートの男……としておくか。男は縁石をひよいと乗り越え、ヒビ割れた石畳の上をステップでも踏むかのように歩く。そして男は、電話ボックスに引っ掛かった死体の頭を片手で掴むと、懐から仰々しいアーミー・ナイフを取り出し、躊躇いもなくその首を切断し始めた。

リズミカルに体を小刻みに揺らしながら、まるで作業でも行うように、刀剣に及ばぬ刃渡りのナイフをノコギリのように引いて、男は悠々と人間の首を少しずつ切り裂いている。首が落ちる寸前まで、わたしは呼吸を忘れていた。

想像と違って血はあまり出ない。グズグズに崩れた歪な切断面から千切れた神経がミミズのように垂れている。

コイツ……晒ってる？

男は人間を解体しながら心底悦んでいる。一瞬で寸断出来るものを、わざわざ時間を掛けて、捕まる危険を冒してまで楽しんでいる。コイツはわたしと同種……いや、それ以上の気狂い。本物のキチ

ガイだ。そう思うと、何故だろうか、自然と笑みがこぼれていた。

「え？」

いつの間にだろうか。

帽子の隙間から覗く硝子球のような無機質な瞳が、カメラをその向こう側のわたしを一点に見つめていた。

「……」

まるでこちらが見えているかのよう。

いや、それともカメラの存在に忌避感を抱いているのだろうか？  
男は微動だにせず、こちらをジッと見ている。

わたしはそのとき、不意に襲った、心臓に氷の刃でも突き立てられたような感覚に戸惑う。

いつの間にか店内のBGMは掻き消え、空気は体積を増したように肺腑に残り、歯をカチカチと鳴らしながらも、わたしは画面から視線を逸らすことができなかった。

永遠に続くかと思つた緊迫の時間は、男の気まぐれであっけなく解き放たれた。

男は踵を返し、無造作に転がっていた首を拾って軽く埃を払うと、その首を筆代わりにして地面に何やら文字を書き始めた。

「……グ・エ・ム・ル」

赤い染料が描くその文字は、日本の……カタ仮名だった。

日本の文字。この男は日本人なのか？

そう思ったとき、静電気でも走ったかのように画面上が弾け、映像がノイズに切り替わった。

「カメラが壊れた……」

画面が一瞬上にブレた。

撃たれた？ いいところだったのに。畜生め。

でも、歯噛みしても映像が戻るわけじゃない。わたしは苛立ち紛れに、貧国では染料に使われているような原材料のカラフルなジュースを飲み干し、底に残っていた氷をバリバリ食らう。

「あああっ……もう！」

お気に入りの曲のサビの途中で電池切れでも食らったかのような嫌な切れ方だった。無理と解かっけていてもつい、ノートパソコンをペシペシ叩いてしまう。

頭を抱えて唸っていると、さっきのカワイイ店員さんが何事かとこちらを窺い、視線が合ったので、わたしは追加注文した。

「お姉さん、鯨カツー丁！」

「白豪へでも渡航して、グリーピースの前で注文しやがってくださいませ」

ちい。なんとも品揃えの悪い店だ。

逆に、品揃えられていたら怖くもあるが。

「そうだ！ こうしちゃいられないわ！」

殺人だ。銃撃だ。カット・スロートだ。爆発だ。これは現場に赴いて直接見るしかない。わたしは席を立ちノートパソコンをカバンに仕舞い、それを肩に掛けて階段を小走りに駆け下り、ファーストフードHeeliを後にする。

事件から間もないからか、表通りはいつものどおりの喧騒だった。表「通り」はいつも「どおり」だ。

ナ二人だか判らない髪の色とファッションをした方々が騒々しく行き交う。わたしは素早くタクシーを呼び止めようと、アイス片手に目前を横切ろうとする大食漢を「えーい」と言っで車道に突き飛ばした。

「のわっ!?!」

車道のど真ん中に突き飛ばされたデブが激しく転がって行く。

キッ!!

タクシーはデブの鼻先で停まってくれた。

「ごめんなさいデブの人！」

わたしはデブの屍を乗り越え、助手席の窓からタクシーへ飛び込む。

「だ、だれだ!?!」

飛び込んで来たわたしを見て、後部座席に居る先客の老人が、仰

天して目を白黒させた。

韓国では目上の人が絶対だ。若者が老人に無礼を働くなどあつてはならないことだ。だけど、わたしは半分日本人だから別にいい。

「お爺さんごめんなさい！ どうせ古い先短いだろうし、ここは前途ある若人に行き先を譲ってください！ あの、そういうことで運転手さん、出して下さい！」

「うぐ……！！？ は、はい！」

運転手の喉下に刃物を突きつけ柔和な笑顔でお願いしたお陰で、車は滞りなく発進した。後ろの御老人が喚きながら杖でわたしの席をガンガン叩いているけど、とにかく快諾してくれてよかった。

「急いで下さい！ もう、クレイジータクシーみたいに飛ばしたりジャンプしたりして急いで下さい！」

「私は2までしかやってないから、屋根伝いに走ってもジャンプは出来ません！」

「じゃあ、それでいいから急いで下さい！」

わたしは運転手の頭にチップのコインをビシビシ投げつけながら、サイドボードをバンバン叩いて急かした。

ばかりん

その弾みでサイドボードが開き、中からトカレフ（拳銃）が飛び出し、そのままわたしの足の下に。

「これは……？」

足下に消えるまで一瞬の出来事だったが、優れた動体視力の持ち主であるわたしは、拳銃の細部までくつきりはつきりと見た。弾かれた様に運転手に振り返る。

「……やれやれ、困ったねえ……お客さん。悪いが見られたからには……」

さくり

ナイフで運転手の頸動脈をチョップリ切る。

「あぎゃっ！？ うわっ！？ や、やめろ……！！？」

「ぶつくさウルサイよ！ いいから飛ばした飛ばした！」



「いたっ!? コインを投げないで!!!?」

「まだブツクサ言うならアンタの臉の上にコインのつけて、アケロ  
ン河の渡し賃にするわよ!!! あと、ジジイ!!! いつまでわたし  
の座席叩いてるのよ!?!?」

「この不良娘が!!! 冥土の道連れにしてくれるわ!!!」

「あんたら薬でもやってるのか!? タクシーでは静かにしてくれ  
!!!」

「はあっ!? 犯罪者の分際で正論!? どんだけ!?!」

そんなこんなで現場に辿りついたのは、乗車から七分後のことだ  
った。

下半分だけ残して半壊した電話ボックスの現場周辺には、大量の  
警察車両が逆さまになって転がり(何台かは燃えている)、爆圧の  
影響でビルの窓ガラスが道路中に散乱していたり、その道路では隕  
石でも落ちたかのような大穴が開いたような状況だった。

目当ての男は既に居ない。

## グエムル

ビルの壁一面に血文字でそう書かれていた。

道路にも、歩道にも、中央分離帯にも、損壊した車両群にも、ひ  
しゃげたガードレールにも、半ばから折れて鉄骨を晒す電柱にも、  
大小様々なグエムルが周囲を席卷している。

「すごい……スペクトル……」

廃墟のように破壊されたビル群を見上げながら、わたしは全身で  
精気を浴びているかのように恍惚とした。

車がナナメになってビルに中腹辺りに突き刺さってる。街路樹は  
爆発地点を中心に放射状になぎ倒され、その付近の石畳も広く円を  
描くように根こそぎ剥がされ、目を細めるほど遠くの方には、原型  
を留めていない赤い塊となった死体が幾つも転がっていた。

## ぶろろろ

わたしを下車させたタクシーが、ヤーヤー言いながらもすごい  
勢いで元来た道に戻って行く。BGMは『OFFSPRING』

あ、警察の車にぶつめた。そして爆発した。

半壊してガソリン漏れしていた警察車両と誘爆したタクシーは直上に5m近く跳ね上がり、天を焦がすほど爆発した。

凄まじい爆音。タクシーのタイヤが転々と、わたしの足元まで転がって来た。

「……死んだ」

わたしの頬を伝い一筋の雫がこぼれ落ちた。

「あちあち!?!?」

悲しみに浸っていると、背中に火が点いた運転手が黒煙の中から飛び出し、ゴキブリのようにカサカサ地面を這い回った。

「運転手!」

「あちあち!?!?」

運転手に続いて、火を背負った老人が煙の中から飛び出て来た。

着物の裾をたくし上げて大股に元氣よく。

さっきの杖はなんだったの……?」

「まあいいか……」

わたしは細かい事は気にしない性質だ。

爆発跡と破壊現場の探索に戻る。

クレーターを作り出した爆発は相当な破壊力をもたらしたのだから、底の方が見えない。穴というよりも孔だ。

爆発の音と立ち昇る煙に誘われて来たのか、クレーターの周囲を取り巻くように遅ればせながら野次馬も集まり出して来ていた。無人の廃墟が一気に賑わい出す。

騒ぎにうんざりしたわたしは、当初の目的を果たすため電話ボックスへと赴く。さっきWEBから利用したカメラ 店舗の軒下に隠れるように設置されたカメラは、レンズを潰され、絡まった緑や黄色いコード二本でかろうじて吊り下がっていた。

ジッと見上げる。

やや高い位置にあるそれは、わたしの身長では背伸びしても少し届きそうにない。

「……撃たれたとしたら、ひよつとして弾が回収できるかな？」

よく観ると瓦礫がいい具合に足場を作ってくれている。わたしは瓦礫に登り、うんと背伸びしながらカメラを両手で掴んだ。グルグル回して千切れかけたコードを切り離す。

「重い……」

コードが千切れた途端、カメラが両腕にずっしりと押し掛かった。六kgぐらいあるか……腰にまでズッシリとくる重量感。長方形のカステラみたいなソレは、手提げカバンに容れようにも角が邪魔だし、ノートパソコンとの同梱も難しそうだった。

「ひゃっほう！ 盗り放題だぜえ！！」

監視カメラを手にどうしようかと思案していると、いつの間にか火事場を狙って商店から物が持ち出され、それらを巡って小競り合いが発生していた。街並みは近代的なのに治安悪いな。

急ぐ必要を感じたわたしは、監視カメラを解体して必要最低限の部位だけ持ち去ろうと思い、カバンの前ポケットから工具を取り出し、そこで 斜向かいの路地に立つ、棒切れ持って暴れていた暴漢と目が合った。何かとてもイヤらしい笑みを浮かべてこっちに来る。

「へっへっ へぶしっ!？」

騒乱につけこんで少女を狙うクソ外道の顔面に、至近距離から力の限りカメラをぶつけてやると、そいつはブツ飛んで身動き一つしなくなった。

さすが六kg。致死に足る破壊力。

「……とはいえ、そろそろヤバイわね」

恐らくコートの男の仕業だろうが、数十人からの警察が片っ端から殺られてしまい、お陰で理性のタガを外した数百人も群衆が略奪、暴行、乱闘、本能の赴くままに暴れ回って手がつけられない。

目当ての弾丸が食い込んだ配電盤を引き摺り出したわたしは、それをハンカチに包んで工具と一緒にカバンに仕舞う。と そこに、  
「へっへっへ……」

「……またかよ」

いつの間に居たのだろうか、無精ひげを生やした肥満の大男が、鼻息も荒くこちらに目を付けていた。

頭にシヨーツを被り、指をわきわきされながら荒い息を吐く、先ほどよりも数段グレードアップした変態だ。

「へっへっへ……お嬢ちゃん、独りかい？」

「そりゃ独りだけど……アンタには関係ないわ。構わないでくれるかしら？」

ああ気持ち悪い。でも近場で投げられそうな物はもう無い。カバンに収まったノートパソコンはいろんな意味で投げられないし、切り札である短尺の暗器では、横綱級の脂肪の塊相手にどれだけ通用するか知れている。

(むう……ちよつとヤバイか?)

醜悪な男にジリジリと迫られ気圧されていると　そのとき、空から一直線に人が降って来た。

遙か上空から　コートを猛烈にはためかせ自由落下する直立不動の男が着地の瞬間、物凄い土煙を巻き上げながら、わたしを庇うように変態の前に現れた。

「うわっ！　ぺっぺっ！　なな、なにあんた！？　だれだよおっ！？」

大量の土埃を掛けられ取り乱す変態。いきなり空から降って来て眼前に立つような輩が相手では無理からぬことだが。

その男は　例の、そう……わたしが今まさに追い求めている爆弾殺人鬼であった。

「な、なんだテメエ!？」

「……アキ」

誰に言うでもなく何かを呟いた男は、さっきカメラで見たときとは違い、帽子を被っていなかった。

その顔、その姿……男は黒髪の長髪を襟首で結んだ、病人のように色白で細面の優男だった。背は170cm前後。作り物のような

静かな笑みを浮かべ、窪んだ眼窩の底から覗く眼は硝子細工のように無機質で　そして東洋人だった。

「あ……」

息が詰まる。

カメラ越しとはワケが違う。

見ているだけで寒気がして鳥肌が立つような存在感がある。

獲物を横取りされたと感じたのか、変態はコートの男に対し怒りをあらわにした。わたしはその光景をただ呆然と見つめていた。心臓の音がトクントクンと、自分で聴こえそうなほど高鳴って、どうしてか顔が紅潮していた。

「私はトシアキ」

「……トシ、アキ……？」

「エースです。自分はエースのトシアキ。間違いなくエースです。今からアナタをブチ殺すエースです。エースという言葉はとても大事なことだから二度言いました」

「よ、四回言わなかったか……？」

「ふざ……けるなッ！！」

怒声を発した瞬間にトシアキの温和な笑顔が掻き消え、変態の目の前の空間が突然音を立て爆発したように弾けた。

鼻面に不意打ち食らった変態は顔を掻き毟りながら後ずさり、自分の足を絡めて盛大に転倒する。

「すごい……」

まったくワケが解らないが、トシアキは何かをやった。

相手に触れることなく戦意を失わせた。

でも変態の言うとおり確かに四回言っていたから、逆恨みではあるとも思った。

「エースであるこの私の至言に茶々入れするとは失敬なッツ！！

もういい、SHINE！」

クールで冷酷な男だと勝手に思い込んでいたが、トシアキはいきなり激情をあらわにし、その場でダンスダンスレボリューションの

ように地団駄を踏み始めた。

A B ……っ!?

はやっ、速すぎる!?

わたしの眼をしても追いきれない!?

「いえーい!」

トシアキはカスタネットでも打ち鳴らすように手をパンパン叩きながら、右へ左へリズミカルに華麗なステップ。一心不乱だった。

もう明日にでも命尽きることを予感しているかのような生命の煌き。

「美しい……」

尻餅を着いていた変態が、いつの間にかその姿に見惚れていた。

被ったシヨーツ脱ぎ、膨らませた股間を沈静化させている。性癖や嗜好を超えたトシアキの華厳なる舞に、その場に居た誰もが一時争いを忘れ、呆然と立ち尽くしている。

懸命なる肉体が奏でる生命賛美の舞……なんと荘厳な光景だろう。

「なんか飽きた。もう死ぬ」

トシアキは不意にそう告げると、旋回を続けながら、黒い皮手袋に包まれた左掌を変態の眼前に翳した。

何事かと思った。そう思った次の瞬間 トシアキのコートの袖が引き裂かれ、トシアキの左腕を構成していたモノが銀色の帯となつて一気に解けた。

「ふへっ?」

銀色の帯は大きく渦を描きながら、あっけに取られている変態の上半身に巻き付く。

「一陣、ストリング・プレイ……」 虎爪”」

トシアキは巻き付けた左腕をグツと引き抜いた。まるで生物のように吸着した銀の帯は変態の肉体をこそぎ落とし、血の一滴すら付着させず空を裂いて巻き戻り、再び主の左腕へと形態を戻す。

「あぎゃああつ!?!?!? あぎいい!?!?!? ひいいいッ!?!?!?」

顔の前半分を削ぎ落とされ、唇と鼻を瞼と耳を失った正視に堪えぬ面が、地獄の底から響くような絶叫を上げてのた打ち回った。

アイススプーンで抉ったような滑らかな切断面からは、気泡が混じったような骨の断層までもが生々しくのぞいていた。菱形に割れた眉間からは脳汁が垂れ、生の脳髓が見え隠れしている。

変態はそんな状態で、剥き出しの歯茎で呻きながらゾンビのように蠢いている。死んでいないのが不思議なくらいだ。

「ああ……やれ殺れ……」

トシアキは面倒くさそうに爪先で地面をトントン叩き、介錯とばかりに右ハイキックを変態の顔面に見舞った。

ドンツ！！

自動車のタイヤすら止まって視得るわたしが視認出来なかったその高速の蹴りは、着弾と同時に爆裂した。断末魔は爆発に掻き消されたか、変態は顔面どころか左上半身を焼失し、ゆっくりと……糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

「これで好しと」

トシアキの蹴り足が地面に着いた瞬間、靴底からチャツと金属の音。爆発の影響でブーツの皮が大きく剥離し、靴の淵を覆うように鉛色の金属が剥き出しになっている。

あれが爆発をもたらしただけ……靴？

金属で補強しているとはいえ、あの爆発でよく脚が吹っ飛ばなかったものだ。爆発の刹那に蹴り脚を一瞬引いたように見えただけ、爆発より早い蹴りとか、まさか……ね。

トシアキは死体に唾を吐き捨て、中指を立て、そして財布から100円出して遺骸の上に放った。

ばんばん

「……拍手」

トシアキは日本の神社でやる、お賽銭を入れた後の一般的な儀式を行い、それを甲いとした。わたしは日本に住んでたから解るけど、あの行為は、葬送で行うにはメチャクチャ意味が違う。

「ふう……あ、失礼しました。女性の前で不躰なマネをしました。どうか御容赦ください」

「いや、それは……こっちも助かったし」

言葉遣いが胡散臭いぐらい丁寧だ。教本で外来語を習ったかのような感じ。

うーむ、やっぱり日本人だろうか？

いやでも、変態と話していたときは韓国語だった。バイリンガル？

いや待て。さっき100円硬貨を遣ってたぞ。顔立ちだけじゃ何とも言えないけど、やっぱり日本人かな？

「あ、自分は北朝鮮から来ました」

「え……？」

言いかけて、トシアキはあわてて手で口を押さえた。

「すみません。自分は今、潜入調査の真つ最中で素性を明かせないのでした。あの、どうか……お忘れください」

「はあ……」

ナイフのように切れるかと思えば、小学生のようなミス。

自信が有り余っているのか馬鹿なのか。

わたしは、その両方だと思う。

「実はですね、韓国の国防に関わる重大な秘密を調査に来たんですが、これがまた滑稽な話で、化け物を見つけて退治して持ち帰れっという話なんですよ、ハイ」

「あの、秘密なんじゃ……？」

「そうなんですけど。まあいいですよ、別に。秘密ってあんまり好きじゃないですしね。仮にアナタがそれを喋ってしまったなら、耳にした人間全て殺せばいいだけですしね。今回は上に言い訳出来る程度に調査の痕跡を残した後、適当に観光して、適当に二百人ぐらい殺して、後は日本経由で適当に帰る予定でしたし」

会話を餓えていたのだろうか、トシアキはわたしが訊いてもいいことまでベラベラとしゃべり始めた。あまりに突拍子の無い内容



に、普通人ならすつとんきような妄想話を聞かされていると眉根をしかめるだろうが、わたしはその話に聞き入っていた。

非現実的な話ともかくとして、少なくとも生粋の殺人者であることは目の前で実証してくれたし、わたしはそれに大いに興味があった。

耳を突くような周囲の騒乱の中、トシアキだけは己を見失うことなく泰然としている。異常な言動や行動からして、端から己を見失っていると言われ兼ねないけど、同類のわたしには確信できる。

トシアキはただの殺人者とは違う。

人を遥かに超越している、人のカタチをした何かだ。

「あつはっは〜！」

いきなり高笑いしたかと思えば、トシアキは群集に向けて左掌を翳した。その掌が向いている　四十mほど先には焼け焦げたブテイツク跡があり、品性のカケラも無さそうな男どもに囲まれ、OL風の若い女性が恐怖に身を竦めていた。

「ハアアアアツ!!!」

トシアキが気合を入れた瞬間、翳した左掌からジェットエンジンのような耳を貫く高音が響き、周囲の風が激しく吹き荒れた。

その次の瞬間　パンツと乾いた音が破裂し、先ほど変態に喰らわせたものと同様の衝撃が発生した。発せられた不可視の衝圧は暴漢たちをすり抜け、その後ろで怯えていた女性の顔を無残にも吹き飛ばした。

「ひゃぐっ!?!」

人間のものとは思えない悲鳴を上げた女性の顔が一度視界から消え、背中に当たった反動でガクンと戻って、振り子のように戻ってまた後ろに消える。

「あ………」

わたしは突然の惨劇に声も出なかった。

浮かれ気分などどこかに吹っ飛んでしまうような凄惨な光景。

女性は首の骨が折れて即死したのだろう、そのまま膝から崩れ落

ち、そしてピクリとも動かなくなる。

「ふむ……出力40%ぐらいですかね。先の戦闘での乱射が祟りましたか。冷却機構に消費が大きい」

たった今、何の罪もない女性一人を殺したというのに、トシアキは何ら気にした様子はなく、左の手首を左右に軽く捻って、指先を小刻みに前後させて腕の調子を確認していた。

「あの……なんで？」

「え……？ 何か？ ……ああ。そういうことですか」  
詰問するつもりは無かった。

純粹に問いたいワケでも無かった。でも、つい口に出た。  
何も殺すことは無かったのでは……と？

あれだけ悪党が跋扈している状況で、わざわざ被害者である女の人を殺すことが、どうしても解せなかった。

「……いやいや、あれは御婦人が試射した直線上に居たので、たまたま命中ってしまったんですよ。殺したことに他意はありません」  
「……そう」

圧倒的な力を持つトシアキにとって、人などそこいらに生えている木と変わらないようだ。そこいらの枝を折ったところで何の罪悪感も感じないように、トシアキにとって人の命なんて路傍の石ほどにも価値が無いのだろう。

「それでもフェミニストなんですよ？ 御婦人に危害を加えてしまったことは改めて謝罪します。ほらっ、このとおり！」

と言って、トシアキは財布から取り出した百円を放り、女性の遺体の上に命中させた。転々と跳ねて側溝に消えていく百円。

ばんばん

「拍手……」

いい加減、それ違うと教えた方がいいのだろうか？  
そもそも百円は何の基準で出しているのだろうか？

どうやらトシアキは、わたしたちのような平和な人種とは違う次元に生きているようだ。価値観があまりに違う。まるで宇宙人みた

いだ。

怪物と呼ぶにふさわしい機械化された肉体に超人的戦闘能力。でもそれ以上に恐ろしいのは、深淵の淵すら窺わせない理解不能な思考。それに伴う奇行。

彼は一体何者なのだろう。

彼を仰ぎ見る。

殺人を犯した大罪人を前にして、不思議と恐怖は無かった。

視線が外せない。唇が乾いて息苦しい。心音がやけに大きくなって治まらない。

これが、わたしとトシアキの初めての出遭いだった。

## 脱出する異常者

【トシアキ】

「目覚めたかね？」

渋い中年の声でした。その声に引き寄せられるように自分の意識が覚醒する。

朦朧とした意識の中で初めに見た映像は、自分の顔を間近で覗き込む初老の医師。そして白衣の男複数名と眩い光でした。

「エースナンバー0。意識はあるかな？ さて……キミが拘束されている理由は解るね？」

「いえ……何故このような仕打ちを？」

初老の医師が言ったとおり、自分の体は寝台の上で首から足まで厚皮のベルトで縛られ拘束衣まで着せられていました。記憶を遡り、意識を反芻して、何故このような仕打ち受けるのか必死に思い出しているのですが、特に理由は思い浮かびませんでした。ひどいです。

自分は、トシアキ。

我が偉大なる祖国北半島が誇る、秘密特殊部隊の「エース・ナンバーズ」最強のソルジャー。

肉体や精神を極限まで『強化改造処置』ブーステップされた、異能の力を持つナンバーズ七人。その中ですら異端視されナンバー規格外の『0番』を与えられた自分は、まさに人間を超えた存在と言えます。

先日、ちよつとしたゴタゴタでナンバーズの一人と衝突し、相打ちになったまでは覚えているのですが、そこから先はモヤが掛かったように不明瞭でした。

尊い生命を護る為の正義の戦い だつたと記憶していますが、力及ばず今現在このような無様を晒す有様。もし穴があつたら、目撃者全員を埋めてやりたい気分です。

「キミは首都で321人を虐殺したんだよ？ さらには、腐食性の

毒ガスを散布して4万人の死傷者を出した……覚えてるかね？」

「ああ……そうですね。進路を維持する為のやむ得ない処置でした。身体が良くなりましたら百円でも放りに行きます」

「キミは……何の罪も無い多くの同胞を死に至らしめて、その……何とも思わないのかね？」

「いいえ、彼らは英雄です。自分という至高の存在を生き永らえさせることで国に尽くしたのです。自分は彼らの行為を忘れません」

「……ふう」

天井の照明が眩しくて医師の表情がよく窺えませんが、医師は舌打ちしたあと短く嘆息し、明らかに不愉快そうに壁に手を当てました。何か気に障ることも言ってしまったのかと少し不安になりましたが、彼は続けてこう言いました。

「ナンバー〇、キミは異常だ。キミのような怪物を作り出してしまった我々も、いずれ然るべき責を負うべきだろうが……今はその是非を問う時間ではない。おめでとうナンバー〇、キミは今日付けでめでたく廃棄処分となった」

「……あの、よく解らないですが。簡潔に言くと、それはどういうことなのでしょう？」

「……」

言ってる意味がまるで理解できず、キョトンとした顔で訪ねると、医師は壁に手を当てたまま眩暈を覚えたかのように大きくかぶりを振り、

「お前はとんでもないイカレ野郎だから、今から始末してやるって言ってるんだ！！ 解ったか、このキチガイがッ！！」

医師は温和な仮面を脱ぎ捨て本性を露にしました。その一言を契機に、自分の闘争本能に大きな火が点きました。

「フッ！！」

舌先で絡め取った奥歯の義歯を爆発的な肺活量を以て吹きつけ、医師の眼球を撃ち抜きました。スチール缶を容易く貫通する不意の一撃により、医師は右目を押さえて絶叫し、自分に覆い被さるよう

に倒れました。

「あががっ!? あわががっ!?」

義歯に含まれている毒物は血中に混じると途端に体内を侵食し、まず痙攣を起こし、そして意識が飛び、呼吸が停止し、成人男性をわずか三秒で完全に麻痺させます。放っておけば大体5分以内に死にますが。

「フオウ先生!? しっかり!!」

「何をしたナンバー〇!!」

想定外の事体に慌てふためく医師どもは、どうにかしてフオウ先生とやらを自分から引き離そうと、何の考えも無しに近付いて来ます。

でも残念。そこは迂闊にも飛礫の殺傷圏内です。

「フッ!!」

「ひがっ!?!」

大柄の医師の顔が近付いた瞬間を狙い、その大きく開いた口目掛け、吹き矢の要領で必殺の飛礫を放つ。

義歯の毒は飲み込む分には無害ですが、単純な礫として効果を十分に発揮します。喉を潰された大柄の医師は目を剥いてのた打ち回り、治療器具が満載したキャスターを脚に引つ掛け、寝台の上に全部プチ撒けました。

「あっはっは、河に落ちた犬みたいに騒ぎますねえ!」

「き、貴様あ!!」

人間のもがき苦しむ様に御満悦になっていると、それがよほど勘に障ったのか、若い医師は自分の腹の上に散乱していたメスを握って、それを振り下ろして来た。

「この外道!! 死ねっ!! 死ねエっ!!」

「くふっ!! ふはっ!! あははっ!!! ぶはははっ!!!」

怒り狂う若い医師の震える手で、無防備な腹がザクザク抉られた。何度も何度も乱暴に。鋼線が編み込まれた拘束衣によって、まるで効果はありませんがね。

「ヘタクソですなえ……そんな拙いメス捌きで人が殺せるんですか？」

「し、死なない!? 何故死なない……!?」

若い医師はよほど取り乱していたのでしよう、自分たちが着せた拘束衣の特性について完全に失念してしまっている。

「アナタは馬鹿ですか？ 拘束衣を脱がさずにどう自分を殺そうというんです？ 確実に殺したいなら頭を狙いなさいな」

「クソツ！ この化け物め!!」

アドバイス差し上げると、若い医師は顔を真っ赤にして、先端が歪んだメスを放り捨てました。頭から湯気を出しそうなくらい怒って馬鹿丸出し。

クク……さあて。

そろそろ遊びも終わりにしておきましょうか。

「自分の皮下組織には特殊形状記憶合金という流体金属が含まれてましてね、筋肉の収縮 掛ける圧力の具合によって幾らでも硬度が上昇するんですよ。たとえば、こんな……風に……ッ!!」

自分は全身を極限まで強張らせ膨張させた。

顎下から足首まで自分を拘束していた金属繊維の束は、まるで空気を含んだバルーンのように急激に膨張し、間もなくそれが限界にまで達すると、張り裂けんばかりの悲鳴を上げた。

ギシ……ミチチツ!!

巨象をも吊り上げる強化繊維の束が一本、また一本と断裂し、「噴ッ!!」と気合を込めると、それは一気に弾けた。解けた無数の鋼線が音を立てて空を裂き、医師たちの皮膚、骨、内臓の一切を區別せず引き裂き、即死たらしめる。

「ふんっ!!」

自分は胸に膝を押し付けるように畳んで僧帽筋に重心を乗せると、腰を捻り半回転させ、その遠心力で全身を直立に伸ばし、頭頂を寝台に付け首の力だけで倒立した。

「ふむ……」

自分は首を傾けた。世界が斜め逆さまに見える。別に遊んでいるわけじゃなく、監禁されていた自分の体内の状態をじっくりとチェックしているのです。

「ふむ……」

全体的に筋肉にやや減衰がみえる。

「ふむ……」

左胸の辺りを中心に骨のあちこちにヒビ……しかし、そのほとんどは既に完治しようとしている。だが左腕に大きな違和感。……無い。腕が無くなっている。しかし感覚はある。

欠損した肉体がまだそこにあるものと脳が認識してしまう『幻肢』というヤツでしょうか。だがその感覚は主に痛みで占められている。「左腕……参りましたね」

とりあえず神経回路を切って、左肩から先の感覚をシャットアウトする。痛みがピタリと止まった。

「お、お、おま……かはっ！」

「おや、これは驚いた。生きてらしたんですか？」

「おまえが……毒ガスで……僕の……い、妹を……家族を」

あらら、死んでしまわれた。

拘束衣に引き裂かれて胸骨を覗かせていた医師の一人が、何やら凄惨憎悪の眼差しでこちらを見ていらしてのですが……残念無念、死んでしまわれた。

しかし困りました。黒のハーフパンツ一丁で財布を持たない今の自分では、彼を甲う術が無い。

「ん……まあいいや」

考えても仕方が無い。無い物は無いのだ。

自分は亀のように首を竦めネック・スプリングで寝台から跳び降りた。床一面に生暖かい肉片が散乱していて、それを素足のまま踏みつけたから何とも言えない感触が走りました。

「グニョグニョして気持ち悪いですねえ……うっ、武器武器……」

とりあえず寝台の上に落ちているメスを二本手に取る。床に落ち



ている医療用電動丸ノコもGET。白衣の胸ポケットにペンライトもありません。

白いタイルで覆われた手術室のような部屋をグチャグチャヨ歩き回りながら、自分は黙々と装備をかき集めました。

「よし……」

白衣と長ズボンを拝借して着用した自分は、右手に医療用アルゴン・プラズマ・レーザーを携え、左手……は無いので、左肩の断面にフィットするように、袖を裂いて巻き付け固定した医療用炭酸ガス・レーザーを装備する。それら二つを大出力で維持出来る大容量の電源を背負い、他にも電熱メス2本に、大小いろんなメスやハサミの束を懐に収めた。

医師たちは山のような殺傷兵器の数々で、自分を寝台に括り付け、一体何をしようとしていたのでしょうか？

「お、おい、大変だ！」

寝台に腰掛けてじっくり考えていると、見回り中の警備員が血塗れの手術室を目撃し、ドアの向こうから犯人とおぼしき自分を指さし叫んだ。

自分は寝台から跳ね上がりドアを蹴破ると、逃げようと背中を見せている警備員に向けビームを見舞う。

ぴーっ

「ぎゃー」

高出力の右のレーザーで左袈裟懸けに焼き切られ、左のレーザーに右袈裟懸けに焼ききられ、まるで御大将が駆る『ターンX』のようなバッテリー印に切断された警備員は、人体が焼き焦げる異臭を漂わせ、バラバラになって床に崩れ落ちた。

「始末」

熱煙昇る発射口をキザツたらしく吹き消し、焦げ臭さが漂う中、警備員のポケットを漁って財布を抜き取り、そこから硬貨一枚を抜いて放りました。

ぱんぱんっ

拍手を打ち、しばし黙祷。

さようなら警備員。キミはホントいいヤツだった。初対面だったけど。

「おい、こつちだ!!」

「あ、やべ!」

警備員との在りし日の想いに胸を焦がしていると、廊下の先に新手が現れました。

ピーっ

「ぎゃー」

「始ま あら? ……もう弾切れ?」

医療用レーザーは、左腕無しのカタワを補うために左右のスイッチを連動させたから同時にしか撃てない上、出力170%MAXで遠距離の目標を撃つ無茶をやった所為で、早々にガス欠となつてしまった。

「あがががッ!!? あががががッ!!?」

その所為で、可哀想に……レーザー照射を浴び、斜め下から両足の大腿部を切り落とされた警備員は、死に切れずにのた打ち回っています。

切断面が炭化して出血しないから生き地獄が長く続く。なんという悲劇……でも自分にはどうすることも出来ませんので仕方ないです。

無用となったレーザー機器と電源を捨て、麻酔無しの虚勢でも実行してるかのように泣き叫ぶ警備員を背に、自分は前に進みます。

「……おっと、忘れていた」

自分は財布から硬貨を取り出し、廊下で未だに喚いている警備員に投げつけておきました。拍手も打って……これで彼も安心して黄泉路が踏めるでしょう。

「アデュー! それじゃあ!」

さわやかに手を振り警備員を死出に送り出すと、自分は再び長い廊下を走り出しました。

「止まれ！！ 止まらんと撃つぞ！！」

前方の階段へと続く道を塞ぐ様に書棚三つを倒したバリケードが現れ、その後ろにはライフルを構えた兵士三名が照準をこちらに向けています。

どうせ止まっても撃つでしょうし、ここは突貫あるのみ。

自分は警告を無視して加速しました。

「チツ！ かまわん、撃て撃てっ！！」

兵士は自分の足元を狙って威嚇射撃して来ました。

「あっひゃっひゃっひゃっ！！」

だのに自分はまったく怯まない。むしろ笑顔。あまりに異様な光景に訝しげに目を細めた兵士たちは、今度は迷わず胴体に照準を合わせてきました。

単発からセレクトしてフルオートでの斉射。だが常人の反射速度を遙かに超越た自分にとって、マシンガンの弾なぞ豆鉄砲と変わらないです。引き鉄を引く指すら自分にはハッキリと視認できます。

「ノロイノロイ！ ガンバのラスボスくらいノロイですよ！！」

余裕の表情で顔面に飛んで来た弾丸を寸前で避け、壁を足場に天井まで一気に駆け上がると、螺旋を描くように廊下を走り、銃弾の雨あられの中を潜り抜けます。

「シヤアッ！」

銃弾を避けつつ、バリケードまでの突破は困難と判断した自分は、逸早く進路を変更し、廊下の途中にある部屋の扉に体当たりで飛び込みました。

蝶番が外れて開いたドア。転がり込むようにして飛び込んだ部屋は、女子更衣室でした。部屋を囲むように整然と並ぶ二段のロッカー、男の幻想を打ち砕く清汗スプレーや化粧やコロンが入り混じった異臭、艶かしい下着姿の女性たちが自分を見て一瞬凍り付きました。

「きゃー！？」

女性たちの甲高い笑い声が悲鳴に変わります。

「ギャーツ!!」

「ああ、こ、これは失礼!!」

「変態よお!! 白衣の変態が!!」

純白の下着を身に纏った力士のような女性が、胸元を隠してあられもない悲鳴を上げました。誤解から生じた悲しいすれ違いとは云え、ひどい侮辱です。

プライドの高い自分は力士から受けた面罵に我慢できず、投げつけられる化粧水のビンやケースなどを最小の動きで避けながら憤然と歩み寄り

ドッパ〜ン!!

渾身の平手を食らわせました。

「ぶべらっ!?!」

爆裂したような轟音が響き、力士は空中で風車のように回転し、床に落ちると同時に猛烈な勢いで転がってロッカーに激突しました。

「女性の裸身に興味などないッ!!」

ロッカーに埋没した目を回している力士に向け、ビツと指差し、自分はキツパリと言い切りました。

『巨漢』…… いや、女性だから『巨婦』が一撃の下に屠られたのを目の当たりにした女性陣は、恐怖に身が竦んだのか、それ以上は暴れず騒ぎもせず、部屋の隅に身を寄せ合って震えています。

「あ……」  
「しまった……」

暴力を振り怯えさせてしまうなど、フェミニストを標榜する私にあるまじき行為。何とか穏やかに場を収めねば。

トトトトトト!!

「ぎゃあああ!!?!」

「いやあああっ!!?!」

小粋なジョークで場の雰囲気を取り戻そうと考えた矢先、追っ手の兵士たちが駆け付け廊下から一斉掃射し、目測も付けずでたらしめな連射によって女性たちをボロキレのように引き裂いた。

「ちいっ!!」

銃撃が始まるとほぼ同時に、とつさに御婦人の手を引いて盾にしたから降り掛かる弾雨の直撃を免れましたが……ですが、決死の想いで身を挺してくれた美しい女性の顔は、卵の殻のように割れて内容物が飛び散り、脳髓も目玉も鼻も唇も頤すらも消し飛び、ポツカリと空洞が空いてしまっている。

かしましく談笑していた日常的一幕があつという間に地獄絵図となり、頭を抱え半狂乱になって絶叫する女性たち。彼女たちの悲痛な悲鳴に臆したか、怯えたようなうめき声と共に廊下側からの銃撃が止んだ。

「ゆるさん……」

無残と成り果てた女性の遺体を両手に抱きしめたまま、自分は怒りに震えていました。形振りかまわず自分を殺しに来た兵士たちにありったけの怒りを籠めて叫びました。

「ぜったいにゆるさんぞ虫ケラども!!!!!!　　じわじわとなぶり殺しにしてくれる!!!!!!」

「!!!!!!?」

大気が震えるような強烈な殺気を受け、兵士たちは恐怖に駆られ漣のように後退する。自分はその隙を見計らい、穴だらけとなった女性の死体を担ぎ上げ、憎き兵士どもに向けて放り投げた。

いきなり血塗れの死体を投げつけられ、反射的に兵士たちの銃口が下がる。自分はその死体を死角に跳躍し、必殺の跳び蹴りを繰り出していた。

「キエエエツ!!!」

厚さ10cm象皮をも穿つエースの素足は空中で死体の胴体を貫通し、その後ろに潜む兵士の顔面までも破裂させ、脳漿混じりの血飛沫が割れた水風船のように廊下側の壁面を凄惨に彩る。

千切れた首先から水道管のノズルのような頸骨をさらす兵士は、銃を構えたままビクビクと痙攣している。

「あ、あは……ひやは……」

恐怖に震えた二人の兵士は、現実逃避するように蒼ざめた驚愕の笑みを浮かべた。

「だがな、自分は容赦する気など無い。」

着地すると同時に壁を背に背後を取り、兵士たちがこちらに向き直るよりも早く、今度は滑り込むような低空から側面を取る。

遅れて振り返り、誰も居ない壁に向けて銃を構えたノロマな兵士の顔面を　　自分は驚掴みにした。

「ひごっ！！？」

獯猛なる動物の筋繊維の移植、それを支える特殊チタン合金製人造強化内骨格、薬物投与、精神暗示の結果、ゴリラとほぼ同等の腕力を持つ我が右手は、瞬間最大870kg超の握力を誇る。掴んだ兵士の顔面を骨ごと根こそぎ引き千切り、掌中で粉末になるまで搗り潰すなどワケない。

自分は血に餓えた兵士の顔面を指の形に引き千切り、先の女性と同様の死に様をくれてやった。

「ひいっ！！」

恐怖に駆られた兵士の銃口が小刻みに揺れ、誰もいない壁と天井に向けて火花を散らす。

「シッ！！」

自分は照準が移る前に瞬時に体を後ろに反らせ、オーバーヘッドの要領でライフルのパレルを足の親指と人差し指で挟み　　潰した。

優れた剛性を誇る近代兵器も我が力の前には無力。

「ひっ、え……へっ！？」

発射口が封じられては頼りの銃も使えない。兵士は信じ難い光景に我を失い、潰れた銃口と自分を交互に見て、やがて意識が途切れたかのようにその場に力無く座り込んだ。

放心したその兵士の首筋を撫でるようにして縊り、頸骨を小枝の

ようにヘシ折り絶命させる。首を一転させた死体が壁に寄り掛かった瞬間、首筋をチリチリ焼くような殺気が背後から感じられた。自分はずぐさま、うつ伏せに横たわる首なし死体のケプラージャケットを踏みつけ、足の指で鷲掴みにして胸元まで引き上げ反転すると、刺すように強烈な殺気の元へと向けた。

ドウムッ！！

その次の瞬間、吊り上げた死体が爆裂 跡形も無く四散した。凄まじい爆圧の余波を浴び全身が軋む。自分は衝撃を利用して滑るように廊下を後退し、見えざる正体不明の敵から大きく距離を取ります。

筒から空気が抜けるような独特の発射音と強力な破壊力から推察するに、敵の携行している武器はグレネード・ランチャー。まだ本調子ではない傷付いた身体では避ける隙がありません。それでもどうにかして隙を作ろうと、

「グレネード・ランチャーってアート・ネイチャーに似てね？」

と、薄モヤの向こうに潜む敵にそう言ったら、お返事にグレラン撃って来ました。

「ひいつ!？」

自分はびっくりして、放物線を描き足元に跳ねて来たグレネード弾を反射的に女子更衣室へ蹴り込み、頭を抱えて伏せました。

一拍置いて大爆発。激しい振動がフロア全体を揺らします。

「くっ!」

閉鎖環境での爆発の影響は累乗したように凄まじく、壁に稲妻のような大きな亀裂が走り、天井がパラパラと崩れて来ました。部屋にはまだ女性たちが居たので、爆発と同時に少し後くらいに「あぶない」と叫んで一応警告しましたが ひよっとして、これは死んだか？

女性たちをすぐにも叩くべきかと、財布を手に緊迫していると、煙で真っ白になった部屋の奥から少数のか細い嗚咽が聴こえ始めました。

良かった。ほとんど死んだか重症みただけど、何人かは無事のようです。

しかし、そう安堵したのもつかの間。

煙が薄まり自分の姿を目視した敵が、再びグレネードを撃って来ました。キン、キンと甲高い音を立てて廊下を跳ねる金属の弾。

「うわっ!？」

自分はびっくりして、反射的にソレを女子更衣室へ蹴り込みます。

一拍遅れて大爆発が起きました。

二度の破壊によってとうとう壁が崩落し、天井の一部が大きくズレて断層が露出。その近くを通っていた何らかの鉄管が折れて、滑るように廊下に落ちました。

「……うわあ」

壮絶なる崩落現場を見て、こりゃ生きてるワケないと思った自分。握り締めた財布を見て、財布ごと放って女性たちを弔おうと一度は振りかぶりましたが、やはり惜しいので思いとどまり、大奮発して硬貨二枚、二百円を瓦礫の上に放りました。

ばんばん

拍手を打ち、しばし冥福を祈ります。

「貴女方の仇は必ず討ちます。どうか草葉の陰から見えて下さい」  
新たな決意を胸に、自分は粉塵に塗れた廊下を歩き出しました。爆発による崩落は思いの外酷く、敵は一時退却したようで、このフロアには誰の気配もありませんでした。

気配の消し方といい、引き際の判断力といい、連中は相当な訓練を積んだ兵士でしょう。本調子なら敵じゃないはずですが、凡兵に大苦戦した自身の不調から鑑みるに、拘束時に導入されたであろう大量の向精神薬と弛緩剤が戦闘の妨げとなっているようです。

「いたっ!」

ままらなぬ事態に苛立っていると、左足首から鋭い痛みが走りましました。

痛みの元に視線を落とすと、爆発の際に受けたものか、足首の



辺りがかなり深く裂け、傷口から粘り気のある血がドロリと垂れています。

「ああ……やれやれ、ホントに参りましたね……」

これは止血が必要な傷だとすぐさま判断し、自分は深呼吸して息を整えながら今一度周囲の殺気を探る。

居ない……。空気の流れる音が聴こえるのみ。

瓦礫と砂塵で視界が塞がれているからか、やはりこのフロアから兵士は退いている。

自分は安堵して胸を撫で下ろしました。

深呼吸が済むと、自分は壁に寄り掛かって目を閉じ……。身体をできるだけ脱力して、頭の中でイメージする。

体組織が徐々に再生してゆく過程を、何万倍速ものスピードで明確に。

「……」

ゆっくりと深く意識の深層に潜り込み、固まって来たイメージが次第に明瞭になって、それに反応し、体細胞の代謝が活発になった身体が熱を帯びてくる。

汗がじわりと滲む。何層も連なる皮膚が、網目のような筋膜が、細く束ねられた筋繊維が、体内を縦横無尽に巡る神経が、血管が、解れた組織が結び合い、瞬く間に再生を始め、最後に血中の血小板をコントロールして患部の凝結を促します。

「……よし」

傷口が癒着し大きな瘡蓋が張る。確認の為に足を前後に曲げてみる。……やや痺れを残してますが、十分歩ける。早歩きも可能でしょう。

自分は回復を確認するよう一歩一歩慎重に歩き、瓦礫を踏み分け廊下を抜け、階段を下ります。

階段の折り返しに来ると 何でしょう？ 下の階の廊下から大きなモーター音が接近して来るのが聴こえました。

顔をヒョイと出して覗いて見ると パンパンッと破裂するよう

な音を出して走る小型バギーが、廊下の向こう側から走って来るのが見えました。

バギーには、犬のように長い舌を垂らした半裸で小柄なモヒカンが乗っています。

キュルルルツツ!!!

高速で疾駆して来たバギーは階段前でUの字を描いて急停止、遮光グラスを外して一度こちらを確認したモヒカンは、ニヤリと笑いながら遮光グラスを掛け直し、火炎放射器を構えると、目の前が真っ赤になるような凄まじい火炎を噴き付けて来ました。

「のわつち?!」

火炎放射に驚いた自分は仰け反りながら尻餅を着き、回避が一瞬遅れた所為で前髪がチリチリに。

「あちあち!?!」

髪が燃えて額が焦げて、自分は熱さのあまりステップしながら走り回りました。

ええい、畜生めが!

髪を燃してくれたモヒ野郎はたった今、自分が心の中で密かに記している『抹殺』リストの上位に格付けされました。

「ひやつはーッ! 汚物は消毒だアッッ!!!」

モヒカン男はバギー後部座席の燃料タンクを背負い、狂喜しながら階段を駆け上って来ます。後ろを見ながら慌てて逃げようとした自分は足を絡ませ、上のフロアに着く寸前に転倒。間を置かず首筋に熱を感じ、痛みを堪えながら恐る恐る後ろを振り返ると 自分に向けられた火炎放射器の放射口が、獲物を前に舌なめずりでもするよにボボボツと燃えていました。

「こ、降参……! 降参しますッ! う、撃たないで……ッ!!」

自分は武器を不携帯を示すようパツと両掌を開いて、必死に被りを振りました。

心の内はどうあれど、合理的に行動するのが真の成熟した大人というもの。自分は泣きながら両手を頭の後ろに組み、降伏の意思を

示します。

心張り裂けそうな苦渋の選択ですが……今は伏して耐えるときです。

まあ、連中は後で必ず殺しますけどね。

その他、関わった全ての人間を殺しますけどね。

たとえ女子供だろうが容赦なく殺しますけどね。

飼ってるペットから昆虫に至るまで徹底して殺りますけどね。

「おい、何をぶつぶつ言ってるんだ？」

「いえいえ、何でもござーあせんですよ！」

後頭部に突きつけられた放射口に媚びへつらう自分。鋭い演技力が光ります。

「おい、オマエがああの伝説のナンバー0だったのか？ ずいぶん大人しいじゃないか？ へへ……この野郎、小便まで洩らしやがって！」

クク……敵を欺くための偽装とも知らず。

「ン〜？ お……おいおい！ マジかよ！？ ウンコまで洩らしやんのかよ！？」

クク……敵をあざ……え？ 何ですって？

鼻を摘んで、本当に汚物でも見るようなモヒ。その対象は自分トシアキでした。

敵の油断を誘う為に失禁したけど脱糞までしていた。

肛門括約筋が活躍しなかったですきん……。

orz こんな感じで失意の底に沈んでいると、モヒは、まさしく汚物から離れるように自分から飛び退いた。鼻を摘みながら、火炎放射器をこちらに向けて。

「汚物は消毒だア〜ツツ！！」

「あつちいいい！！？」

モヒは自分の背中に火炎放射がましてくれました。

背中を燃やされながらもゴキブリのように這って上のフロアに逃げる自分。その姿はまるで殺虫スプレーに追い立てられる節足動物

のよう。鋭い形態模写が光ります。

「あちい！？ あちい！？」

ですが、熱いのは形態模写でも演技でもありません。普通に熱いです。死ぬくらい熱いです。つーか死にます。

「熱いだろ、こん畜生ッ！！」

火炎の射程外まで逃げた自分は、メラメラ燃える白衣を引き裂き丸めた物を、モヒの顔に投げ付けてやりました。

「うおつとー！」

壁にボスンと当たって、床で燃え盛る白衣。軽く避けられてしまいました。

「まだまだあー！！」

自分はあるったけの憎悪を燃やしながらズボンと黒パンツを下ろし、死ねやと気合込めてクソついたパンツ振りかぶったら、追って来たモヒによって火達磨にされました。

「あちあちあちっ！！？ ちくしょう！？ これが本当の焼け糞かっ！！！？」

燃え上がるパンツを握り締めながら、自分は激しく嘔き付ける火中でもがき苦しみました。

「オラオラー！ 消毒だアッツ！！」

「うぎゃあああぁぁぁっ！！！」

手を休めず火炎を放射し続けるモヒ。

もう、アチアチで済むようなレベルの熱さじゃありません。

「熱いってレベルじゃねえぞ！？ うっ……ガクリ」

酸欠と高熱で意識が何度も途切れそうになったとき、走馬灯のように過去の記憶の一片が脳裏に過ぎりました。

おっばい おっばい

「……………」



左右に振り払い、鬼火のように蒼く燃え上がる手刀を上段に構えた。  
「チヨープー!!」

と言つて蹴り。金的。

チヨップに反応して頭を守り、無防備となつた玉を爪先で潰されたモヒは、声にならない声を喉の奥から漏らしました。

「おは……かはああうっ!?!」

「成敗ツー!!」

股間を押さえながら内股のまま膝を落とすモヒのモヒカン目掛け、自分は今度こそ、蒼白く燃える手刀を水平に振り抜きました。

すぱーん!

ちよつと目測誤つたか、手刀はモヒの額辺りから頭蓋骨をカットし、断髪するつもりがプリンのような脳髓をキレイに露出させてしまいました。

「あらら……」

モヒカンの載つた頭のでっぺんがクルクル回りながら天井辺りまで飛び、ジャンプしてソレをキャッチした自分は、

「そおいつ!!」

ダンクシュートみたいに叩きつけて、元通りにしておきました。

「お、おい!? なにが起こつたらるれ!?!」

切られた自分の頭を触つて激しくうるたえるモヒ。

ああ、そんなに触るとズレますよ。その……頭蓋とかが。

「にやわおろしたろっ!? おおうおうになっ!?!」

勢い余つて脳髓のでっぺん辺りがちよっぴり切れてしまったようで、モヒの呂律がずいぶんおかしいことになっています。

あー、こりや可笑的い。ざまあ。超ざまあ。

「でも……もういいや、なんか飽きた。汚物は……消毒でしたっけ?」

自分は床に放り出されていた火炎放射器を拾つて構え、それをモヒに向けました。燃料タンクは彼が背負っているから使用は一度切りになります……じゃあ、グッドラック。

自分はトリガーを引いて憎きモヒを火達磨にしました。

「あぎゃあああああああ~~~~ッ!!!!!!」

「おっほ、こりゃあ凄い悲鳴だ!」

「ひぎぎぎっ!?!? いぎぎぎぎイイイツ!?!?」

ファイアーダンスよろしく踊り狂うモヒを指さしながらさんざん笑った後、タンクが誘爆する前に階段の下に蹴り飛ばしました。

「ひぎええ!?!?」

階下に蹴落とされたモヒのブタのような悲鳴が、狂わんばかりの自分の怒りを鎮めてくれます。

さようなら。また逢う日まで。

『外道めが……』

焼死するモヒを見下ろしカンラカンラ哄笑を上げていると、不意に頭の中でハスキーな女性の声が出た。

姿は見えない。発生源すら特定できない。頭蓋骨に直接振動するかのような響こえ。

過去に覚えのある不思議な感覚……これは精神感応です。そして、その能力を有する稀有な存在は ナンバーズ最強の1番を有する

『紅尾の蛇』としか考えられなかった。

『紅尾の蛇』ですか?』

『屍喰らい』、相変わらずだな』

初めて遭ったときの蛇は、餓鬼のように痩せ衰えた骨と皮だけの矮躯な姿でした。

瞳孔の閉じた金色の眼、炎のように揺らめく赤髪、アバラがくつきりと浮き、乾いた皮膚はヒビ割れ、飢餓状態のように脆弱な肉体

……思い返すだけでおぞましい。

はつきり言って、この女だけは苦手です。まるで勝てる気がしない。

なにせ……蛇は不死身ですからね。

蛇とは訓練時代の同期ですが、まったくソリが合わず事あることに衝突し、些細なことで殺したり殺され掛けたりしたんですが、ヤ

ッはその度に姿を変えて戻って来る。女性であったり男であったり、子供であったり老人であったり、正体がまるで掴めない。正直、一番恐ろしく、一番遭いたくない存在でした。

『一応訊いておくか……投降しろ。しないな。じゃあ死ぬ』

『選択の余地ナシですか……？』

『投降するのか？』

『しません』

だって殺されますし。

『そうか……迫撃の王の穴埋めに一人欲しかったから、おとなしく投降するなら便宜を図ろうと思ったんだが……止むを得まい』

『え……？』

『残念だよ屍喰らい』

このクソアマ。どうせ殺すクセに心にも無いことを。

骨まで凍て尽くすような強烈な殺気が場を支配し、呼吸が自然と浅くなり、手足の末端から痺れ始めた。

精神汚染が肉体を蝕む前に、自分は敢えて代謝機能を抑えて整体に努める。

焼け爛れた皮膚の再生は氣をかなり消費する作業ですし、安定した休息が望めない状況下で、傷ついた身体を引きずっての消耗戦は自殺行為で、まして相手は蛇。その隙を見逃すような甘い女じゃない。

自分は無理を承知で一時回復を抑制し、身体が参ってしまうまでの短時間の内に、残されたわずかな力で勝負を決する以外に無いのです。

蛇との一戦は、一撃に……この右手の一撃に懸ける。

体内を巡り充足して練り上げられてゆく蒼き戦氣を右腕に集束させます。

「……よし」

意を決し、周囲に氣を配りながら比較的瓦礫の少ない見通しの良い場所まで移動しました。



素早く壁に背を預け奇襲に備える　その次の瞬間、突如壁が割れ、身体が後ろに投げ出されました。

「コンクリートを!?」  
飛散する瓦礫の陰に潜む蛇は完全に自分の虚を衝き、あつという間に殺傷圏内に到達する。

「ちいっ!」  
体勢を立て直しながら隠し持っていたメスを抜き、戦気を伝導させると、瓦礫の山を縫って死角から巻き付いた不可視のおそろく銀系が、雑巾でも搾るようにメスを圧搾してしまう。

『四陣　ストリングプレイ・虎球』  
メスを伝い指先にまで銀系が絡まり、指が……千切れ……これ、この感覚は最近味わったような!?

肉がこそぎ落とされて、メタリック・シルバーの強化内骨格が完全に飛び出す。自分は絡めとられた中指と人さし指を捨て、痛みを味わう間もなく崩壊した壁の奥　倉庫のような部屋まで後退した。敵の気配は既に無く、視界を覆うほどの粉塵が立ち込めている。絶対不分である単分子の糸を指先の精妙な所作で操り、金属を断つことなく圧壊させる芸術的な神技を可能とする者は……自分が知る限り一人しか居ません。

「ソレイン!!!」  
先日、自分と戦い敗れたエースナンバーの新鋭。畏怖を覚えるほど鬼気迫る圧力と対峙した瞬間、過去の映像がフラッシュバックし、失われていた戦いの記憶を呼び覚ます。

濛々と立ち込める煙の中、ソレインの影が一瞬横切った。  
障害物の多い退路無き部屋は、弦使いである迫撃の王の領域。

この間合いに限定するならソレインはエース・ナンバーズ屈指の強者となり、逆に……射撃やスピード特性を活かした中距離、巨艦ヤシロからの長距離を得意とし、近接戦闘を不得手とする自分には分が悪いです。

視界を開く為に放出した黄金色の鬨氣に煽られ、空気が鳴動し粉

塵が瞬く間に消えてゆく。

薄毛ヤの中から少年の輪郭が浮かび上がった。

「ソレ……」

現れたソレインの姿を見て、自分思わず息を呑みました。

彼の首が……無かったからです。

正確には首から上にあるはずの頭が無い。気配や体つきは間違はなく彼のもので、襟首から覗く蒼白い首筋には死斑が浮き、その切断面は死後硬直によって組織が凝結し蠟のような質感に変わってしまっている。

死体が動くななんてそんなオカルト……自分には理解できません。

「い、一体……?」

『二陣 ストリングプレイ・虎空』

力なく垂れ下がっていたソレインの左腕が前触れもなくブレ、目に見えぬ不可視の衝撃が自分の鼻面に叩き込まれた。

「くあつ!?!」

鼻骨を砕き、前歯を欠き、人体を軽々と吹き飛ばし壁に叩き付けたその瞬撃の感触は 鉄球を高速で投げつけられたようなものでした。

その正体は極限まで圧縮した空気を高速で射出した 『<sup>プレス</sup>衝圧』。

かなり面食らいましたが自分は冷静に判断し、二度三度とたたみこまれないよう、鼻血を拭いながら壁伝いに右サイドのコーナーまで移動する。狭い場所の方がストリングの動きを限定できカウンタ―も取り易いと踏みました。

『 虎空』

ソレインの左腕が再びブレ、先の一撃から衝圧の軌道やタイミングを先読みした自分は横っ飛びでソレを避けます。

シュボツ!

叩き付けられた衝圧により、壁面にインクをぶちまけたような大きな傷跡が刻まれた。

一撃目とは明らかに威力が違う。

当たれば顔面の肉がごっさり飛ばされていたでしょう。

背筋がヌルリと湿ったとき、恐怖から逃れ安堵した刹那を狙い、ソレインの右腕がブレ　自分の背中を深く抉りました。

「あぎゃあつ!?!」

あれほどの絶技を両腕で撃てるとは予想もつかなかった。直撃を受けた自分は息も止まりそうな激痛に耐えかね、床の上でのた打ち回りました。

皮膚をこそぎ落した背中に熱湯を浴びせられたかのような激痛。

暴風に煽られた細竹の如く脊椎が軋み、背面の皮膚が大きく剥がれ肉が弾けた。

「くおつ!?!」

何もかも頭から消し飛ぶような苦痛に涙すら流れ、自分はただただ喘ぐ。

『六陣　虎縛』

ソレインの右五指が抑揚の無い声と同時に一気に開き、その指先から不可視の糸が発せられた。

「痛い……ひがっ!?!」

全身を容赦なく射抜いた銀糸が床を楔打ち、自分は”シエー”のポーズに近いあられもない格好で縫い止められていた。

『捕縛完了』

「ちよつと!?!?　せめて、もうちよつとマシな格好で……」

銀糸は心臓や脳髓などの重要器官にまでその毒牙を突き立て、無理に動けばそれは死を意味していました。

自分は……まぎれもなく敗北したのです。

『蹴りなさい』

紅尾の蛇による出どころ不明の音声ガイダンスに従い、ピンで標本にされた虫の如く身動きの取れない自分の顔を容赦なく蹴るソレイン。

鼻の骨が折れた顔に、ドリルのように抉り込む悪辣な踵落とし。

靴底に鉛入りの感触がするソレインの蹴りは岩盤を踏み割るほど

の破壊力。死ねる。死んでしまえる。

「ゴはっ！ ぶはっ！！」

自分の頭蓋はチタン合金製ですが、蹴られる度に脳髓がガンガン揺さぶられます。

折られた鼻は気道を確保する為にチタンではなく軟骨に類似する柔らかい素材を使っていますから、鼻血が止まらず息苦しくて堪りません。

『そのまま死になさい、屍喰らい。罪無き領民を虐殺した貴方に相応しい末路ですよ』

「……」

歯をほとんど欠損してしまった自分は、もはや返事を返すことから叶いませんでした。

ああ……またまた脳裏に走馬灯が巡る。

昔の自分は……第一期ナンバーズ候補生十三人の中で最も体が弱く、覚えが悪く、見込みナシと断じられ早々に見限られた存在でした。

自分は生き残りたかった。

生い立ちも親の顔も知らず、酷薄な戦闘教官の管理の下で劣悪な環境を生き、自分の意思など関係なく鍛え上げられ続けた。

強さだけが自分にとって全てで、それを否定されるのは死ぬのと同義……少なくとも自分にとってはそうでした。

だから自分は殺したんです。

十三人の内の十一人を殺したんです。

あの蛇と並ぶような化け物どもを一人一人、丹念に丁寧に抜かりなく確実に嵌め殺したんです。謀殺したのです。

自己の生存を懸け万事を尽くしたワケです。

自分の人生に天命が入る余地など無かった。世界で神は唯一自分だけでした。

『やれやれ……なんてしぶとい』

二十は蹴られたでしょうが……二桁数えるのも曖昧になるくらいズタボロにされた自分は、胃液を嘔吐しながら白目を剥き昏倒しかけていた。

世界が急激な勢いで回る。意識が遠退く。  
暗転。

顔面に冷たい水をぶちまけられ、自分は急速に覚醒した。

「起きたか……」

「もがもが（司令官殿！）」

乾いた血でバリバリになった臉を無理やり開くと、そこには自分が敬愛して止まぬ憂国の……えっと、名前は忘れたけど”司令官殿”がいらっしやいました。

司令官！ 司令官じゃないかつ！！

「やらかしてくれたなトシアキ」

司令官殿は失った片目にアイバツチを巻き、残った右の眼が鋭く私を見下ろしています。オールバックにして整えた真っ白な髪、鼻の下に蓄えた見事な髭、辛苦の歴史を物語る深い皺が刻まれた浅黒い面長の顔面には数え切れぬ無数の傷　の内の半分以上が自分のお茶目によるものですが、まさに司令官殿！！

自分は先ほどと同じような密室で寝台の上に寝かされ、カラスの嘴のようなマスクで口を封じられ、芋虫のように手足をグルグルに縛られていました。

ですが先ほどと違うところが1つ、あの清廉潔白の戦士である司令官殿が目の前に居てくださる。

自分は地獄に仏とばかりに司令官殿に助けを求めました。

「もがもが（司令官殿、助けて下さい！）」

「……ふん」

「もご？（あれ？）」

しかしどうしたことか、もがけど騒げど司令官殿は腕組みをして

無言のまま、冷たい眼差しで自分を睥睨するばかり。

何故、何故……そのような眼で自分を……？

命を賭して仕えた忠臣に何故、どうしてそのような、汚物でも見るかのような蔑みの目を……？

「もーもーも！ もがもがー！ もうもーもふ……（忠誠を尽くした勇士に対する扱いがこれですか……？ わかりました。もうこうなったら、アナタを殺して自分は生きるしか……）」

「何を言っているか解らんが、言わんとしていることは何となく解るぞ。相変わらず性根の腐った男だ……」

「もがー！（なんですって!?!）」

「快樂に身を委ね、暴虐の限りを尽くし、妄想に浸り自己を見つめ直さず、数多の非道の罪は己の都合で曲解、歪曲し、その責任は全て他者に擦り付ける……何という無分別。理性のカケラも無い。まるで動物ではないか。いや、それ以下だ」

司令官殿は自分の耳元まで顔を近付け、静かだが内腑を抉るような厳しい口調で責め立てる。

なんとという暴言。

天下に燦然と輝く我が正道を、ただ単に理解出来ないから悪と断じるその偏見には辟易しますが、ここ最近第一線を退き、昼夜デスクワークに終始する老害著しい寂しい独り身には、拘束した相手に愚痴をこぼす以外ウサを晴らす術が無いのでしよう。

団塊だから仕方ない。

自分は大人ですから許しますよ。

司令官殿が馬鹿だから仕方が無いと諦めましょう。

「……何か達観したような、凄い腹立つ顔してるのが気になるな……」

「もふもふもふ（さあ、可哀相な御老人。幾らでもお話を聞いてあげますよ）」

「く……っ!」

司令官殿は一度自分を殴ろうとして、寸前で思い止まる。

自分にはその行動原理が解りますよ。

口論に負け暴力に訴え出るなど負けと思ったのでしよう。チンケな御方だ。どうせ何一つ勝てないなら、とりあえず暴力だけでも勝つておけばいいものを。

『バレイン司令、もうよろしいですか？』

「もふ……（蛇）」

背後に控えていた紅尾の蛇が自分の視界に入り、司令官殿にお伺いを立てた。正確には蛇が操るソレインのようですが、上官に配慮しているつもりか、首の断面に木の板を突き立て、申し訳程度の似顔絵が貼り付けてある。かの鬼才である『スプー画伯』が描き殴ったかのようなソレインの顔は悪夢に出てきそうなほど恐ろしく筆遣いにどっしりとした安定感が窺える。

ばれいんばれいん……そういえば司令官殿の名前って、確かそんなだった気もします。

『司令、もうよろしいですか？』

「ああ。本当なら今までチョツカイ掛けられた分、サンキュー・スモークキングみたいに禁煙パッチ全身に張りまくって懲らしめてやりたいところだが、今は任務を優先するでしょう……」

「もふもぐ（死ぬ）」

「ごすっ！」

発せられる憎悪を敏感に感じ取ったか、司令官殿に頭をグーで殴られた。

身動きの取れぬ相手になんと卑劣な……しかし、感情に走り手を上げたのだから司令の負けです。

やーい、ばーか！ ばーか！ 河馬ー！

メガドライブいまだに大事にしてやんの！

「……なあ、コイツもう一回殴っていいか？」

『御随意に』

「もがもがー！！（SEI GAIー！！）」

「トシアキ、大変不本意だが上から横槍が来てな……貴様に今一度

選択肢をやるう。先日申し渡した任務の内容は覚えているな？ 件の 南半島の生物兵器『グエムル討伐』の任務だ」

そう言いながら、自分の口の拘束具を外す司令官殿。熱気で湿った口周りが束縛から解放され、新鮮な空気がひんやりと唇を撫でる。

「南半島？ ああ、韓国の？」

「南半島だー！」

「まあそれはいいのですが、あれってやっぱりパトレイバーの」  
「だ、だま、だまれ……だまれえええッッ！！！！」

何か禁忌に触れてしまったのか、激昂に駆られた司令官殿は身を引き裂くような絶叫を上げて自分に馬乗りになり、眼を血走らせ歯を剥き出しにしながら拳の乱打を浴びせてきた。

「責様に何が解るッ！！ 禁止ワードとか平気でガン無視してしゃべるお前に……！！ 重責を負い、責様のやらかした殺戮や破壊活動や舌禍の後始末に追われ、ストレス性の胃痛と心痛に苦しむ私の一体何が……ッ！ 何が……ッッ！！」

苛烈なれど老いた拳にエースを打倒する力は無く、自分は事が収まるのをただ静かに見ていた。

責任者の役目は責任を取ること。

司令官殿は人知れず、自分の後始末に努めてくれていたのですね。なんか……胸が温かくなりました。

『司令、その辺でござ遠慮願えますか？』

「はあ、はあ、はあ……ああ、すまん……ほんともう……なんかもう、ほんと……」

暴力の限りを尽くした司令官殿は憑き物が落ちたような呆けた顔で、乱れた髪をそのままにゆっくりと自分から離れた。

司令官殿の真心に触れ感動した自分は任務継続を首肯にて快諾し、蛇の走狗となったソレインの手によってようやく解放されました。

体に巻き付けてあった特殊ゴムの拘束具から解放された自分は寝台の上で体を丸め、外された関節をひとつずつ元に戻し、一番不快であった股関節の脱臼を元に戻すと、ようやく人心地着きました。



『屍喰らい、司令に対して口が過ぎますよ』

解放感に浸っていると、その気持ちに水を差す様に蛇（ソレイン？）が苦言を呈して来ました。

「そう言うあなたは顔ぶあ過ぎるじゃなひですか？ 立て看板にラクガキのような……へつと、何でふか？」

『何？ 何を言ってるのか分かりません。何か不満でもあるのですか？』

「不満ひか無いんでふけどね」

歯が欠けているせいで少し間の抜けた声が出ます。

自分の歯には趣向を凝らした多様なギミックが仕込まれてますので素材はチタン製でも強度がイマイチ。殴る蹴るでも結構力ントンに折れてしまふんです。一考の余地アリですね。

「あーあー……あなたに対しては不満しか無いんですけどね」

何度か練習した後、腹式を駆使した特殊な発声法を利用して、腹話術の要領で会話を試みます。

「あれ……声が……遅れて聴こえるよ……？」

と、音声と口パクを上手くずらし身振り手振りを加えながらしゃべったら、いきなり左肩の切断面に指を突っ込まれました。

「あぐつ！？」

蛇に操られたソレインの親指が無慈悲にも自分の肩肉をグリグリと抉り、脳天に響くほどの激痛が走りました。

『勘違いしなさんなよ屍喰らい。あなたは決して許されたワケじゃない。まだふざけたことをのたまうなら即刻、地獄に送り返しますよ』

「いたいいたい」

『解りました？』

「いたいいたい」

『わ・か・り・ま・し・た・か？』

「い、痛いですよ！ 解りました、解りましたよ！」

子供のように泣いて謝って懇願して、蛇は付け根まで押し込んだ

親指をようやく引き抜いてくれました。

「うおおお……ッッ!!」

自分は抉られた肩を押さえ、苦痛のあまり痙攣したように震えま  
した。

なんとという凶暴な女でしょう!

腕の切断面に指突っ込んでこねくり回しやがりましたよ!?

肉と骨の間に親指を通しやがりましたよ!?

まったく、普通の兵士なら狂死してますよ!

「ほれっ、仮の身分証を用意してやったぞ。国籍は日系ドイツ人。貴様が常日頃自称する”教養”とやらを考慮して語学教師という職業を選択した。貴様は馬鹿で馬鹿で馬鹿で馬鹿で本当に仕方が無い馬鹿だけど座学はそれなりの成績だし、確か仮想敵国の言語は習得済みだったな?」

「司令官殿、何か……聞き捨てなら無い言葉が多々ありましたけど、自分が教職……ですか?」

放り投げられたパスポートを開きながら尋ねました。

『この世で最も不適切な職業選択ですね。人道語る殺人鬼みたいなあなたにぴったりじゃないですか?』

「うるさいですよ……」

教師ぐらいカルトムービー観て知ってますよ。

ええっと、確か教壇に立って……「今から皆さんに殺し合いをして貰います」  
でいいですよね?

天職じゃないですか。楽なもんですよ。

「おまえさ、教師に対して何か違う印象を持ってないか?」

「さあてね?」

パスポートをパラパラとめくりながら、英語表記されたその内容のでたらめさに思わず苦笑いが漏れそうになる。年齢は三十一歳で……顔写真の写りはまあ、及第点をあげてもいいでしょう。

『では、準備の方はよろしいでしょうか?』

「ああ、やってくれ」

溜息が出るほどくだらない茶番劇の真っ只中に放り込まれることとなった自分は、もう逆らう気力すら持てずうな垂れてしまいました。

『では屍喰らい、そろそろ人質を獲らせて貰いますよ』

「は……？」

いつの間に退室したのか、部屋の中に司令官殿と蛇の姿がありませんでした。

何事かと思つてあたりを見回す間に、膝がガクリと落ちた。

「れ……？」

身体から力が抜けて、床が迫つて来て……。

暗転。

即効性の睡眠ガスで眠らされた自分が目覚めた時、再び寝台の上に横たわっていました。ガス導入後の呼吸を補助するマスクが口を押さえてますが、拘束はされていません。

もの凄く気だるく、体が痺れて首から下の自由がまったく利かない。

自分は司令官殿に嵌められたのかと思ひ……悔しさに歯噛みしていると、不意に寝台の横から少年がニユツと首を出してきたから、ギョツして目を見開いた。

『目覚めたようですね。さて、人質を捕らせて貰いますよ』

「ひと……人質……？ アナタ、一体……？」

『蛇です』

「……え？」

簡潔に答えた少年に、自分は少し戸惑いました。

しばし黙考。そして答えに至る。

思い出した。

そう言えば蛇は他人の体を操れるんですたっけ。

白衣を身に纏っている若草色の瞳をした少年は、蛇に操られているせいでしょうか、背格好よりもずっと大人びた雰囲気をしていま

した。こうも外見がコロコロ変わると、どうにもやり辛いです。

『さあ、覚悟を決めて貰いますよ』

「……………フツ」

蛇がのたまった『人質』という言葉を、自分は一笑に付しました。まったく、何を考えているのでしょうか。

はあ！？ 人質？ 効きませんよ！ 全然余裕ですよ！ ぶつちりぎりですよ！

仮に、自分の毛ほどの価値も無い有象無象の誰かを質に捕ったとしても、まずそいつから撃つぐらいの男ですよ自分は！！ 犯人邪魔で人質が撃てないなら、犯人が人質から離れて人質が撃てるようになるまで待つぐらいの生粋のスナイパーですよ！ というか、そんな絶好のポジショニングなら犯人撃てよって思いませんか！？ ぶつぶつ！！

「おい、何をぶつぶつ言ってるんだ……………？」

『お忘れですか、コイツの妄想癖を』

「ぶつぶつぶつ……………」

「……………コイツの場合、妄想で済ませなかったから問題なんだ」

『心中お察しします。ナンバーズ史上最底評価を受けたこの愚物が、まさか国家を揺るがすほどの大規模殺戮を行うとは、私ですら予想がつきませんでした。トシアキが秘匿していたあの 最新鋭のイージス艦すら歯牙にかけないステルス機能まで搭載した戦術核搭載巨艦 あんな非常識な物を一個人が所有していたとは』

「現行不可能とされる生体コンピューターを並列化した自律思考統制機構を持ち、原子力とはまったく異なる未知の動力源で推進するあの艦は、依然調査中だが謎の部分が多い。何でも、外殻のモース硬度がダイヤモンドを遙かに凌ぐ18に達するとか技術者は言っていたが、そんな物この地球上に存在し得ない物質のはずだ。『ヤツら』が動いているとしか思えん」

『……………』

「ぶつぶつぶつ……………」

外野がにわかには活気付いているようですが、要するに人質など無意味だということが、自分の脳内で開催された自分会議で決定しました。

死ね人質！！ 死んでしまえ！！

『 それでは人質を捕らせて貰いますよ 』

「さーどうぞ。来なさい」

虜囚の生き恥を晒しながらも決して誇りを失わない自分は、胸を張って堂々と蛇と向き合います。

「あの軀をしてみる。アレを見て貴様には何か感ずるモノがあるんじゃないか？」

「はあ………？」

司令官殿殿がおっしやられたのでその視線を追って 硝子ケースに収まった首なしの裸体を横目に確認しました。見ると言われて見ましたが、しっかし汚つたない軀でした。ガリガリに痩せて骨ばって血色が悪くて、酷い箇所だと肌に黄淡が見え、おまけに左腕は無いし、全身が痣と火傷と傷と弾痕だらけだし、粗チンだし、首の先端には何の装飾もない銀の首輪をして、この体の持ち主のセンスの悪さが窺えます。

「どうだ、解ったか？」

「はい。このボディの持ち主は酷い不摂生の輩ですね。スーパー・サイズミーにでも出演たんですか？ 弱いから傷だらけなんですよ。皮被ってるし」

股間の御粗末を睥睨して吐き捨てる。

「それ、お前だよ」

「そうですねえ。こんな貧相な軀は到底 え？」

あれ？ 今なんと？

自分の体だと言われても、今ちゃんと体あります。

ま、まさか司令官殿、自分が密かに恐れていた痴呆がついに発症して……。

『 あれが人質ですよ 』

「蛇……？」

蛇が操る少年はやたら偉そうに腕組みをして、泰然と言い放ちました。

死ねばいいのに。

自分は素直にそう思いました。蛇は続けてこういいます。

『私の施術によってあなたはその首を挿げ替えたのです。愚か者……あなたが一瞥して卑下したあの軀は、あなた自身のモノですよ？ あなたという男が、どれだけ歪んだ偏見と先入観を以てこの世界を睥睨してきたのか……フン、馬脚を現しましたね』

「……そんな」

蛇は鬼の首でも獲ったかのように珍しく感情をあらわにして、ここぞとばかりに自分に喰って掛かりました。

蛇の言うとおり先入観でモノを見ていた自分は真実を濁らせてしまった。そのことに関して反論の余地などなく、堪らなく口惜しくやるせない気持ちが湧き出し、ただ言われるがまま羞恥と怒りに震えるしかありませんでした。

『ようやく解ったようですね。あなた自身が人質に捕られたということ。その代替としてソレインの身体を宛がったワケですが、残念ながらその身体も長くは保たない』

「……」

『言葉も無いですか？ その肉体は防腐処置は施されていますが、あなたのお陰で損傷が酷く、いずれは朽ちる運命にある。その刻限は……おおよそ二ヶ月』

「……二ヶ月？」

『そう。ですが多少乱暴に扱っても二ヶ月以上は保つよう、内部構造を一新しました。あなたの脳波を電位変換しその微弱な電気信号によって死体に血流が走り、細胞は息を吹き返し、筋肉は生者のように動く。その分、より強く意識しなければ肉体は用を為さなくなります。欠点があります。欠点は眠れないこと。眠れば自発呼吸が取れなくなり、脳に酸素が供給されず死亡する。死にたくなく

ば眠らぬよう努めることです』

「何ですって?!」

『残念ですが仕様です』

「メーカーに抗議します! リコール! リコール! 返品を要求します!」

『……人間の首を短時間の内に何度も取っ替え引っ替え出来ると思いますか? 今回の施術法だって、あなたの私有艦から入手した技術を流用したものでしかなく……まったく、あなた本当に何者ですか?』

蛇は溜息をつき、自分の髪を掴んで強引に首を斜めに反らせ、胸ポケットにあつた手鏡で首筋を映しました。

鏡に映る首の付け根には赤いミミズ腫れが点々と……しかし術後のような縫い跡はありません。

「この傷跡は……?」

『イルカの生脳を保全するために使われていた細胞を再生維持する『青紫の光』……それをたった数分照射すれば、肉体の内部で神経やら血管やら骨が接合して”くつつく”。『代謝』ではなく文字通り『再生』する。血液や細胞遺伝子レベルでの拒否反応など一切起こさず、首周りのサイズまでもピタリと合わせてしまうという非常識なシロモノでした。続けていれば、同土ソレインの肉体も生き返っていたかも知れませんね……』

「不思議ですね。きっと私の前世は、古代超科学文明の末裔なんですよ」

「いや、宇宙人じゃないのか?」

「はあ?」

司令官殿が妄言が余程気に喰わなかったのか、今の今まで他人のものであつた自分の左腕が勝手に、弾けたように跳ね上がり、その掌を大きく翳しました。

鼓膜をつんざくような超高音が唸りを上げ、次の瞬間に目の前の空気が破裂し、司令官殿の身体は天井まで吹き飛ばされていた。

「うがあああつ!!?」

対戦術核使用の強化コンクリートに激突し、蚊取り線香にやられた羽虫の如く落ちてきた司令官殿。

相当な勢いでしたから、身体が大変おもしろい方向に曲がってしまいました。

「なんと!？」

何が起こったのか一瞬理解出来ませんでした。

老いたとはいえガタイのいい司令官殿を裕に三メートルも吹っ飛ばした不可視の衝撃　それは先刻ソレインが放った衝圧。

簡単な理論だけで細かな仕組みは解りませんが、左掌にある肉団子程度の大きさの中央孔から高圧縮された空気が解き放たれた瞬間　左肘の周辺に展開した四つの吸気孔からシュボツと圧縮空気が抜け、そのカウンターによって衝撃の反動が分散されたようです。あれだけの威力で肩にまつたく負担が掛かりませんでした。

「うぐぎゃあああ!!?　痛てエエイツ!!」

針金のように折れた手足の骨が肉を突き破り血塗れとなった司令官殿は、歴戦の古強者とは思えぬ醜態でのた打ち回っておられた。

口の端から泡を吐き、濁った眼を血走らせ、哀れで無残で生き汚く……何と見苦しいことが。

「おいたわしい……」

『いや、今のは主にアナタのせいでしょう』

自分の度し難い心痛を察しない蛇が冷静につっこんだ。

尊敬していた方の無様など誰が拝みたいものか。

こうなってしまうては司令官殿の誇りを御守りするため、即座に抹殺して差し上げることこそ忠臣の役目。

自分はフラつく身体を気力で起こし、今一度必殺の左掌を、醜悪なる司令官殿に向けかざした。

「このクズが。我が手の閃きにより黄泉路を踏むがいい……!!」

『待ちなさい、さすがにそれは止めますよ』

「止めないで下さい。このままでは司令官殿の名誉が……」



空気弾発射後の放熱のため急速冷却に入り、冷蔵庫のサーモ・スタットのような微小な唸りを上げ続けている自分の左腕をがっちり押さえ駄目駄目と首を横に振る蛇。部下としては当然の行為なのでしょうが、それが果たして自分の『厚意』に勝るものなのか疑問です。瞬きの間に始末する優しさこそ今の司令官殿に必要なこと。上官の命を護ることが軍籍に身を置く者の使命とはいえ、その都合だけで相手を慮らず死に場所を奪う欺瞞が、自分にはどうしても許せませんでした。

「あー！ あれは何でしょう!？」

「え……?」

驚いた顔であさつての方を指差し叫ぶと、蛇は釣られて視線を左へ。

今だ！ 今こそ天命を果たすとき！！

隙を衝いて蛇の拘束を振り払い、すかさず左掌をかざしたとき

酷く怯えた表情の司令官殿が一瞬眼に映りました。

今生の別れにしては締まらない顔。

脳裡に過ぎる司令官殿との思い出の日々。蜜月の時間。でもそれも

も最期。

じゃあね。さようなら老害。

ビィィッ！！

明確な殺意を籠めた左腕が、輪郭がブレるほど高速で振動を始め

その次の瞬間、関節部が消失したかのように左腕は肩から垂れ

下がり、また自分の意思と関係なく、蛇行するが如く前後に大きく

揺れ その形状を異なモノへと変えた。

左腕が解けて紙紐のように分解した。

細く長く形状を変えた左腕が、新体操のリボンのように大きく螺旋を描き解けてゆく。

「わ、わ、ひい……ッ!!?」

銀色のテープに絡み付かれた司令官殿は一瞬呆けた顔になり、一拍遅れて自分の置かれた事態が判ると、折れた手足に構わず必死に

身をよじって暴れ出す。

「……ストリング・プレイ？」

妖々の始祖である天才中村氏が、その終生を賭して編み出したと謂われる伝説の秘儀 『饗乱』。

その饗乱を軸とするアジア圏最強にして最古の奥義の中には、動物の動きを模した技が多く登場し、ソレインが操る『虎式』は、その中でも特に攻撃力に特化した技と伝え聞く。

「七陣 ストリング・プレイ『虎眼』」

脳髄に植え付けられた記憶が左腕の発動を機に覚醒し、自分の口は勝手に意味不明な言葉を発していた。

絡め捕った司令官殿をフィッシュしたかのように引き寄せ、一度大きく後ろに振ってから引き戻し、弧を描くように足元に叩き付けた。

「みぎやつ!？」

遠心利かせて叩き付けられ、小動物をクビったかのような奇声を上げた司令官殿。

でも死んでない。さすがに頑丈です。

丸めた新聞紙で殴打したゴキブリのようにピクピク痙攣している司令官殿を拘束してた銀帯がスルリと解け、解けた銀帯は中心に向かって集束するように螺旋を描き、司令官殿の眼前でゆっくりと回り始めた。

「むにゃ……」

するとどうだろう。あれほど「痛いよ苦しいよママ」と泣き叫びほざいていた糞虫が、コクリコクリ船を漕ぎ出した。

これは一体……？

『ソレインが蓄積して来た知識や経験を戦闘情報として肉体にフィード・バックし、あらゆる状況に置いて即座に最適な攻撃が仕掛けられるよう設定しています。アナタは今、生前のソレインとほぼ同等の戦闘力を有しているのですよ』

「この体にそんな秘密が？」

司令官殿を幻惑した奇怪な銀帯が元の形状に戻り、繋ぎ目すら判らないほど完璧に復元された精巧な指は、その一本一本まで自分の思い通りに可動した。

若手のエースの中でも特に才能に秀で、麒麟児とまで持て囃されたソレイン。

父親は軍閥を一括に取り仕切る將軍で母親は政府高官。まさしくエリート中のエリート。ソレインの底知れぬ才能を見抜いた先見ある自分は、彼の骨を折り内臓を破裂させ徹底的に破壊して、二度と再起出来ないよう痛めつけました。

若く美しく聡明であり、天賦の才と絶大な自信に溢れ、彼はまるで神に祝福されて生まれて来たかのような完璧な逸材でした。もし対峙したのがあと半年……いや、三ヶ月ほど後でしたら、地面を這っていたのは間違いなく自分だったでしょう。

クク……でも残念。出遭ったのが三ヶ月前で。

煌びやかな人生踏み外して死んでしまいましたね、ソレインさん。『どうしました？ 何か不具合がありますか？』

「……いえ、とんでもない」

自分は常日頃考えていました。紅尾の蛇に勝てるとしたら、それはひよつとしたらソレイン以外になかったかも とね。

成り行きとはいえ、こんな大層な身体を頂戴したら……。テメエ殺したくなるじゃないですか、蛇イ。

## 錯綜する少女

【信濃川ノア】

惨劇を潜り抜け無事に帰宅したわたしは、機械パーツで足の踏み場の無い雑然とした自室で独り呆然と頹杖を付き、街で起きた一連の出来事を頭の中で繰り返し反芻していた。

「……………」

あの男……トシアキとか言った。

鮮烈な血の臭い漂わせていたあの男は、結局わたしに指一本触れることなく、暴徒の群れが見えなくなる安全地帯までエスコートしてくれた。

その帰路の途中、彼は機密と言いながらあれやこれやそんなことまで訊いてもいないのにやたら楽しそうに話してくれて、お陰でわたしは母さんにも言えないような秘密を大量に抱える羽目になってしまった。

キュルルル……カチッ

そんなことを思い返しながら、わたしは事の発端であるイタズラ電話のイタズラの部分を編集作業している。件数は大分減ったけど、どっかの誰かさんがまたまたイタズラ電話をしてくれたお陰で留守録テープを再々編集しなければならなかった。

必要な内容だけ残して不要な会話はカット。

アナログなのに400分超も録音出来る大容量なので、テープを巻き戻すだけでもずいぶんと思案に浸れた。

「さて、交換交換……………」

デッキから取り出したテープを入れ替える。

この留守録機、通常規格で400分以上録音出来る留守録テープは無いので、母さんに頼まれてわたしが改造した。内臓出来る四つの120分テープを切り替えることで、最大480分の長時間録音を可能としている。

エンジンニアであった父さんの血を引いてるからか、わたしはとにかく解体したり改造したりするのが好きで得意なのだ。この留守録機も完成したときは小躍りするほど喜んだものだけど 正直に言おう。使い難い。

「ただいまー」

「お……」

玄関から母さんの声がした。わたしはPCを待機状態にして席を立つ。

「あれー？ ノアー、留守番のテープ無いよー？」

「あ、ごめ〜ん！ 今持つてく！」

もう母さんが帰って来るとは と思いつつ掛け時計を見たら、長針が23時を指していたのでギョツとする。あんなことがあったからずいぶん時間を使ってしまったようだ。まだ巻き戻しに一本残っているけど、さつき迷惑非通知設定したから四本も要らないし、とりあえずあるだけ持つてくか。

PCパーツや配線が所狭しと並ぶ乱雑な机の上から編集済みのテープを驚掴みにして、わたしは居間へ行く。

「はい、これ」

「ありがとう。でも、どうして外しちゃったの？」

テープを受け取った母さんは電話機にテープを1つ1つセットしながら尋ねた。

「メンテナンス」

「そう。何か入ってた？」

「特には無かったよ」

嘘だった。

ええもう、凄い罵詈雑言でしたよ。

自分に矢玉が当たらないからって醜い本性剥き出しで……連中は自分で自分が許せないと思えることはないのだろうか。ああイラつく。

でも、そんなこと母さんにわざわざ話す事は無い。

ぴんぼつ

作り笑いの裏で、明日行つて予定の凄惨な復讐劇を脳裡に描いていると、尻切れトンボ気味なインターホンが鳴った。普通、ぴんのあとに『ぼくん』と間延びするもんだと思うけど、ウチのはずつと歯切れが良い。

「はい」

急いでテープを詰め終えた母さんはそう言うと、小走りに玄関に向かう。

後姿を見送つたあと、わたしは少し喉が渴いてたから冷蔵庫を開け、半透明のポットに作り置きしておいたココアをサイドポケットから取り出す。日本から取り寄せた天然の軟水を選択し、本場バンホーテンの上質ココアパウダーから作り上げた究極の逸品。手間暇と愛情を注いだココアドリンクを前にすると、自然と我が子をいとおしむような優しい手付きになってしまう。

慎重にココアをコップに注ぐ。

今日の嫌な気分も、人生観反転するような殺戮ショーの余韻も、きつとこのココアが一抹の清涼剤となって、わたしの心を癒してくれるだろう。

「いただきます」

「ノアー、お客さんよ」

「ふえ……?」

初恋にも似た（経験はないけど）期待を胸にコップに口を付けたところで、不意に母さんからストップが掛かった。ココアとの逢瀬を邪魔されたわたしは眉間に皺を寄せて聞き返す。

「……誰?」

「さあ? 男の人だけ……こんな時間だし、間が悪いなら今日は帰って貰う?」

「いや……いいよ。あ、母さん。ココア駄目だからね!」

「え〜!」

愛しのココアを付け狙うハンターの目をした母に釘を刺し、とり

あえず謎の訪問者を迎えるため玄関に向かった。

誰だろ？ もう23時だし。

こんな時間に訪ねて来る男の知り合いって……まあ、会えば判るか。

「ハロー」

「……」

玄関の前に立つ痩身の男を見た瞬間、わたしはその場に立ち止まり、驚きのあまり身動きすら出来ず呼吸を止めた。

トシ……アキ？

「グーテンアーベント？」

「ドイツ語……？」

そしてなにゆえ疑問形？

「トットツインス？」

「オランダ語……？」

「クワヘリ？」

「スワヒリ語……かな？」

だんだん難易度が上がった気がする。

「ホシ？」

「ウイグル語？ ウイグルか……ウイグルに自由をッ！！！！」

「ふふ……こんわんば」

涼やかというか、やけに冷めた笑みを浮かべ「ヨッ」と手を挙げているトシアキに、わたしの思考はショート寸前だった。

「いやあ、自分はドイツ人でしてね」

「え……北から来たとか言わなか いやいや、何でアンタがここに居るのよ！？」

「何だか解らないですけど、警察が追って来るんですよ」

「当たり前だ！」

わたしは顔を真っ赤にして怒鳴った。

自分が言えた義理ではないが、あまりに世間ズレしたトシアキに  
思わずツツコミ入れていた。

「ちよっ…… あんだけ派手に暴れといて、よくココまで来れたわ  
ね！ 何したか忘れたの！？ この鶏頭っ！」

考えなくても言葉がポンポン出る。

一度話し始めると緊張なんかいつの間にかどこかに飛んでいて、  
気取ったり、優越感に浸ったり、意地張ったり、斜に構えたりする  
いつものわたしはココに居なくて、ただ溢れてくるありのままの感  
情をぶつけていた。

「ねえノア、知り合い？」

「違います！」

玄関で騒いでるのが気になったのだろう、居間のドアからひよっ  
こり顔を覗かせた母さんに、わたしはきっぱりと言いつつ。

あ、いや、知ってるんだけどね。何というか……勢い？

「え……知らない人？ まさか……強盗？ け、警察……っ！ 軍  
隊……っ！」

「母さん早計。アーミー呼ばないで。あのさ……ごめん、嘘だから  
ね。ちゃんと知り合いだよ」

青ざめた顔でわななく母さんに、わたしは努めて平静に訂正した。  
「あはは、どうも」  
トシアキは唇をスマイルマンのように吊り上げ、まだおっかなび  
つくりしている母さんに微笑み掛ける。

何というか……邪悪な顔だった。

「じゃあそういうことで、ちよっとお邪魔しますよ」

「ちよっ、と、どうということだよ!？」

トシアキは素早くブーツを脱いで、わたしを軽く横に押し退け、  
ズカズカズカズカ入って来た。

「ズカズカズカ　あ、奥様、お風呂よろしいですか？」

「え？ あ……はい。どうぞ……」

お嬢様育ちで人当たりの好い母さんは、呆れるほど強引で殺気と



血臭をプンプン漂わせているトシアキに対しやや引き気味だったが、割と素直に頷く。男にああも強引に迫られちゃ、か弱い女性じゃ頷く以外に無いかも知れないけど。

「あの失礼ですけど……何か変なニオイが……？」

「いや、失敬失敬！ 自分は精肉工場に勤めていましてね！」

「あら、そうであつしやるの？」

「ええ、精肉工場で精勤ですよ！ 政治的理由で輸入せざるを得なかった狂牛病疑惑付きアメリカ産牛骨粉とか沢山余ってますから、お嬢さんならお安くしておきますよ！」

「あら、お嬢さんだなんて！」

世辞を真に受けた母さんは照れ笑いを浮かべ、トシアキの背中をバシバシ叩いて、バシバシ蹴った。

我が母ながら腰の入ったいいミドルキックだった。

ミドルキック世界選手権あるなら世界狙える。

能面ヅラのトシアキが「ぐほっ」と呻いて、ほんの一瞬苦悶の表情を浮かべたくらいだ。

「よいしょっと！」

「ちよつと、ここで脱がないですよ！」

廊下でいきなり血糊の付着したコートを脱ぎ始めたので、わたしはトシアキの背中を押して浴室まで誘導する。そのとき掌を伝って……圧倒されるような重厚な筋肉の感触がした。

「ふんふんふん 人生楽だけありやいいさ〜」

風呂場の摺りガラス越しに見えるシルエットは、意気揚々と鼻歌など歌っていた。

水戸黄門のアレンジだろうか。

歌詞に対してはあまり深く追求しない方が良さそうだ。

「……ねえ」

「はい？ 何ですか？」

「わたしを送ったあと、一体何があつたの？」

「はい。いや、威嚇の意味を込めて、追って来る警官10人ばかりを思いつく限り凄惨な方法で解体したんですけど、やつらそれでも追って来るんですよ」

「そう、着替えここに置いてくわよ……」  
網籠の中に、バスタオルと一緒に男物の下着やシャツやジャージを置いておく。

トシアキの着ていた服は洗ったら洗濯機に血の臭いが付きそうだったし……大変申し訳ないけど父さんの遺品から御借りした。こんな形で改めて遺品整理することになるなんて……ごめんよ父さん。

「ふう……」

部屋に戻り大きく息を吐く。

やっぱりアイツはとんでもない男だ。

人間味のカケラも無い、社会性とか倫理観とか、そんなものとは一切無縁の傍若無人な男。

ああ……クソ、わたし迂闊だ。自分だけならまだしも、母さんまで危険に晒すなんて。

こうなったら絶対にトシアキから眼を離さないぞ。

「あつはつはつは!!」

そんなわたしの心配をよそに、風呂上りでこざっぱりしたトシアキは、居間のソファーにドツカリ腰掛けビールジョッキ片手にお笑い番組を観ながら爆笑している。すっかり打ち解けてしまった母さんを間に挟んでトシアキの対角に座るわたしは、ココアを啜りながら2m以内を堅持し、ジツと監視を続けている。

しっかし母さんの厚意といえ、どこまでも厚かましい男だな。

あんまし堂々としているから呆れ果てて腹も立たない。

こんな隙だらけな男があんな凄惨な殺人をやらかしたなんて、現場を見たわたし以外誰も信じやしないだろうな。

よし……そろそろ探り入れてみるか。

「あの……失礼。ちよつとお花摘みに」

「おトイレ？ がんばってね」

トシアキとコンタクトを取るため、女性の間で通じる『お手洗いの合言葉を口にしてそそくさと立ち上がるうとしたとき、母さんはそれを台無しにするようなことをおっしやいました。

「母さん……？」

わたしがキツと睨むと、ほろ酔い加減の母さんは「あら、うふふ」と言つて、亀のように首を引っ込めた。

母さんつたら、酒が入つてずいぶんご機嫌だ。

お陰でとんだ恥を晒した。

わたしは意を決つして席を立ち、母さんに気付かれないよう後ろからトシアキの肩をポンと叩いて、振り向いた赤ら顔のヤツに親指で廊下を指し 眼で合図した。

ちよつと顔貸せや。

「……？」

トシアキはきよとんとした顔をしていたが、強い警戒色を伴つたわたしの真剣な眼差しを見ると緩んだ頬を引き締め、全てを納得したように大きく頷く。

「ああ、連れシヨンですね？」

「違つッ！……！」

わたしは叫んでいた。

それを見て母さんが、何だろうと不思議そうに首を傾げた。

「ああ恥かいた！ どの世界にお手洗い一緒する男女がいるつてのよ……！」

トシアキを廊下まで引つ張つて、居間へ続く扉を締めるなり、わたしは怒鳴つた。

「そうですか？ 自分の居たトコでは男女の境はありませんでしたけどね」

「……アンタんとコの常識は韓国コウの常識じゃないのよ。郷に入れば

郷に……て言葉知らない？」

「知らないです」

何だか頭痛がして来た。

額に手を当て血が昇った頭に沈静を促す。

羞恥心を隠すために不自然に荒げた語気も、世間ズレしたトシアキ相手じゃどうにも空回りしてるみたいで、必死になってるのが何だか馬鹿らしくなってきた。

「もういいわ……でも、母さんに手え出したらぶっ殺すわよ」

「ウイ」

フランス語……？

まったく、こいつは一体何人なんだろうか？

「自分が男ということ、ノアさんはお母様のことを案じてらっしゃるようですが……でも大丈夫ですよ。自分は性機能不全です。だから問題ありません」

「え……？ ああ、う、うん……そう……なら、いいけど……？」

おや……今、サラッと凄いいこと言われなかったか？

人間、不意にとつもない衝撃を受けると思考が麻痺することがある。

今わたしが受けたモノが正にそれで、呆然と突っ立ったまましばらくして……ようやくトシアキの言った言葉の意味を理解する。

「う……うああああっ！！？」

言葉の意味を理解したわたしは、なんか耐え切れずに絶叫していた。

ちよつと、性機能不全ってナニ……っ！？

アレがアレして……アレにならないワケなの！？

平たく言うなら……陰茎が性的刺激に反応しなくて勃起状態にならないワケなの！？（平た過ぎた！）

ノット・スタンバイなワケなの！？

「おや、この部屋は何ですか？」

「……え？」

悶えるように頭を抱えてた思春期のわたしを、トシアキの声が現実  
に呼び戻した。

……ふう。

危うく取り返しがつかなくなる場所まで墮ちるところだった。

「……どうかしましたか？ どこかお加減が優れないようですが？」

「いや……何でもない。そこは……父さんの書斎よ」

「お父上の？」

「うん、そう。今はもういないんだけどね。父さんが亡くなったあと、貸し倉庫に預けてあった遺品なんかを引き取ったら一部屋分になっちゃって。その内整理しようかって母さんとも話してたんだけど、かなり大荷物だし女手2つじゃどうにもね……。捨てられないからとりあえずその部屋に置いてあるんだけど」

「へえ……」

興味深そうにそう言って、トシアキは何の遠慮もためらいも無くドアノブを回して扉を開けた。

……いきなり入る気？

ただでさえ掃除が滞りがちな場所なんだから、他所の人間に勝手にされちゃ堪ったもんじゃない。

わたしはトシアキのあとを追って部屋に入る。

「ちよつと待つてよ、その部屋灯り点くか分かんないよ？」

入居してから数年の間ほとんど電気なんか通してない。蛍光灯が駄目になっているかも知れない。

廊下から差す光で部屋の中の雑然とした床がうつすら浮き上がり、わたしはそれを踏まないよう爪先で足場を探りながら、どうにか手探りで部屋の灯りに辿り着いた。

スイッチを入れてしばらくすると、天井の照明がチカチカ明滅し始め、ブーンという音がして灯りが点いた。

「ほう」

照明が点くと、トシアキは感嘆の声を漏らした。

この家を借りてからほとんど入ることの無かった主無き部屋は、

沢山の機械の山に囲まれていた。

組み立て途中のパソコン数台がスチール製の棚に並び、PCの頭脳となる基盤はダンボールに山積されて埃を被っている。隙間が窺えないほど張り巡らされた配線は神経網の如く床下から床上にまではびこり、11から30インチ以上まで幅広く取り揃えた液晶モニタ十数台にはそれぞれ埃避けのビニールが掛けられている。

その中でも特に眼を惹くのは、部屋の中央に鎮座した、歯医者の子椅子みたいに大仰な仕掛けが施された黒革張りのリクライニング・チェアだろう。

椅子の背もたれから延びた円盤状の天蓋の淵に引っ掛かっている、黒い繭のような形をした光沢のあるヘッド・マウント・ディスプレイは、その椅子に付属している物のようだ。このシステムを稼動する為に存在する、部屋の奥の硝子張りの向こうに三基並んだ長方形の大きなサーバーは、大量に放熱する為、それらの熱を効率良く処理する空調設備はあまりに大きすぎて日本で処分してしまったから、今は起動出来ない状態にあった。

「……ずいぶん長い間放置しているみたいですけど」

「母さんがあんましイジリたがらないのよ。この部屋の配置だって、倉庫にあったときのまんまで置かれてんのよ。埠頭近くの倉庫の一階と二階を借りて、下の箱に大容量のダイナモ容れて、そこから電力引っ張って来て上の設備に電気供給してたみたいけど……何に使ってたかは未だに謎。父さんには悪いけど、ウチにはただのお荷物よ」

「へえ……」

トシアキは感慨深そうに部屋を眺め、椅子のシートを撫でた。

「装着者のブレイン・マップを複製、電脳量子化し、それを電脳空間上で擬似形成することによって得る体感は現実と遜色無く、生身の生体に影響を及ぼすほどのものである」

「……？」

トシアキは何やら小難しいことをブツブツ呟きながら、懐かしむ

かのような表情でシートに腰を下ろした。

「『揺り籠』……こんなところにあつたなんて……」

「揺り籠？ これってそういう名前なの？ さっきも言ったけど、それは動かせないわよ。この家じゃヒューズ自体が飛んじやう」

「……これは自分の物です」

「え……いや、いきなりそう言われても……？」

出処も用途も不明なシロモノだけど、父さんの遺品を勝手に自分の物と主張されても困る。わたしには愛着も執着もないけど、母さんが大事に思っているからこれは譲れない。

「証拠ならありますよ。ほらっ、ここの刻印」

「……もっ」

かなり興奮した様子でトシアキが手招きするので、わたしは足元に気を付けながら仕方なく揺り籠のそばに寄ってみる。

トシアキが指差す天蓋の裏に刻まれた 製品番号だろうか、そこには八桁の数字が並んでいる。

でも、それが何だと言うのだろうか？

トシアキは椅子の端に腰掛け、おもむろにヘッド・マウント・ディスプレイを被った。

天蓋上部から延長する多関節のアームと連動したヘッド・マウント・ディスプレイを被ると、顎先が見えなくなるほど頭がスッポリ包まれ、その状態でトシアキが後ろの首筋辺りを触ると、額とこめかみの両端から突き出ている三つの円柱状の芯棒がキュルキュル回転しながら挿入され 最後にカチツと音を立ててキレイに納まった。

それ、そうやって被るの……？

マスクを一度も試したことのないわたしが（いやだって、タバコ吸いで加齢臭まで出てきた中年のお父さんがちよくちよく被っているフルフェイスのマスクを、年頃の娘が被ると思う？ いや被らないね！）感心していると、トシアキは首をコキコキ鳴らしながら背もたれに深く横たわっていた。そんな様子を見てみると……いつ

だったか、テレビのUFO特番で観た宇宙人の解剖実験VTRが頭の中でリフレインされる。

「それ息苦しくない？」

「意外に快適です。空気孔のようなものは見当たらなかったし、呼吸していても感じられないのですが、ヘルメット全体から必要な分だけきつちり酸素が供給されているような心地よさです」

「それって……どんな？」

よく分からなかったけど、トシアキはとても満足なようだ。

トシアキは非常にリラックスした様子で、銭形平次の鼻歌なぞ口ずさみながら、肘当ての位置に据えられたタッチパネルを慣れた手つきで押している。残念ながら電気が通ってないので反応は無いのだが。

「ふむ……『YMR』ですか、なるほど……」

「どうしたの？ 何か視得るの？」

「ええ……。こいつは相当前から何処かとリンクしているようですね。あの、唐突で不躰な質問になりますが、『YMR』という単語に聞き覚えはありませんか？」

「アンタがいまさら不躰を言うか！ ……YMRね、結構有名よ。

仮想世界での自律進化をシステムに取り入れた画期的な多人数次世代オンラインRPGの金字塔で、業界シェアナンバー1を誇るヴェイン株式会社が販売元となったゲーム。今までのオンラインゲームにあった”予定調和”を一切排した先の見えない展開がマニア受けしているみたい」

「詳しいですね。そのゲームの経験はお有りですか？」

「今どきの若い子ならみんな知ってるわよ。ずいぶん前に父さんがプレゼントに買ってくれたんで、義理というか……興味本位でちょっと触ったんだけど、趣味に合わなくて直ぐ飽きちゃった。やたらでかいパッケージだから積みゲーの土台になってるわ。税抜き『二万八千七十円』だったかな？ ……お高い無駄な買い物だね」

「それ下さい」



「ええ、いいわよ」

即答。だって本当に要らないし。

そして断っても意味は無さそうだし（断ったら家捜しして勝手に持って行きそう）。

YMRは、父さんが誕生日にと買ってくれた思い出の品だから売るワケにもいかなかったけど……ま、あげる分には問題ないだろう。正直邪魔でもあったし。

「悪いですね」

「別にいいわよ。どんなに素晴らしいゲームだって遊ばなきゃクソゲー以下よ。それに、アンタには街での借りがあるしね」

「いえいえ、こちらこそ夜遅くに泊めて貰っちゃって」

「呼んでもいないのにね……」

申し訳なさそうに頭を下げたトシアキは輝く白い歯を見せた。

この男かなり厚かましいが、そんなことどうでもいいと思えるくらい厚かましい。北のドイツ人は他人に遠慮しない文化なのだろうか。それとも彼なりのスタイルなのだろうか。そもそもドイツって北……？

「あつはつはつは、こりゃ一本獲られましたね！」

「いや、笑い事じゃねえだろ」

トシアキの会話は、まるでマイコンとの対話のようだ。相手の感情や機微を読み取ることが出来ない旧式の不完全なタイプ。

コイツは今までどんな生活を送って来たんだろ。

全身をアメコミのヒーローみたいに改造して、人殺しなんか缶ジュースのプルトップ空けるくらいにしか思っただけで、超天然で、厚顔不遜で……そんなもって。

およ、なんだろ？　なんか変な気持ちだぞ。

この気持ち……殺意かな？

黒光りするメットを被ったまま首を前後にガクンガクン揺らし哄笑する奇怪な男に、わたしは何故だか胸の高鳴りを禁じ得なかった。ひとしきり『揺り籠』のチェックを終えたトシアキは、毛布に包

まり独り居間で寝ることとなった。

トシアキに「永遠におやすみ」と言ったあと、わたしは寝付けずにベットの中で悶々としていた。

「むう……」

やけに体が熱い。妙に火照っている。

ベットに入ってからもう何度も寝返りを打っているけど、さっぱり眠くならない。

沸騰したような頭の中ではトシアキの邪悪な笑顔がぐるぐると巡っている。

胸が苦しくて喘いでしまうほど息苦しい。

「……何これ？」

初めての経験だった。

殺意とはどうも違うような気持ち。

これは……悪意だろうか？

昔の夢を視た。

わたしがまだ小学生で、父さんが生きていた頃の夢。

出張先の台湾から半年ぶりに帰って来た父さんは、その日を境に一人で出掛けることが多くなった。

行き先も告げずに朝早く出る。手提げ鞆一杯に何かを詰めて意気揚々と。帰ってくるのは早くても夕方か夜遅く。遊びたい盛りわたしはそれが不満だった。

ずっとずっと、不満だったのだ。

だから、ある日、わたしは決起した。

眠い目を擦りながら玄関前の階段に潜んで待ち構え、何も知らずにやって来て靴紐を結んでいる父さんの無防備な背中にダイヴかましました。

「死ね！」

家長の義務を果たさせ家庭円満を守ろうと意気込んだ、そんな健気なわたしの全力体当たり。死ねと言ったのはなんか勢いだ。

階段の上から飛んで来た頭に腰椎を痛打された父さんは「ごふえ！」と言い、プルプル震えながら腰を押さえ、平伏するように前のめりになってムセた。

「遊んで！」

わたしは父さんを足蹴にしながら泰然と見下ろし、シンプルにして切なる要求を突き付けた。

小学生当時のわたしは今よりも遠慮の無い子供で、身近の動物は全て殺すか傷付けるかする子だった。

特に暗い陰を負っているわけじゃなく、平和な国で恵まれた家庭に育ったのに、何故かわたしは怪物だった。

女版トシアキだろう。

「と、父さんは……忙しい……んだよ」

「なにその日曜にゴルフバック担ぎつつ仕事行くんだ的ないわけー！ 出張先の現地妻孕ませて離婚迫られてるかそついうのならはつきり言つてよー！」

「そんなことしてないよ!? 僕はママ一筋だからね!？」

「え……わたしは？」

「え……？」

わたしが急にしょぼんと肩を落としたので、父さんは困惑した。

「パパはママ一筋なの？ マママ一筋で、わたしは入ってないの？ 大事じゃないの？ 要らない子？」

「そんなことはないよ！ いや……あーそうだな、もちろんママと同じくらいノアだつて大事さ！ もちろんだとも！ じゃあ……ママとノアの二筋かな？ うん！」

「わたしかママかどっちかはつきりしてよ！ 男でしょ、意気地なし！」

「どつしると!？」

当時のわたし超理不尽。

その上、父さんをパパ呼ばわりだぜ。

「パパー、遊んでくれないと、パパの大事にしているゲームが入っ

たフロッピーディスクの横に、破損したハードディスクから取り出した希土類磁石置くよー！」

「やめて！ Y U - N のデータ飛んじゃう!?」

伏せてるのにまったく伏せてない字面で父さんは懇願した。

父さんの弱みをガツチリ握ったわたしはムフフンと得意げに鼻を鳴らし、スカートのポケットから止めとばかりに 先の副将軍が頻繁に使用する土下座強制アイテムよろしく磁石を取り出した。

「ええい！ ひかえい！ ひかえおろう!!」

テレビで観た助角はアイテム使用時に必ず敵をしばくので、わたしは同じように父さんをしばき倒し、その上で遊ぶことを強要する。

「わ、わかった！ わかったから！ 今日だけだぞ！」

「わーい！ 中国のデイズニーランドらしきトコに行きたいなっ！」

「ノア……それ、デイズニーやない、石景山遊園地や……」

父さんは、まるでわたしがおはじきとドロップを間違えてるかのよう間違いを訂正した。

## 旅立ちの少女

【夢・トシアキ】

蛇の猛毒によって期限付きで解放された自分は、”一年前”の大規模な毒ガステロ事件で半壊した首都を取材に来ていた外国人クルーの一団を襲い、地下室に閉じ込めてから三日掛けて気が済むまで刻み殺し、性別も人種も誰が誰だか判らないくらい平等に形を変えてさしあげてから遺体を井戸に放り込み、百円も放り込み、拍手を打ち、奪ったパスポート（蛇に貰った物は不備があり過ぎて捨てました）で国境を越え、韓国ソウル市内へと潜入することに成功しました。

「『揺り籠』……こんなところにあつたなんて……」

「揺り籠？ これってそういう名前なの？」

押し入ったステイ先で揺り籠に遭遇した自分。

揺り籠について興味深そうに尋ねた少女に答えることなく、自分  
はしばし懐かしい記憶に胸を熱くしていました。

揺り籠を初めて目にしたのは……そう、自分が司令官殿よりエース・ナンバーを正式に拝領する以前の……少年時代のことでした。

ありつただけの知恵を振り絞り、圧倒的強者を徹底的に嵌め潰していた、懐かしき悪しき時代のことです。強化改造した肉体を維持する為に薬をジャブジャブ射たれ、その影響で昔の記憶は完全ではありませんが、おおよそ十五年前……あれは陽炎が立ち昇るような暑い夏の日でした。

一面砂地しか見えない悪環境下で、二人の優秀な戦闘教官が各々担当する紅・白の二部隊 計二十人足らずの選ばれし少年少女が集い、徒手勝ち抜き戦によるエース選抜が実施された。

自分が在籍していた白組は、この時既に半数以上の仲間が行方不明になっていました。

自分が殺してしまつたからです。

勝ち抜き戦は十五対三という圧倒的不利な状況。一人で五人は勝ち抜かないと負けてしまい、自分らの進退が危うくなってしまいました。

自分たちは北朝鮮最先端の技術によって英才教育された特別な人材で、その身体の隅々には他国に漏らしてはならない多くの秘密が隠されています。負ければ死ぬ。機密保持の為に処分される。ここに居る皆もそれを知っている。だから誰もが押し黙ったように無言で、闘志を籠めたギラギラした眼をしている。

戦力として期待されず次峰として選出された自分。白組の同士イテルヒが二人抜いて三人目で頭を踏み潰されて死んでしまい、膝を震わせながらの参戦。

イテルヒはかなり強かったはずですが、向こうも相当訓練されているようで、右フック一閃で顎を打ち抜き、意識が飛んだところで顔面に踵落とし。イテルヒの身体がビクツと撥ねて動かなくなる。対戦相手は殺人をまったく逡巡無く行いました。

「くそ……」

五人くらいは残しておくべきだったと、今更ながら後悔します。

イテルヒを破った満身創痍の敵をタックルから寝技に持ち込んでネチネチ体力を奪い、最後に絞め落とし辛勝した自分。意識を喪失している相手に跨り、顔面を石で砕いてイテルヒへの手向けとする。

「おらおらおらあああゝ!!」

自分は敵に恐怖を植え付ける為に必要以上に死体を殴打し、裂いた脇腹から腸を引きずり出し、それを巻き付けて自らの首を絞めるパフォームンスまでやって敵の戦意喪失を図りました。

「うおー！ 次はキサマらもこうしてやるううー!!」

ダミ声を発しながら小走りに相手陣営に見せびらかしに行くと、

「アホか！ 早く次の試合を始める!!」

白組担当の戦闘教官『霧のガガレイ』が、怒鳴りながら愛弟子に石を投げる暴拳に出ました。

こちらら死なないように必死だというのに、まったくなんという戦闘教官。

自分は対戦を再開する前にもう一度敵陣に駆け戻り、滑り込むように片膝を着くと、「ゲツヘツヘツヘツヘツ！ 次はキサマらもこうしてやるううう！」とダミ声で挑発しながら舌先をチロチロ出し、両手に握り締めた腸を交差して首を絞め上げ、並んで体育座りしている連中を見回しながら念入りに脅しましたが、敵側の総勢は眼をギラギラさせながらもまったく平然と見ていらっしやる。逆に自分はガガレイに石を投げられ、頭にダメージを負いました。

「始め！」

紅組戦闘教官『紅炎のヒルド』の合図により戦いが始まりました。対戦相手であるアフリカ系黒人の少年と対峙した瞬間 真っ先に自分の死に顔が浮かびました。

外人はズるいですよ。

基本からして身体能力が違う。

死に掛け相手に肩で息するくらい疲れたのに、どっから攫って来たか知りませんが、また強そうな相手を……。

既に体力消耗が激しい自分はイチかバチかの短期決戦に臨み、打撃戦の末にガード上から被せるようにこめかみ殴られ あっさりス力勝ちされてしまいました。

「うわっ！？ あひいいっ！？」

勝負は倒されただけでは終わらない。

相手の死を以ってそれを決着とする。

熱波の下、凍り付くような恐怖に全身を支配された自分とはっさに砂を目潰しにして逃げようと思いますが、脚が言うことを聞かずに三步も行かずに膝を着く。背中を蹴られうつ伏せに倒れ、そのまま跨られました。

左頬を腫らし唇の端から血を流している黒人の少年が手に持っているのは 大きな石。拳はカンタンに消耗するから、次戦を見据えて石で合理的に相手を殺すつもりだ。

いやだ。死にたくない。やめてくれ。お願いだ。

「やめて……たすけて……お願いします……」

こうなることを恐れて仲間を殺して来たというにあんまりだ。

靴の裏でもケツの穴でも舐めるから勘弁してくれ、何でもするか  
ら助けてくれと、自分はあられもなく泣き叫び本気で懇願しました。

石が目前に迫り、死を想像したそのとき　ストップが掛かった。

「試合を中断せよ！　　同土トシアキ、直ちに宿舎前に出頭せよ

！」

「ハア……ハア……」

恐怖で完全に麻痺していた脳が上官殿の言葉を理解するのに数秒  
掛かりました。

寸前のところで、自分は助けられたのです。

命令に絶対服従するよう訓練された黒人の少年は、仲間を殺し自  
分を殺そうとした相手を前にしながら、何のためらいも無くスツと  
離れた。

背を向けて自軍の陣営へと戻る。

怒りも悲しみも無い。自己を護ろうとする気すら無い。

まさに次世代の完成された殺戮兵器がそこには在った。

この後、白組大将の『蛇』による殺戮ショーが開催されたことは  
言うまでもない。

後のエース・ナンバー1。

事実上崩壊した白組から紅組に編入され、”紅”を冠することに  
なる少女が、人間をマネキンのように解体していった。

特殊部隊の長のみ着用に許される真白き軍服に身を包む年若い上  
官殿に案内され、黒塗りのセダンに乗せられた自分は、十四年前の  
爆発事故によって永らく封鎖されている地下核実験施設に入ること  
を口頭で伝えられました。

なぜ自分のような一介の訓練兵が上から　それも送迎の車まで  
用意して呼び出されたのか……？



半死半生のところで救い出された当時の自分は思考停止したまま車に揺られ、そのことに考えが至りませんでした。早鐘のごとく打つ心臓と荒い息を吐きながら、ただただ安堵するばかり。

「大丈夫かい？」

「……え？」

「泣いてるようだけど」

「え……あ、すみません」

不意に上官殿から指摘され、自分は慌てて頬を拭きました。気付かない内に涙を流していたようです。

「大変だね、訓練兵は」

「いえ……義務ですから」

物心つく前の幼少期から徹底した国家主義や愛国思想を叩き込まれ洗脳されてきた自分は、上官殿の気遣いが理解出来ず一瞬、返事に詰まりました。

大変だとか命を惜しむとか、そんなこと考えることも許されなかった。

大人も御同輩も誰も彼もが口を揃え、身命を賭して国に尽くすべきだと言った。

反論も反証も反抗も反対も反目も反発も反意も反落も反撃も反骨も反逆も反日も（日本は同盟国です）許されない。ただ機械のように忠実な兵士たれと教えられた。

「君達はまだ子供だ。あまり無理をすることはないんだ」

「……ハッ！ お気遣い畏れ入ります！」

だから上官殿のフランクな態度に却って戸惑ってしまう。

都心から離れ車に揺れること五時間……人口密集地から大きく離れた裸山林が目には痛い砂利道で揺れる山岳部に差し掛かると、前方に道幅を埋める車止めと通行ゲートが見え始め、その付近まで来ると武装した三人の兵士が両手を振りながら立ちはだかりました。「結構です。お通り下さい」

「ごくらうさま」

上官殿が命令書を見せて確認が済むと、ビー、ビーという野太い警報が鳴り響き、道を塞いでいたゲートが開かれました。

ゲートを通過して山に沿ってゆるやかな坂道を登り続けると、10分もしない内に二番目のゲートに遭遇します。

「写真、その他、データメモリー等の持ち込み持ち出しは禁止されております」

「わかってるよ」

「ハッ！ 規則ですのー！」

「はい、ごくらうさま」

上官殿はエリート部隊特有の特権意識から来る傲慢さが無い礼儀正しい、それでいて気さくな方で、一人一人の兵に労いの言葉を掛けてリラックスさせて下さいます。

施設は既に放棄されているというのに異様なほど厳重な警備。少し型が古いですが戦車や武装ヘリまで即座に起動出来るよう待機しています。知り得ていた情報と目の当たりにする現状の食い違いに不審に思いながら、自分はガタガタと揺れる勾配を黙って眺めていました。

20分ほど車に揺られていると、やがて厚いコンクリートで覆われたトンネルに入りました。台形の形に山をブチ抜いて通した頑強な造りのトンネル内は橙色の灯りに照らされ、特殊車両十台以上が並走出来るほどに広く車線を取っており、直線に数百mを走り抜けると道は円を描くようになだらかな下り斜面へと移行し、そこからなんと12km近くも地下を走って ようやく目的地である最深部にまで到達しました。

辿り着いたそこは、鉄骨とパイプで補強された岩肌が覗く広大な地下空間。

見上げると天井が高い。頂点がほとんど霞んでいる。おそらく数千m以上あるでしょう。

その地下世界には首都が霞むような近未来的な高層ビル群が形成

され、浮遊する卵型の乗り物が整然とした道を高速で行き交っています。

ビルの膝下には緑多く花が咲き鳥が飛び、光の胞子のようなものが都市全体から浮かび上がっていました。

都市から離れた場所には掘削用の重機や建築用の建機が数百台以上も稼動し、開発を進めています。

これだけの大規模な都市計画にも関わらずなぜか人間は数えるほどしかおらず、機械が自動的にその役割を担っているようでした。

……ですが自分はそんなことよりも、異様な地下世界の一端に取り残された、ポツンと置かれた主無き小さな黒い椅子に何故か惹かれていました。

広大な地下都市を前にうっかりすると見落としてしまいそうな、ゴマ粒にも満たない小さなそれこそが『揺り籠』。

これが自分と『揺り籠』との出遭いで……再会でした。

「あれは……？」

天井から照射されるビームのような強烈な照明を浴び、揺り籠はそのシルエツトを浮かび上がらせていた。

椅子だ。奇妙な形の椅子。

でも、あれを見ているとどうしてか胸がザワついて落ち着かない。焦燥にも似た感覚。

「ようこそ、トシアキくん」

途方も無い世界観に圧倒され呆然としてみると、不意に車の窓をノックされた。驚いて反射的に窓の外を見ると、そこには 若き司令官殿のお姿があった。

まだ顔に傷も無い、日焼けする前で肌も白い、がっしりとした太い骨格、丈夫な軍服がはちきれんばかりの肉厚の筋肉、ピンと伸びた背筋、聡明なる深い蒼の瞳……自信に満ち満ちたやさぐれていない綺麗な司令官殿がそこには居た。

上官殿に促され車を降りた自分は、目の前に悠然と立つ御方の胸元に飾られた階級章を見て、即座に敬礼しました。

ざっ！

威風堂々と敬礼を返す司令官殿。やさぐれていません。

「よく来た。君にしか頼めない事案を抱えていてね、是非協力をお願いしたい」

遙かに年下で下つ端の自分に対し、司令官殿はまったく尊大な態度を見せず、穏やかなお顔で、両手を包み込むような握手をするフレンドリーっぷりでした。

証拠は完全に隠滅しましたが、部隊内での連続行方不明事件の関与をもしかして問いただされるんじゃないかとビクビクしていた自分はその優しいご尊顔を見て、大らかで温かな握手を受け、ふと緊張が弛緩していくのを感じました。

「ハッ！ 自分に出来ることでしたら何なりと御申し付け下さい！」

「トシアキくん。突然のことで驚くのも無理は無いだろっが、君は宇宙人なんだよ！」

「は……？」

「正確には宇宙人と人間の間の異種間交配によって誕生した、特別な生命体なんだ！」

「は……？」

自分は司令官殿が何をおっしゃているのか本気で解らず、思わず素の表情になっていました。

この人は何を言っているんでしょうか。

宇宙人とか……アニメの観過ぎじゃありませんか？

「さあ、その機械に寝そべってくれ。そのこのヘッド・マウント・ディスプレイを装着してくれたまえ。さあ！ さあ！ 早く！」

「ちょ……キモッ、寄らないで下さいッ！」

妙なテンションで詰め寄って来た司令官殿があまりおぞましかったので、自分は反射的に司令官殿の体を捌き、前倒しにしてから覆い被さるようにヘッドロックを極め、そのままリターンしておもいつきり車のフロントガラスに突っ込ませました。

ぐわっしゅんっ！！

「みぎやあああつ！！！！？」

「あ、やつちやつた……！」

顔中に破片が突き刺さった司令官殿が広大なホール全域に響くく  
らい絶叫して、地面を転げ回り、勢いあまって車の側面に頭をガン  
ツとぶつけました。

「うぎやあああ！？ あひいいいっ！！！！？」

思い出しました。

司令官殿の主な歴戦の傷は、このとき自分が付けたんでしたっけ。

「ちよっ、おまつ、何するだー！！？ 許さん！！！」

「すまません！ あんまり気持ち悪いからつい……！！！」

司令官殿の醜態を見た上官殿は急ぎ車から降り、自分の頬を何度  
も叩きました。

命が惜しいので、殴られながらも自分は素直に謝りました。

「やり過ぎだ！ 見ろっ、司令官殿のあの姿を！！！」

「ギイイイツ！！？ ギヒイイツ！！？」

顔を真っ赤にして捲くし立てる上官殿にグルリと首を回され、司  
令官殿の醜悪なお姿が眼に映ります。

「何と見苦しい……。す、直ぐに始末を……！！！」

「おい、君は何を言ってるんだ！？ ここは医者だろっ！！？」

「があああつ！！！！？ うぐぎいやああッ！！！！？」

「いい歳こいて宇宙人とか、どんだけだよ……、どんだけ……！」

この頃からでしょうか、自分が酷く宇宙人嫌いになったのは。

日々過酷な鍛錬を積み戦場を挑り所に生きるリアリストとしては、  
気狂いの妄想の産物なんか認められるワケないじゃないですか。

そりゃ、ピラミッドは超古代文明が生み出した遺物ですし、宇宙  
の果ては時間軸の反転した時空です。霊魂による未来予測もありま  
す。米国は911を自作自演し、テレビCMの全てにはサブリミナ  
ルが仕込まれ、我々が見ているこの世界は0と1が演出する電子の  
仮想世界で、この世の神は唯一ゼウスのみです。

ですが、だからと言って……宇宙人はないでしょう？

「よっこいしょ……ふう、とにかく落ち着いて下さい。ああ、なんかノド乾いたんで、甘くない、お茶か何か買って来て下さい」

「この張本人がひと事みたいに落ち着くなよ！ 降りろよっ！ 尻に敷いてる司令官殿の顔から降りろよっ！？」

「はい百円」

「聴けよ！？」

百円を放り投げると上官殿はそれをキャッチして、カードダスで既に二十枚ぐらいタブツってる糞カードを「またおまえかよ！」と地面に投げつけて踏みつけるような勢いで百円を投げ捨て、地団駄を踏みました。

「ぐはっ……ふはっ、ふはっ……と、トシアキよ……ゆ、『揺り籠』は、我らが別次元へと跳ぶ為の鍵だ」

「鍵？」

座っていた自分を押し退け、顔にびっしり刺さった硝子の破片を摘み取りながら、息を吹き返した司令官殿がそうおっしゃいました。しかし、歯医者診察台みたいな椅子とエイリアンヘッドのよくなフルフェイスのメットが鍵ですか？

司令官殿は明らかにオカシイ。

これは……もう一度フロント 硝子は割れて無いから、バックライト辺りに顔をダイブさせる必要があるのでは？ そう思ってジリジリ距離を詰めながら、一度指示を仰ごうと上官殿を横目に見ると、中指を立てて「死ねっ」という横柄な顔をされました。

「十五年以上前に我が国と韓 南半島との国境線付近に墜落した巨大な銀の円盤。その中から発見された人型をした奇妙な知的生命体は、我々の科学力を遥かに超越した外宇宙からの来訪者だった。彼らは不慮の事故があったのか、墜落以前に乗組員3人全員が死亡しており、椅子に括られたその小さな体はほとんど干乾びて、初めは何だか判らなかつたそうだ」

「……それが宇宙人だと？ もう、いやですねえ……。それはきつと某国の生物兵器ですよ」

「お前は黙って聴け！ ……どうぞ司令官殿！」

「ウム……。我々はその遺骸の1つからどうにか採取した精子を培養し、特に頭脳身体能力に秀でた女性兵士を母体として選別……ついに人工的に彼らとの混血児を造りだすことに成功した。それがキミなんだ！ そして『揺り籠』と名付けられたこの寝台は、その宇宙船から運び出した超科学の粋なのだよ！」

「……」

上官殿もさすがに付いていけなかったのか、少し引きつった笑みと乾いた拍手で司令官殿の演説を閉める。

何とも度し難い妄言だ。

このずっと後に聞くのですが、先んじて調査に臨んでいた韓国の先遣隊を武力で追っ払った際に、既に何か持ち去られた形跡があったそうなのですが、それが例の『グエムル』と繋がるのかは、まだ不明です。

司令官殿は治療の為、医務室へ連れて行かれ、自分は上官殿に命じられるまま揺り籠の研究スタッフと一緒に起動を試みました。

自分は言われた通りの手順で揺り籠を起動し、そして 知ってしまった。

この世界の恐るべき秘密を。

「ぶはあっ！！？ げほっ、げほっ……し、死ぬかと思ったあ！！」  
屋根のある家は久しぶりであまりに居心地が良く、いつの間にか自分はうつかり眠っていました。

寝たら死ぬ身体なのに……危うく永眠するところだった。

睡眠を取ると呼吸が停まってしまう自分はうたた寝も出来ません。なのでノアさんと別れソファに横になるとき、片手を挙げて眠らないように対策を施しました寝ましたけど。

横になるとき予め片腕を挙げて置くと、ウトウトしても腕がガクンと落ちて、それで意識を保つことが出来るのです寝ましたけど。

「はあ、はあ……」

胸を押さえて喘ぐ。

意識を集中することで停止しかけて心臓がギリギリのところまで再起動し、自分はどうにか一命を取りとめました。ですが生死に直結した呼吸器や循環系に供給電力が優先され、末端の手足はまだ痺れていて体を起こすのが精一杯です。

やれやれ……参りましたね……おや、ノアさんではないですか。ふむ、何やら様子が優れないようですが？

【信濃川ノア】

うむ……眠れん。

朝からいろいろあって一度は眠れたけど、目覚めてからはさっぱりだ。

眠れない理由は判っている……主にアレのことだろうな。

家中に殺人鬼匿っている戦慄の状況もさることながら、トシアキの言った『揺り籠』の存在がどうにも頭の片隅に引っ掛かって消えない。

今になってなぜアレが話題に上るのだろうか？

わたしは……あの椅子の存在は父さんの死後に初めて知った。

「はい……そうですね……。あの……いきなりの申し出ですし、少し考えさせて戴いてもよろしいでしょうか？」

「日本には二週間滞在する予定だ。それまでに行く末を決めなさい」  
父さんの四十九日を終えて少ししてから、母方のおじさんが一族を代表して家に訪ねて来た。不況の折り、まともな仕事も無く母子家庭で暮らすには経済的にキツイだろう、そう言って韓国へ移住するよう提案して来た。

葬式にも来なかつた親戚連中は正直嫌いだったけど、母さんの気持ちに区切りを付けるには悪くない提案だとわたしは思っていた。個人の好き嫌いは置いて、経済的に裕福なのは生活する上で安心出来る。



以前 母さんはお嬢様育ちだと言ったことがあるが、そのまま受け取っていい。

母さんの生家はかなりの資産家で、世界的にも名の通った優良企業を幾つも抱えるコンツェルンの一角に名を連ねている。そんな大変な金持ちなのだ。貧乏母娘の暮らしひとつくらい……どうとでもしてくれるだろうさ。

過去に、その実家の力の一端を垣間見れた……こんな話がある。

父さんが事故死した日を境に、偶然か必然か、親しかった父さんの同僚三人が次々と事故死するという怪死事件が起き、一時期、警察が動く騒ぎになっていた。

その報せを受けた母さんは、即座に家名を利用して韓国大使館を通じ警察機構に顔が利く大物政治家動かしたらしい。お陰でかなり綿密な捜査が行われたが、それでも他殺の線は無いと断定され、父さんと同僚の方々はそのまま事故死として処理された。

日本人との国際結婚に猛反発され、家出同然に韓国を離れた母さんは実家と半絶縁状態だった。それでも旦那の為だと頭を下げ、その御威光を笠に着てまで父さんの死因を調べたのは……どうしても父さんの死に納得出来ない理由があったんだと思う。

今にして思うけど、母さんはその借りのせいで韓国行きを断れなくなっただんじやないかなあ……。

とんとん拍子に移住を決めた一週間後、荷造りで大忙しのウチに、貸し倉庫の管理会社から滞納している倉庫の賃貸料金を支払って欲しいという内容の電話が来た と、父さんの同僚の奥さん 高橋さんからウチに電話が。

話によると、父さんは高橋さんを含めた同僚の三人とナイショで大きなコンテナを二つ借りていたらしく、全員が事故死してから支払いが遅延し、延滞料が結構な額になっていくとのこと。借り主は架空の会社名義で連絡先は電話を掛けて来た高橋さん宅となっていて、支払い義務は法律上高橋さんになるらしい。そんなもんだから、

事情をまったく知らない他の同僚の二家族には支払いの折半を断られてしまい、住宅ローンなどで金銭的に逼迫していた高橋さんは困り果て、最後の頼みとばかりにウチに連絡して来たらしい。

「ええ、わかりました」

共同で借りていたなら支払うべきだと、お人好しの母さん。いつだって即断即決だぜ。

コンテナ二つ分の大荷物を遺族でどう分けるか、またはどう処分するか決める為に、日時を決めて一緒に中の様子を見に行こうと母さんは高橋さんに提案した。

「いえ、本当に……支払って戴けるだけでこちらとしては……ええ、全てそちらで処分なさって下さい」

「はい……ではそのように計らいますが、でも……ご家族にとって大切な物もあるかも知れませんか？」

「いえ、結構です。全てそちら様にお任せします……」

電話越しの気弱なおばさんの声は、気弱を装いながらも厄介ごとを母さんに全部押し付けようという佞言ねいげんにしか聴こえて来なかった。少なくともわたしには。

わたしはそういうのが一等我慢できない。受話器をひったくつて「このクサレビッチが！」と怒鳴りつけ、中指立てながら電話を切る。

「ちょっと、ノア！」

ちよつとフリーダム過ぎるだろうと、母さんが目を吊り上げた。

「母さん、お人好し過ぎ！ そーいうの見ててちよつとイラツとくるよー！」

「高橋さんも旦那さんを亡くされて大変なのよ……電話を盗み聴きして一方的に悪く言うものじゃないわ」

「なにそれ！？ そんなのウチだって」

言い掛けて、わたしはハツと口を押さえた。

母さんが唇をキュツと噛み締めてポロポロ涙をこぼしていた。

「……ごめん」

父さんが死んで二ヶ月……母さんは未だに精神的に不安定な状態が続いて、日常のふとした拍子にこんな調子だ。

お人好しでばやんとしたけど、子供の前で泣くような母さんじゃなかった。

日本は父さんとの思い出が多過ぎる……韓国にだって逃げたくなくなるよ。

北朝鮮と日本は同盟関係にあり、韓国は中国と同盟関係にあり、日本は韓国と中国と友好関係にあり、そして北朝鮮と中国との間ではいまだに冷戦が続いている。

海に囲まれた島国という地形的有利に護られた日和見的な気質の日本は、交戦状態から冷戦状態になるまで20年近く戦争を続けている両国間を相手にのらりくらりと外交を続け、平和を維持し続けて来た。

父さんと母さんが結ばれたのはそんな渦中であり、北朝鮮と中国の長期に亘る情勢不安に際し警戒が厳しくなり、昔ほど日韓の行き来が楽では無くなった昨今、出国の際にはテロや銃器の持ち込みを警戒して厳重な審査を受ける必要があり、それは戻る事が困難であることも示していた。

「おいおい審査オール・スルーだよ、母さんの実家どんだけ権力あるの?」

困難である……そんな風に考えていた時期がわたしにもありました。

わたしと母さんは出国までの一時間をVIPラウンジで優雅に過ごし、時間になると挨拶に来た機長に先導され（御年配の……しかも機長が荷物まで持ってくれてるよ）ながら、ターミナルの外れにあるVIPロードを通って飛行機まで赴く。空港には自動小銃を携行する軍人の姿がちらほら見え、旅行者に眼を光らせているらしいけど、ウチらはそんなの一切目にすることなくスルッと裏の廊下を通った。

耳障りじゃない程度の音量で穏やかな音楽が流れ、ガラスケースに収まった見事な調度品などが並ぶ清潔でチリ一つ見当たらない廊下を進むと、背広を少し着崩した感じの20代半ばくらいの青年が通路の先の出口を塞ぐように立っていた。

「スнкуウ……」

「お久しぶりです姉さん」

母さんにスнкуウと呼ばれた青年は親しい間柄らしく、母さんを見ると怜悧で冷たそうな印象であった面をパツと輝かせ抱擁して来た。

「スнкуウ、この子がわたしの娘で、ノアよ。信濃川ノア」

「ノアさん、韓国まで短い旅ですがよろしく」

「はい……お世話になります」

握手を求められて来たので応じる。

わたしとて狂犬じゃない。トシアキじゃない。親戚連中が気に食わないからといって理由も無く襲い掛かったり切り刻んだりはしない。

「義兄さんのお葬式に出席出来ず本当に申し訳ありませんでした。

どうか許して下さい」

「そちらもご多忙でしょうし、わたしは気にしておりません」

「そうですね……若いのにしっかりしてらっしゃる。安心しました」

多忙だからとて身内の葬式に出れねえわけねえだろうが、刻むぞ

ゴラア……などど内心思いつつも十代乙女相応の笑顔。

韓国行きを”勧告”に来た母さんの兄である『サンス』伯父は、体が大きくて強面で相手に有無を言わせぬ迫力があつたが、こつちのスнкуウ叔父は今どきの若者といった雰囲気だ。狐みたいな感じ。決して礼儀知らずというわけじゃなさそうだけど、砕けていると言つてもいい。

ぶつちやけ膝なり頭蓋なり砕いてやりたいところなんだけどね。

「ノア、殺気殺気！」

「あ……出てた？」

わたしの本性をある程度知っている母さんが、漏れ出でた殺気を鎮めようと、背後に立ってお尻を撫でて来た。

なぜに尻を撫でるのは謎だった。

どうにも気恥ずかしいので視線をさまよわせると、スнкуウが名状し難い生暖かい眼で親子の奇妙な触れ合いを眺めてた。

目を逸らせば母娘のスキンシップに色っぽい想像を掻き立てたということになり、逸らさないなら逸らさないでどう反応すればいいか困る。だからスнкуウは、4様のような無我の境地に没入したみたいなきみを浮かべる以外に無かったのだろう。あ、優雅に手を振っておられる。

「コホン！ そろそろ搭乗しましょうか……？」

「ええ、そうね」

ごまかすように咳払いして謎の空気をうやむやにしようとするスнкуウ。なんだか少し顔が赤い。

見た目ちよつと遊び人風で、わたしとはたぶん倍くらい歳離れた大人だけど、結構カワイイ人なのかも知れない。そう思うとちよつぱり殺意が治まる。

「ねえ、母さんは何でわたしのお尻触ったの？」

内容がちよつとアレなので周りに聴かれないよう小声で尋ねると、母さんは小声で「パパの代わり」と返し、優しい顔でニンマリ笑った。

「えー？ 父さんデブいじゃん！ デカツ尻じゃん！」

「母さんの尻を見る目に間違いはないわ。ノアはいいお尻よ……うらまやしい」

弁当に、レンジでチンしただけの添加物と中国野菜たっぷりのお肉入クズ肉合挽き冷凍モノ出来合いハンバーグ詰めて来たことを歌い踊ってまでして狂喜する家庭の事情が透けて見える涙を誘うくらい親の愛がまったく感じられない虐待すら懸念されるみじめで哀れで同情されるべき学友を羨望するかのようにつつた母さんの眼がキラリと光る。

尻の余韻を確かめるように手をワキワキさせながら何を言うかなこの親。

「評価の最高基準が父さんと知らされたあとじゃ、褒められても悪口言われてるようにしか思えないよ……」

親子の情を打ち捨て冷徹なる乙女の審美眼に従い判断するならば父さんはデブです。

やや太りです。

ああでも、ハンサムなだけの人よりは魅力的だとは思っけどね（一応フォロー）。

「あの、そろそろ……」

「すいません。いま行きます」

フライトの準備に当たるということで機長から荷を受け取ったスルクウが本当に困っているような顔をしていたので、わたしは母さんの手を引いて急ぎ廊下の出口へ。分岐路の右通路から非常口を出てファーストクラス的一般客と合流し、いっしょに飛行機の搭乗口へと向かう。

「ねえ、スルクウさんってさ、母さんとどんな知り合い？ 弟だったの？」

「それは話の中で聞いたけど」

「とても真面目ない子よ。お父様が連れて来て養子縁組で家に入った子だから直接の血の繋がりはないのだけど、母さんとよく遊んだわ」

「ふーん」

どつりで、スルクウからは親戚連中から漂う差別的な嫌な臭いがあんまりしないわけだ。

格好はあまり褒められたものじゃないけどスルクウ叔父は、時代に逆行して、今どき血筋や家柄で他人を見比べる連中と一線を画すのだろう。

……と、思いたいわたしがいる。

敵知らずの無頼者とはいえ所詮は女子中学生だし、環境の変化にや少々ナーバス気味だよ。

韓国に旅立つ三日前、わたしと母さんと車を出してくれたサンス伯父の三人で例のコンテナの荷物を下見に行った。

軽い物ならそのまま車で持って行く予定だったけど、詳しく調べるところに、ちよつと車で運べる量じゃないということが判明。状況を説明するとサンス伯父に提案され、わたしは携帯電話でコンテナの内容物を詳細に撮影することになった。

撮影した何枚かの写真データを運送業者に送り、折り返し掛かってきた電話からデータを元に算出された大体の料金を聞き、母さんのOKが出ると、サンス伯父に頼んで韓国への船便を手配して貰う。航空機じゃさすがに無理な積載量っぽいので船で運ぶことにしたのだ。

「おうおう、こりやまた大層なご趣味で」

撮影が終わったあと、二階コンテナ内に山積みされた荷物を念の為にリストとして書き出しながら、わたしはつい独りごちた。

高をくくっていたが、コンテナの中から出るわ出るわの電算電脳電子の世界。

奇怪な機械のお宝箱。

ギミック満載の天蓋付き黒革張りの椅子、マンションの一棟や二棟賄えそうなくらい大容量の発電機、その電力を通す運動会の綱みために太いモンスターケーブル五本、メーカーロゴや型番が見当たらない見た事も無い型の大型サーバーが三基、最新式のノートパソコン六台（限界スペックまで改造済み）、剥き出しのハードディスクやUSBメモリなどの記憶媒体が多数……etc。仕舞いにゃ、設定温度を零下まで下げられるよう改良した空調まで取り付けられていた。ずっと空転していたらしく動力が完全に焼き付いていて使い物にないみたいだったけど……これはさすがに処分だな。

つーか、借り物のコンテナに穴あけたりボルト留めしたりしていいの？

弁償代大丈夫かなあ……。

「ねえ、父さん……ここで何をしていたの？」

コンテナは、外から見るとより奥行きがあつて結構な広さだったが、それでも足の踏み場も身の置き場所も無いくらい機械が詰まっている。

まるでコンテナをPCケースに見立ててパソコンを組んだようだ。電源、ファン、ハードディスク、メモリー、マザーボード　思い返せば必要最低限の物はほぼ揃っている。

電源は下のコンテナに、ファンは空調機、ハードディスクは三基のサーバー、肝心のメモリーやマザーボード……それは消去法からして、あの大きな椅子が担っているんじゃないだろうか？　外見からはとても想像も付かないけど……ま、子供のわたしが考えても仕方がないか。

リストを確認して問題が無いと判断すると、わたしは扉からひよいと顔を出し、調査がちゃんと終わったことを下界の母さんに伝える。

「ノアー、母さんも行くかうかー！」

「駄目！　母さんは絶対に無理だから！　もう終わったからいいの！　おとなしくしていて！」

上段のコンテナに上がる方法は、中世時代の攻城戦に使うような四輪で移動する鉄の階段を利用する。手押しで重いし、折りたたみ式で不安定だから揺れるし、階段の一段がめっちゃ高くおまけに幅狭いし、海風強いし、下手な絶叫マシーンより怖いくらいで、はつきり言つて運痴の母さんをここに上げるのは”不可能”だった。

「ほいつ、到着！」

わたしは恐怖の階段を危なげなく一足飛びに下りて、最後にサンズ伯父の手を借りて地表に戻つて来た。

「あ……ど、どうも……ありがとうございます」

「ああ、ご苦労だったな」

あまりに自然なエスコートだったので、つい手を伸ばしてしまつた。



迂闊……っ！！

サンス伯父め……かなり女性慣れしているのか、手を取る仕草に大人の余裕が窺えた。

わたしとて無法者じゃない。トシアキじゃない。手を借りたのならちゃんと礼くらいは言う。

たとえ蛇蝎のごとく嫌ってしようともだ。

飛行機でまで呉越同舟しないことが唯一の救いだよ。替わりにスンクウ来たけど。

しっかしすごい荷物だった。起業か秘密結社結成でも企んでたんじゃないかってくらいの実した設備。

まあ後者はありえないだろうけど、そんなくらい最先端科学の粋ってことで。

情緒不安定な母さんが本能的に美人のおすましフライト・アテンダントさんの尻を触り、ホテルの部屋番ルージュでメモったキスマーク付きのカードを恥ずかしそうにソツと手渡される以外は万事つつがなく飛行機の旅は進み、わたしはついに韓国へと降り立ったのだ。

来たよ韓国のソウル！

焼肉！ ナムル！ キムチ！ パクリとレッドカラーの辛い国！  
母の祖国をわりと知らないわたしは、いつ唐辛子壺を抱えた賊に強襲されるのかと周囲を警戒していた。

だがそんなものは来なかった。替わりにと言っではなんだが、空港のロビーでテコンドー使いが賭け事の参加者を募っていた。

なんだ、あのキム・カツファンは。

空港であんな大道芸していいのかな？

人山の中央で大仰に演説するキム。韓国語だから話の内容はよくわからないけど、見た目から判断するに、どうやら一般から挑戦者を募るストリートファイトのようで、アシスタント役の少年がオッズ表を看板に貼り付けて歩き回り、熱気溢れる群集は怒声のような

叫び声を上げ、握り締めた札束を振りながら賭けに興じている。

「ペーラペラペラ、ペラペーラ！ ペラペラプロペラ！」

「母さん、あれは何て言ってるの？」

「さて、何と言っているでしょう？」

韓国語を覚える勉強だからと言って、もったいぶって答えを教えたくない母さん。

そもそもペラペラって何だよ。英語かよ。

あれでムツカシイ異国語を表現してるのかよ。

漫画でだって今どきそんなことしないぞ。

「お姉さま……」

しかも何か付いて来てるぞ……で、さっき尻撫でた美人のお姉さんじゃん！？ 業務どうしたよ！？

柱の陰からうつとりと母さんに熱視線を送る『キマシタワー（女性同士が友情を超えた深い関係を結ぶ または匂わせる行為を揶揄した造語。発言の際には頬に手を当て目を輝かせるのが一般的な構えとされている。使用に当たっては公式ホームページに掲載されている数百項目の厳正なルールを熟読し熟知し熟慮した上で行使し、結果、対象を精神的に傷付ける または仲違いを誘発する またはそれらに準じる違法行為に発展すれば厳罰に処されるので注意が必要である）』にわたしは戦慄した。

「ん？ どうしたの？」

「あれあれ……」

母さんの腕を取って素早く死角に引つ張り込み、柱の陰からこっそりお姉さんの居た方を指差す……と、既に誰も居なかった。

こわっ!？

「姉さん、ノアさん、待って下さい！」

さすが厳しい訓練を受けたフライト・アテンダントだ侮れないぜと恐怖に心底震えていると、直線に流れるエスカレーターを走ってスंकウが両手両脇に大荷物抱えて来た。

わたしと母さん手ブラ。

「ごめん忘れてた！」

「ひどいですよ！ 荷物まで放っておいて！」  
スルクウ涙目。

いい歳こいた大人が息せき切らせながら本気で涙目。

機内でウトウトしてたらコンテナでの一件と個性強いサンス伯父の夢見ちゃったから、降りる頃には陰の薄い方の存在をすっかり失念していた。さすがのわたしも悪かったと思う。

「いやー、本当に悪かったよ。お詫びにキムチあげるよ」

「要りませんよ……というかノアさん。何で韓国来るのにわざわざ日本からキムチの瓶詰め持って来てるんですか？ しかも八瓶も！ どうりで荷物が重たいわけだ！」

「え……そりゃ、わたしがキムチ好きだからだけど？」

「……ノアさん、ここは韓国ですよ！ 言うなればキムチの国！  
ここでは韓国を『韓国』と読む人だっているくらいです！ 韓国人を人体練成したら、成分の六割はキムチで賄えるくらいキムチを常食する民族なんです！ キムチなんて下着売り場でだって買えますよ！ わざわざ国外から持ち込まなくても、ここで買えば済むですよー！」

「下着売……そ、そう？ でもさ、こっちにお気入りの瓶が無かったら、ちよつと困るかなーって……」

わたしが気圧されるくらい、あの大人しかったスルクウが熱くなっている。

韓国人の彼にとって、キムチとはそんなに大切なものなのだろうか？

でも真理に囚われた弟とか市販のキムチで大体呼び戻せるのか。ある意味便利だな。

「持ってかれたあー！？ でも大丈夫！ キムチあるから！」  
即座にアル・キムチが復活するぜ。

「さあ……ノア、ちゃんとスルクウ叔父さんにあやまりなさい」  
「ごめん」

真剣な顔の母さんが肩をポンと叩いてうながしたので、わたしは素直に頭を下げた。

元韓国人の母さんは同郷の者として通じるものがあるのだろう、スンクウ叔父の言葉は至極当然のことだと言う。

やってけっかなあ……この国で。

## パク・サンス

### 【パク・サンス】

韓国には、電子産業で世界的に名を馳せる『ソン家』を頂点とした、ピラミッド構造の組織形態を採る一大グループが存在し、我がパク家はその三角形の二層目 有名氏族七家の一つとして数えられ、近年はアジアのみならず西洋列強を相手に急速に台頭を始めている一族だ。

半世紀前まではただの一商社でしかなかったパク家が上場企業にまでのし上がり、いまだ飽くことなく邁進を続けられるには 理由がある。それはパク家の血筋が、ごく稀に傑出した天才を生み出す選ばれた血統であるからだ。

現会長であり俺の祖父でもある『パク・イギョク』。

彼こそが、たった独りでパク家の隆盛時代を築き上げた不世出の天才。

ソン家に認められるまでの祖父は周囲から変人呼ばわりされ、兄弟の中ですら一番の不出来と誹られていた。そんな評価では当然家業を継げるはずもなく、祖父は中学卒業と同時に早々にパク家に見切りを付け、一介の技術屋として単身ソン・グループの末端に召抱えられた。

天才エンジニアとして海外紙面にも飾られた祖父は組織の中で瞬く間に頭角を現し、ついには七家筆頭であった『テイ家』までも叩き落とし 凡人ゆえに天才を理解できなかつた愚昧なる一族兄弟どもをその傘下に収めた。

たった独りの天才が組織を根底から変える。

祖父は、いまだ韓国企業に根付く世襲制や親族経営などの悪習を逆手に取り、社のトップであった親兄弟を実験台に逸早く実力主義を取り入れ、ソン・グループの中でも驚くべき業績を残した。

枕元で父から英雄譚のごとく聞かされて来た祖父イギョクの偉業

の数々は俺にとって憧れであった。

神仏のごとく信仰し、神聖視していたと言ってもいい。

高校卒業後、俺は祖父に倣って单身外の世界へと飛び出した。

留学先のイェール大では先進的な経済学を学び、首席のまま卒業した。

カレッジ・フットボールでは州代表に選ばれ、優秀選手としてメダルまで授与された。

全てが俺の思い通りで、自分の足跡をなぞるようにノロノロ歩いてくる凡人のクズどもに得も知れぬ優越感を感じていた。

自分こそが祖父の偉業を継ぐべき次代の天才だと信じて疑わなかった。

帰国するまでは。

彼女に会うまでは。

本物の天才という化け物に遭うまでは、そう思っていた。

帰国後、俺はパク家の重要ポストに選任されるまでのテスト期間として、手始めに広告会社を1つ任された。与えられた会社はパク家系列の社員三十名から成る中小クラス。

……小物ならばここで、あまりに規模が小さいと腹の1つでも立てるだろうが、祖父に全幅の信頼を寄せる俺にとっては心地の良い試練でしかなかった。

見込まれているからこそ試されているのだ。

優秀だからこそハードルが高く険しいのだ。

自分で言うのもなんだが、俺は兄弟の中でも能力が特に突出していると自負している。祖父の右腕になるのは自分しか居ないと確信している。

だからのんきに一年も棒に振ったのだ。

「あるえ？」

代表に就任してから数カ月……特に仕事もなく窓際で時間を潰す日々が続いた。

オフィスを見回せば、箸にも棒にもかからぬ下賤な輩が思い思いに好き勝手にしている。一度厳しく怒鳴りつけてやったが、翌日から仕事をボイコットされ、管理責任を問われることを恐れた俺はそれを黙認するようになっていた。

欠伸を噛み締めることもなく大口を開ける不真面目な社員。

パソコンでエロ画像見てるメガネ。

ネイルを手入れする化粧過剰な女性社員。

やたら音がうるさいリース期間ギリギリのエアコン。

心のどこかでは……心のどこかでは「おかしいな」とは思っていた。

この状況を。この不遇を。

あれ？ 俺ひよつとして飼いや殺されてね？

いやでも……俺は天才だし、そんなことはありえん……と、自称

天才のアミバのように無意味な理屈で自分を過大評価し続けていた。

心折れるまで一年も。一年だぞおい！？

パク家は親族経営も世襲制も踏襲しない。

ただ能力のある者だけを取り立てる。

俺は勘違いしていたのだ。

真の天才である祖父は、俺程度の秀才など目の端にすら入れていないということを知らなかったのだ。

栄転の辞令を待ち焦がれ一年、精神的に限界を迎えた俺は、ついに祖父の屋敷まで乗り込んで直談判に打って出た。

自己顕示欲の塊だが過度の自己アピールを好しとしない面倒な二面性を持つ俺にとって、それは苦渋の大決心だった。

こんな恥知らずな……無能者どもと同じような行動に出るなど屈辱以外の何者でもない。だがどれほど厚顔と罵られようと、浪費した一年に懸けて、是が非でも相応しいポストを用意して貰うつもりだ。

俺にはその実力も資格もある。

俺は天才だ。俺は強い。

「だーめ！」

意気込んで屋敷に訪れるも、黒服のゴツイセキュリティからインターフェイス越しに手でパッテンされ、俺は門前払いを食らった。「親戚です！ 孫です！ 天才です！」

電車で四時間も掛けて来たからには引くに引けない。

俺はピンポンを連打し、門をガチャガチャ揺らし、とにかくしつこく食い下がった。

六時間後。

「ハア、ハア……くそ！！」

巨大な鉄扉の前で喚き散らし、空に茜が掛かるまで粘ったが、とうとう相手にもされなくなり、このままではただ時間を無駄にするだけだと俺は早々に判断した。

押して駄目なら引いてみよ。

単純な力押しは無能な凡人の専売特許だ。

天才は物事を深く思索する。そして無理だと判断した。だからとりあえず帰る。

さてどうやって祖父と会おうか……そんな風に思い悩みながらとぼとぼ公園を歩いていると、偶然にも散歩中の祖父と遭遇。犬連れ  
てる。

俺は天才なのでとっさに木の陰に隠れる。

これぞ天の配剤か……？

全域を巡るように小川が流れ、各種球技場まで敷設された広大な森林公園で、目当ての人と遭遇するなど偶然とは思えない。今の今まで虫ケラのような連中と会社で軟禁されていたのが嘘の様な幸運。まさに天恵。神は俺に天を掴むべきだとおっしゃっておられる。

祖父は池に架かった橋を横断する途中で、幸いにも俺が潜む林の近くを通るようだ。

俺は息を潜めタイミングを見計らい……祖父が近くに来るのをジツと待ち続けた。



「ハアハア……」

「やだ、あのひと怖い！」

「こんな夕暮れどきに変態かな……関わらない方がいいよ」

ベンチに座ってイチャついていた凡庸なるカップルが、まるで変質者でも見るかのようにこちらをチラチラ窺っている。

「チツ！」

隠れているので大声を上げるわけにもいかない。

俺は急ぎ上着を脱いで上半身裸になり、フットボールで鍛えた隆々たる筋肉をこれでもかと披露して追い払う。

「そ……そろそろ行こうか！ 早く！」

「うん！」

横胸を強調するサイド・チェストのポージングで大胸筋をピクピク動かすと、カップルはギョッして、手を取って小走りにその場から逃げて行った。

馬鹿め！ 俺は天才だ！

視界から消え失せた愚物どもを蔑むように鼻を鳴らし、再び祖父が来るのを待ち構える。

緊張の時。

一秒が長く感じられる。

鼓動が早くなり自然と息が荒くなる。

そして時は訪れた。

「あのっ！」

祖父が通りかかる直前 俺は茂みを掻き分けて飛び出した。

「わうわうわうー！」

「ぬおっ!？」

飛び出したはいいが、祖父が連れていたデカイ犬から激しく吠え立てられた。

仲間には優しいが外敵には鬼のように接するグレート・デーンは、まるで上半身裸の不審者から主人を護るようはこちらを牽制し、リードを引き千切らんばかりに威嚇して来る。

「やめろ！ 止せ！」

犬の分際で何を吠えている。

こっちはただの天才だというのに。

「……ほら、大丈夫。怖くないから」

俺は慈愛に満ちた曇り無き眼で、ゆっくりとデーン（犬）に歩み寄る。

口元に柔らかな微笑を湛え、敵意が無いことを示すようにソツと指を差し出す。腕ごとガブリといかれた。

「怯 うぎゃあああつ!?」

大型犬の強靱な牙が腕の肉を貫通して骨を削り、俺はとんでもない激痛に悲鳴を上げた。

「ああ……なんてことを！ こらっ、ツア！ 人様を咬んでは駄目だろう！」

「ツア！」

「いたいいたい!!」

祖父は唸り声を上げるツアの頭をペシッと叩き、耳穴にプツと息を吹き込み、大慌てで口を離させた。

「うあ！ いたたた！ ひいいいっ!!」

どうにか解放されたが、腕がちよつとえらいことになっていた。

動物にマジ咬みされるなんて初めての経験で、恐怖のあまり全身が震え上がっていた。

クソ……所詮は動物だなんて侮ったのが間違いだった。

風の谷の少女のように、動物なんか簡単にたらし込めると思って真似てみたが大失敗。

野郎め、いきなり肉を貫いて骨を断ちに来やがった。

天才が下手に出ていれば、この畜生風情め、調子にのりやがって……。

「おお……可哀想に、こんなに怯えてしまつて」

「キイツ！」

恐怖のあまり完全に我をを失っていた俺は、差し出された祖父の

手に噛み付いた。

憎悪にまかせ力の限り歯を立てる。

「ほら、怖くない……怯えていたんですね？」

頬に触れる温かな手によって俺はハッと正気を取り戻した。

あれ？ いつの間にか犬と立場が変わっているような……？

祖父は噛まれた痛みなどオクビにも出さず、手の温もりと同じ温かな微笑みを掛けてくださった。

咬まれた腕を水道で洗い、俺は改めて祖父との邂逅を果たす。

ベージュ暖色系の正装を上品に着こなす、少年のように小柄な老人は、犬の首筋を擦るように撫でて落ち着かせると俺に向き直り

パナマ帽を取ってから深く一礼した。

「私の友が不躰をして大変申しありません。大事はありませんか？」

咬まれた傷はどー見ても重大事以外の何者でもないが、それをこらえてでも俺には為すべきことがあった。

「……いえ問題ありません。それよりも……少しお話をさせて戴いてよろしいでしょうか？」

「ええ、まあ。多忙ですのであまり時間は取れませんが。それでよろしいのなら」

「ありがとうございます」

久方ぶりに見た祖父は、いまだ老齡を感じさせない優雅な佇まいであった。

銀縁眼鏡の奥に見える涼風のような瞳には気品が溢れ、良く整った顔には若干の皺が浮かぶものの、張り艶が充分窺えるほどに若々しい。

「では、あの……」

「はい、何でしょう？」

「え……あ……その」

祖父との出会いは果たした。だが緊張して言葉にならない。

背筋がピンと伸びる。

人嫌いで有名な祖父は親族間でも滅多に交流を持たない。

だが十年ぶりに逢う祖父は、最後に見たときと変わらぬ美しい男ひとで、変な話だが仄かな色香すら感じさせる……気がするのだ。

「あー、えーっとー……」

「……？」

どうしても話を切り出さないと、祖父は笑みを絶やさぬまま少し首を傾げた。

早く話すべきだとはわかっている。だが無理もないのだ。

偉大過ぎる祖父を目の前にして、天才ともあるう者が竦んでいる。頭が真っ白になり、二の句どころか一の句すら出てこない。

「うー！」

裸身を晒しながら呻く怪しさMAXの大男に対し、主の足許で大人しく伏せていたツアが鎌首をもたげ始めた。

咬まれた傷痕が痛み、毛穴という毛穴から冷や汗が一気に噴き出た。

「……か、会長！ 俺は……いや、私はサンスです！ 孫のパク・サンスです！」

「ああ……ええ、そうですねえ」

俺のテンパった態度とは対照的に、祖父はとても穏やかに目を細めた。

俺のこと……孫だと覚えていてくれたようだ。

ではなぜ慇懃な……親族に他人行儀な態度を取られるのか？

奇妙な違和感を感じ、同時にとてつもない不安に駆られる。

だがここで後退するくらいなら天才を名乗りはしない。

「帰国後のご挨拶が遅くなり申し訳ありません。留学先の”イエール”を”首席”で卒業し、現在では広告会社の取締役を務めさせて戴いております、パク・サンスでございます！」

「ああ……ひょっとして、貴方はそれをわざわざ言いに来てくれたのですか？ こちらこそすみませんねえ……もう歳で、人と会うのが億劫になってしまってます」

心配など杞憂ですよとばかりに、祖父は俺の言葉に紳士に耳を傾けている。

いける！！

そう確信した俺は、一気呵成に成功への口火を切った。

「会長、ご無礼を承知で提言させて戴きます！ 私は世界でも指折りの”有名大学”を”首席”で卒業し、多くの資格を修め、”パク家直系”でもあり、貴方にとって非常に”有益”な人材のはずです！ それなのになぜ、なぜ……あのような僻地で飼い殺しにするような真似をするのですか！？」

アピール出来そうな単語は特に語気を強め、俺は一年の鬱憤を晴らすのごとく一息に喋り尽くした。

して祖父は、

「はあ……有益……ですか？」

「はい！」

やや困惑気味に言葉を濁し、一度視線を左右に揺らした。

「私が……貴方を飼い殺しにしたと？」

「言葉が過ぎたのは謝ります。ですが一年の時間を費やし、私はそのような感じております！！」

「おかしいなあ……確か同条件でも天才のはずなら……ああ、いやでも、男だから仕方なかったのかなあ……？」

感情のままに喋って息を荒げる俺を尻目に、祖父は何やらブツブツと独り言を始めた。

顎先をさすりながら俯き加減で二歩、三歩と歩き、立ち止まり顔を上げると　こう言った。

「あの、申し訳ありません。とても残念ですが、貴方は有益にはほど遠い存在だと思えます。だって貴方　」

やめる。その先を言うな。

願うように、祈るように、すがりつくように、目を背けひたすら否定して来たその言葉を……神である貴方の口から言うな。

「普通ですから」

「う、うわあああああつ！！！！？」

堅牢に護られて来たプライドが紙切れのようにズダズダに引き裂かれた瞬間、俺は自我を失い、自分でも信じられないような絶叫を上げていた。

目の前が真っ赤に染まり、凶暴な何かが胸の奥から湧き上がり、俺は祖父に掴み掛かっていた。

ガサッ

茂みが大きな音を立て、反射的に振り返ると、その刹那 凄まじい衝撃によって顔が弾け飛んだ。

「ぐはっ！？」

破裂したかのような衝撃に首が擦れ、体が横転する。

目の前で盛大に火花が散った。

俺に不意打ちを仕掛け、祖父を護るように素早く立ち塞がった者は、学生服の まだ年端もいかぬ少年であった。

「なんだ……お前は！？」

男女の境を見失うほどに美しくも凜々しい面の少年は、祖父とそう変わらぬ体格で、ただの蹴りの一撃で、大柄の俺を弾き飛ばした。

跳び蹴り……！？

ジンジンと疼く頬が赤く腫れ上がり、目の前で閃光が明滅している。

今のはただの子供の蹴りではない。

何らかの闘技を十分に修めた者の蹴り……おそらくはテコンドー。

「やあスンクウ」

「おじいさま、ご無事ですか！」

「うん」

「スンクウ……？」

祖父は俺のことなど眼中にない様子で、『スンクウ』 後に弟

と知る、見るからに利発そうな少年の頭を優しく撫でた。

「会長……」

必死に立ち上がろうとしたが、力が抜けたように体が横に流れ、

かろうじて手を着く。

立てない……蹴りが効いている。

俺が子供にKOされた？

あんな中学生くらいの子供に……？

「おや、まだ居たのですか？ 困りましたねえ」

「か、会長……会長……、俺は……！！」

地平に消えゆく夕焼けの鮮烈な残照を背にした祖父の 穏やかな口調から紡がれる辛辣な物言いが、再び胸を抉った。

「うああ……会長おおツツ！！」

足が利かない。腹這いでズリズリと近付く。無我夢中だった。

まるで虫ケラ。

手足を？がれ、死にかけ足掻く、嫌悪すべきもの それは正に今の自分そのものだった。

「俺にチャンスを！ 天才じゃないかも知れませんが！！ どうか

……お願いします！！」

天才ではない。

自分で口にしたその事実を、言ったあとに初めて気付く。

胸にポツカリ空いた喪失感拭えない……が、それでも俺は必要とされたい。

祖父に、パク家に、全ての人間に、なくてはならない大切な人と  
言われたい！！

「すみませんが親族は特別厳しく評価する方針なんです。場末で一年も惰眠を貪るような不出来な子に役職を振るなんて、一族の長として到底出来ませんよ。グループの今後に関わる。それにもう次期代表は決まっていますのですよ？」

「それは誰なんですか！？ ま、まさか、その子供とは言いませんよね！」

「ええ。スнкуウはあくまで保険です。天性の才覚はあるでしょうが、あの子と比べるにはとてもとても……」

「では、その次期代表とは……？」

「『ジウ』です」

祖父から告げられた名前は 『パク・ジウ』。  
パク家四女のお転婆娘。チビで馬鹿で遊んでばかりいた……俺の  
実妹。

ボクツとしながら日々を無駄に過ごす能天気な妹の醜態を横目に、  
道を先んじていると優越感を感じていたのは一度二度ではない。

天才の眼からすれば何か特別なモノを持っているのかも知れない  
が、だが性質の悪い冗談だ。

女の身で一族代表など務まるはずがない。

「会長、冗談を言っておられるのですか？ ジウは……妹ですよ？」

「ええ、そうですね」

「ハハ……だって女じゃないですか」

そう言つて、自分の中の卑しい衝動が大きく膨らんだ。

もはや処理し切れないコンプレックスの黒い波が止め処なく押し  
寄せ、俺を醜悪なモノへと変えてしまっていた。

祖父はそんな俺を見て、初めて瞳にはつきりとした侮蔑の色を宿  
した。

それを見た俺は、驚くと同時に笑っていた。

天才だつて気分を害するのだ。俺がそうさせた。

腹の底がにわかに熱を持ち、下衆な優越感が湧き上がる。

自分を維持するだけで必死な俺は、そんな自分の姿がまるで見え  
ていない。

「韓国は縦割りの男尊女卑の社会です。昔ほど表立つてはいないが、  
今も女性蔑視、女性差別が因習として根付いている。わたしも”体  
験者”としてその流れは根底から変えたいと切に願っているのです  
ですから、それは敢えて口を挟みません。ですが……妹を貶めるの  
はやめなさい。家長として命じます」

「……あ、はい……」

語気を荒げたわけでも、凄んだわけでもないのに、体を強く押さ



れたような感覚に俺は恐怖した。

権力者である祖父の機嫌を損ねれば身内だろうと無事に済むわけがない。

強大な組織はそれを維持するため、例外なく裏で暴力に通じている。それがソンの家の屋台骨ともなれば……今更、ほんとうに今更だが、俺はガタガタ震えながら後悔する。

「……そう怯えないください。今回の件は私にも少なからず非があったでしょう。説明もなしにジウにパク家を委ねると言って、それを急に理解しろというのは無茶な要求でした。申しわけありません」

「……いえ。こちらこそ言葉が過ぎました。申し訳ないです……」

祖父が圧力を解いてくれたお陰で、俺は肩を抱きながらどうにか返事できた。

途端、全身から脂汗がブワツと噴き出た。

汗で衣服が張り付き、まだ体が小刻みに震えている。

「……パク家の血統には途方もない天才を生み出す因子があります。歴史的偉人となり得るような、歴史的殺戮者となり得るような、大衆が求心してやまぬ、恒星も光すらも呑み込む？洞のような、強烈なカリスマ性を備えた者が誕生する一族です。しかしそれは女兒にのみ限られてしまう。いつ如何なる時も例外なく」

「そんな……だって会長は男性ではありませんか!!」

そうだ。

祖父は俺の父の父であり、どこをどう見ても男性なのは疑いようもない事実だ。

そして完全なる天才だ。俺と違って……天才なんだ。

「私が男性であるなどと、そんなこと誰が言いました?」

「え……? それは父が……貴方を父と呼んでいましたから……そうだと思います」

父＝男性。それは世界共通の常識だ。

祖父は表情を変えぬまま溜め息を漏らし、帽子を被り直しながら

一歩近付いて、

「秀才らしかぬ発想ですね。既成の事柄に囚われ疑いもなくそれに追従するなど。普通の方はそれが一般的なのでしょうが？」

「ぐっ！！ ですが、貴方は俺の祖父です！」

「いえ、私は女です。見た目から判断は付き難いでしょうが。半陰陽の奇形。おそましき両性具有……古く神話ではアンドロギュノスと呼ばれていた染色体XX型、そして貴方の父を出産した母でもある」

「……」

言葉が……言葉が出なかった。

驚き過ぎて呼吸すら止まりそうだ。

あまりに突飛な話だと理解しているが、それを否定しようにも祖父の言葉は確固たるもので揺ぎ無い。

祖父が祖母だったなどと誰が信じる。

こんな悪夢誰が受け容れられる。

## パク・サンス その華麗なる恋愛遍歴

韓国は表向き中国との同盟路線を採っている。

だがそれは実際とは大きく異なり、その実態は 日本が韓国を支援 韓国が米国へ資金を流し、それに合わせ米国が北朝鮮を支援 北朝鮮が軍備を強化し中国を牽制 となっている。

中国はかねてより経済・軍事の両面からアジア統一を画策し、近隣諸国の国境、領海、領空を脅かすこと数多、果ては超大国との世界二分を視野にまで入れて拡大を続けている。この勢力に吞まれぬよう日・韓・朝の三国は古くから秘密裏に会合し、中国をアジア圏に留め防衛線を確保したい米国からの支援も受け、微妙な軍事バランスを演出することでその侵攻を今日まで防いできた。

だが近年、この勢力図に大きな波紋が投げ掛けられた。核保有を最大の切り札とする北朝鮮から防衛計画が漏洩し、発射される戦術核弾頭の詳細までもが丸裸にされてしまった。

高度な迎撃機構を備えた核搭載艦を建造中であった中国からの軍事侵攻 または核攻撃を予測した北朝鮮は、大国の圧倒的物量差による焦土作戦が実施されるより逸早く全軍を挙げ、半ば自棄の先制攻撃を決定。陸海空を遍く駆使し、大陸の至る所から110万人中およそ65万を超える北朝鮮兵が防衛ラインを抜けて本土へ進撃。侵攻を予測していた中国軍によって多くが海上で藻屑とされながらも、生き残りの兵士達は数年に亘り散発的なゲリラ活動を行い、一般市民も巻き込み、日々勢力図を塗り替えるような泥沼の交戦状態に突入した。

この危急を鏝際で終息させたのは、北朝鮮軍に在籍する姉の『蛇<sup>ペム</sup>』率いるエース級特殊部隊の活躍によるものが大きかった……がしかし、これら一連の動きによって三国の連合が中国当局に明るみになってしまった。

連合を切り崩そうとする中国からの軍事的な外圧が強まるにつれ、

ソン家が中心となつて広めて来た”一国独立”に対する訴求力が薄れ、それに替わるように台頭して来たのが、ソン家と韓国の政・財・官を二分する大財閥 『リク家』が音頭を執る”従属派”だった。従属派は中国を絶対的に支持し、北朝鮮への軍事侵攻ルートを提供その行動により、開戦の発端となつた防衛計画の漏洩が従属派によるものだという情報が北朝鮮に露呈し、韓国は北との連合を一時凍結せざるを得ない状況に陥つた。国境間での緊張は強まり、再び交渉のテーブルを設けるには韓国側も多くの犠牲を払つた。

「ギョッッヒツヒツヒツヒ！！！」

戦時下の大陸で、奇声を上げる謎の殺戮者の情報が多く寄せられた。

非人道行為があまりに目に余るといふ工員からの訴えが次々に寄せられ、朝鮮語を話していたといふ情報を元に北側の責任者へ連絡を取つたが 「そんなトシアキ知りません」と、米国のパイプ役でもある基地司令官から聞いても居ない名前を聞かされてしまふ。

知らないで通してくればこちらで隠密に処理出来たが、聞いてしまつた以上はもう無視出来ない。北朝鮮 韓国 日本経由で堂々と中国入りしたその男によつて、こちらも少なからず被害を受けている。防衛上の観点から 他国から受けた攻撃に対し、韓国は如何なる場合でも厳しく追求し報復せねばならない。軍部を掌握しつゝあつた従属派閥はこれ幸いと、洋上に展開しているイージス艦から、北朝鮮へ向けトマホーク見舞つてやろうとハーブンを開けて待ち構えている。そんなことになれば連合は完全に破綻し、日本も我々を見限つて中国への協調姿勢を強めるだろう。

ただの一兵士によつてアジア全域が戦火に巻き込まれようとしていた。

司令官がうっかり口にした『TOSHIAKI』 通称”T”は、大陸を股に恐るべき範囲に亘り超人的に暴れ回つた。

農作物に「肥料じゃ！」と叫んでウンコをひり出してた。美少年を見掛けると数百里に亘って尾け回した。生活用水に使われる大河に砒素を大量に流していた。ヘリから都市部に向けて「人道人道」と口ずさみながら毒ガスを散布していた。寺院を爆破して僧侶を吊るし上げた。迫撃砲を担いで「ウエイ」と言いながら民家を吹き飛ばして回っていた。などなど……国際世論が中国側に傾くほどの悪評が、謎の兵士Tによってもたらされていた。

Tは虐殺、文化財の強奪または破壊、強姦、薬物売買、人身売買、人体実験など、およそ考え得る最悪の罪業を鼻歌気分でこなし、「あの悪魔は誰だ!?」あのスポーティな視線のヤツは!?」という叫びが現場から日に日に強まり、関係者筋として完璧に疑われている北朝鮮側の司令官は「え、なに!? 俺がトシアキって言った証拠でもあんの!? ないでしょ!!! え……あんの? 通話記録してるって……? おや、あれ……なんか、通信の、状態がオカシイ、ような……ザザザ……なんか、ノイズが混じって声が聴こえな……すよー! ガチャツツ!」有線通話で混線するとう内容の、訳の解らない一人芝居を始め、通話を一方的に切ってしまう。後日そのことを指摘したら電話越しで大慌てされ、それ以降は連絡が取れなくなってしまうた。

対象Tの件を北側に追求するべきかせざるべきか。

「ねー、まだあ?」

洋上展開中のイージスから連日矢のような催促が届く。

「お、おや、ガガガ……!!! こ、混線かな!? 今揚げ物してるから、悪いけどまたね!」

恥を忍んで北の司令官の真似事をして時間を稼ぐが、それでも足らず、FFのエンディング流れてるからテレビの前から動けないとか、おばあちゃんがギックリ腰になったから病院に連れて行くとか、さすがに言い訳が苦しくなってきた。戦争か平和か……我々は決断を迫られている。

リク家の件で負い目があるこちらとしても報復は避けたいが……

ところが停戦間近になり、丁が北朝鮮の兵士だという根拠は、丁自身が北朝鮮の兵士を虐殺しているという多くの映像が中国側によって撮影されたことで一気に晴れ、北との関係がこれ以上こじれないで済むことに我々も胸を撫で下ろした。

この後　空爆を受けた北朝鮮は焦土寸前となり、中国は内乱まで勃発して経済がズダズダとなり、しばらく戦況は進展せず年月が過ぎだが　核迎撃の要である中国の新造艦が何者かの手によって奪取され、北の防衛計画が刷新され新型核弾頭も配備されたことにより、決め手を失った中国側から韓国を通じて停戦交渉が持ち込まれ、両国間は終わりの見えない永き冷戦状態に入る事となる。

と、おカタイ話はこれくらいにして　　やあ、僕はパク・サンスだよ！

完膚無きまでにプライド粉々に砕かれてから身の丈に合った生き方を選んだよ。

お陰で眉間からすっかり陰が落ちて、こんな風にさわやか路線黨進中さ。

驚きの白さってやつかな？

会長から「貴方は女心を知るべきだ」と言われたから、手当たり次第に口説いて同時進行でお付き合ひしてたら、先日気の強い中学生の娘にちよっぴり刺されたよ。

あの歳は恋愛Ⅱ人生だから難しいね、ハハ（ミツキー風な声）！  
自業自得とはいえ腹筋シックス・パックスに鍛えてなかったら死んでたよ、ハハ！

責任取って三年後に結婚することになるんだけど、尻に敷かれっぱなしさ、ハハ！

ポージングで馬鹿ツプル追い払ったことを何気なく話したら「独創的で天才っぽい」と評価され、会長の下で働かせてもらえるようになった。それからは休む暇もなく海外を飛び回り、毎日が驚きの連続さ。上で話したことは全部会長から聞いた話だけど、本気で人

生観変わりそうだったよ。自分が如何に狭い世界で生きて来たのか痛感したよ。

10年後 日本・関西国際空港。

道行く大勢の人が僕のことをチラチラと見る。

2m12cmという長身はスポーツ選手にしてもかなり大柄だし、それに鍛えているからだろう。

ちよつとした恐怖とそれに勝る好奇の視線。

今回日本に訪れたのは、日本にいらっしやる慈雨様をお迎えに上がる為だ。

ご主人を亡くされて間もなくだし、そのご心痛は計り知れないが、引きずつても連れて来いとお達した。

パク家の基盤は資本でも人材でも人脈でもなく、ただ独りの天才によつて維持されるモノで、天才因子を持つ女性が必要不可欠。その天才候補である四女の内 長女ペム様は産まれて間もなくソンの家の遠縁に当たる北の名家に養子入りし、次女と三女は平凡な秀才、手元に残る唯一の天才である四女・慈雨様こそがパク家の象徴たる存在に成り得る。

日本人と結婚し子供を儲け、名を『信濃川慈雨』と和名に変えても、誠心誠意込めてお話すれば、慈雨様ならきつとパク家の本質を理解して戴けるだろう。

会長はもう長くは持たない。

半年前から寢床に居る時間が長くなり、会長からの御下命は今回の旅で最後となるかも知れない。

天才に焦がれ、天才になれず、天才に準じた僕に相応しい命だ。

僕はやり遂げる。たとえ忌み嫌われようともね。

そして任務は遂行された。

その途中で偶然発見した『揺り籠』との邂逅……そのことを僕は何故か報告に上げなかった。

連合を支援する重大なプロジェクトに参加出来ることになったのは、筋肉と天運が味方した結果だった。では 北の上層部に潜り込んでいた間諜スパイの手によって流出した『揺り籠』との出遭いもまた 天がもたらした巡り合わせだったとでもいうのだろうか。

山積する停戦処理が一段落し、北朝鮮との会合の調整も着々と進む中、揺り籠の確保は連合再締結の大きな交渉材料となり、連合の成否次第で今後のアジアの行く末が決まる。それを左右する揺り籠の場所を把握している僕こそ……全てを支配出来る男だ。

そのとき多分……悪魔が囁いたのだろう。

神懸りのな強運が……燻っていた権力への羨望を呼び覚ましたのかも知れない。

僕が足許にも及ばない強大な権力者や天衣無縫な天才どもが右往左往する中、全てを知り全てを動かす力を密かに掌握しているという甘美なる愉悅……それが僕を狂わせたのかも知れない。

パク家の従僕として生きる道を選んだ僕が何故、一体どうしてあのような大それたことが出来たのだろうか……それは今でも分からない。

マイレージで世界一周出来るくらい海外出張に慣れた僕は気持ちに余裕があり、刃傷沙汰起こす鬼嫁が居ないのをいいことに、目を付けていた美人のおすましフライト・アテンダントさんにモーシヨンを掛ける。

唾を整髪料代わりに髪を整え、シャツのボタンを外してたくましい胸をあらわにし、準備が整うと指をパチンと鳴らした。

不倫は文化。浮気は男の甲斐性。

経済的に余裕のある大人の男が、たった1人が女性に入れ込むなど前時代的でナンセンスだ。

「はい、お呼びでしょうか？」

数秒もせずに僕の許へ来た お目当ての黒髪の乙女。ただそこに居るだけで周囲が華やぐ、上品で清楚で可憐で控え目な純和風の



美人。

必ずモノにする……内心そう意気込んでいた僕は、掛かり付けの歯科医で入念にホワイトニングした輝く白い歯を見せながら注文する。

「プリーズ！ マンゴウ・ジュウー！ それと……君のハートをお願いできるかな？」

指先でバキューンと心臓を撃つ小粋な仕草でオシャレに注文したら、

「チッ！」

なんかすつごい舌打ちされました。

「え……？ 何このクソお客様？ 縄でお首をお巻きになられてご自害なさればいいのに」  
みたいな蔑みの目を向けられ、無言の圧力に耐えられなくなった僕は脂汗を流しながら視線を逸らしてしまっ

大変余談だが、彼女 フライト・アテンダントの『谷口』さんは、この直ぐ後に航空業界から身を引き、揺り籠の保管場所として監視中であった慈雨様の語学教室で働き始めた。どんな因縁でそんなことになったのか、それは腕利きの調査員が調査してもまったくの謎だった。

日本の空港に着き、予約していたレンタカーを出して目的地である信濃川家へと向かう。

信濃川家で焼香を済ませたのち、慈雨様に会長の健康状態と代表権譲渡の旨を伝え、事前に調査済みである経済状態などを理由に挙げて帰国を強く勧めた。

急いでいたこともあって少々強引に話を進めた僕は、慈雨様の娘であるノアへの覚えを良くしておこうと引越しの手伝いを買って出るが、パク家を挙げて父親の葬儀をボイコットしたと思っ込んでいる彼女は露骨に反抗的で、廊下で目が合うなり「帰れ！」と言う始末。

べしっ

「いたっ!？」

帰り際にカエラのCDを頭に投げて来る始末。

「シャレかよ!？」

震える手でジャケットを握り締め、すでに走り去ったノアにツッコむ始末。

まあ……ノアの気持ちは解らないでもない。

親戚から見放されていると感じたのも無理からぬことだ。

だがアジアが ひいては世界がどうなるかの瀬戸際で、パク家全員が一丸となって休日返上で駆け回っていたのだ。葬儀が信濃川でなくパク家であっても同様だっただろう。だがそんなことを今更言っても、”小学生”の幼子にそのような理屈が通じるわけがない。女は感情の生き物だ。

どう理屈を重ねた処で納得しない。

だからあえて言わない。

多くの女性と付き合ったことがある僕だからこそ出来る賢明な判断だ。またなんか投げられたら怖いしね。

「荷物を運ぶなら車を出そうか？」

目を置いてノアが落ち着くの見計らい、韓国移住の一助として機嫌取りに奔走する僕。ケンブリッジ首席卒業生が必死に子供のご機嫌伺いをする姿がそこには在った。

フン……笑いたければ笑うがいい。

プライドを捨ててもこの仕事を成し遂げると決意した信義の男に何の引け目があるうか。

それに頭を下げるだけの価値がノアにはある。

慈雨様同様、ノアもパク家女兒の血統としていかなく天才性を発揮し、ギフテッドとして高い知能指数を示した彼女は、日本では特例となる学校を跨いだ”飛び級”で中学校に通っている。

信濃川ノア。

彼女もまたパク家に必要な天才なのだ。

さて、信濃川親子が韓国行きを承諾するまでに1つやっておきたいことがある。それはノアに取り入ることだ。

残念だが会長は老齢でもう長くはない。寿命だ。こればかりは天才でも動かしようが無い。そうなる僕には有力な後ろ盾を失ってしまう。

僕は会長に取り立てられてから精勤に励み、期待に添うよう必死に仕事をこなして来たが……やや問題を抱えている。

女性との問題だ。

会長に言われたからやったことなので僕はまったく悪くないのだが、会長の死後、グループ総資産の精査が行われれば、高額な出張経費の出納から世界各地でやらかした派手な女性遍歴がバレてしまおうし、そうなれば連鎖的に、バーでナオンを落とすときの殺し文句として「ここだけの話だが……俺はスパイなんだぜ！」と親指を立てながら、極秘事項を何人もの女性に話してしまったことまで目がバてしまい、このままでは最悪お払い箱ということも充分考えられる。

困り果てた僕は使者という立場を利用し、次期代表の慈雨様を逸早く擁立して甘い汁を吸おうとさり気なく話を切り出したが、飛行機でナンパしたときと同様の「死ねオラ」みたいな無言の圧力を掛けられ言葉が出なかった。

どうやら慈雨様は、僕が子供の頃にイジメたのを印象として覚えていたようで、笑顔こそ絶やさぬものの言葉の端々に棘があり、何となく対応も冷たい。ホウキは逆さに立てるわ、ぶぶ漬けは出されるわで、肝心の帰国勧告すら難航する始末。背後に蒼白き鬼面が見えるかのようなプレッシャーだ。

慈雨様は望み薄……ということとで登場するのが信濃川ノア。

次期代表の慈雨様が一番大切にされてらっしゃるノアにさえ気に入られればこの先は安泰。一生左ウチワの生活だ。

世界中の幼女から老婆までありとあらゆる女を落として来た僕だ

し、見た目は子供で頭脳は大人のガキ一匹、卓越した落としのテクで朝飯前だ。

ノアを手懐けて傀儡に仕立ててやる。

今よりも更に上のポストを掴んでサクセスしてやる。

一世一代の大勝負。このナンパで歴史が変わる。ノアに対して本気で動く。

ノアだけはガチ。

「おーい、いるか？」

木村のCDを返しに来たという理由で、僕は二階のノアの部屋に尋ねに行く。扉の前に「ノックしてね　お願い！」　の札が下がっていたから、忘れずにノックを二回。

「なに？」

少しして、扉の隙間から覗く不機嫌そうなノアの顔が見えた。

近くで見ると改めて認識する。

溜息が出そうなくらい美しい少女だ。

小顔で整った顔。絹のようにキメ細かな長い黒髪。乳白色の柔らかそうな肌。体付きは一見華奢に見えるが、黄金率に等しい均整の取れた無駄のない骨格や筋肉から想起される猫科動物のようなしなやかさときたらどうだ。まるで芸術品だ。

慈雨様の面影を感じさせる天真爛漫そうな豊かな表情には精気が溢れ、強い意志の光を放つ穢れ無き気高き瞳は見る者を魅了する。

もし出逢ったのが十年後であつたら、このパク・サンス……本気になつていたかも知れないな。

「忘れ物だ」

「……ありがとう」

隙間からCDを受け取ると、ノアは目線を逸らしながらも素直に礼を言う。

意外に御し易いタイプかも知れない。

「じゃあ」

「あ、ちよつと待った」

「……なに？」

ここで逃がすものかと隙間に手を差し込み、少し強引にノアを呼び止める。こういうプライドの高そうな強気っ娘タイプの方は、ちよつとばかり強引なのがいいんだ。僕の長年の経験則が告げる。

そして知識がある分……意外性に弱い。

「アナタノコト、スキダカラー!!!」

面倒臭そうな視線が一瞬こちらに向けられたとき、僕は、切な過ぎて今にも泣き出しそうな顔で、チャンドンゴン風に激白する。

「!!!？」

ノアは突然のことに目を丸くして、そして目を細めて一言。

「えっと、サンス伯父って……ロリコン？」

「うん実は え？ 違う!」

否定する前に扉がパタンと閉められる。

失敗した。

ノアの籠絡に失敗し、いよいよ左遷か解雇の未来がリアルに視得てきた。

ああ……全て終わった。

最期の晚餐となるかも知れない。

そう思い自棄になった僕は、都内の一流ホテルのワンフロアを貸切りにした。

どうせ金だけはわんさかあるんだ。

退職金代わりに乱痴気騒ぎでもやって楽しんでやる。

美人の姉ちゃんいっぱい呼んで、ドンベリ風呂で浴びるほど高級な酒飲んで、末期の栄光でも味わって……それが終わったらどこかへ逃げよう。金を口座から引き出して、どっかの間抜けな”司令官”みたいに……南極辺りにでも逃げ延びよう。

チャチャチャチャー!

そんなことを考えながら車を走らせていると携帯が鳴った。

着信音は『ビッグブリッチの死闘』。

運転中なので確認出来ないが重要な電話かも知れない。後続との車間距離を確認し、充分安全と判断してからウインカーを点灯し、減速しながら路肩に停車する。

「はい、もしもし？」

「……あの、もしもし？」

返事はない。まるで屍のようだ。

非通知設定からの連絡だが、一般と独立した独自の基地局を通している僕の携帯はイタズラでも偶然でも掛かるようなものではないし、不審に思いながらもとにかく相手の反応を待つ。

ジツと耳をこらすと感情を押し潰したような静かな息遣いだけが聴こえて……気が付くと僕はガタガタ震えていた。

名乗りもせず、声も上げない、非通知の相手が誰なのか……僕は本能的に察知した。それは嫁。

人を本気で刺す嫁だ……！！

10年前に刺されたときの記憶が古傷の痛みと共に鮮明に甦る。

まさかマカオでの浮気がバレたのか！？

何か……何か言わなくては……！！

液体窒素のように冷たい極限の恐怖が僕を追い詰めていた。

「あ、あのお……リリーさんでしょうか？」

僕はガタガタ震えながら、無言の恐怖に耐え切れず思い切って口を開いた。

倍近く歳の離れている僕の妻 『パク・リリー』は、旧姓を『

テイ』と名乗る武家出身の狂人 相手を愛し過ぎて傷付けてしま  
うという、俗にいうヤンデレだ。

以前に話したかと思うが、テイ家は祖父のイギョクが凋落させたかつての七家筆頭で、付け加えるならばソン・グループの暗部である軍需産業やコリアン・マフィアを一括に取り仕切っていた超武闘

派集団である。

外敵に対し巨大な抑止力として機能していたテイ家だが、三国連合強化の為に軍縮路線を貫こうとしていた当時のソン家は何かとスキャンダルが多い彼らを扱いかね、所有する株式総てを上場に出がったばかりのパク家に譲渡し、これを即座に解体する。

反抗の間も与えられず力を失い離散したテイ家は後に『リク家』と併合し、軍に広い人脈を持つ彼らは開戦の混乱に乗じて軍部掌握に暗躍　連合を凍結に追い込むことでソン家に対し大いに復讐を遂げてくれた。

お付合いを続け親密になっていく内に彼女の素性が次第に明らかになり、出世に響くような厄介ごとは御免とばかりに僕は別れ話を切り出した。

もし、これ以上仲が深まり結婚にまで発展してみる。

下手すれば、チャペル鳴り響く教会は戦場となり、銃弾が入り乱れ式場が葬式場に早代わりだ。

ブーケの替わりに手榴弾だ。

ライスシャワーの替わりに血のシャワーだ。

そんな惨劇が眼に浮かぶ。

というわけで……僕は是が非でもお付合いを断ろうとしたのだが、言い終える前にお腹をブスリ刺されたので婚約を快諾した。

退院後、虎の子を得るような覚悟でテイ家本山に御挨拶に伺うことを電話で連絡したら、リリーの御父上殿が出て「……だから？勝手にすればいい」と言つて、酷薄に切り捨てられた。

「あら？ ええ……と？」

隙あらば、自分がパク家の者であると言つて破談に持ち込もうと考えていたが……甘かった。

僕はテイ家のことを何一つ解っていなかったのだ。

他人よりも関係が薄い彼らのことを何一つとして。

「あのさ……」

通話が一方的に切られてしまい、状況がまったく理解出来ない僕

は、胸を押し付けるように腕を組んでいるリリーを横目にチラリと窺う。彼女はプレゼントを開ける前の子供ののように、期待いっぱい瞳を輝かせている。

なんて言やいいんだ？

「あの……勝手にどうぞと言われたんですけど？」

「サンス様、わたしうれしいです！」

「ああっ！？」腕に胸がギュウギュウ当たってるッ！！？胸が当たっているッ！？キモチイ……いや、メツチャ怖い！！ああでも……怖いけど、なんだろうこの気持ちはっ！？なんなんだこの名状し難い気持ちは！！？」

痛みと恐怖とエロの狭間で僕は揺れた。

スレンダーな彼女に不釣り合いなグレイプフルーツ大のおそろしく柔らかく温かい双球に腕が挟まれてしまっでは動けない。

悲しいかな……。

動けるけど動けないんだ……男だから。

後にリリーから聞いたのだが、テイ家は、国益やテロが絡む重大な機密を扱う特異な立場から個人主義化が進み、身内でも男は立つて歩いた時点で、女は初潮を迎えた時点で独立させるという厳しい方針を執っているらしい。だから娘が対立組織のボンクラと結婚しようが知ったことではないそうだ。

「くう……だ、駄目だ！！ここは耐えるんだ！！これから訪れる偉大なる未来を見据えよサンス！男の根性を見せるサンス！！たかが小娘のおっぱいに惑わされるな！！うおおおーっ！！」  
気付くと婚姻届を書いてました。  
印までしっかりと捺して。

婚姻届はリリーの手によって来るべき三年後まで厳重に封印され……  
……そうして僕らは密やかに結婚したのでした。

新婚当時は結構楽しかった。

嫁さんは笑顔の眩しいカワイイ系の美人だし、礼儀正しく言葉遣





それらのモノどもに類似する韓国で最も恐れられる連中は ” 群レキ隊 ” と呼ばれる十三人から成るテイ家の面々であり、そして嫁のタク・リリーも、その怪物の一人である。怯えるなと言う方が無理だ。

「サンス様、何故……電話して下さいませんか？」

「え……？」

「サンス様……まさか、今日が何の日か……覚えていらっしやらないのですか？」

「……うん？」

何の日？

何の日って何だ？

浮気がバレたワケじゃないのか？

か、考える！ とにかく考えるんだ！ 僕はケンブリッジ首席の

秀才だ！

もし ” 知らん ” とかのたまってみる。アイツは即座に僕を殺しに追って来る。

それこそ南極だろうがアラスカだろうがイスカンドルだろうが何処に逃げようが追って来て、泣いて命乞いをする僕の心臓に深々と冷たい刃を突き立てるだろう。だからそうなる前に、嘘でも何でもいいからとにかく時間を稼ぐんだ！ サンス、女に嘘がバレたときは ” CSK (CRY / 泣く・SORRY / 謝る・KNEEL DO WNON THE GROUND / 土下座) ” の基本を忘れないで！

「覚えて……らっしやらないのですか……？」

「あー、うん！ 覚えてる！ 覚えてるとも！ 当然じゃないかっ

！」

「そう……安心しました……」

苦し紛れにごまかした途端、安堵したのか、嫁の声音がとても柔らかくなった。それと同時に全身を硬直させていた強烈な殺気も柔らぐのを感じられ、僕はハンドルにしがみ付き大きく喘いだ。

ふう……なんとか一難は去ったようだ。

これでもしバレたら、四肢切断程度じゃ済まないかも知れない。  
もう後戻りは出来ん。

「もちろん今日が何の日か覚えてるよ！ 覚えてるんだけどさ……  
えっと、仕事がちよつと立て込んでね……？ で、今さっき一段  
落ち着いたばかりなんだ。ホテルに着いたらちゃんと電話しようと思  
ってたんだよ！」

「そうですか。サンス様、大変御疲れ様でした。わたしに何かお手  
伝い出来ることはありますでしょうか？」

「ああ……そうだな……？」

殺気が引いていくにつれ僕は冷静さを取り戻した。スピーカー設  
定にした携帯をタコメーターの左横にあるホルダーに立て、スケジ  
ュール管理の為に常備している電子ブックを懐から取り出し、巧み  
なトークで時間稼ぎをしつつ画面に表示された一覧から今日の日付  
に関する情報を素早く探った。

結婚記念日。

そうだ！ 結婚記念日だったか！！

出張で家に全然帰ってないから、記念日とか年中行事とかスツポ  
リ頭から抜けてた。

そうと分かればこっちのもんだ。

「あの、リリー。結婚記念日おめでとう」

「……はい！」

僕が照れくさそうに言うと、明るく元気な声が嬉しそうに弾んだ。  
危ねえ……間に合ったか。

普段まったく自己主張しない控えめな彼女がありつたけの勇気を  
振り絞って出張先に電話して来た……それだけで、この記念日にど  
れほど入れ込んでいたのが容易に理解出来る。それを裏切った場合  
の末路も。

まあそれでも、リリーはルールさえ守っていれば本当にいい嫁だ。  
良妻賢母だと言える。

そしてある意味最悪の妻でもある。

僕は彼女と寝たことが一度もない。性的な意味で。

恐怖を刻み込まれた身体が十年の年月を経ても未だ頑なに性交渉を拒んでいる。その根は深く果てしなく……他の女性に対しても僕は紳士であることを余儀なくされている。大学じゃ成績落とさないよう必死に勉強ばかりしてたし、クラブに在籍するフットボーラーはガチホモばかり。お陰で健全すぎる青春時代を過ごした。”ナンパ”だの”落としのテク”だのとかくいう僕も、所詮は童貞なのだ。”……”

どうにか惨劇を回避して電話を切ったが、命の際を潜り抜けた心臓は未だ強く高鳴り、何だか後部座席に嫁が居そうな気がして不安になる。

もちろん居るはずはない。

でも一度そう思うとバックミラーが見れない罫。

「やべやべ、切り替えないとな！」

僕はわざとらしく声を出しかぶりを振ると、気晴らしに外の空気を吸おうと、後ろを見ないようにしながら素早く車を降りた。大きく伸びをして、身体をほぐしながらガードレールに腰掛け、少しでも恐怖をまぎらわそうとふと思いつき、空港の喫茶店でナンパした幼女にさっそく電話してみる。懲りない男だ。

ピッ

夜中なのに3コールもせずに繋がった。

僕はコホンと咳払いをして、相手には見えてないのに襟を正す。

「やあ、覚えてる？ 僕は空港で」

「キリンさんがすきです。でもおまえはキライです」

プッ

会話を遮るようにつたない言葉で罵られた後、一方的に電話を切られる。一瞬何が起こったのか理解出来なかった。

「……今のキリンのくだり要らなくね？」

なぜにキリンと比較したし。

意味不明な言葉でフラれて余計に鬱になった。

ま、まあいいさ。

男は仕事に生きてこそ男というものだ。いつまでも女にかかずら  
っておられるものか。それに……嫁の殺意の波動を回避出来たなら  
今回の問題もなんとか出来そうな気がして来る。

相対的にだが。

恋人役としてはみごとに空振ったが、権謀術数の限りを尽くし、  
あの手この手の手練手管で搦め手を狙えば、当初の予定通り信濃川  
親子を韓国へお招き出来そうな気がする。

それに実際、信濃川家は経済的に相当困窮している。

エンジニアとして高給取りだった旦那が生前から貯金を食い潰し  
ていたらしく、使途不明で引き出された額は調べただけでも八千万  
円以上となっていた。この他にも幾つか借金があり、これを相殺す  
るには財産を処分してどうにかどっこいに出来るか出来ないかとい  
った具合。おまけに社宅からは半年以内に出なければならぬ決ま  
りがあるので、僕が訪れたとき、慈雨様は引越し先を検討してテン  
ヤワンヤの最中だった。

引越しが済んでしまつたら移住の件が難しくなる。そう思った僕  
は手伝うフリをしながら引越し先を特定した。金を積んで引越し先  
のアパートを即金で強引に買い上げ、持ち主であった地主は海外へ  
消えて貰った。

今現在、アパートにはVシネに出てくるような強面の劇団員を雇  
って住まわせている。ソイツが居住権を主張すればしばらく時間が  
稼げるだろうし、契約不履行を理由に元の持ち主を裁判に出頭させ  
ようにも海外だし、慈雨様が出来ることはせいぜい民事で敷金礼金  
の回収程度。そうなれば大荷物を抱えた彼女達は行き場も無く途方  
に暮れ、最後には僕を頼るしかないということだ。

「……ぬふふ」

完璧だな。やっぱ天才かもしれないね。

後はギリギリまで助け舟を出さないで、恩を売る形で慈雨様に後

る盾になつて貰えば僕は安泰。

いろいろと問題はあつたが、やはり最後は正義が勝つのだ。

勝つ者が正義だから間違つてないよね？

「クツフツフ……クツハツハツハ！！ ファー……ッハツハツハツハ！！！」

王者の風格を示すかのように高らかに笑う。

都会の濼んだ空に遍く星は見えねど、我が広き心には膨張を続ける大宇宙がツ！ 大銀河が確かに拡がっているツツ！！ 今や世界は僕の為にある！

「やだ……なに独りで笑つてるの？ あのチエホンマンみたいな大つきな人！」

「シツ！ 視線を合わせないで！ あつちから行こつ！ あれは間違ひなく薬をやつてる目だ！ ぜつたい関わらない方がいいよ！」

遙かなる虚空を包み込まんばかりに両手を広げていると、通りすがりの若い男女がヒソヒソ陰口を漏らしながら来た道を戻って行く。クソが……。

ヒソヒソ話ならもつとヒソヒソしろ。丸聴こえなんだよ。

まったく、どこの国にもムカツクカップルというものは居るものだ。

というかカップル全般がムカツクのだが。

「シャアー……ッ！！！」

「うあつ！？」

「きやあつ！？」

怒りのままに奇声を上げながら追い掛けたら、カップルは化け物を見たかのように慌てふためいて、ヒールを履いていた女のほうか足をもつれさせて派手に転んだ。

男は振り返つて一度手を差し伸べようとしたが、迫り来る僕を見てヒィと悲鳴を漏らし、女を置いて独り踵を返す。

「ちよつと！ 置いてかないでよ！！？ この裏切り者お！！！」

「うわああつ！！！」

「やたつ！ カップルが破綻した！！」

「ざまあみる！！ 僕は秀才だ！！」

逃げ惑う小市民どもの醜態に胸をスツとさせ、警察に通報される前にダツシュで車に戻る僕。

僕はフットボーラーの花形だったから、これでも100Mを12秒で走れるんだ！

身長2m越えて体重170kg（体脂肪率5%以下）でだぞ！

しかも三十本連続で走ってまったくタイムは落とさない！

クツクツク……こんな能力の無駄遣い見たことがねえ！

僕は間違いないで勝ったはずなのに……なぜだか泣いていた。

「おいおい、どこの変態だ？」

「え？」

あふれ出る涙を拭いつつ車のドアに手を掛けた瞬間、背後から、若い男の声が僕に投げ掛けられた。

まったく気配が無い状態から、敵意に等しいあからさまな殺気を不意にぶつけられた僕は背筋をゾクツとさせ、弾けたように振り返る。

「スルクウ……」

「よお、元気だったかクソ兄貴？」

そこには僕の義弟が……童顔の中に潜む生来の凶相を隠そうとせず、歪な笑みを見せて立っていた。

研ぎ澄まされた刃物のように尋常ではない殺気と狂気を身に纏う少年のような風貌の男　スルクウは、半mの身長差の持つ義兄を

心の底から見下し、乱暴にネクタイを掴んで強引に首を下げさせた。

「ためえ相変わらず背エだけは高いな？ あんまし遅えから俺が来てやったぜ？　なあおい、挨拶はどうした？　この前教えてやったる？　やれよ？」

「はい……こ、こんばんわ……スルクウさん」

ネクタイをグイグイ引っ張られ、僕は石畳に膝を着く。

僕はスルクウにノックアウトされて以来、まったく頭が上がりな

いでいた。

僕と義弟の力関係はイジメツ子とイジメられっ子のそれであった。しかもコイツはとんだ二重人格で、表向きは人の良さそうな純朴な青年を演じ、僕や下っ端に対してはこのようにチンピラの如く接する。

とても悔しいが……僕はコイツの前に立つと過去の心的外傷トラウマで足が竦み、目も合わせられないし、何も言い返せない。

「スнкуウは親も国籍も判らない孤児だった。」

観光地図にはまず載らないような掃き溜めのスラムに隣接する会長の別邸に侵入しようとしていたところを捕らえられ、その才能を認められて即日養子入りした。

スнкуウは特に戦闘能力に秀でており、北朝鮮と中国の情勢不安に加え軍でのリク家の動きが活発化してきたことに際し、防衛力の再編を迫られたソン家はテイ家の後釜として彼には大いに期待していたようだが……ある日を境にスнкуウは人が変わったかのように何かに怯え、自室に引き籠もるようになってしまい、韓国第二の超人部隊は形になる前に雲散霧消してしまった。

パク家の面子を潰したスнкуウは非難の矢面に立ち、会長の勧めで海外で再起を決意する。数年の海外留学を経てソン家系列のエレクトロニクス関連の会社に入社、横這いであった業績をここ数年で右肩上がりしている。さらに学問や経済だけでなく古流武術や人体力学および整体に精通し、それに関する自筆の本も何冊か出版している。社交界ではその女受けする中性的な甘いマスクで周囲を魅了しているが、不思議と女性関係は真面目で、嫁に頼んで雇った密偵に張らせているが女の影はまったく見えない。ホモなのかもしれない。ホモに違いない。ホモと断定して差し支えないだろう。

「クソ……こんなホモにいいようにコキ使われるなんて!!」

「口に出てるぞクソ兄貴……」

とにかく文武の両面でスнкуウは強い。

ナイフ二本で軍事演習下の米空母を単独で制圧出来るウチの嫁ほ



どではないだろうが、この僕を一撃で倒すほどだからな。

簡単に言うようだが……この僕を一撃で倒すということは、それはとてもすごいことであり、偉大なことであり、恐ろしく強いということだ。道行く獅子を殴るに等しい行為だ。試しにちよつとイメージしてみようか？ サバンナの草原を歩くライオンがいるとな。

「おらあつー!!」

僕はライオンに駆け寄り、助走の勢いをのせた拳で後頭部をおもいっきり殴った。イメージだから手加減などまったくしない。

「ぐがうつつー!!!」

「うおつ!? やめろ!? 僕は悪くない!!」

ライオンはまるで後頭部でも殴られたかのように激怒し、ものすごい力で僕を地面に押し倒し、首筋に喰らい付いて首の骨を一気に噛み砕く。

「あが……かぶつ」

血を吐いて絶命した僕の眼からは光が消失し……そのまま捕食されてしまった。

どうだ！ こんな感じですよいんだぞ！

「はあはあ……ちよつと強過ぎたな……普通に自分をイメージすればよかったんだ」

「……?」

スルクウが危ないモノでも見るかのように眉をひそめたが、所詮は天才未満、僕の突発的な行動を不審がるだけで解答を導き出すことが出来ない。

僕はそんなスルクウをよそに新たに自分をイメージする。

草原に1人立つ全裸の僕。古代剣闘士の彫像のように完成された見事な肉体。圧倒的な存在感。濃厚な肉質。

美しい……自画自賛かもしれないが見惚れてしまう。

「やあ、さすが僕だ！」

「……」

想像の自分に気安く近づくと、そいつは目線だけ動かしてギロイと僕を睨み、いきなり拳を振りかぶったかと思うと殴りつけて来た。「ぐはっ!?!」

まるで破城鎚のような巨大な拳骨が弧を描くように走り、僕は頬をひしゃげさせさせながらゴロゴロ転がった。

いきなり殴られた! クソ……僕のクセに!!

怖いから殴り返しはしないが、文句ぐらいいは言ってやろうと怒りの形相で顔を上げたが、腕組みをしたままそいつは僕を再び睨む。

なんか文句あんなのかと言わんばかりだ。

強烈なプレッシャーを叩き付けられた僕は怒りを忘れて鼻白み、悔しさに震えながらその場で顔を埋める。

「うっうっ……グスツ! ちくしょうっ!!」

「……なぜいきなり泣く!?!」

「負けたんです! 僕は自分に負けたんですよ!」

「……そ、そうかよ? あ、あまり気を落とすなよ……? じゃあまたな!!」

前触れもなくマジ泣きを始めた僕にさしものスルクウも怯み、言葉少なにその場を後にした。

消え行くスルクウの後姿を見て、僕はフンと鼻を鳴らした。

冷えた胸に去来するは、いつか見てるよという精一杯の強がり。

この間にも僕の”密偵”がスルクウの後を追跡しているだろう。

密偵との情報のやりとりは、オンライン上にあるパスワード付きの”密偵のお部屋”という名前のホームページに掲載される。もう少し隠してもいいと思う。

小さなハートマークが所狭しと浮かぶ薄紅色の背景のホームペには”今週のベストショット!!”と銘打たれた週替わりするスルクウの顔写真が中央に大きく張られていて、それを見るたびに密偵がどんな人物なのかつい想像してしまう。

っーか、どうやって対象に気付かれずにそこまで接近出来たの? 鮮明度から察するにコレ、望遠じゃないよな!?

”ようこそいらつしゃいました！”と、もてなし気分満々で上記された来場カウンターの嫁と僕しか覗かない上に定期的に移転するので36でストップしている。掲示板の入り口には情報の更新を示す”New!”の金字が付き、その下には密偵のポエムやプロフィールなどが事細かに掲載され、その内容は……「時間が不規則なお仕事だからお肌のお手入れがたいへん！お姉ちゃんとも遊びに行けないし、そろそろお休み欲しいよー！（＜・＞）」……とか顔文字で書かれててイラツとする。

情報が正確で迅速だから雇ってるけど、ホントに何だコイツ！？  
闇世界の住人が顔文字とか使ってるじゃねーぞ！

女学生がおまえは！？

飼い犬のポエムとかいらねえよ！！

わんわんわんわわーんとか書いたってさっぱりわからねえよ！？

それで可愛らしさをアピールしてるつもりかよっ！？ あざと

さしか感じねえよ！！

それに……”キリ番オメー！”とか言って、自作した桃白白の絵をお祝いメールに添付したり、「手作りアップルパイを贈るので送付先をご連絡ください」とか言ってくんな！ たかか100番目を踏んだだけでそこまで気遣われると却って怖いだろ！？ どんだけ友達いないんだよ！？ 来場カウンント100はキリ番じゃねえよ！  
むしろ寂寥感が漂う数だろ！？

そんな調子の……一度も姿を見たことがない、年齢も性別も不明な密偵。馬鹿っぽいがそれでも腕は確か。

密偵なら日本でのスルクウの動向を丸裸にしてくれるだろう。

空想で殺されたり殴られたりした僕はフラフラと車に戻り、シートに座ってからふと気付き、急いでメールを見ると着信がすごいことになっていた。

スルクウ 接近

あと150m

スルクウ接近

あと100m

どうする？ 早く返事して！

携帯持っていない！？

目視で確認したけど

車のドリンクホルダーに掛けっ放しだよ！

命令できない状況と判断するよ！

ボスの前に出るのちよっぴり恥ずかしいけど…

でもいざとなったらボクがカタをつけるよ！

密偵いきまーす！（。。）>

密偵から沢山連絡が入っていた。

状況がもう少し過激になれば密偵の姿が拝めたかもしれないが、  
だが今回は携帯を車に置き忘れた僕に落ち度があるだろう。

しかしコイツ……仕事は確かなんだよな。

お礼に返信しとくか……。

密偵さんへ

いつもお世話になってます

お仕事ご苦労様です

引き続きスルクウの追跡お願いします

「ふう……」

メールを打ってから携帯を懐にしまうと、忘れていた疲労感がド  
ツと押し寄せた。僕はリクライニングを利かせ、今後、どうにかし  
てスルクウをハメてやれないかと考えていた。

どうせスルクウに手柄を奪われれば先は長くない。

アイツは僕を使い捨てにするつもり満々だしな。

いつその機会に、思い切って反撃の狼煙を上げてやろう。

力で抑圧されながらも怒りの炎を絶やさず燻り続けさせていられたのは、スルクウが親も知れない貧民の出だという差別意識からだ。パク家は超実力主義で人物を取り立てる。その審査基準は独特で曖昧。単純に勤続年数とか業績とか戦闘能力とか機知の豊富さだけでは評さず……とにかく頭脳でも、力でも、卑怯な手段でも、運ですら相手を叩き潰して上にのし上ることを会長は暗に認めてらっしゃる。だからスルクウもエリートの僕と対等の立場にいる。

卑劣も才であり一芸。

僕は天才ではないが、卑怯という一点に置いては他を圧倒する。そして手駒も粒ぞろいだ。

孤高のスルクウ1人くらい、どうにかなりそうな気がする。

いけ密偵！ 憎き敵スルクウの弱点を握るのだ！！

フハ！ フハハハハ！！！      ゲホッ……ゴホッ！！

密偵から送られているであろう最新情報をホテルでチェックしようと車を全速力で走らせたが、制限速度を超過してオービスにキャッチされ、後方から追って来た白バイに誘導されて再び停車する羽目に。

手下使ってスルクウぶつちめて、信濃川親子を懐柔して韓国にお招きし、いい地位について、キレイなお姉ちゃんに囲まれて暮らしたいという、現代の英傑に相応しい霸道が早くも途切れようとしていた。

「もしもし」

コンコンとドアをノックして免許証の提示を求める白バイ隊員。公僕のクセに不遜な態度。スルクウのことで頭にくっていた僕は憤然と車のドアを開けて外に出る。

「う……」

徹底的に鍛え上げられし、灼熱を孕む火山弾がごとき巨大な影が覆い被さり、白バイ隊員は怯えた表情で一步退がった。NBA最高クラスの身長を誇る僕からすれば、この国の脆弱極まりない成人男

子なぞ赤子同然。矮躯矮躯。ひょうろく玉。腕も首もハリガネのよ  
うで、撫でればポツキリいきそうじゃないか。

「あ、あの……免許証の提示を！」

「あん？ なに！？ 土下座しろっての！？ いいよ！ 土下座く  
らいしてやんよ！！」

「いえ、免許証を……」

「ハイハイ、わたしが悪うございました！ スイマセンスイマセン  
……これでいいか！？」

これ以上厄介ごとに巻き込まれてたまるか。

僕は運転がアレな人だから免許がヤバイんだよ。

平たく言うと偽造なんだよ。

プライドの高い僕は土下座しながらも心は錦、白バイ野郎に親の  
敵のような視線を向ける。

僕は昔から運転が苦手で免許が取れなかった。

あれはそう。

眩い夏の陽射し照りつける、楽しい初デートの日だったか。

イタリアの貿易会社で知り合い、数ヶ月の濃密な大人のオフィス  
ラブ（挨拶をする／談笑する／手が触れる／一緒に食事する／ゲー  
ムの話で盛り上がる）を経て漕ぎ着けたデート。世間では童貞マニ  
ユアルと揶揄されるデート攻略本まで精読してこの日に望んだ。

ポロロロロロッ！！！！

彼女のマンションの前に停車する一台のマイバッハ・ランドレー。  
完成されたフォルム。安定した制動。磨き込まれた疾駆する至宝。  
スルクウに土下座して貸りた芸術品だ。

まあ、ほんの家一軒くらいの格安車だ。

まあ、ほんの世界に百台ほどしかない恥ずかしい安物だ。

「サンス、それどうしたの！？」

「フフン……」

金髪をポニーテールに結んだ蒼い瞳の活発な乙女は、驚きと喜びを混同させたような表情で、車のボンネットに足組みして座る僕に尋ねた。

僕はスツと髪をかき上げながら、ドヤ顔で車が自分の物であると主張。

いや嘘じゃない。

この車は直ぐに僕の物になるんだ。

帰りに崖から転落して廃車になって天に召された。

命の次に大事な愛車を御釈迦にされたスンクウが汗だくになって病院に怒鳴り込んで来たが、殴る箇所が一箇所もないくらい包帯グルグル巻きにされた僕を見て、「もういい……車は兄貴が責任を持つて始末するんだぞ」と言つて、寸志だが見舞金までくれた。そんな次第で、車は僕の物になった。

「さあ、どうぞお嬢さん」

僕は颯爽と助手席に座り、高級車に目を輝かせている彼女を運転席へと誘う。

「……」

彼女は一瞬目が点になって、一度を空を仰いでから僕に向き直る。

「あの……何で助手席に座ってるのかな？」

「フフ、僕は免許持つてないんだよ！」

「……え？ それじゃあどうやってここまで来たの!？」

「密偵に運転して貰った。僕は電車で来た」

「……」

「まあ免許はないけどさ、いざとなればトリアスロン余裕でこなせるくらい体力はあるから！」

「アンタがそれをこなせたとして、私はどうすりゃいいのよ……?」

「ささ、カモン！」

「う、うん……」

彼女の運転でデートは順調な滑り出しで始まった。

都心を外れ山間を抜けて二時間掛けて目的地である海へと辿り着





「はは、ばーか！」

「デカイなりして情けねえの！」

愚民どもが何か言っているが耳に入らない。

悲しみと後悔だけが空虚な胸を埋め尽くそうとしていた。

誰もが僕を笑い蔑んだ。

惨めな者を嘲笑した。

僕は絶望の淵に立った……だがそんなとき、ただ一人の少女だけが優しい声を掛けてくれた。

「あの、だいじょうぶ？」

少女はまるで壊れ物に触れるようにソツと僕の頭を撫で、嗚咽が消えるまで背中をさすってくれた。

その少女が今の嫁さんだ。

白いワンピースの似合う麦藁帽子を被った、肩まで掛かるストリート銀髪の少女。帽子が陰になってその表情はよく窺えないが、

僕が泣き止むとホツとしたように口元に優しい笑みを湛え、

「元気出してくださいね」そう言うってから立ち去った。

その手に血塗られた漆黒の刃を握り締めて。

「……ありがとう謎の少女」

何で幼い少女が血いついたナイフ持っているのか知らんが、僕は彼女の笑みに確かに天使を見た。

膝を着き手を合わせて祈る。

そしてその帰りに事故った。

ハンドル切り損ねてガードレール突き破り崖から落ちる途中、走馬灯の中で悪魔を見た。

「……という馴れ初めだった」

「いい話だね。じゃあ免許証出してね」

白バイ隊員は鼻をズツとすすってから、免許を出せと手を差し出す。

むづ……官憲横暴。

## 怪物ノインタタン

どうにか偽造免許がバレずに解放された。

違反切符を切られる程度で済んでよかった。

安全運転でホテルの前に着き、荷物とキーを預けて車の駐車代行をお願いし、ドアボーイに一礼されてロビーに入ると、総支配人並びに高嶋政伸以下従業員全員が赤絨毯の前で整列し僕を出迎えた。

「ようこそいらっしやいませ！　パク様！！」

「ようこそいらっしやいませ！！」

総支配人が挨拶をすると、それに続いて下っ端どもが一斉に礼をした。

そっぴや人生の最期だと思ってスイート貸し切りにしたんだっけ。

MASANOBUまで出て来るとは格式高いホテルだ。

滞在中に何がしかの問題が起きなければいいが。

「けりゃっ！！」

ガッ！

「うっ！？」

通りがかりになんとなくMASANOBUを殴った。

”何で殴ったの？”と、殴られた頬を押さえて恨めしそうな顔を向けるMASANOBUを背に僕はエレベーターへと向かう。人生とは理不尽なものなのだ。

最上階のフロアに着くと、際どいドレス着たキレイなお姉ちゃん達が僕を待ち構えていた。アメフトでボールキープしてるヤツを狙うがごとき勢いで一斉に襲い掛かって来る。

「先生、お帰りなさい！」

「ばばー！！」

「あんたー！！！！」

「アニキイイッ！！」

「ギョギョギョギョッ!!!」

僕は大勢に揉みくちやにされ、強引に背広を剥ぎ取られた。  
ちよつ、なに!?

小池一夫の漫画に出て来るヤクザの情婦みたいなのは誰!? 背中に刺青見えてんだけど!? 歳四十じゃ利かないだろ!? アンタは”お姉ちゃん”というより”姐さん”だろ!?

魚! お前は人ですらない!!

「はあはあはあ……」

命からがらお姉ちゃん以下おばちゃん 上半身が魚のような怪物などを振り払い、僕は肩で大きく息をつく。巨漢が出揃う大学リーグでだってこんな猛チャージ受けたことねえぞ!

「いいか、呼称は統一しろ! とりあえず、僕のことはお兄ちゃんと呼称ベツ!!」

僕はコンパニオンの女どもに怒鳴りつける。

お姉ちゃん達は……ひい、ふう、みい、十人は居るか。

悪いけどもう帰って貰おうかな……。

でも胸元とか股下とか衣装の際どさがヤヴァイ。

化け物も居るけど美人も居る。

僕の中で理性と欲望が対立する。

僕の理性と欲望を具象化したミニ天使とミニ悪魔が頭の上で争い始めた。

「おりやつ!」

悪魔が天使の輪を掴んで背負いの要領で投げた。

背中を強打して苦しそうにムせている天使の上に跨り、悪魔は巨大なフォークで天使を八つ裂きに。血が飛び臓物が散る。ミンチよ  
りひでえ。というかミンチ。

「じゃあ、部屋に行こうか!」

「ハイ!」

悪魔の圧勝だった。

チユンチユン朝チユン。

ホテルでの一夜が明けた。

昨夜は、お姉ちゃん達と酒飲んで柿の種つまみにマリオパーティーで盛り上がった。

大いに盛り上がった。

だがしかし、エロいイベントなどは特に無かった。というか皆無だった。

「やっべ、何もしてねー……」

営業スマイルを浮かべながら「バイバーイ」と手を振るお姉ちゃん達が去った後、僕はホテル最上階の目玉でもあるパノラマに広がる展望室から大都会を一望しつつ、白いバスローブに身を包みシャパンングラス片手に朝日を浴びている。知らない人から見れば勝ち組のさわやかな朝だろうが、その内心は夏休みの宿題を忘れた子供のごとく焦り逸っていた。

僕は明け方近くまで遊び倒してしまった。

密偵のページ覗いてスルクウの情報を調べたり、信濃川家移転の事案を煮詰めたりなどせず……全部忘れて遊び倒してしまった。

「まあいいや」

後悔しても仕方が無い。

時間の針が戻るわけでもないし、僕は過去は振り返らない男なんだ。

そんなことよりも昨晩の釣果である　お姉ちゃん達の連絡先が詰まったテーブルの上の携帯をチラリと見て、僕はだらしなく顔を緩ませた。これがもし嫁にバレたらタダでは済まないだろうけど、もちろん後悔はない。そのときが来るまでは。

「けりやっ!」

ガッ!

「うつ！？」

身支度を整えホテルを出る途中、メフィラス星人のような顔で口ビーに立っていたMASANOBUをとりあえず殴る。

殴られたMASANOBUは乙女のように膝を合わせて座り込み、恨めしそうちにこちらを見やるが、悪く思わないで欲しい。人生とは嵐のごとく理不尽なものなのだ。

だが……やまぬ嵐など決してない。

今は激しい嵐のときでも、耐えて忍べばやがて静かな風が来る。

MASANOBUよ……キミは大空に羽ばたく鳥となれ。

などと人生賛美を心の中で詠った僕は、街頭で貰ったマツクの割引クーポンを財布から出して、甘い嫌いだからアップルパイのだけ千切ってMASANOBUの胸ポケットにさりげなく収めた。

「チップだ。遠慮せずにとつとけ」

「ど、どうも……」

クーポンの収まった胸ポケットをポンポンと叩きアルカイックなスマイルを浮かべると、MASANOBUは胸を押さえ複雑そうな顔で頭を下げる。

人生とは本当に厳しいものなのだ。

下等な民に人生訓を与え大いに悦に入った僕は、歩いて2分ほど先にある駅前のマツクに向かう。財布のクーポンを使うつもりだ。

朝早い店内は店員を含めて数名程度、掃除の行き届いた清潔な空間に耳心地のよい緩やかな音楽が流れている。マツク常連である僕は迷うことなくレジに向かい、モーニング・セットのクーポンを差し出す。

「ムウヌイーセエーツットウ！」

英語圏の異文化に触発されそれを至上としそれを相対的により高次にする為にそれ以外を劣等とする極端な傾倒をする自己の無い軽佻浮薄な若者にありがちな哀れで滑稽で無駄なくらいネイティブ意識した巻き舌の発音でモーニング・セットを注文したが、発音が上

等過ぎた所為か、ヒアリング出来なかった店員さんはキョトンとした顔。

「むっ……」

仕方ないから普通に言いなおすと、今度はクーポンが期限切れかつ韓国のものである使用出来ないと丁寧に断りされた。

ガツカリである。

「じゃあ、スマイルください」

「はい（ニッコリ）」

お下げの店員さんが美人だったのでクーポンの代わりに駄目元でお願いすると、店員さんは嫌な顔ひとつせず可愛らしく小首を傾げ、パツと花が咲いたような笑みを浮かべた。

腰を低く構えて上目遣い。

手はお膝。

豊かな胸が腕に挟まれ強調され……官能的な絶景が生まれた。

「……くっ！」

思わず手が伸びそうになるが、僕は必死にかぶりを振る。ドイツのごときただひとつの吸引力に思わず引き込まれそうになるが、断固たる意志の力で思い止まる。

騙されるものかっ！！

僕はおっぱいの所為で嫁に籠絡され結婚させられたのだ。

嫁のおっぱいにさえ惑わされなければ、僕は鳥のように自由に空を飛ばたいと思う。そう思うと悔しくてならない。

「あの……写メ撮っていいですか？」

おっぱいはとてつもなく憎いが、それでも彼女の胸は後世に残すべきであると判断した、私怨に流されぬ賢明な僕は、携帯を構えながら店員さんに撮影許可を請う。客と店員の立場であり、さらに構えてお願いしてる時点で有無をいわせぬと言っているようなものだが。

「はあ……いいですけど？」

店員さんはよくわかってない様子だったが、突然の無理なお願いに笑顔で快諾してくれた。

『ソレイン・リュスカ』。

僕は即座にネームプレートを確認し、それを頭の中に深く刻んでおく。

名前の上に小さく書かれた姓名は”ソレイン”を姓として”リュスカ”を名としている。異国人のようだが普通に日本読み。

妖精のような美麗な顔立ち、黒鳥の濡れ羽のように美しい黒髪、穢れ無き幼子のように真っ直ぐな瞳の奥には無数の星々が瞬き、そんな彼女の神々しいまでに眩しい笑顔ときたら、少年の日の憧憬を思い出さずにはおられない。子供のノアなど足元にも及ばぬ成熟した大人の美しさ。ひとつひとつの仕草に初々しさと隠し切れぬ貴品が溢れる。東洋の島国にこんな至宝が埋もれていようとは。

いとしい女よ……仕事終わったらまた逢おう。  
僕は切なさを胸に秘め、モーニング・セットが出来上がるのを待った。

絶世の美人に逢えて幸先のいい一日だ。

後で絶対に来よう。

ゆるんだ顔のままモーニングセットを載せたトレイを持って細かい階段を上る。おっさん一人しか居ないガラガラの二階フロアをザッと見回し、奥まった席に目を付けそこに陣取ると、テーブルの下コンセントから勝手に電源を拝借してノートパソコンを起動。OSが完全に起ち上がる三秒を待ちつつ、アツアツのコーヒーを啜る。  
「うん」

コーヒーをノドに流し込むと胃袋をカッ熱くしてくれる。

原価2.5円とは思えない満足感。

僕は方々を忙しく飛び回る仕事柄、カップ麺とか袋パンとか簡易食や携帯食で食事をまかうことが多く、金はあるけどホテルで飲む

高級で香り高いコーヒーをあまり好まない。好きなのは、こう……ドブのような、ドン底のような、人工的な、屈辱を煮しめたような下卑た味が好みなのだ。駄菓子とか。ヨーグルトっぽいものとか、30円のカツじゃないカツとかな。

『密偵のお部屋』

いつ見ても女子高生のブログにしか見えないホームペにブックマークから移動する。検索エンジンから画面が切り替わると、更新されたばかりのスнкуウのバストアップ写真が目飛び込んで来た。

白い潇洒な服を着た流し目でカメラ目線のスнкуウが口に赤い薔薇をくわえ手拍子。

何があつた義弟……？

「ん……？」

顔写真が強烈過ぎて気付かなかつたが、ふと見るとカウントが少し上がっていた。おそらく嫁が来たのだろう。

何の繋がりか知らないが、嫁は密偵とわりと親しい間柄らしい。

僕直属の密偵はこのキャピキャピしたヤツが三代目で、初代の密偵はガタイのイイ爺様、二代目はやり手のキャリアウーマン風的美女。いずれも劣らぬ実力者達であつたが、寿命で死んでしまつたり寿退社してしまつたりで結局、嫁から紹介された三代目が一番長い付き合いになつている。

三代目の密偵は、忠義度MAXの嫁が紹介した密偵。当然調べるまでもなく優秀で、諜報戦でスнкуウのグループを大きく出し抜き、お陰でパク家での主な情報戦略や交渉ごとは僕に任されるようになった。

神出鬼没にして大胆不敵。

最先端の高度な諜報技術を駆使し、世界中のありとあらゆる機関に非常に緊密な情報網を持ち、闇から闇へと移り潜む漆黒の隠者。歳や背格好はもちろん、男とも女とも知れず、やりとりはメールか掲示板で済ませているので正体はまったくの不明。密偵が掲示板で嫁のことを「お姉ちゃん」と呼ぶことをそのまま受け取るなら、密



偵はテイ家の身内でありレギオンの一員ではないか　と僕は推測している。並外れた超人的な能力から察するに、それは当たらずも遠からずといったところのようだが。

「更新状況は今日の日付で”New”になってる。……朝早くなのに、コイツいつ寝てんだ？」

不思議に思いつつ掲示板を開き、過去に遡ってスルクウの動向をチエックする。

スルクウは部下から連絡を受け、パナマの量子医療研究施設の視察を終えてから自家用ジェットで日本へ直行している。首都にあるソソ系列の専用飛行場からヘリに乗り換え大阪へ移動……その間に僕の密偵が独断し、誤情報をチラつかせるなどして到着を数時間引き延ばしたようだが、埠頭付近を移動中に原因不明の超局地的電磁波障害により一時通信途絶、目標を22分31秒ロス。その間、ホテルへ行く途中で僕とスルクウが鉢合わせた　とログに記録されている。

「不測の事態か……妙なタイミングだな」

まあいい。今片付けるべき問題は信濃川家だ。

借金苦に追い込んでこちらに引き入れる段取りは付いているが、予定通り上手く借りを作れたとしても彼女らは僕を毛嫌いしていることに変わりはない。特にノアなんてあの歳でかなりアナーキーな少女だし、“バンダイナムコ”を“ナムコバンダイ”と言ってはばからぬほど捻くれている。下手な援助では警戒心を触発し却ってマインナスに働きかねない。だから事が起こるまで、点数稼ぎはこまめに積み重ね大きくしておくべきだろう。

「さてと、そろそろ行くかな」

ほとんど手付かずだったモーニング・セットを一口にたいたらげ、最後に流し込むようにコーヒーを飲み干し、ノートPCを鞆にしまつて席を立つ。

とりあえず何かプレゼントでも買って行こうか。

贈り物は、女性に限らず誰でも嬉しいものだ。サバ缶でも。

「帰れっ!!」

部屋の前でノアは僕を怒鳴りつけた。

ことの次第はこうだ。

車で信濃川家を訪れた僕は、階段を上がりノアの部屋をノックして、ドアが開くなり彼女にさわやかな笑みを浮かべた。

ノアは潰れたゴキブリを見るかのような眼で僕を見上げたが、それを涼やかに流し、背中に隠していた大きな箱を彼女の前にスッと差し出す。

「なに……これ？」

「プレゼントさ。お姫様」

「……」

綺麗な包み紙で丁寧にラッピングされたリボンの付いた大きな箱を受け取り、ノアは困惑したように、一瞬ほころんだ顔を隠すように僕から視線を逸らした。

プレゼントは不意を衝くほどに効果は跳ね上がる。

驚きと喜び。

思いもかけぬサプライズ・イベントは乙女心をくすぐる一助となるだろう。

そう雑誌に書いてあった。ゆえに真理。

「……開けてもいいの？」

「どうぞ」

開ける サバ缶。

「帰れっ!!」

とまあ、こんな流れだ。

箱いっぱい詰まったサバ缶が力まかせに放り出され、床を縦横無尽にコロコロ転がる。

クソ……選択を間違ったか。

実はノックの直前、僕の心の中の何シャダイかが警告を囁いていたのだが、気が逸っていてソレを無視してしまった。

心の中でシャダイは言った。

「そんなサバ缶で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

僕はフンと鼻息を鳴らしドアの前に立つ。

しかしシャダイはなおも食い下がり。

「おいおい、本当に大丈夫なのか？ そのサバ缶の山盛りはワゴン特売品だろうか？ 鈴木商店の、賞味期限切れ間近の、一個25円のだよな？」

「大丈夫、食える」

「……いやいや、よく見る。もう一度よく見てから考え直せ。冷静になれ……女の子へのプレゼントだぞ？ しかもなんか膨らんでるだろ？ フチ錆びてんだろ？ 悪いことは言わない……それはやめておけ」

「……大丈夫だ」

僕は警告を無視してドアをノックした。

神は言っている。

プレゼントは内容ではなく気持ちの問題だと。

しかし結果は惨憺たるものであった。

「神の嘘つきめ……」

床に散乱したサバ缶をグリグリ踏みつけ、眼を三角にして子犬のようにキャンキャン吠えるノア。

こんなことになったのも全部神の所為だ。サバ缶の所為だ。

「サバ缶を裁かん！！」

サバ缶を踏みにじり、怨嗟の声を上げ、手で逆さ十字を切り、僕は最大の怒りと最大の憎しみを込めて神を呪った。

「誰がうまいことを言えと言った……ワケわかんないこと言っただい片付けてよ！」

「はい！」

コロコロ転がるサバ缶を拾い集めながらノアが怒鳴ったので、僕はいつしよにサバ缶を掻き集めた。

拾い損ねたサバ缶が階段をテンテンと跳ね落ちていく。  
「フンガッ!!」

ドゴッ!!

僕は頭上で組に合わせた拳を「噴ッ!!」という気合と共にハンマーのように振り下ろし、床板を爆砕した。

気を一点集束させた波状衝撃によってボロ屋は波打つよう上下に震動し、勢いよくバツクスピンの掛かったサバ缶が二階に戻ってきたので、僕はそれを優雅に拾い上げる。

「……ふっ」

「ちよつと、床板壊さないでよ!!」

「アウチっ!!」

サバ缶を手にスツと髪を掻き上げると、ノアに尻をおもいつきし蹴つとばされた。

「もうっ! どーすんのよ、コレ! 廊下に穴が開いて階下の母さんが見えてるじゃないの!? 引越し前なのに弁償モンよコレは!!」

「すいません、つい……」

ノアに叱られつつ下の居間でお茶を飲んでいたジウ様に手を振ると、株価が大暴落したような張り付いた笑みを返して下さった。

何だか計画が大きく遠のいた気がした。

久しぶりに気を開放したけど、破壊力余って余計な損害を招いてしまった。もつと修行が必要のようだ。

さて、気とは……僕がスнкуウに敗れて少しした後、衝動的に中華の魔大陸へ武者修行に出て、旅先の霊山で出会った火羅カラという密教の導師に金の御殿を寄付して教えて貰った秘術である。火式錬気術と呼ばれるそれは、体内を巡る生命エネルギーを練り上げ攻撃力に転化させる術で、広い世界を探しても指折り数えるほどしか存在しない『羅将』と畏れられる仙人レベルに達すると、空を自由に舞

い、大河を自在に逆行させ、大地を断ち割り、触れただけで金属を溶かすそうだ。見たことはないけど。

「あゝあ、こりゃひどいわね……。あー、ほらほらっ、さっさと片付けて！」

「はいはい……。いや、あのさ、今、僕、素手で床を爆発させたのだけれども、それについて何か感想は持たないのか？ 氣とか使っちゃってんだけど……」

「氣を出すくらいの中二設定じゃ最近の子供は驚かないわよ。うちの学校じゃ、白髪でオッドアイでアイパッチして頬に傷があつて幼少のころに両親を謎の組織に殺されて復讐を誓っている孤高の男子がいるけど、そーいうのはべつに珍しくはないわ。そこら辺を探せばすぐに1人や二人は見つかるもの」

「それはパーフェクトな中二病発症者だな……。日本始まつてるな」

ノアの言ったことは驚きだが、そんなヤツが現実に居るならぜひ見てみたい。純粹にそう思った。

でも僕が子供の頃って、もっとこう……。物事に対して大きくリアクションを取ったもんなんだがな。目の前で床板プチ抜かれたら、普通は呆氣に取られて言葉を失ったり、こう……。青ざめた表情で二歩、三歩とあとじさつたりするもんだろ？ あーあ、ゲーム世代は醒めてて嫌だね。

おっ、そうだ、ちょっと想像してみよう。

小学生の頃の僕を思い浮かべて。

真っ白い広大な空間に利発そうな少年が立っている。赤い蝶ネクタイにチエック柄の半ズボン。まさに坊ちゃん然とした格好。とても凛々しいがどこか冷たそうな表情。そうだな……。可愛いというよりカッコイイという表現が似合いそうだ。

「やあ、さすが僕だ」

苦労や挫折を知らず天才を自称していた若かりし自分を懐かしみ友達気分で気安く近寄ると、横目で一瞥されたあと「チッ」と舌打ちされた。

僕なのに態度悪いな……僕が下手に出ているというのに取り付く島もない。

でも他人に気を許さない僕、ちよつとカツコイイ。

「まあまあ、そう警戒しないでくれよ。僕は僕のことをよく知っているんだよ？ キミは」

「けりやつー！」

ガツー！

「うっ！？」

孫を見るような生暖かい目で手を差し伸べるとその瞬間、子供の僕がいきなり爪先でスネを蹴って、そのまま脱兎の如く走り去った。

「ばーか！ 死ぬー！」

「テメツ、この野郎！？ 僕の分際でなにしゃがるっ！！！？」

ものすごい逃げ足であつという間に距離を取り、こっちに向けて中指を立て挑発するガキ。

僕は蹴られた足を抱えピョンピョン飛び跳ねながら、ガキというか僕のでかした凶行を罵った。

「うっ、うっ……ぐすっ……チクシヨウ……！」

「ちよ……！？ ちよつとナニ？ 何で泣いてんの？ なぜに！？」

「僕が僕を馬鹿にしたんだ……ッ！ 僕が僕を馬鹿にしたんだ……」

ツツー！

「……？」

悔しさに泣きはらしている僕を見て、ノアは気の毒な人を見るような顔をした。

「すまない……いきなり泣いたりして驚いたろう」

「ホント……どん引きだよ。下手すりゃ爺孫くらい歳離れたおっさんが鼻水垂らしながら泣き始めたらどうリアクション取ればいいのか判らないわ。だから泣き止んで欲しいのだけれども。切実に」

「……ああ、すまない。もう大丈夫」

「ホントに？」

「言っても解らないだろうけど、僕は自分に負けてしまったのさ。」

天才と信じて疑わなかった輝かしい時代の僕にね」

「病院……を紹介するべきかしら……親戚として……一応……」

「病気ではない。だから落ち着くんだけ」

「アンタが落ち着けよ」

病院は御免だと必死にすがりつこうとしたら、その前にノアは僕の頭を踏みつけた。

ノアの片足が上がった刹那の時間、スカートがふわりと翻り、紳士の僕は慌てて下に目を逸らした。

「ぐへっ！」

その結果、モロに床板を舐める羽目になった。

ノアからサバ缶の山をつつ返され、足蹴にされ、精神疾患まで疑われる始末。

このままではご機嫌取りどころか黄色い救急車を呼ばれてしまいそうな気がしたので、とりあえずほとぼりが冷めるまで信濃川家から一時撤退することにした。

「じゃあ、そういうことで……」

「どういうことよ!? どこへ行くのよ!?」

「……すまない。ちよつと用事があるから一度帰るよ」

「用事って……床の穴はどーすんの!?」

さりげなく退散しようと廊下の窓を開けて窓枠におもむろに足を掛けるたが、ノアは僕の背広の端を掴んで断固として止めに来た。

「フツ……そんなもの敷金で修繕してもらえばいいだろう」

「足りるかっ！」

「だから、こんなボロ屋なんて引き払って韓国に移住すればいいんだ。金なんか腐るほどあるぞ。ぜえ〜んぶ君ら親子の物だ」

「そ、それとこれとは話がべつよ!!!」

憤懣やるかたなしといった様子で詰め寄るノアをまあまあと宥めつつ僕は、彼女の気を一瞬逸らそうと、窓の外を指差して叫んだ。

「あーっ!!! あそこにノンタンタンがいるぞッ!!!」

「え……？ ああ！ ホントだ！ ノンタタンがいる！」

「え……？」

マジで！？

ノアの意外な反応につられて思わず外に視線を向けると、なんとそこには 小学生低学年くらいの体躯をした白猫のような怪生物が、ニコニコしながら公道をスキップして通り過ぎようとしていた。「タンタタン、ノンタタン タンタタン、ノンタタン、ノンタタン」

「わあっ！ ノンタタンだ〜！ なつかしい〜！ ノンタタン！」

ノアは窓にへばりついて夢中でノンタタンに手を振っている。

してノンタタンとは……北朝鮮放送の子供番組に出て来る五匹組の大人気マスコットキャラである。

着ぐるみの造形があまりにクオリティーが高く、合体ロボに乗って悪を討つという斬新なアイデアとその愛くるしい姿に世界中のファンが熱狂し、韓国ですら名誉国民に認定されるほど親しまれている国民的キャラクターだ。世界中で翻訳され今でも頻繁に再放送されているので、現代っ子のノアが知っていてもおかしくはない。

だが……騙されてはいけない。

政府中枢の情報すら統括する僕は、あの化け物が何なのか知っている。  
アレは恐ろしいものなのだ。

かの有名なエリア51と並ぶほど大々的に報道された三十八度線でのUFO墜落事件から数ヶ月、韓国の都市郊外で謎の生物の目撃例が多く寄せられることになった。

それはノンタタンのような人型のネコであったり、都心でコンパニオン嬢やってる半漁人だったりすれば、身の丈が三十メートルを越す顔の無い白い巨人であったり、空を飛ぶ大口の生首であったり……とにかく地球上で存在するはずもない異常なカタチをした化け



物が一斉に突如として発生した。メディアはUFO墜落事件と怪生物の存在を面白おかしく結び付け、公共の電波を使って無責任に愚にもつかぬ流言蜚語を撒き散らしたが、実はそれが的外れではなかった。

怪物の出現した発端はおっしゃるとおりUFOにあり、拡散の原因はおっしゃるとおり韓国軍直結の研究機関が深く関わっていた。

軍の研究チームは墜落したUFOの残骸から採取した未知のDNAデータマップを参考に現存する動物、植物、昆虫、菌類……果ては生きた人間まで使ってゲノムを掛け合わせ、低コストで量産可能な国産の生物兵器の研究を進めていた。その実験の過程で生まれた知性の乏しい　または制御が利かぬほど知性が高すぎて破棄された異形の生き物こそが　僕の目の前をスキップしているヌコなのである。

「この野郎！」

こちらら去就を懸けて必死だというのに呑気なネコ。腹が立つ。人の幸福は僕の不幸だ！！

僕はカツとなってポケットに突っ込んでいたサバ缶を素早く取り出し、窓の外に見えるノントタン目掛け力の限り投げつけてやった。「おらあつ！！！」

遠投で150mラインを楽々越える僕の鉄砲肩から繰り出されしサバ缶はまるでレーザービームのように一直線に飛び、狙いたがわずノントタンの後頭部にクリーンヒット。

スカーン！！　という快音が閑静な住宅街に鳴り響いた。「ノ、ノントタン！！？」

不意打ちで物をぶつけられたノントタンは絶叫しながら俊敏に振り返り、獯猛に血走した深紅の双眸を怒りに輝かせながら大きく牙を剥いた。

腐っても兵器仕様に調整されたヌコだ、戦闘態勢に入ると空気が固化しそうなくらい強烈な殺気を放ち、毛皮の下からでも判るくらいビクビクと筋肉が隆起し……マジで怖いものがある。

「ちょっと！ なにやってんの！！ ノンタタン可哀想でしょ！！」  
「君はまだ若いからわからないんだ……世界を識るにはまだ早い……じゃあ、あとでまた！」

「ちょ……！！」

そう言い残し、背を向けたまま二階から飛び降りた瞬間、ノアの驚いて息を呑む表情が見えた。

だが案ずること無かれ。

軽業も僕の得意分野だ。

僕は余裕の表情で身伸ばしたまま一回転してブロック塀の上に着地だが老朽して脆くなっていたか、両足が着いた瞬間にボコツという音がしてブロックが外れ バナナの皮を踏んだみたいに足を滑らせしこたま後頭部を地面に叩き付けた。

「おぐっ！？」

地面からさほど距離はなかったものの頭を強打してウナギの如くのた打ち回る。

「ちょっとー！ なにやってんの！？ 馬鹿なの！？」

「……ぐおおっ！！ だ、だいじょうぶ！ だいじょうぶ……だからー！！」

「足メツチャ震えてるじゃん……」

冷酷で無情な少女だが、怪我人を追い討ちするほどの悪意はない。だが着地の失態によって気付かれてしまったようだ。

猛獣と化したノンタタンが立ち止まりこちらをギツと凝視していた。

「……来るならこい！」

僕は拳銃の早撃ちのように懐に手を差し込み、素早く抜き出した携帯の短縮プッシュ 昨晚の酒宴の際に登録したコンパニオン嬢

『ミヨ（自称18）』をTELにて召喚する。

さらに即効魔法発動！！

特急料金を支払い個人ハイヤーをフィールドに特殊召喚！！

ミヨが到着するまでのターンを一気に繰り上げる！！

ノンタタンと睨み合いながら二分経過

法定速度ブツちぎったタクシーが太陽の光を背に勾配を飛翔し、土煙を上げながら颯爽登場。僕の背後から風と共に走り抜け急ブレーキ チョロQのように回転しながらノンタタンを遮るように横付けに急停車した。

「おまたせー！」

「よし来い！」

タクシーのドアが開き、額にキラリ汗を光らせ、待望のコンパニオン・ミヨが僕のために馳せ参じた。

僕は高貴な女性を馬車からエスコートするような優雅な仕草でミヨの手を取り、ノンタタンの前に誘導。そして命じる。

「よし、行け！」

「え？？ い、行けって……？ あれ、ノンタタン……だよね？  
ど、どうすればいいの？」

完全に異形と化したノンタタンの方を指差し命じると、ミヨは困惑した泣き出しそうな表情でかぶりを振った。

「戦うんだ……それしかない」

「グルルル……！！」

にじり寄るノンタタンと僕を交互に見たミヨは、イヤイヤするようにまたかぶりを振り、必死にすがり付いて来る。

「む……無理無理！！ 無理だつてば！！ デートするんじゃないか  
つたの！？ 二時間八万円……って聞いたのに……」

「むう……資本主義の国だな。わかった、金を出そう。幾ら欲しい  
？」

「じよ……冗談でしょ？」

「冗談なものか。いま小切手を書くからな。えっと……五千万でいいか？」

「え！？ はあ！？ ごせつ……！！？ ちょっとちょっと！ だからなんでそうなるの！？」

「駄目か……んじゃ六千万？ 七千万では？ ふむ……八千万と



” 王様ゲーム！ 王様僕でーす！”

” 田舎のおつかさん肺を悪くしちゃって……アタイがお金稼がなきゃ駄目なんだ”

” ふーん（鼻をほじりながら）”

” マリオサンバ！！”

” 実はな、おらあスパイなんだぜ！！”

” キャー素敵！”

” マリオサンバ！！”

「マリオ……サンバ……！」

「グ……グルル？」

安息の日々を……幸福の時間を……僕は一瞬にして失った。

金にあかせて女性をポケモン扱いするべきではなかった。相応の対価を払ったのだから相手の責任だ。なんてことは口が裂けても言えない。

そんなの……ポケモンボールの中が気持ちいいからという理由でポケモンの自由を奪ってもいいと言つると同じだ。その論理が成り立つなら、人間を麻薬漬けにして奴隷にするのも気持ちいいからいいだろうというのとさして変わらない。僕はそんな任天堂になりたくはない。SEGA派だし。

正直……心底悔やんでいる。

それでも感傷に浸ることなど戦士には許されない。

僕は運命という名の呪縛から抗い、自分で選び望んで戦場に立った。

その責は全て自分が負わねばならない。

たとえどんな艱難辛苦が待ち受けていようとも。

「ミヨの仇だ……思い知らせてやるぞ化け物め!!」

「仇つつーか、アンタの所為で死んでない!？」

惨劇とノンタタン見たさに降りて来たのか、玄関の前に立つノアが的確なツッコミを入れて来た。

「言い訳はしないよ……僕が彼女を死に追いやった。極東の拝金主義者の女術に小銭をやって優越感に浸りながら怪物と戦わせた。恥知らずな俗物だ。だが……それでも自分を否定しないのが上に立つ者の宿命だ」

「……医者へ行け」

「……断る。責任の放棄はできない。僕は多くの命を背負ってしまった。せめてノンタタンに一矢報いるまでやめるワケにはいかないんだ……」

「ノンタタン!!」

拳を握る。強く。重く。固く握る。

小指から順に折り畳み岩塊のように硬く固める。

その握力はパーベルのシャフトを指の形に歪ませる。

ギチッ

久しぶりに握った拳の感触を確認するよう太く大きい指を擦り合わせる。粘土をへうで切ったような深い溝が幾重にも浮き上がる鮫肌の掌が、ギコを弾くような音を鳴らした。サンドペーパーから始めて金ヤスリで慣らした掌は、軽く掴んで引くだけで対象の皮膚を肉ごとこそぎ落とす。衣服を引き裂き、金属の表面すらカンナのように削る。

「ちょ、アンタ……」

感覚の鋭敏なノアは僕の闘気が充実していくのに気付いたようで、血の気が引く緊迫した頬にじわりと汗を滲ませている。

「フン……見せてやるよ」

小細工なしの一発勝負を。

僕みずからが打って出るという意味を。覚悟を。

研ぎ澄まされた白刃に等しい鉄爪を携えた白猫の異形は、三日月に吊り上る口元に嗜虐的な笑みを湛えている。

血に餓えた荒い息を大きく吐きながらもヤツは拙速に動かない。

体格差を警戒しているのもあるが……非常に狡猾だ。

ヤツは人間を識るからこそその狡猾さを持つている。

その愛らしい外見を巧みに利用して人間社会に溶け込み、世界中で人気を獲得する日々の中、人類の寝首を搔かんと絶えず爪を研いでいたのだろう。何年も何年も辛抱強く。

「だが死ね」

僕が口火を切った瞬間、誘うように鬨氣の放出を弛めた刹那、ケダモノは血塗られた赤の口腔を拡げ、二十m近い距離を一気に詰めて飛び掛って来た。

想像する 最強の姿を。

想像を凝らし創造する。

無きものを有るべきものへと。

理想の力を現実のものへと昇華させる。

体の奥底から湧き上がる巨大な熱エネルギーをただ一撃の破壊力に変え 敵に背面を向けるほど上半身を大きく捻り込み、鬨氣によつて灼熱の鉄槌と化した右拳を振り被る。

円盤投げのような体勢から弧を描くように繰り出された鉄拳が肉迫するノンタタンの眼前に振り下ろされる。唸りを上げる豪拳は炎の如く熱を孕んだ熱風を発生させ、瞬きの間も与えず敵の視界を焼き尽くした。

「グギヤアツ!!?!」

動物の運動性能を以てしても回避不能な攻撃によつて、熱湯を掛けたように顔面が焼け爛れたノンタタンは激痛と混乱によつてジタバタ暴れ狂った。

「しゃあっ!!」

僕はすかさずノンタタンの背後に回り、両肩を鷲掴みにする。

拳はフェイント。

本命は凶器と化した掌による惨殺狙い。

ただでは殺さない。

まずは手足を潰し、動けなくなったところでジワジワと痛みを与え、ミヨの無念を存分に晴らす。

両手を武器化する為に器具で皮膚を削り取り、皮膚が再生する合間に特殊な鉄粉を塗り込み、それを何度も繰り返す。層が厚みを増してくると今度は少しずつ形を山形に整えた。硬質化した掌中は触れるとコツコツとした重い感触があり、先端は内側に向けて鋭くなっている。手を広げると無数の口がパクリと開いているように見え、その掌に触れた箇所は全て急所と化す。

ぶちぶちっ

掴むとほぼ同時に肩口の肉を掌が”噛み千切った”。

高密度の筋肉の塊も、この掌に掛かれれば圧力鍋で煮込んだポトフのように柔らかい。僅か一秒の間に素早く肩から肘に掛けて左右三度ずつ。六もの肉を噛み千切ると、ノンタタンはようやく自分の腕から白い骨が見えているのに気付き、この世のものとは思えぬ悲鳴を上げた。

両の掌を開くと、何層にも分かれた掌の隙間から、風糸のような筋繊維の糸を引く毛皮付の肉がベチヨツと地面に落ちた。

「ヒギヤアアッ！！？　　グアギヤアアッ！！？」

ブレイクダンサーのように転げ回るノンタタンに構わず狙い済まして背面を強蹴。一気に扉際に寄せ、追い詰めたところで今度は太腿に手を添える。

ぶちぶちっ

無数の繊維の糸が千切れてほつれるような音を立て、まるでピラ



ニアのように凶悪な牙を剥く両掌が馬脚の如く肥大化していたノ  
タタンの脚を何度となく難無く食い千切った。

脚、足、臀部、脇腹、背、首筋、左頬　ハンド・ドラムのジ  
ョン・ポーナムのように手を振り上げる度ノタタンの肉が削れ、除  
々に骨が覗いてくる。

「う……………うぐ……………」

残虐な解体ショーに耐え切れなくなったノアが、塀に寄り掛かっ  
て苦しそうにえづいた。

初めツンツンのちにゲロ。

これがツンゲロというやつか。

いや知らないけど。

「フツヒヤツヒヤツハア……………!!　泣けエ!!　叫べエ!!　CV:  
千秋でなああッッ!!」

もういつそノンタンって言っちゃえよとばかりに叫びながら、僕  
は振り上げた両掌で敵を蹴り続ける。

肉を筆られ続けるノタタンは驕る前の千秋のような絶叫を上げ  
るが、だが目の前の血塗れのこいつはノンタンではない。あくまで  
”ノタタン”だ。

”ノタタン、ノタタン、どこいくの?”

「地獄に逃げやああッ!!!!!!!!!!」

「ギヤアアア……………ツツツ!!」

馬乗りの状態であらかた胸周りの肉を筆り尽くした。

剥き出しになった肋骨を掌でバキバキ切断し、全てを切り終える  
と上から順に観音開き。鉄棒のように硬く柔軟な骨がミシミシ音を  
立てハの字に開いていく。

「そいやっ!!」

肋骨を開いて完全に無防備にすると、今度は、小刻みに脈打ち湯  
気が立つ鮮紅色の内臓に、思うさま両腕をつっこんでグチャグチャ

に掻き回す。

どろんこ遊びのように。

合挽肉を入念に混ぜ合わせるように。

とても苦しんで無残に死ぬように。

グチャグチャドロドロに。

「クツクツクツク……！」

腹の底から哄笑がこみ上げて来る。

どれほど痛めつけてもノンタタンが死なないからだ。

高圧縮ゴムの塊のような強靱な心臓を握り潰し、肺腑を掻き混ぜ、半透明のソーセージのような腸を引きずり出し、無造作に指で神経や血管を引きちぎり、ここまでしてまだ死なない。そこかしらに散らばった肉片のほとんど、どれもが別個の生き物のように収縮し跳ね上がらんばかりに動いている。昆虫に匹敵する素晴らしき野生の生命力。

「う……気持ち悪い……」

我慢の限界だとばかりにノアが扉を背にしゃがみこんだ。吐くのはギリギリ留めたようだが、顔から少々血の気が引いている。

「物見遊山はもういいだろう……家に入っている」

「うん……」

さっきまで「キヤーカワイイ抱いてー！」と、しなをつくりながら言っていたのに……まったく薄情な。ゲーム世代のリセット感覚だな。

「さて……そろそろ終わりにしようか」

「……」

脳の許容を遥かに超えた激痛に晒され続け痛みすら感じなくなつたのか、安価な硝子細工のように光が失せたノンタタンの虚ろな眼は、ただ静かに虚空を見つめている。

さてフィニッシュは、敢えて手付かずにしておいた頭を潰して仕舞いしよう。

言わずもがな頭はゾンビの急所。

如何に強靱な肉体を持つ生物でも脳を破壊されては生存できない。

「じゃあな、高視聴率！！」

「……」

僕はトドメとばかりに右の拳を握った。

だがそれを振り下ろすでもなく、据えるようにノンタタンの額に押し当て、そのままジワジワと沈めていく。

「ヒギツ！ ヒガツ！ イギ……ア……ガ……！」

頭部が圧壊寸前に近付くと、ノンタタンの眼は飛び出しそうなくらい大きく見開かれ、鼻孔からは灰褐色の脳髄が pasta のようにニョロリと押し出され口の中でトグロを巻いた。棘のある長い舌は芋虫のようにモゾモゾだらしく口元で蠢き……逃れられぬ死を目前に小波のような痙攣が始まる。

僕はそれでも黙ったまま拳を押し当てる。

「……イギイ」

人よりも遥かに厚く硬いボーリング球ほどの硬度を誇る頭蓋骨はやがて……スイカのように押し潰された。

その間際、喉から搾り出された吃音のような断末魔が微かに響いた。

無事に害獣の駆除を終え、一息ついて額に浮かぶ汗を袖で拭う。

世界に貢献するいい仕事をした。

さて、たくさん汗を掻いたから信濃川家のアバラ屋でシャワーでも浴びようかな。シャンプーハットがあればいいのだけれど。

どんどんどんっ

「おーい、開けてくれ！」

「いやよ。アンタみたいに獣臭漂わせたの家に入れたら臭いがうつるでしょ」

熱の籠った胸元をパタパタ開きながらドアをノックしたが、あえなく門前払された。

……まあ無理も無い。

仮に逆の立場だったら僕は入れない。

交尾中の犬を追い払うがごとく水をブツ掛けるだろう。

「しかし参ったぞ……世界的に有名なアイドル動物が惨死してご近所さんが野次馬に集まって来てるし、騒ぎを聞きつけてパトカーのサイレンも近付いて来ている」

昨晩のこともあるし警察は苦手だ。

職質されないかとソワソワする。

そんな犯罪者特有の強い焦燥に駆られるが……だが警察が来ても特に問題はない。

それはなぜかと言うと、ノンタタンはこの世界ではよくわからない生き物に位置付けられていて、動物ではなくもちろん人間でもなく、謎の生物として扱われている。よって保護対象になりえないのだ。

ドル箱アイドルなので北朝鮮や韓国、動物保護に力を入れているドイツなんかでは不思議生物を保護する法も存在するが、ジャンル分けできないよくわからない生き物をこの国で”S A T S U G A I”しても、今のところそれを取り締まる罰則はないのだ。……まあ罪に問われるとすれば、せいぜい猛烈な汚臭を周囲に撒き散らしたくらいで、それは小銭を握らせて軽いお小言でも食らえば済む話……なんだけど。

「いやああっ！！ ノンタタンが死んでる！！」

「なんてこった！！ ノンタタンが殺されちゃった！！」

「このひとでなし！！」

だが法律など関係なく、平日の日中から暇そうにしてる諸人達はノンタタンの死を我が事のように怒り、血とミート塗れの僕に人殺しでも見るような禍々しい視線を向けて来る。

なんとということだ。

遵法精神のカケラも無い無軌道な連中が僕をリンチに掛けようと包囲している。

「まっつてくれ民草ども！　これは正当防衛だ！　僕は悪くない！」

「何が民草だ馬鹿ヤロー！！」

「死ねえ！！！」

アメリカ人のような仕草で大きく肩を竦め、いわれなき糾弾に抗議したが、怒りに燃えた民衆にそんなフランクな態度は火に油だった。敗戦を目の当たりにした直後のフリーガンのごとく一斉にブーイングが始まる。

「クソ……こつちが下手に出てればいい気になりやがって！！」

「アンタがいつ下手に出たよ！」

今にも飛び掛つて来そうな暴徒に取り囲まれ齒軋りしていると、二階の窓からひよっこり顔を出したノアが即座にツツコミを入れて来た。

「うおうい！　いい加減に開けてくれ！」

「いや」

「そんな殺生な……」

救いを求め太鼓の達人みたいに玄関の扉を叩くが、ノアはぶいっと顔を逸らし頑なに開錠を拒む。居間で茶をすする母親に至ってはガン無視を決め込んでいる模様。

ヤツラめ！

親戚の僕を見捨てるつもりだな！？

「破アツ！！！」

状況的に緊急避難が成立すると判断した法に明るい僕は、直ちにドアノブの上を正拳で貫き、穴に手を差し込んで鍵を開けた。

「あ、逃げるぞ！！！」

「追え！」

敷地の前に群れをなしていた群集は、僕の行動を契機に門を押し破つて侵入して来た。

「遅い」

僕は扉の隙間から滑り込むように家に入り急ぎ施錠、人差し指と親指に挟んだ鍵錠に強力な火氣を送り込んで稼動部位を熱融解

手を離すと橙の光を仄かに残す鍵が直ぐに冷え、一筋の煙を燻らせながら固着する。

「クソ！ 開かない！！ どうなってるんだ！？」

同じように扉の穴から鍵を開けようとした暴徒が苛立たしげにドアを叩くが、僕はその手をグツと握って、固まった鍵と同じく火よりも熱い熱を送り込む。

「アジイイ！！？ 放せエエ！！」

「フン……暴徒の分際で何を猛々しい。燃えるような握手ううう」  
着火しないよう加減して熱を送り続けると、やがて肉が溶ける強烈な異臭が立ち込めてくる。

「あつあつ！！ あつうう！！ は、放せ！！ お願いだから！！」  
「いや」

ノアの真似をしてプイツと顔を逸らす。

握った手の中からバチバチと目玉焼きが焼けるような音がし始めると、恐慌した暴徒が無理やりに手を引っ張ったもんだからさあ大変。切れ目を入れたニクロム線をペンチで剥くみたいに肉がズルリと抜け、細い指骨がドアの向こう側へスツと消えて行った。

「うへえ」

気持ち悪いから掌中に残る焦げた指をドアの穴に押し込むと、間を置かず外で凄惨な悲鳴が聴こえた。

「うわああああつ！！ ひいいい！！」

のた打ち回る悲鳴が扉越しからでも大きく聴こえる。

これは面白そうだ。

イタズラ好きで物見高い僕はニシシと笑い、ちよつとからかってやろうとノブに手を掛けたが……さっき溶接したのを失念していた。ビクともしない。

「……うん。開けたら……危ないよなあ」

開けたら暴徒を数十人くらいハツ倒さなきゃならない。

シャワーも早く浴びたいし。

仕事を早く終わらせてキレイな姉ちゃん達と宴会したい。

そんなことをあれこれ考えた。僕は決めた。というか誘惑に負け

めりめりめりっ！！

溶接した扉を腕力で強引にこじ開ける。

ボロ屋の鍵くらい単純なパワーだけで破壊できる。

鍵をフックしている留め金が歪んだことで内部のシリンダーが外れ、歪みによって扉の縁を覆うプラスチックフレームがヒビ割れ始め、半身が通り抜けられそうなくらいの隙間が生まれた。

隙間からヒョイと顔を出すと 血走った眼の暴徒達と出会い頭に目が合った。

一瞬の静寂が訪れる。

「……………」

「……………」

手に得物。目に狂気。熱の籠った空気。

一触即発の状況。

吐く息だけがやけに大きく聴こえる。

互いに目をパチクリさせて見つめ合う冗談みたいな空白の時間

それが妙におかしくて、僕は口元にフツと微笑を浮かべた。

「あ、おま」

「見る、貴様ら！ そこにうずくまる子悪党の哀れな様を！！ 感情に任せ徒に行動を起こした末路がこれだ！！ その傷が痛む度に後悔し、僕の顔を思い出せ！ ひざまずけ！ 命乞いをしろ！ 小僧から石を取り戻せ！ ざまあみろ！ 超ざまあみろ！ エクストリームざまあみろ！ 又フツハツハツハツハ！！ ンじゃっ！ そういうことだっ！」

ばたんっ！

と 言いたいことを一方的に叫んでから扉を閉める。

再び訪れた数秒の静寂のあと、鼓膜が破れそうなくらいとんでもない怒号と共に扉がドツカンドツカンを叩かれ始めた。

「テメエ殺すぞおらあああ！！」

「バラバラにしてやるッ！！」

「うはっ！ サイコー！！」

期待を裏切らぬ予想通り過ぎる反応に、僕は河原で色本を発見した中学生のように色めき立った。

この国の卑民どもは目の前で親兄弟が殺されても笑って済ましてくれる心優しい民だと聞いていたのに、結構沸点低いじゃないか。たかか猫一匹殺して、手の半分を焼失させて、ちよこつとおちよくつたくらいで、まるで火が点いたような凄い暴れ方をする。

公共ではとてもお披露目できないような罵詈雑言を浴びせ、振り上げた玄翁でドアをガンガン叩き、石礫で窓ガラスを割り、指先でスイカが割れそうなほどのスピードでインターホンを連打している。「ねえちよつと、どうしたの！？」

「さあ？ ゾンビウイルスでも発症したんじゃないか？」

玄関がえらい騒ぎになって、ノアが血相を変えて小走りに降りて来た。

僕は悪くないということを念頭に状況を説明するが、育ちが悪い所為で人を信じるということができないノアは、話を聞く内にだんだんジト眼になってくる。

「アンタ無駄に人の神経逆撫でる天才だから、皆それで怒ったんじゃないの！？ うあ……ご近所さん勢ぞろいだよ。ねえ！ アンタに何も後ろめたいことがないなら警察呼んで収拾して貰うけど！ それでいい！？」

「そ、そんなこと言って……僕を警官に売るつもりだなッ！ 信じないぞ！！ 絶対に信じないからなっ！！ おまえは人を平気で裏



切るような薄汚い目をしている!!」

「無理やり家に籠城されて、なんでそこまで一方的に言われにやならんのよ?」

「親戚だろう? 人は信頼し助け合うものなんだ。そこに理由なんか要らないんだ。愛は愛を救うんだよ」

「まったく……都合の悪いときだけ愛だの信頼だの持ち出して。なんて心の伴わない言葉だよ。汚い。大人汚い」

「ま、まて! 追い出さなくてくれ! か、金なら幾らでも……いや、違う。今は忘れてくれ……」

忘れてた。

今は金に頼れないんだ。

金銭問題が解決してしまつたら信濃川親子を籠絡できない。金で恩を売つて彼女達を韓国に呼べなければ僕は破滅だ。

ならば携帯で昨晚の半漁人でも喚ぶか!?

タンノくんみたいなヤツを!!

アレはヴィジュアルからして強烈だから、気持ち悪さで外の連中を追っ払うことくらいはできると思っただが。

「あ……」

この窮状を打破する解決策をあれこれ思索していると、割れた窓からふと外の様子が見えた。群衆にまぎれ警官の帽子が見え隠れしているのが。

ぬう……公たる僕が一般ピーポーに扇動され暴徒化するとは!

官憲横暴なり!

「来い! 半漁人!!」

極限まで追い詰められ戦士としての本能が覚醒した。

僕は取りい出したる携帯のアドレスから選択し、短縮プッシュにて怪生物の召喚を発動する。

「さらにそして即効魔法発動! 別途特急料金を支払いハイヤーを特殊召喚! 召喚までの道程を銭金で解決する!」

もう女性は雑に扱わないと心に決めた!

しからば……異形の怪生物を以って状況を好転させる！

「あ、なんか来る」

「早っ！？ 10秒も経ってないのにもう来たのか！！」

ノアの指さす方をキツと睨むと、獣のような唸りを上げる大排気量のエンジン音が坂の向こうから響き始めた。その正体は間違いなくハイヤー。

ハイヤーは勢いよく勾配の頂を切って飛翔する。鏡面のように磨きこまれたセレブ御用達の白い車体が陽光を受け眩く光る。

どぎゅるるるるっ

着地と同時に急ブレーキを掛けたハイヤーはネズミ花火のように高速回転しながら人垣を蹴散らし、凄まじい砂煙を上げながらピタリと門前に停車する。その最中に轢かれた数十名の暴徒達は黄砂のように濛々と立ち上る煙の中、怨霊のようなうめき声を洩らし苦痛に蠢いていた。

「玄関の前が空いたわ」

「いや……脱出するにはまだまだだな。慈雨様……母さん呼んで来なさい」

「もう居ます」

「うわっ!？」

突然、僕とノアの間 ニュツと割って入って来た慈雨様。かなりびっくりした。隠形の術でも使ったのかのような神出鬼没さに底知れぬ天才の片鱗を感じる。

「母さん、家が……」

「まあ……この際は仕方がないです。形あるものは何時か壊れるものです。諸行無常です」

外の騒音と中の惨状からすれば場違いなほど淡々とした声音で慈雨様はおっしゃった。悟りを開いた超越者たるオーラが漂っている。さすが慈雨様。聡明でらっしやる。

もうサイコー！ 抱いて！

「いやです」

「心読まれた!?!」

「……?」

瞬きの瞬間に僕と慈雨様が高度な心理戦を繰り広げていたことに気付かず、ノアは首を傾げて喉に小骨が刺さったような顔。

「うううう……」

外では暴走車に轢かれた暴徒達が立ち上がるうとしていた。塀に叩きつけられたり地面に投げ出されたりしたのに、それでも死傷に至らぬ暴徒達。本気でゾンビのようだ。

そして一方、その大量のゾンビを轢きまくって堂々と停車するハイヤーの自動ドアが開き、そこから銀色の怪魚がモゾモゾと陽の下に這い出て来る。昨晚の半漁人だ。

「ギョツ!」

半漁人は足元で這い蹲る1人を踏み付け、ゆっくりと大地に降り立った。

「むう……」

陽射しの下で見ると一層恐ろしい。

なんと形容すればいいのやら……その姿、例えるならマンボウの体に直接女性の手足が付いているような……そんなそんな、神をも恐れぬ姿をした異形をしている。

「ギョギョツ!」

半漁人は僕を認めるや嬉しそうに顔を上下に揺らし、トップモデルのような完成された歩調でまっすぐ向かって来る。トップモデルには失礼な話だが、歩き方が正にそれとしか言いようが無い。

「よ、よおし……そのままこっちへ来い!」

「ギョツ!」

半漁人は元気に手を挙げて応える。

姿形はたとえようもなくおぞましいが意外に素直なヤツだ。

「いいか? よく聞けよ」

相手は化け物だ。かろうじて意思の疎通は出来ても言葉が十人並に通じるとは思えん。僕は身振り手振りを加え、『五百円やるから周辺を歩き回って人間を追っ払え』と要求を簡潔に伝えた。半漁はそれに大きくうなづく。

「ギョツ！」

命令を受諾した半漁は郵便受けに片肘を預けながら暴徒たちに振り返り、下々を見下すように大きく顎をしゃくった。

『安い女じゃないのよ』と言わんばかりに挑発的な振る舞い。辺り一面に鮮烈な薔薇のフレグランスが匂い立つ。

「ざわっ！！」

半漁の登場で空気が一瞬にして変わった。

キモイので遠巻きに困んでいた暴徒どもが武器を握り締めとてもイラついているのが手に取るように解る。なにせ命令した僕ですらムカついたくらいだ。マジ殴りてえ。

「ギョツ！」

「ざわっ！！」

「ギョギョギョツ！！」

「ざわわっ！！」

半漁が前進すると、磁石でも近付けたかのように人山がワツと割れた。

いいぞ………凄い嫌われようだ。

このまま暴徒たちを押し返して、ハイヤーに乗ってトンズラだ。その足で領事館まで逃げこんでしまえば治外法権でオールOK。僕の名前で外圧かければ後処理はどうとでも出来るし、ついでに信濃川親子にも恩を売れるというものだ。

「さて………何台か警察車両も来ているようだし、念のため密偵に指示を仰ぐかな」

パク・サンス『件名ノボスケテ』

いつもお世話になっております

お手数ですが韓国領事館までの逃走ルートの指示をお願いします

メールを送信してから二秒と待たず返信が来る。

密偵「件名ノボスケます」

はい、かしこまりました

「よし」

添付ファイルを画面上に開くと緑のラインで構成された詳細な地図が表示された。その地図上を走るオレンジ色の矢印が最適な逃走ルートを示し、信濃川家の前で青く点滅する光点が僕たちで、重なりあって大きく見える赤い点々が敵勢を示している。地図は情勢に合わせてリアルタイムで更新されるのでこまめにチェックする必要がある。

密偵「件名ノところで」

では次のコールを合図に状況を開始致します

よろしければ障害物を半数ほど間引いておきましょうか？

パク・サンス「件名ノあの」

さすがにこれ以上揉め事は増やしたくありませんので、人死には出さないようなるべく穏便にお願いします

あと、これは仕事とはべつの興味本位からの質問ですが、頻繁に更新されるホームページの写真はどのように撮影なさっておられるのでしょうか？（盗撮なのにかなり近くで写しているようなので）ご迷惑でなければぜひ教えてください

送信……と。

少しして返信が来た。

密偵『件名ノご質問への回答』  
戴いたご質問への答えですが、特別なことはしておりませ  
ごく普通にです

パク・サンス『件名ノ了解』

わかりました

ありがとうございます

近距離の被写体を非常に好意的な感じで撮影しているのに普通は  
ないだろう？ コイツ本気で何者なんだ？

## やさしいやさしい裏のおじいちゃん

「……………」  
メールでやりとりする間、ノアが不思議そうにこっちを見ていた。貧乏だから携帯電話が眩しいのだろう。

「ン……………どうした？ 欲しいのか？」

「いや……………、気持ち悪いなーと思って」「失敬なっ！」

ストラップのヒモで得意げに携帯プラプラさせてたら、真顔で馬鹿にされた。クソ……………いやだが、高学歴に対して見事な意趣返しだ。今後貴様を『カウンター使い・ノア』と呼ばう。

「いやよ」

「心読まないで！？」

「困ったわねえ……………コピー機のトナー粉でも撒いて追っ払えないかしら？」

「母さん過激」

廊下の隅にあるダンボール三段重ねのトナー粉をチラリ見て、慈雨様はさらりと恐ろしいことを言い放った。

信濃川家には業者に騙されて購入した内職用のトナー粉がたっぷりとある。トナー粉の粒子は細かいので器官に入れば呼吸を妨げられるし、大量に撒いて火を点ければ屋外でも粉塵爆発が起こせる。でもそれを日本国内でやるとさすがに揉み消せないのご自重して戴く。海でなら五、六十人殺しても新聞にすら載せない自信はあるが。

「……………さて、怪魚のお陰で人もバラけてきたし、運動がてらいつちよ無双してやるかな」

慈雨様がうつかり強行に出ないようわざとらしく言い残し、僕は肩をほぐしながら辺りを軽く見回した。

ざっと五十人程度か。

数万のゾンビが占拠するシヨツピングモールを無手で単独制圧出来る身体能力の持ち主である僕ならば、戦闘訓練も行っていない貧弱なジャップの群れなぞ造作ない。生かさず殺さず適度に痛め付けられる。

では……まず手始めに。

「しえありやつ！」

僕は気合を発し暴徒の輪の中へと駆け出した。標的は、ゴルフのアイアンで必死に半漁を追っ払おうとしている信楽焼きの狸のような及び腰のジジイ。

「な、なんだ貴様ア！」

「フン」

僕は振り下ろされたアイアンを腕で軽く払い除けてから覆い被さるようにしてジジイの太い首をフック、段腹に隠れたベルトを逆手で掴み高々と抱え上げた。

「ふんっ!!」

ざっと90kg程度の荷を抱え上げながら速攻のダッシュ 塀を踏み台にさらに高く跳ぶ。

跳躍の直後、その一瞬脳裏に浮かんだのは、武者修行中に師匠に命じられて行った雪山強行軍。無装備半裸の状態で421kgもあるグラント・ピアノを片手に担ぎ、最大傾斜角130度越えとかいうワケ解かない魔の氷壁を片手五指を頼りに踏破した。

雪山登山の目的は限界を超えた氣のコントロールの修行だそうで、バナナで人が刺せるマイナス30度の激烈な凍風の中、氣を放出し過ぎないように注意しながら表皮に火氣の薄幕を張り、冷気を防ぎ暖気を内包しつつ、ついでに長時間力を維持し続ける攻防一体の訓練。その荒行に比べれば油ギツシユなジジイなぞ空気のようになりに軽い存在。

出立の直前、師匠に尋ねた。

「なんでグラント・ピアノを担ぐのですか？」と。

老齡の師匠は皺枯れた声で言った。

「重いでしょ？」



「はあ……重い……ですね？」

そら重いよ。自重の倍以上あるし。

重くてしかるべき存在だよ。グラウンドさんは。

傾斜が反り返ってるようなレベルの場所じゃほとんど片手の握力のみで支えたんだぞ。ビバークなんて出来ないから十六時間も。辞書でも持っみたいにグラウンドの端っこ片手にな。今思い出しても身震いする。

「超滞空&投げっ放しブレーン・バスター!!!」

2 m 強の身長と垂直跳び140 cm のバネが踏み台を経て 高さ5 m 以上の超滞空を生み出す。人だかりをクッションに狙い済まし、背中から思いつきりジジイを叩き付けた。

頭上から超高速で人間1人を浴びせられた暴徒どもからベキベキと木の枝のように骨が砕ける音と阿鼻叫喚の絶叫が鳴り響き、二十人近くがドミノ倒しに巻き込まれた。

「しゃっ！」

拳を握り湧き上がる歓喜に打ち震えながら着地した僕は、直ぐさま浮き足立った敵に追撃をかけるべく、後退が適わぬ密集地帯を狙い、左の腕をブンツと一回転させ振り上げた。

「殺熊ラリアット!!!」

アラスカの厳冬に耐え抜きし野生の大熊を空中で一回転させ絶命に追い込んだ、火気未使用で衝撃度4.2トンの、軽トラのぶちかましに等しい大豪腕が五人余りの人間を無造作に刈り取り、空に舞い上げた。

「ふぐあああっ!?!?」

大気を切り裂く拳圧が凄まじい突風を巻き起こし、複数の成人男子が頭上の遙か高さを舞う、そんな異常な状況 そのわずか数秒の間の光景を誰もが等しく大口を開けて眺めていた。

「ヒューッ! やっぱ僕って最強過ぎる!」

椰子の実のように堅く膨らんだ力瘤をバシツと叩き、衆人どもに見せ付けるかのような腕力アピール。

これが常人と非凡との差よ。

これが秀才の実力。

「いい加減にしる！ みんな帰れ！ カエラ！」

漫画に出てくるソバ屋の出前みたいに山積みของCDアルバムを片手に抱えたノアは、手裏剣でも投げるかのようなフォームでカエラを水平に高速発射した。

「あぎやつ！？」

「ひぎゃぶつ！？」

マシンのようなスピードで放たれたにも関わらずCDケースの角は次々と暴徒達の眉間に突き刺さり、恐れ慄いた人波が瞬く間に捌けて行く。

目を見張るような凄まじい戦果だった。

だがそれは……食べ物をおもちやにすることと同じで許されないことだった。それ以上にカエラだった。

「やめる！ カエラのCDを投げるな！ カエラを大切にしろ！」  
「いや……アンタ、カエラの何なんだ……？」

我に返った僕は無理にでも惨劇を止めようとしたが 時すでに遅く、二秒余りで五十枚以上あったCDを全弾打ち尽くしたノアは掴まれた腕を見て困惑気味の表情。

CDは後でスタッフがおいしく頂きました。

そんなテロップでも流してフォローしようと思ったが、ヒットした時点で粉々に砕けているのでおいしく頂きようもない。そもそもスタッフって誰だということにもなりかねない。無念だが諦めるしかない。

「……ふう」

ノアを解放し、気を静める為にひと息吐く。

ここは大人の責任として尻の1つでも叩いてきちんと躡けるべきだろうが、大人として利権が一番大切な僕はノアに嫌われるような

真似は極力避けたい。無念だが諦めるしかない。

だがしかし、真に恐るべきはノア。

プラケースがクオーツみてえに粉々だ。

クレーマシーンかコイツは？

「えいや」

今さらながら天才の血統に恐れ慄いていると、ノアは外側に向けて右腕を軽く振った。

直後　遠くに立っていた少年の肩に眩い銀光が煌く。

「え？　え……？　ええ！？」

何も見えなかった。

気付いたら少年が刺されていた。

投擲する際を見ていたにも関わらず軌跡すらまったく判然としな  
いスピードで。

少年は深々と刺さった刃物の柄を恐る恐る指先で触れ、「はっつ」と息を呑み膝を落とす。

シャツがジワリと滲む右肩を押さえ、痛みを理解するよりも早く我が身に降り掛かった異変に気付いた少年は、溢れ出る血を現実のものを受け止めきれずに顔を強張らせている。

「な、なにを……？」

「何って……スロージング・ダガーよ？　私は”<sup>タスク</sup>牙”って呼んでるけどね」

ノアは悪びれもなくしれつと言って、袖の下に隠した機械仕掛けの投擲器具の発射台を手首に付いた小型ハンドルで巻き戻す。

ハンドルを巻き終えるとカチリと音がして、今度は肘周りを確認するようにさすっている。

「これは肘を伸ばすと発射される仕組み。ちゃんと安全装置もあるから普通にしている分には問題ないわ」

と解説してくれつつも内蔵された刃物は一切見せない。

敵が刃物の形状を理解しているのとしていないのじゃ戦闘時に於けるアドバンテージの高さが違うからだ。

「つーか僕、敵扱い？」

「でも、そんな器具で発射したらスローイングじゃなかるう。」 シューティング・ダガー” だろ？」

「機械はただの補助。ちゃんと腕の振りで飛ばしてんだから、” スローイング” でいいのよ」

「そりゃヘリクツだろ。僕ならそんなオモチャに頼らなくても、機械よりずっと遠くに飛ばせるね。能のない人間は、すぐそーいうオモチャに頼りたがるんだよ」

「これは咄嗟に手にナイフを収めたり、ノーモーションで発射して相手の不意を衝いたりする暗器なの！ 私は普通に投げたって遠投で92m出せるんだからね！」

「残念、僕は152mです！ アメフトボールでな！ 普通のボールなら200mは堅い！」

「私だってソフトボールだよ！ いろいろあつて正確には測れなかったけど……利き手が使えてたらあと40mは飛ばせてたね！」

「それを加えても僕には及ばないな！」

「大人のクセになんて負けず嫌い！」

「あのお……」

「なに!？」

激化する体力自慢の最中、慈雨様が申し訳なさそうに口を挟んだので、僕とノアは同時に振り返って怒鳴った。

「裏のおじいちゃんが……」

「裏のジジイ？ 裏のジジイがどうかしたのですか？」

慈雨様が珍しく困った顔をなされていたので、指差す先を何事かと振り返って見ると そこには裏のジジイとおぼしきフンドシ丁の老人が、二本の高枝切りバサミを構え仁王立ちしていた。

「ちよっ……裏のおじいちゃん!？」

「知り合いか？」

「えっと、ああなる前のおじいちゃんなら……」

ノアが口ごもりながら「ああなる前」と言ったということは、裏の老人は今さつき”ああなった”らしい。「キシヤエエイ!!」と叫びながら、高枝切りバサミの二刀を高速回転させるようになったらしい。

「キシヤエエイ!!」

消えかけた命の灯火を燃やし尽くすような鬼のような形相、まさに鬼気迫るといふ言葉に相応しい。何だか知らんが明らかに敵意を持っている。

「しかし、あの高枝きりバサミ……」

おそらく一本の値段でもう一本付いて来る、テレビでよく見掛けるお得な通販で買ったのだろう。神をも殺す強力な殺傷兵器を通信販売するとはおそろしい国だ。神仏に等しい存在はハサミとかチエーンソーにすこぶる弱いと云うのに。

「ねえ、おじいちゃん、どうしたの!!」

「キシヤエエイ!!」

「待つんだノアよ! あれは最早、君が知る御老人ではない!」

「そんな……」

「もう何を言っても無駄だ! キシヤエエイとしか言わん! おそろくは次も”キシヤエエイ”と叫ぶだろう!」

「キシヤエエイ!!」

「ほら見る! 解つたらジジイは諦めるんだツ!!」

「……うん」

「キ、キシヤエエイ!?!」

一体何が原因で集団狂騒に駆られたか知らんが、僕の野望を阻む者は誰であろうと裏のジジイであろうと容赦はしない。

僕は掌を拳でバシツと叩いて気合を入れ、禍々しき魔人と化した老人に飛び掛った。

「行くぞ裏のジジイ!! 裏に住んでるからってデカイ面しやがつて!!」

「キ、キシヤエエイ!?!」

ほとんど言い掛かりに近いが裏のジジイはその一言に怯んだ。チャンス到来である。

「熱風拳!!!」

決して烈風ではないそれは、瞬間的に氣を炸裂させた拳を振り上げ、鬨氣によつて発生させた熱風の衝撃波を中距離から放つ大技。大地を切り裂くようにして奔る灼熱の熱氣の波が、一直線に裏のジジイに襲い掛かる。

「クシャエエイ!!!」

赤く燃える波状衝撃が激突する刹那　裏のジジイは鳥のはばたきのように振り上げた高枝切りバサミで左右の二連撃を放ち、アスファルトごと波を斬り裂き、一瞬にしてそれを掻き消してしまった。「ンなんだとお!?!」

これにはさすがの僕も驚愕した。信じられないことだった。

ただの素人のジジイが、僕が長年掛けてS N Kから盗み出した必殺技を一蹴してしまった。

「クソ……なんてヤツだ！　さすが裏に住んでるだけあるぜ!!!」

「私のウチの裏はパワー・スポットか何かか!?!」

「ゴシャエエイ!!!」

「叫び方まで変えて!!!　一般ピーポーが調子に乗りやがって!!!」

「ちゃんと”キシャエエイ”と言え!!!」

「キシャエエイ!!!」

意外と素直なやつだ。

「裏のおじいちゃん、しつかりして!!!」

「無駄だ！　ここを乗り切るには裏のジジイを倒すしかない！　涙を飲んで裏のジジイを倒すしかないんだ!」

「干し柿とかくれる良いおじいちゃんだったのに……うまく逃げられないの?」

「やつは既に修羅に足を踏み入れている。独身のまま高齢化すると、極稀にああいった変貌を遂げることもあるんだ!　あと裏に住んで

たりするとな!」

「キシヤエエイ!!」

「うるさい黙れ!」キシヤエエイ”言うな!!」

「キシヤエエイ!」?

「自分から言えといったクセに……」

「……む、そつだな。おい、言っつていいぞ!」

「キシヤエエイ!」

「……やっぱ駄目だな。うるさい!」

「石を投げるな!」

「なんか気分が変わったんだ!」

「山の天気並に意見がコロコロ変わるなアンタ!」

「ノア、気をつけなさい! 裏のおじいちゃんは強敵よ!!」

「母さん……?」

「ただのジジイが裏に居るというだけで裏のジジイになる……!!」

うつすらと鬨気すら放っているではないか!」

「だからウチの裏は何なんだ……?」

ノアが背伸びするように家の裏を伺おうとした瞬間、ジレた裏の

ジジイが例によって「キシヤエエイ」と叫んで飛び掛って来た。

「カマン!」

攻撃を予測していた僕は素早くポケットからサバ缶を取り出し、

わずかな助走で15m近い跳躍を見せた裏のジジイの眼前でソレを

握り潰した。

ブチユツ!

「ヒギヤアア!!?」

腐敗し液体と化していた缶の内容物をまともに喰らった裏のジジ

イは、強烈な刺激臭に絶叫を上げもがき苦しむ。敵が弱っている…

…僕はそう云った隙を見逃さない。

「今だツ!! サバ・シユート!!!!」

僕は握り潰した缶を離し、落着寸前を狙い済まし裏のジジイの顔  
面目掛けシュートを放った。

闘気を爆発的に燃焼させ”噴氣”を開放　ブーストを掛け練成  
した火気を右脚の一点に集束し　インパクトの瞬間に全エネルギー  
を炸裂させ解き放つ。黒く汚染された海にプカリ浮く大量のサバ  
を背景に、紅蓮に燃える必殺のシュートがいま解き放たれた。

「ヒュギアツ!？」

至近距離から燃え滾る金属塊を顔面にブチかますと裏のジジイの  
顎先が跳ね上がり、シュートの摩擦によって大気が焦げる強烈な臭  
気が立ち込める。

手心え十二分。

猛烈な爆発力に針の穴を通す指向性を持たせ加速させた蹴りは、  
人体の限界を遥かに超え、熱を帯びた蹴り脚の筋繊維がプチプチ音  
を立てて千切れるほど。重大な障害は無いが無視出来るほどでもな  
い。

「よし来いっ、ハイヤー！ツツ!!」

裏のジジイが膝をガクリと落とすも、そのチャンスに足が付いて  
いかない　しからは、追撃の他力本願、大量の轢殺行為によって  
純白の車体を真っ赤に変えたハイヤーを発進させる。

ブルロロロロツ!!

僕の意図を予測していたハイヤーはサイドブレーキを外して急発  
進　振り返る暇も与えず裏のジジイを猛烈なスピードで撥ねた。

ガツ、ガン!!

撥ねられた弾みで転がるようにボンネットでワンバウンドし大き  
く宙を舞う裏のジジイ。

完全に仕留めたと僕は顔を緩ませたが、地面に落下する直前に裏



のジジイは眼をカツと見開き、ゴムのように体を捻って、握り締め  
ていた高枝切りバサミをノアの顔面に向け投げ付けた。

「チイイ!!!」

不意を衝かれ反応が遅れた。撥ねられながらも高枝切りバサミを  
投げ付けてくる執念深さは賞賛に値するが、僕は必死に腕を伸ばし、  
襲い掛かる凶刃を寸での処で掴み取っていた。

「……む？」

初動が遅れたのもあるが裏のジジイの執念がわずかに勝った。完  
全に止めたと思ったハサミの先端は薄皮一枚を貫き、ノアの額には  
一筋の血が流れていた。

「すまん……無事か？」

「え……あ……うん？」

余程驚いたのだろう、ノアは額の血を拭う事もせず、目を見開い  
たまま強張った表情でゆっくりとうなづく。

まだ若いし、死の恐怖に慄いた経験が無かったのだろう。ノアは  
立ち竦んだまま瞳にうつすら涙すら浮かべていた。

「あ……まあ気にするな」

僕はそう言つて、しょぼくれるノアの肩をポンと叩き、頭をぐし  
やぐしやにしながらさすつてやる。その場の雰囲気は流されただけ  
で特に打算で慰めてるわけではない。フェミニストだしな。

「でも、裏のおじいちゃんがあんなことに……よくわからないけど  
裏に住んでたからああなっちゃんだったよね？ ホントよくわか  
ないけど……」

「まあそうだが……だがそんなに気にするな。どうせ老い先短い老  
人だし、加害者だし、家族もいないようだし……後で手配して墓で  
も立ててやるから」

「……身も蓋もねえ言い方だわ」

「それは死生観の違いだな。国柄というわけじゃないが死せば皆等  
しく肉というのが僕の自論だ。裏のジジイは死んだ　それで全て

「終わりなんだ」

「なんか達観してるわね。全面的には同意しかねるけど、アンタなりの”覚悟の程”という矜持だけは理解出来るよ。ただの馬鹿かと思っただけど、いざとなればやっぱり大人なんだ」

ノアは何かを納得したようにうんうんと頷いている。別にそこまで考えて言ったワケじゃないが好意的に解釈してくれたようなので敢えて訂正はしない。死んだらお仕舞いだし、しかも他人だし、別にどーでもいいんじゃないかな的な意味合いの発言だったのだがな。若人って勝手に物事を自分の都合のいい風に理想化するよな。

「みなさん、早く乗ってください！」

「ま、MASANOBUか!？」

ライトなタナボタ気分を味わって鼻を高くしていると、ハイヤーの運転席を除いたドアが全て開き、韓国の美人嫁を持つ一流ホテルメンの縦長の顔が窓からニョキと出る。

「けりゃ！」

ガッ!

「うつ!？」

感激のあまり僕は駆け寄って、MASANOBUの顔面をおもいつきり殴った。

「よく来てくれた！」

「……どういたしまして」

MASANOBUは殴られた頬をさすりながらとても恨めしそうな顔で「何故殴ったし」とこちらを見るが……悪く思わないでくれ。弾みだ。あと何か人生だ。

「さあ、乗った乗った!!」

「ノア、行きましょう」

乗車を促す僕の声に従い、慈雨様とノアは後部座席に乗り込んだ。

いやはや最近のホテルはサービスがいい。

車での送迎や窮地からの脱出まで手伝ってくれる。

「よっしゃ！ GOGOGO!!」

助手席に乗り込みしつかりシートベルトを掛けた僕は、地図を表示した携帯をホルダーに立て、タッチパネルを操作して逃走ルートナビゲーションをスタートさせる。

すると画面の左端から二足歩行する白いデフォルメ・ニャンコが歩いて来て、フキダシと音声で『ナビ始めるニヤツ！ テメーら気合入れるニヤツ！』と言ってお辞儀した。礼儀正しいのか乱暴なのかどっちなんだ。

「まあよし……すみません、ちょっと倒しますよ」

身体がデカ過ぎてあまりに窮屈なので、後ろの慈雨様に断ってからリクライニングを倒す。

「ちよつと、やめてよ！ 邪魔！！ エッチ！」

「そ、そんなこと言ったって……」

慈雨様のお膝に頭を傾ける姿勢になったのがノアは相当気に食わなかったようで、僕の額を両手でギユウギユウ押して来た。

「あらあらまあまあ」

「いた！ いたっ！？ 慈雨様、コイツに何か言っちゃってください！」

「あらあらまあまあ」

「……」 あらあら”じゃなくて！ ンじゃあ、MASANOBU！  
！ お前でいいから何か言っちゃれ！！」

「姉さん、事件です」

「……それはお前の口癖だろう」

『前方30m先を右折！ 右曲がるニヤツ！ でないと死ぬニヤツ  
！！』

「右曲がって！！ 超右曲がって！！？」

「姉さあああつあん！！ 事件でえええす！！」

「よし、いいぞー！！ その調子！ 良い子のMASANOBUには

コインのチップをやるう!!」

ナイスな逃走劇の幕開けに大喝采の僕はポケットから硬貨を引っ張り出し、M A S A N O B Uの頭にそれをビシバシ投げ付けてやる。華麗なるドライブテクに対しての正当なる褒賞。

三つ指付いてありがたがるべきである。

「ね、ねえ、なにやってんの!？」

「何って……チップだよ! 欧米じゃ当たり前だろ!」

「お前は何人だコリア!? てか、チップ!？」

「いいからお前もやれ! 大儲けで運転手さんは大喜びだ!」

「でもなんか血イ出てない!？」

路が狭い市街を高速で走り一瞬たりとも目を離せない状況のM A S A N O B Uは、大量のコインを膝に載せたまま喜びに打ち震えている。

暴徒の群れから辛くも逃れ安堵するもつかの間、画面の範囲外から内側へと、僕らを包囲するように赤い光点はどんどん増大して来ていた。

お茶の間アイドル・ノントタンの訃報は光の速さで瞬く間に各地のファンに電信され、全国津々浦々より聖戦気取りの犯罪者集団が結集しつつある。しかもその中に警官まで参戦しているというのだから始末におえん。密偵があらゆる手段を講じて情報を錯綜させ敵の数を減らしているが、それでも孔明レベルのゲーム難度になるのは保障出来る。

「スルクウの頼めば即座にへりをチャーター出来るが……」

弱気になってふと口に出た一言にハツと口をつくむ。

確かに……義弟に頭を下げれば空路から難なく脱出出来るだろう。だが御免だ。

一人称を変え自己を偽らなければ堪えられないほど揉み手で媚び続けて来た屈辱の日々……それでも譲れないモノがある。それはチャゲアス風に言うならプライド。

僕が僕であることを望むなら最後の一线だけは死守しなければならない。

『右！ 右ニヤツ！ 右ニヤツ！』

「また右か……？ 何か、さつきから同じ場所を回ってないか！？」

『渋滞を避けて、信号待ちを短縮して、敵の包囲網を避かわして進路を確保するのに多少の回り道が必要ニヤツ！ 急がば回れニヤツ！

もしこのまま直進すれば次の交差点の信号で捕まって二十三秒のタイムロスが出るニヤツ！ その間に敵に補足される確率は72パーセントニヤよ！』

「 というわけだ！ キミ達、目先の功を焦り短絡に物事を捉えるな！」

「なんでアンタが偉そうなの！？」

「偉いモン！」

「もん！？」

ブッブー！！

何の根拠も無く誇らしげに胸を張っていると急に、後続に着くバシからクラクションで煽られた。

スモークガラスで車内を隠した違法改造車両はグングン車間距離を詰め、こちらの尻をチョンと突付く。

「敵か！」

僕は咄嗟に投げられそうな武器を探った。

サバ缶は先の戦闘で消費してしまったし。

何か……ないか！？

何か……武器は！？

「 ウェイトティッシュ・クラッシュッ！！ 」  
無かった。

窓から渾身の力で投げ付けたプラスチックの筒はバンのサイドミラーにヒットして、遙か後ろの方へテンテンと転がって行った。

「畜生おおお！！ ウェイトティツシュじゃ駄目だ！！ 戦闘力がない！！」

僕はどうしようもない無力感に打ちひしがれ、項垂れながら自らの膝をガンと叩き唇を噛み締める。

「あの、こんなものならありますけど？」

「ください！」

絶望の淵に立たされた僕を救い上げるように慈雨様が助け舟を出してくださった。

慈雨様から受け取ったそれを僕は今一度渾身の力で投げ付ける。

「食らえ！」 おばあちゃんのポタポタ焼きブーメラン！！」

エッジを利かせるように放り投げた袋詰めのは、バンのウィンカー辺りに当たって落下　タイヤに巻き込まれて消えて行った。

「畜生おおお！！ ポタポタしてちゃ駄目だ！！ 濡れてエッジが足りない！！！」

迂闊！！

エッジさえ足りていれば空力を支配して、ポタポタ焼きはV字を描き我が手に戻って来たはずなのに！！

「んなわけあるかぁッー！！ 当たった時点でコナゴナだろうがぁあー！！」

「何を独りでボケて独りでツツコンでんのよ……？」

「あらあらまあまあ」

「母さん落ち着いてるわね……」

「ああ、本当に……」

呆れた風に嘆息したノアと同じように僕も慈雨様振り返った。

まるで困ってない顔で困った風に頬に手を当てながら慈雨様。やっぱり天才は理解できません。

「何か……他に何かないか！？」

「電池はどう？」

「ありがたい！」 アルカリ電池・バースト！！」

ノアから受け取り素早く放り投げた単三乾電池は、バンのフロン

トガラスの左隅にヒットし微小なキズを付けた。

「よし！ 効果あり！ ……他には？」

「ん、あとは携帯くらいしか…あ、でも、これは駄目だかね！  
中のメモリーのバックアップ取ってな」

「 DOKOMO・ダイナミックツ！！！」

言い終えるよりも早く僕はノアの手から携帯をひったくり、エッジを鋭く利かせた投法でそれを窓からブン投げた。

ガッ！！

肘を内角に利かせることで鋭い回転の掛かった携帯はフロントガラスに蜘蛛の巣状のヒビを入れ、時速90kmの慣性をブチ殺すほどの反動で僕の手に戻って来る。

「返すよ、ありがとう！」

「ちよっおま…今のどうやった！？ というか携帯ベコベコなんだけど！？ 下半分が無いんだけど！？ メモリー・ロストどころじゃないんですけど！？」

「心配しなくても、あとで一円で買って来てやる！」

「それ契約も込みだから！ 私の携帯よか、さっきから投げてる硬貨を投げなさいよ！」

「残念ながら全部遣ってしまった」

「馬鹿！ お馬鹿！ やっぱリアンタは馬鹿よ！ 最低よ！ ちよつとでも感心して損した！ こんな変なヤツが実はいい人 だったりするなんて乙女チックな妄想、りぼんの読み過ぎだったわ！ マーガレットの読み過ぎだったわ！ 漫画ゴラクの読み過ぎだったわ！」

「最後のだけなんか違くない？ たいへん少女向きじゃなくない？」  
ザ・シェフ！！

フロントガラスに一撃入れてバンを大きく引き離したが、投げる

物が無くなったのを悟られたか、すぐさま距離を詰められケツにピツタリと着かれた。

次の瞬間、急ブレーキを掛けたような大きな衝撃が後ろから連続して襲ってくる。

「な、なにか……なにか投げる物は!？」

「そんなこと言ったって、いきなりだったから着の身着のまま来たし、もう何も無いってば。アンタ、波動拳みたいな手から出せるんでしょ？ それでなんとかしなさいよ？」

「波動……氣のことか？ 無理だな。何でさつきサバ缶を目潰しに使ったと思う？ もうガス欠なんだよ」

必殺系の特技は噴氣状態にまで氣を高めないとは発生できない。一応、氣を操る者の世界では常識である。

大量の氣を放出する噴氣を長時間維持することは非常に難しく、常人なら数秒で即死してしまうほど消耗が激しい。雪山に籠り不眠不休で半月近く氣を維持し続けられる僕ですら噴氣の状態は30分と保たないのだ。

「目潰しに流用できるモン女の子のプレゼントにするなよ……。馬鹿力なんだし、適当に車体からむしり取って投げれば？ 腕自慢なんだでしょ？」

「姉さん、事件です！」

「……駄目だそうだ」

殺人でも犯しかねないくらい断固たる態度でMASANOBUが拒否したのでノアの提案はあえなく却下、投げる物が完全に無くなってしまった。

こりゃ本当に参ったぞ。

同乗者がVIPや女性でなければ人間ミサイルとか言っておもいつきし投げられるんだが、唯一保護対象外であるMASANOBUは運転手だし投げられない。とかなんとか言ってる内にまたケツを突つかれる。

『ケツのバンを振り払うニヤッ！ 二台追い抜いてから左車線に移



動して前方120m先　愛媛ナンバーの白のシビツクの後ろに着けるニヤッ!」

「姉さん、事件です!」

「愛媛だと?　たしか日本の愛媛ってのは、ミカン産地で有名なあの愛媛か?　僕は柑橘系の匂いがワリと好物なんだよ!」

「そうだよ。よく知ってるわね。そういえば母さんもミカン好きだったよね?」

「ええ。コタツでミカン……コタツでごろごろ……ゆっくりぬくぬく……冬の定番ね」

「もう、母さんったらおばさんっぽい!」

「アツハツハツハツハ!」

などと皆して和んだのもつかの間、いつの間にか左サイドに着いたバンに猛烈な勢いで幅寄せされ、ハイヤーの右側面がガードレールにゴリゴリ擦り付けられ火花を散らした。

ギギギギギギッ!!

ガードレール下の縁石に乗り上げて車体の片側が一瞬浮き上がり、あわや横転というところでガードレールがつつかえ棒になってギリギリ片輪走行を維持　だがその間にも、僕は狭い車内で大きく右へ左へと揺さぶられていた。

「のわあっ!!　クウ……ち、畜生う!!　誰だよ!?　ノンキにミカンとか愛媛とか言い出した馬鹿は!」

「ホント最低です!　愛媛最悪です!　ミカンなんか死罪です!」

「何よもう……!!　ミカンなんてただ丸いだけじゃない!　ブツブツでさ!　思春期の男子学生かつての!　ふざけてんじゃないわよ!　無駄にオレンジ色して!」

「姉さん、事件ですっ!」

『ひどい言い掛かりニヤ』

「うるさい!　たとえ不条理でも人は誰かを恨まずには生きていけ

ないんだよ!」

「人って言っても地名だけどね!」

「果物ですけどね」

「事件です!」

「ええい、こまけえこたあいいんだよ! 敵さん、なかなかいい位置に付けてくれた!」

こちらに車体を預けガードレールに押し付けて走るバン、スライドして開閉するその無防備極まる横っ腹が手の届く位置にある。

「フンガツ!」

僕は窓から半身乗り出し、延ばした掌で直接バンのドアを鷲掴み、そのままひつぺがそうと渾身の力を込めた。

綱引きのように一度、二度、三度と鞆ふいしのように全身全霊力を込めて引くとバンのドアは山形に変形し、窓枠のフレームが歪んでスモークガラスが圧壊、そこから覗き視得る車内にはスシ詰め状態の襲撃者数名の怯えた顔があった。

「はい、こんにちわ」

僕は空いた隙間に手を突っ込んで一気にサイドドアを引っぺがし、放り捨て、ハイヤーの狭い窓枠を強引に潜り抜け、前転してバンの中へと乗り込む。

薄暗い車内には運転席以外の座席を取り払った広い空間があり、二十代前半くらいの若者……五人が一塊になり、怯えた表情で震えていた。

「ケツ!」

あまりの醜態ぶりに僕は吐き捨てた。

バンのドアをこじ開けるようなバケモノ相手に抵抗など無駄と悟っているのだろう。連中の腐った卑屈な眼に攻撃の意思はまったく窺えなかった。

「あ、あの!! 僕らはその……!!」

「悪くないんです!! へ、変な女にそそのかされて……!!」

攻勢から一転、劣勢となるや我に返り連中は恥知らずにも助けてくださいと命乞い。

なに？ そののかされただと？

カツとなつてやっただと？ 猛省してるだと？

ンなこたあ知るか！

実際やったのはテメエだ！ テメエらだ！ 子供じゃあるまいし

！ このテレビ脳どもが！

僕はカツとなつて、連中の首根っこ掴んで片っ端から外に放り出した。

「いぎやあああつ！！？」

「猛省つてのは言葉だけじゃ伝わらん！ まずはユー・キャン・フライ！ そしてアイ・キャン・土下座だ！ キミならできる！ きっとできる！ 走る車から飛び出して、着地と同時にナウ土下座！ 反省は態度で示せ！ さあ、痛みと共に生まれ変わるんだよ！ 卑屈で低所得で他人を妬み羨み数を集めて強くなった気である愉快なキミら下郎が、穢れ無き無垢なるモノへと！」

せつかく僕が説教しているというのに道路に投げ出されたくらいで悲鳴をあげ、ゴムボールのようにバウンドして消えてゆく青年ども。運転手がだいぶ速度を緩めたから死にはしないだろうが、骨の何本かくらいはヘシ折れるだろう。

が……しかし。

か。あれほど言つたというのに誰一人として土下座してないではないか。

芸人ならそこは意地でも土下座だろうが！！

「まあいいや。さて……」

「ひ……す、すみませんすみません！！ ごめんなさい！ 本当にっ！ 僕は騙されただけですっ！！」

仕上げとばかり僕が運転席の背もたれボンと手を掛けると、運転

手は首をブンブン振りながら仲間と同じようなことを言った。

「すみませんすみません！ ごめんなさい！」

「ハハ……やだなあ。そんなに謝らなくてもいいよ。そんな恐々とした態度をされるとまるで僕が悪者のようじゃないか？」

「へ……？」

「謝る必要なんか無いよ……絶対許す気ないしね」

満面の笑顔を見せた僕は座席の下にスルリと手を潜り込ませ、レールで固定された座席ごと運転手を引っぺがし、外に向かって全力で投げ捨てた。

「しまった……！！」

投げ捨てた直後に僕はハッと気付いた。今さっき投げ捨てて中央分離帯辺りでクラッシュしたシートがRECARO製だということに。

RECAROシートとはAGR（ドイツ脊椎健康推進協会）の認定を唯一受けたカーシートであり、EU圏の多くではRECAROシートを買うことは医療行為として認められている。厳しい審査を潜り抜け、人間工学、整形医学的に照らし合わせ作られたそれは正にイスの王である。

「……まあいいか」

よく考えたらべつによかった。

良いイスだけど個人的にはべつによかった。

さようならRECARO。

忘れないよ。大好き。

いっさい使ってないけど。

## MASANOBUとの別離

苦闘の末に見事暴走バンを撃退し、その後目立った追跡も無く無事高速に乗った僕率いる一行。このまま電子ヌコのナビに従えば目的地まで磐石のようだ。

「姉さん、ガソリンがもうありません！」

「さんざん迂回したからな……猫、近くのガス・ステーションまでどれくらいだ？」

『ガソリンスタンドのある次のパーキングエリアまで3・2kmニヤッ！ 暴動が拡大して警察が仕事を始めたみたいだから細かい騒動はもう下火ニヤよ！』

「フッ！ やはり天は僕の味方をしているな！ 少々予定調和臭くて退屈な話だが」

「サンス兄さん、どうもありがとうございます。助かりました」

「へ……？」

一瞬何のことか解らず、僕はすっとんきょうな声を上げた。

「まあ……ちよつとは見直したかな？」

「ほえ……？」

慈雨様の穏やかな笑みに続いて、腕組みしたノアがブイツと横を向きながらツング ツンデレっぷりを発揮した。心なしか顔が赤いような気もする。いや赤いね。意外過ぎる信濃川親子のお褒めの言葉に僕は思わず歓喜の声が漏れた。

「フフ……フハハ……」

えらい災難に遭ったかと思っただが蓋を開けて見ればどうだ？ 災い転じて福となしたじゃないか？

僕は二人から受けた礼の言葉をしばし噛み締め酔い痴れた。

「ウツヒツヒ！！ ウツヒヤツヒヤツハッハ！！」

「母さん……ちよつと恐い」

「心の病気だからそつとしておいてあげなさい」

【四時間後 都内某所・韓国大使館宿舎内】

高速を出て韓国領事館に無事たどり着いた僕らは、超SクラスのVIPであるソン家の特別な計らいで大使館宿舎に匿われることになった。

当初の目的地であった韓国大使館へはどのルートを取っても到達不可能と判断され、ルートを変更し、ワンクッション置いて一時領事館預かりの身となり、そこから公用車で大使館へと移動 現在に至る。

「ありがとうMASANOBU。感謝の言葉もない。要するに感謝の言葉なんてまるっきりないということだ」

「き、恐縮です……」

「フン」

感謝の言葉もないという言葉、実際は言葉に尽くせぬほど感謝しているという意味だが、照れくさいのでぼかしておく。

おっと。最後だし、アレやっとかないとな。

アレをやらずに僕とMASANOBUの仲は語れないだろう。

「けりやっ！」

それは人生という名の衝動に突き動かされて振るう愛の拳。気合を込め別れの拳を振り下ろそうとした瞬間 MASANOBUは予期していたかのように構えを左前傾にスイッチ、目測を一步ズラされ上体が泳ぎ手打ちとなった僕の拳に合わせ、全身を浴びせ掛けるような踏み込みから芸術的ジョルトカウンターを返して来た。

ゴギギギッ！！

互いの拳が交差し、死中に活を見出すような会心の一撃が僕の顔面に深々とメリ込みんだ。

「ぐがはああっ！！？」

鼻面を粉碎したMASANOBUの右の拳から血の糸が引く。

よ、よくやった……！ 見事だM A S A N O B U……！！  
もうキミに教えることは……てかメツチャ痛いんですけど！！？  
鼻がおかしな方向に曲がってるんですけど！！？  
「姉さああん！！ 事件でええええす！！」  
見事に巨凶パク・サンス越えを果たしたM A S A N O B Uは、胸  
元で拳をグツと握り締めながら天に吼える。  
事件の加害者自供乙。

バイオハザードの洋館みたいな造りの宿舎。  
いきなり窓ガラスを割って押し入って来るドーベルマンや廊下に  
落ちてる何かの肉を「うーうー」言いながら拾って食べるいじきた  
ないスタッフ達に苦戦しながら食堂へ逃げ込み、僕は夜を徹して信  
濃川親子の説得に当たった。

食堂内の一画をガラスで隔てた喫茶室のソファに腰を掛け、テー  
ブルを挟んで向かい合い、まず軽い歓談から入って彼女達の緊張を  
ほぐす。レトロゲームから携帯ゲームへの変遷、そしてゲームギア  
談義に華を咲かせ、頃合を見て本題を切り出すべく、口の滑りを良  
くしようとお茶を頼んだのが運の尽きだった。

「うー……」  
ワゴンでティーセットと洋菓子を運んで来たスタッフが突如豹変  
し、「うーうー」言いながらノアの背後から抱きつき、白い首筋に  
一度口付けてから舌を這わせようとした。  
「わわっ！？ ちよつと……なに！？」  
「うーうー……」  
唾液でテロテロ光る細長い舌先が蛇のように波打ち、背筋が伸び  
るような嫌悪感に身を凍らせたノアが涙目で頭を振った。

「こ、このロリコンめが！！ 破廉恥なッ！！ その、”うーうー”  
”言つのをやめさない！！”  
激昂した僕はスタッフの顔面にティーカップを投げ付け、怯んだ  
隙にテーブルを跨ぎ、札束を手にした憤怒の形相のアグネスを背景

に肩口に強烈な跳び蹴りをくれてやった。

170kg超の蹴りをまともに食らって吹っ飛んだロリコンは壁に掛けられた柱時計を粉碎し、砕けた拍子に背中に突き刺さった木材やガラスの破片に小さな悲鳴を漏らした。

「うっうっう……」

「さまあ！」

給仕改めロリコンは絨毯の上でピクピク痙攣している。そんなにピクピクしたってマイピクにはしてやらん。絶対にだ。

「……あ、ありがと。でも……その人って大丈夫？ 眼が白く濁ってるし、なんか肌色おかしいし……」

「べつにいいじゃん。他人だし。さまあ！」

「……あー、そういや、そうゆうヤツだったわね……うっかりだわ」  
何やら達観したような諦観したような複雑な顔のノア。

フツ、少女がまた1つ大人の階段を上ったようだ。

強制的に。

救急車で搬送されて行った不埒な茶坊主を見送った後も、僕の揺ぎ無い信念に感銘を受けたであろうノアは、移住の話に真剣に耳を傾け始めていた。

結果として、こんな事態だから娘さんの安全を第一に考えるべきだ という切り口で始めた僕の韓国移住ベトナムシヤレではない勧告は遂に慈雨様に受け入れられ、数日後に信濃川親子を連れて帰国することが決定した。

しかし一方、「学校の友達と別れたくない！ というか、そもそもソイツが原因じゃないか！」と言って愚痴るノアは、頑として移住を受け入れなかった。

「もう誰が悪いとか、犯人捜しをして右往左往している段階じゃないんだ。どうか解ってくれ……」

「いや捜してないから。犯人アンタだから」

「じゃあどうすんの！？ このまま日本に居座るの?!」

「何でソッチが逆ギレするの?!」



僕は仕事柄海外を飛び回ることが多いし、異国へ移住することに反対する少女の不安な気持ちも解らないではない。解らぬでもない……だが、子供の意見を頭ごなしにコナゴナに砕き現実を教えるのが大人の誠意。

二時間くらい泣きながら土下座して必死にお願いしたら、ノアは渋々だが引越しを承諾してくれた。

「ありがとうございます！！ 本当にありがとうございます！！」  
本当にありがとうございます！！」

「もういいわよ……見苦しいからやめて。母さんと私が日本に残ればアンタも残るって言うし……どの道選択肢なんてないもんね。というか、ぶっちゃけ強力な脅しね……」

「ノア……」

ソファに隣り合って座っていた慈雨様は、意気消沈したノアのうなだれた姿を見て申し訳なさそうに肩を抱いた。

可哀相だが、これも僕の利権の為だ。

そもそも扶養家族であるノアは発言はできても決定権はない。親である慈雨様が移住を決めた時点で、何と言おうが身の振り方は決まっていたのだ。

だがまあ……彼女達がソン・グループにもたらすだろう利益を少しばかりキャッシュ・バックしてやれば何不自由なくゴージャスに暮らせるし、こんな狭量な島国で過ごした煩雑な日々などすぐに忘れるだろう。

まあ……韓国も島国だがな。

しかも半分。

「あの、お願いがあるんだけど……」

「何だい？ 遠慮せず伯父さんに何でも言うてくれ！」

口籠るノアがもじもじしながら上目遣い。酒が入って気が大きくなっていた僕はそのしおらしい姿にほだされ、「任せとかんかい！」とばかりに胸をドンと叩いた。

「うん……こんなときに悪いけど、父さんの遺品を回収したいんだ

けど……」

「ああ……そのことか。ちゃんと覚えてるよ。部下にお願いしてちゃんと引越し先まで運ばせるからな。君達親子は何の心配もしなくていいんだ」

「うづん……あの、ちゃんと現地に行つて保存状態を観たいんだど……うーん、まだ外は危険だと思うがな」

顎に手を当て言葉を濁しながら慈雨様をチラ見して、「娘さんが危ないことをしようとしてますよ！ 止めなくていいんですか!？」  
という内容の視線を送る。

「にこりん」

微笑まれた!?

これは断れないか!?

日本のあちこちでトチ狂つた暴漢が跳梁跋扈しているというこの状況で、わざわざ港のコンテナまで行つて、センチメンタリズムに付き合つて危険を冒せというのか？ 借金残して死んだ甲斐性なしの遺品にどれほどの価値があるというのだ？

猥雑なゴミ山を前に呆然と立ち竦むノアの顔が思い浮かぶようだ。どうせ、お宝AVとかアイドル雑誌の切り抜きとか鉄道模型とかビジュアルマンシールとか……興味の無い人間にとって二束三文くらいの価値しかないくだらないゴミが積んであるだけだ。金目の物なんか無いと断言してもいいね。

「わ、わかつた！ 僕に任せておいてくれ!」

「うん、ありがとう」

ここで反対してゴネられても面倒。せめて出発の日まで、せいぜいさわやかな伯父さんを演じて点数維持しとかないとな。

僕は根が善人だから不合理だと解つていても非情に徹しきれない甘さがある。それが女絡みならなおのこと。

まあ、モテる男の宿命つてヤツ?

モテる男は大人の余裕で女を挽きつけるのよ。

すでに息の掛かった警察関係者やメディアに情報統制を敷き、替りとなる相応のニュースソースを提供してノンタン殺害事件に対し報道を自粛し矮小化するよう厳命してあるが、あの現場に居合わせた目撃者が、インターネットや口コミを通じて僕が凶行におよんだシーンの動画や顔写真をニューサイトや掲示板に投稿しまくってるせいで火種は再燃し、大事にならぬよう隠密裏にと活動を制限された警察じゃ火消しに心許ないのが現状。

「クソツ……下衆ども！」

物の価値が解らぬ庶民めがっ！

この国の各関係機関の根回しにウチのグループが年間幾ら払ってると思ってるのか！ それが心無い中傷で全てペア……このままじゃ僕の責任問題に発展するじゃないか！

僕は何一つ悪いことしてないのに！！

卑劣にも匿名を悪用してあることないこといい加減なこと書き込みやがって！！ お前ら全員”ZANMETSU”するぞ！！

『まあまあ、そっいきりたつニヤよ。みっともない』

「うおっ！？」

ひと通り連絡を終えて息を吐くと、画面上からいきなりナビネコが闖入、びっくりして携帯を落としてしまう。

「この畜生め！ デリーツ！」

『ニヤ……』

猫のドヤ顔にイラッときた僕は、携帯を拾って容赦なく削除ボタンをクリックした。ションボリ顔の猫が縞模様のノイズの中に消えていく。

「フン」

ざまのないヤツだと小さく鼻を鳴らしてやる。

本日大いに役立つてくれたナビネコだが最早用済み。

生意気なヌコは親指1つで電子の海原に消るがいい。

でも仕事の範疇を超えて動くななんて、高度な擬似人格プログラムも考えものだな。

「さて」

まあ過ぎたことは振り返るまい。

あとは引き受けた仕事をやり抜くだけ。

いつもどおり万事に対し万全を期し万難を排せばいい。

携帯メールで密偵と連絡を取りコンテナ周辺の様子を探るよう指示しておく。

「これでよしと」

挨拶も抜きに内容を簡潔にまとめ 送信ボタンを押す。

携帯を閉じて数分も待たずに密偵からの着信が来た。

じえつとおく、じえつとおく、 じえつ ピッ。

ジェットマン。送られて来た添付ファイルを開いてコンテナ周辺の衛星写真を確認する。

「ふむ……」

ファイルには写真以外に監視カメラの有無や時間帯ごとの人の出入りの詳細も含まれていた。音振や熱源感知などで近辺にある建物内部の様子もチェック済みなので不審者は皆無と言っているだろう。それ以外にも特に異常はない様子。まずは僥倖を得たか。

密偵には以前から引越しの手伝いをする話してたから即座に事細かな情報を送って来れたのだろうが、それにしても早い。異常と言っているくらいだ。

本当に何モンなんだか。

## パク・スンクウ

【パク・スンクウ】

深夜2時　海外から輸入された荷を集積する、埠頭一帯を囲うように延びる倉庫街の片隅に、個人経営の小さな貸しコンテナ場がある。

立地の悪さから集客が見込まれず、荷の内容や氏素性を明かせないような少々ヤバイ客筋を囲い込むことで存続してられるようなチンケな会社のチンケなコンテナの2つに、世界の真実を解き明かす鍵が密かに隠されているとしたら人はどう思うだろうか。

「か、体が動かない……!?!?」

万華鏡のように複雑に彩を変えた女の両眼を正視した瞬間、パク・サンスの全身がガタガタ震え両手両足の末端から硬直が始まった。

こんな夜更けに護衛も就けず単独で動いた迂闊な義兄は、携帯の地図を片手に山積みされたコンテナの狭路をさまよっていた処を敵に補足され、現在の状況に至っている。

女と見るや任務を放り出しナンパ。

アホの極みとしか言いようがない。

義兄の目的はおそらく僕と同様だろう。

ならば競争相手を助ける義理はない。

コンテナから”例のブツ”はすでに入手済みだし、あとは事が終息するまでただ傍観するだけだ。

そう。いつもどおり。

観ているだけだ。粛々と。

「うが……!!」

苦悶の表情を浮かべる義兄。その前に立つ全身白尽くめの女は、白いつば広帽子を目深に被り直し、血のように紅い唇に上品な笑みを湛えていた。

彼女は台湾の異能集団”銀輪”が擁する組織のナンバー2　白

き女帝『リシユ・タエイ』に相違ない。あの女には僕が立案した韓国第二期超人部隊が全滅させられたという苦い経験がある。

銀輪のリシユと威軍の金虎のたった二人に壊滅の憂き目を食らったせいで、責任者である僕は島流し同然の左遷になった。忘れようとしても忘れられるわけがない。

リシユは雪のように純白なストレートヘアと絹のようなキメ細やかな白い肌に合わせ、徹底して自身のイメージカラーである白を強調するよう衣装をコーディネートしている。

白い帽子に白い襟巻き。白熊の毛皮に羽の装飾をあしらえた白のロング・ブーツ。頭からつま先までが総て白。だがそれすら差し置いて眼を引くのは、女性の細腕に余る双頭の龍を模した白金のガンレット”二十八式イージス鉄甲・龍掌”だろう。

物体の固有振動数に瞬時に同調・反発させるイージス・システムは如何なる攻撃をも弾く究極の無比の神盾として機能する。あの鉄甲の前では炸裂する砲弾や酸性の雨すら無力と化す。

「リシユ……き、聞いたことがある……ぞ！　せ、”石視”<sup>せき</sup>の魔眼を持つ死神……！」

「ご明察」

いつもながら芝居掛かった義兄のセリフ回しにリシユが端的に応える。

義兄が口にした石視とは、かの有名な邪気眼やオプティク・ブラストと同格に並べられるS級の魔眼。認知度では後者に遠くおよばないが、その威力たるや絶大。

術者の両眼から発せられし石視の魔光が対象の網膜を透して脳髄に受容されると、数秒後にタンパク質を異常変異させ筋組織を骨化させるゲノム・エラーを引き起こし、通常の数万倍のスピードで分裂増殖を続ける骨芽細胞が血液を介して全身に拡がり、やがて身体が石のようになって死に至る。

万死の魔眼と鉄壁の神盾。

この二つを有した怪物がリシユ・タエイ。

たえ僕が加勢したとてどうしようもない相手だ。

きーみーのぉー、ここおーろにいー、しる　ピッ。

静観を決め込もうとした直後に鳴り響く携帯の着信音……バイオマンのOP。

「はい、スнкуウです」

携帯は私設の基地局を中継して繋がるので、日本滞在中に僕と連絡が取れる相手は大体特定されていた。

「夜分おそれいります。パク・リリーです」

電話の主は義兄サンスの妻であるパク夫人。

彼女は僕の雇い主だった。

パク・リリーは夫の帰りを待つ主婦として献身的に努める傍ら、パートと称し、裏社会で”密偵”と呼ばれ一目置かれる情報屋集団を統括していた。

密偵と云っても、情報を管理する夫人が実際に動くことはまずなく……その手足となって働くのは、テイ家の分家からさらに分派した異端中の異端児達　次世代レギオンを担う”ネオ・レギオン”の鬼子らと、その活動をサポートする僕であり、その恩恵は主に……あそこで硬直しているアホに捧げられるためのモノであった。

「スнкуウさん、大変申し訳ありませんが……今回の監視任務の内容を延長して主人への助成を願えますでしょうか？」

「……はい」

とてつもなく嫌な任務だった。

それでも僕は命じられるままに従う。

「よかった……。いつも無理なお願いを聞いて頂いてありがとうございます。今度、焼きたてのアップルパイを御馳走しますね」

「楽しみにしていますよ」

夫人と僕の間柄を一言で説明するのは難しい。

主従関係を結ぶにあたっては様々な経緯をたどったし、一時期は

互いの骨肉を食むような戦闘状況にも置かれた。それでも説明しろと云うならば……そうだな、きつと僕は彼女のことを好きなんだろ。

夫人対して抱く尊敬や恩義や信頼……様々な想いが混じり合った結果生まれた感情を……自分の都合のいい風にはき違えているだけなのかも知れないが。

「さてと……」

指を組んでのばした腕をグツと後ろに反らせる。

僕の仕事は別働隊が到着するまでの時間稼ぎ……相手を倒す必要はない。

格上のバケモノ相手に人間のクズを護れと云う願い……正直、不服をのべれば億千万の言葉を尽くしてもまったく足りないが、それでも夫人の願いを聞くことだけが僕の想いを示す唯一の手段。

命を削るような鉄火場を離れ幾年月経ち、怪物じみた身体能力の義兄に大勝したのも遙か昔。古錆びた拳でどれだけの時間が稼げるか知れているが、僕の懸命が彼女のひとときの微笑みであれたなら……悪くはない。悪くわない、こんな人生も。

「闘気開放 集束」

大きく吸った息を残らず吐き終わると、腹の下 丹田を軸に定め氣を集束させてゆく。出し惜しみ出来るようなレベルの差ではないので端から全力だ。

エネルギーは大きな螺旋を描く。

力を一点に集束し螺旋の回転幅を狭めることで闘気の純度が極限まで高まると、氣は黄金から澄んだ蒼白い光へと変化する。この状態を戦氣と呼び、荒ぶる力を効率よくまとめ形にすることで、噴氣状態をより長くより強く保つことが可能となる。

「おかしいわ……普通ならとつくに石化しているはずなのに。不思議？ どうしてかしら？」

「いたいいたい！ 指びりつとする！ 指先がびりつとする！ 舌がしびれる！！」



「体積が大きいからかしら……？ いやでも、これだけ時間を掛ければ……普通は固まるわよ……ねえ？」

「知らん！ 僕に訊かれても困る！」

石化の兆候が始まってから数分経っても一向に参る気配がない騒がしい義兄に対し、リシユは驚いた風に唇の形を変えた。目深に被っていた帽子を外しながら義兄の前に立つと、興味深そうに頬をペタペタ触り始め、唇が重なりそうなほど間近で顔を覗き込む。

「野郎……あの状況でニヤけるか普通？」

美人を前にしてだらしのない顔をする義兄に、呆れるを通り越してある意味尊敬してしまう。

だが義兄の奇行はその程度では留まらない。調査に熱中するリシユが不用意に顔を近づけた瞬間、舌をペロツと伸ばし、なんと彼女の形の良い唇を舐め回した。

「な、な、な……っ！」

「……ニヤリ」

不意打ちを喰らったリシユは少女のような可愛らしい悲鳴を上げて義兄を突き飛ばし、口元を隠し眼をうるませながら顔を真っ赤にしている。

「よし……チャンスだ！！」

「アイツならやりかねん」長年の勘から義兄の行動を予測していた僕は、リシユの鉄壁がユルむその好機にすっかり備えていた。お腕を持つように出した右手の上に戦気を集中させ、頭の中で作り上げたイメージに沿って気を練り上げ続けていた。

弾丸。弾。円筒形。円錐形。金属。長距離。精密。

狙撃。ライフルの弾。

可能な限り気を集束させて形成した即席のライフル弾は、ボンヤリとした状態から次第にその実像を高め、硬度を増し やがて、常人に可視出来るくらいに形が固定する。

「ちよろいもんだぜ」

リシユ・タエイ……身に纏う気は正に怪物そのものだが、その心

は意外にも擦れてなかった。まるで乙女のように繊細で、子供のイタズラ程度のセクハラで目を丸くして防御圏を崩してしまうなんてな。

龍掌が顔から離れた瞬間がヤツの最期だ。

その時まであと……数秒足らず……ここだ！

「そのキレイな顔をフツ飛ばしてやる！！」

ひとさし指を弾いて蒼白く光る弾丸を発射した瞬間　リシュは死角から迫る弾丸に反応し顔を素早く向け、振り上げた右の鉄甲でそれを受け止めた。

フイーン

弾頭が接触した点を中心に鉄甲の表面に波紋が広がり、大気が小刻みに震える音が響き、緩やかに回転を止めた氣の弾丸は音もなくその場で霧散　掻き消されてしまった。

「ク……！！」

猫のように大きく見開かれたリシュの青紫色の眼光が、200m先の貨物上に潜むスナイパーを的確に射抜き、僕は恐怖に慄きながら顔を伏せた。

「ハアツ……ハアツ……！！」

齒の根が合わぬほどに芯から震えが来る。

そ、走馬灯とでも云うのか……不意に、かつてリシュに襲われときの凄惨な記憶が脳裏に去来した。

過去に、東南アジアの辺境で秘密裏に建造されたバイオプラントが襲撃され、軍用に強化調整された三千を超える獣兵ビーストが三時間足らずで全滅した。一体で二個中隊以上の戦果を挙げ戦車をも屠る異形の凶獣が、たった二人を相手に一瞬にして。

異星船から持ち出したオーバーテクノロジーを武器に大々的に軍需産業へ乗り出しそうとしていた僕は、そのプロモーション戦略の

一環として、獣兵で構成された超人部隊を組織し、離反の末にライバルであるリク家に同調したテイ一族 群隊<sup>レキオン</sup>への肅清を兼ねたデモンストレーションを披露することで、一気に世界市場へと販売網を拡げようとしていた。

一体たったの九万ドルという高いコストパフォーマンスを誇る獣兵は、睡眠調教で人間の火器を一通り扱えるようになり、声帯の仕様で言語機能は無いが、六歳児程度の知能はあるので簡単な命令なら認識することが可能。

生産効率を上げる為に成長速度を速めているので寿命は三年と短命だが、人間の兵士1人を育てて維持するより遥かに安く効率が良いので、生産体制が整い安定供給が望めるようになれば、獣兵は各国の戦地で引く手数多となる予定だった。

だが……そうはならなかった。

太陽光が燦々と降り注ぎ、蒸し暑い濃密な湿った空気が常に肌にまとわりつく、青々と草木生い茂る熱帯の辺境の地に、人の手で生み出した紛いモノでは決してたどり着けない高みに立つ本物の怪物が訪れた。

威軍の獣皇『金虎』。

銀輪の白き女帝『リシユ・タエイ』。

外宇宙、銀河の渦、銀の輪より訪れし末裔を謳う銀輪は、地球外異種文明よりもたらされた技術の拡散を善しとせず、武力を行使してもそれを阻止、あるいは排除しようとする過激なカルト教団の一面があり、旧き儒教を踏襲せし異教徒である威軍と共闘体制を組むことはありえなかった。

だが彼ら二人は、どんな偶然か……たまたま時同じくして鉢合わせた。僕の命運が懸かったプラントを完膚なきまでに破壊する為に。

『殲滅です』

万の猛獣を操るとされる金虎は、幾何学模様が刻印された2m弱四方の漆黒の金属の箱に自身を隠し、係留索のように太く頑強な鎖で箱を嚴重に巻きつけ、カバのように巨きな体躯をした四足獣の大猫にそれを曳かせている。

そしてその大猫の親である、身の丈70mを越す妖魅『火毬』は、足下にまとわりつく獣兵を蟻のごとく片っ端から踏み殺す。

火毬が歩くだけで地響きが腹の下底を抉り、大樹が小枝のごとくへし折られる。鼠のような、白黒の縞模様の火の尾が波立つと先端からパツと火の粉が散り、森は瞬く間に火の海に包まれた。

「ハイダラー！（火事だー！） ハイダラー！（火事だー！）」

逃げ惑う現地スタッフ。常駐していた兵士が火の対処に追われていたその間隙を縫うように、手薄となっていたプラントの非常階段から白き魔性が潜入しようとしていた。

リシュ・タエイだ。

虎の子の獣兵はアフリカ南部の戦地へと長距離輸送を控え、代謝機能を一時的に低下させる溶液で満たした地下プールの中、仮死状態に置かれていた。

獣兵以外にめぼしい戦力も無く、プラント内の研究施設に勤めるただの人間にリシュ・タエイを止められるはずもなく……身動きの取れぬ三千体は、数十億ドルを投じたプロジェクトは、石視によって全滅させられてしまった。

一秒……二秒……体に異変の兆候はない。

「……ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！」

息をひそめ硬直していた肺腑が酸素を求めて暴れ出す。石視の殺傷圏内外でなければ今ので死んでいた。あっさりと。痛恨のミスに背筋が凍る。

よく考えたら……不意討ちなんだから叫んでから攻撃しちゃ駄目だろう……しかも狙撃箇所まで指定して……防がれて当然だ。

だが何か……是が非でもそう言わなければならない気がした。  
どうかしてると思うが……そんな気が。

万に1つの勝機が……千載一遇のチャンスが……、そんな気のせいで今終わった。

「ちよつと、そこのあなた！ 卑怯よ！ 出てらつしやい！」

存在そのものが反則級なクセして容赦なく僕を糾弾するリシュ。  
たとえるなら、ガトリングガン構えた虎が病気で死に掛けた岩陰の子鼠に「おい卑怯だぞ出て来い！」と言っているようなもの。もちろん虎はガトリングガンを持たないし僕は鼠でもない。彼我の戦力差はそれ以上かも知れないが。

「そろそろ腹ア括るか……いくぞ、水氣練成！！！」

氣の属性にある地・水・火・風の四大元素（流派によつてはそれ以上ともされている）の中で、最も顕在化する力が強い水氣を操る僕は、頭上に掲げた燃え滾る球状の蒼炎を両手で挟み込みながら鋭く研ぎ澄まし、仄かに蒼白く光る長大な槍へと変化させる。

「蒼き星屑の尾」フルー・ジャベリン！！！」

僕は貨物の陰から飛び出し振り向きざま 目測すら付けず凡その勘で必殺の大槍を振り下ろした。

ヒュゴツッ！！！！

ロケットエンジンのような轟音を響かせながら放たれた槍は小型の彗星のように蒼く荘厳な尾を引き、敵の頭上目掛け一直線に流れ落ちる。

「あら、凄いい」

厚さ10mの鉄塊すら貫く蒼炎の槍を、まるで人ごとのような口振りで端的に評したりシユは、月光にも似た眩き蒼光の下、悠然と右腕をかざした。

「……龍珠」じゅうず

龍の右は絶対防御。

龍の掌中に埋没する銀珠　”龍珠”がリシュの眩きに反応して一際強い光輝を放つと、光は十字を描き、透明なスクリーンとなって前面に展開した。スクリーンに阻まれた大槍は回転を続け、蒼白い粒子の火花を散らしながら切っ先をすり減らし、数秒もせず完全に消滅させられてしまった。

「バケモノめ……！」

全身の力がガクンと抜け落ち、膝を崩し掛けた。予想はしていたが予想以上に余裕で避けられた。

しかもバリアまで張るなんてデータにない。

「ねえねえ、お姉さん！ おフロ入るとき、体はどこから洗う派？ 胸？」

「……あなた石視を受けたのに、一体どうやって動いてらっしゃるの？」

「さあ？　どーでもいいよそんなこと！　それよりもさあ、深夜も営業してるイイ店知ってるんだけど、今からいつしよに行かない？

松屋って云うんだけど！」

「そ、そんなこと……？　ま、まあいいでしょう……でも、吉牛派なので謹んでお断りするわ！　それにあなた！　ちよつと失礼よ！

女性の唇はね、不浄を赦さぬ神聖な　」

よし、ナイスだ義兄！

何だかよく解らないが特異体質なのか、義兄は石視に対し強力な耐性を持っているようだ。数分経っても手足の痺れ以外は何も起こらず、自分を殺そうとした女を懲りずにナンパしているのがその証拠。妻帯者のクセして野原一家の長男みたいな女の口説き方しやがって。……それはそうと、吉牛派か？　リシュ・タエイ？

「ねーね、今度の休日ドライブしない？」

「……ハア」

義兄はなおもリシュを誘っているがまったく相手にされず、その返答とばかりに今度は龍の左が唸りを上げる。

ドンッ！！

腹部にメリ込んだポイントを中心に全身に波紋が広がり 次の瞬間、水風船を破裂させたような怪音と共に義兄の巨軀が弾け飛んだ。

「ぶへあっ!?!」

「 ” 震水 ” 」

何を喰らったか解らないが義兄は膝から地面に崩れ落ち、胃を逆さまにしたような勢いで激しく嘔吐する。

龍の右が防御に長けているとすれば左は攻撃専用だろうか……？ 打撃以外の何らかの衝撃が義兄の全身を駆け巡り昏倒せしめたのだ。触れてもいないはずの貨物やコンテナの金属板が戦慄くように震え、深い暗闇だが僕の眼には波頭もわずかに揺れているのが判る。お馬鹿キャラじゃなきゃ普通に死んでただろう。

「うげええー！ うげえええー！」

「驚いた……！ 今で死なないのは獣兵かアフリカ象くらいなものよ？ あなたひよっとして象なのかしら？」

「違うゾウ！」

「ふうん……」

リシユは僕のことなど空気のように思っているのか、大好きなオモチャを見つけた子供のような目で義兄を観察している。近付きすぎるとさっきの『ペロペロ』が待っているだろうが、距離を完全に見切っているのか、義兄の舌先は彼女に触れることなくおじぎを繰り返すばかりだ。

「あなた、もしかしたら」バック・ドア「裏口」を開いたのかもね。理性を保つて

いながら能力を維持し続けるなんて珍しい症例だわ。興味深い」

「……僕とアナタは運命という名の絆で結ばれた恋人。二人は時を越えて出逢ったのですよ……そう、愛し合う為に！」

義兄め、この期に及んでどういう神経してやがんだ!?

キレイなジャイアンみたいな目をして何のつもりだ！？  
ゲロ吐いた後に吐くセリフじゃねえぞ！！

初っ端の大技でやや意識が遠退き掛けたが……まだやれる。

必殺技であるプラズマ化した蒼炎の槍は、尖端の瞬間最大焦点温度が数千度（理論上もっと高く出来るがフツーに自殺行為である）以上にも達し、生身では近づくだけで煙と化してしまったため、術者は体の表面を覆うように高濃度の水気の気流を張り、その余波を同時に防がなければならぬ。限界値を超えれば待っているのは自滅。 ” 氣 ” の残量には細心の ” 氣 ” を配る必要があるのだ。 …… べつにシャレではない。

「 水氣練成！ 」

水氣の超高温によって大気組成を電離させ荷電粒子を生み出し、そのエネルギー粒子を高密に圧縮したグレープフルーツ大の蒼炎球を両手の間に形成する。外側に向かって放射状に蒼く、中央の核となる部分に白き光を留めたプラズマ球を……僕はこう呼んでいる。

「 デス・スター ” 惑星崩滅球 ” ！！ 」

「 うはッ！ こいつイイ歳こいて ” デス・スター ” とか言っちゃってるよ！ 」

「 う、うるさいな！！ 」

超必殺技発動の瞬間、空気を読まぬ義兄が馬鹿にした風にこちらを指差して吹き出した。僕は途端に我に返り、自分の行動と発言の数々を思い返して顔を真っ赤にする。

ぼ、僕だつて子供っぽいのは重々承知してるよ！

でも、氣を集束して武器化する際、意識領域の奥から素早く設計図を引き出し形成力を高めるのに、連想用のキーワードを定めておくとか有利に働くんだよ！ 集束率や持続時間が上がったたり！！ ほんの…… 気休め程度だけどな。でも効果はあるんだよ！ ホントだぞ！

「 クスクス…… あ、いえ…… 失礼。顔がアウストラロピテクスに似



たマツスルな人、あれでも狙撃者さんは至って真剣なのだから笑ってはいけないわ」

「いや……そこフォローしないで。逆に厳しいです。」

「えっへっへっ、すみませんね〜！ あの人ちよつと頭が残念なんです！ どうか勘弁してやってください！ 永らく中二病を患ってましてね！」

「”サバ・シユート”のおまえに言われたくねえよ！！」

「……サバ・シユート？ スンクウさん、何で僕の必殺技のこと知ってんツスか？」

「あ、いや……そ、そう！ 動画サイトで観たんだ！ 確かそうだった！」

「まずい、頭に血が昇ってつい余計な事を……。」

「サバ・シユートって何かしら？」

「気にしないでください。ホモのたわ言ですから」

「おい！？ 敵に変なこと吹聴すんな！？ お前が行く先々の会社で僕の同性愛者疑惑流してんの知ってんだからな！！」

「何のことやら？」

「義兄がヤレヤレと肩を竦める。」

「そんなもので誤魔化されるかよ！」

「逐一監視している僕が貴様の悪行を知らぬはずがないだろ！」

「監視していることは秘密なので踏み込んで突っ込めないけど……。」

「お前のせいで僕が女性社員からどんな風に見られてるか……！！」

「飯食ってるときに隣に座ったOLが「受けですか？ 攻めですか？」

「どっちでもドンと来いですか？ 地球は青いですか？」とか、

「目をキラキラさせながら訊いて来たりッ！ 最後の質問意味わかん

「ねえよ！！ マンファの即売会で勝手にマツチヨと交わる薄い本の

「主人公にされたりッ！ その本を鵜呑みにしたファンから大量のフ

「アンレターが届いたりっ！！ もう沢山だッ！！」

「いや〜、あっはっはっは！！！！」

「笑うな!？」

「あの、デス・スターが消え掛けるけど？」

「え……うわっ!？」

リシュに言われて僕はギョツとした。意識力が大幅に削がれたことで球状を崩した惑星崩滅球が、ウニのように無数の角を突き出し崩壊しようとしていた。再構成しようにも爆縮が始まって間に合わない。

「クツ……惑星崩滅球!！」  
デス・スター

このまま自滅する　とっさにそう判断した僕は、カメハメ波の要領で荒ぶる蒼炎球を敵に向け撃ち出した。

「　火氣練成!！」

アホだが義兄はプレイボーイ。リシュを庇おうと迷うことなく飛び出し、ナツクルボールのような不規則な軌道で迫る惑星崩滅球を迎え撃つべく噴氣を開放した。焼却炉の中に大量の燃焼剤をブチ込んだような火勢で噴き上がる金色の闘氣は質こそ戦氣に劣るものの、その総量は桁違いに大きい。

「　悪りいなスルクウ！　おめえの技借りっぞ!！」

義兄の力強い声に呼応するように肘から先の両腕が紅蓮に包まれた。

義兄は紅く燃え盛る両腕を高々と掲げ、嵐のように激しく渦を巻く劫火を御して徐々に球体へと変化させる。

真昼の如く闇夜を切り裂く紅炎の照光。

球体の表層を海蛇の如く荒れ狂うプロミネンス。

眼が眩むような明滅する光の中、義兄は一瞬だけ嘲笑うかのような表情で唇の端を歪め　カメハメ波の要領で紅炎球を撃ち出した。

「死ねエエ!!　火式　”惑星崩滅球”!！」  
デス・スター

「　っ!！」

デカイ……!!

軽く蒼炎球の50倍以上はある……が!!

ボン！

こちらに向かつて一直線に落下した紅炎球はゴムボールみたいに蒼炎球に弾かれ遙か沖の方へ飛んで行った。火の玉は海面をオレンジ色に染めながらジュウジュウ煙を上げ、やがて”鎮火”して……

”沈下”した。……シャレじゃないからな。  
「ンな……何イ!?」

投球フォームのまま驚愕に彩られる義兄のツラ。

何イじゃねえ。阿呆めが。

いくらデカくても中身スカスカの球じゃ弾かれて当然。

闘気の燃焼力じゃ大気を電離させるには充分足りず、エネルギー変換がスムーズに行えない。結果、密度が低くなり球体が維持出来なくなる。火球が不要に大きかったのもエネルギーが荒れ狂うように躍動したのもそのため。才能に依存して術理を軽んじるから子供みたいなミスをするんだ。

「おい、いいからその女から離れる！ 邪魔だ！」

「嫌だねエ！ 僕はもう女性を見捨てないと心に決めたんだ！ たとえスルクウ……貴様を敵に回してでもなア！！」

「この馬鹿が……！！」

誰の為に奮闘してっと思っただッ！

僕はつい苛立ち、いつそ義兄を沖にでも吹っ飛ばしてしまおうかと迷った。

義兄は打たれ弱くていい加減な男だが、女が絡むと極端に強くなる傾向がある。……昔、僕の左腕の骨をコナゴナ砕いたときも女絡みのことだった。夫人……”パク・リリー”の為に。

「話の腰を折るようで申し訳ないけど、そのイケメンさん。私がここに居る理由はご存知かしら？」

「ああ……」

肯定すると、先程まで冗談ばかり言っただけでいたリシュの眼

が打って変わって真剣味を帯びる。

彼女が指しているのは間違はなく、僕がコンテナから回収したHDDのこと。ノアの父親である故・信濃川タダシディスク・ドライブが記録した”揺り籠”の実験データ。世界で初めて”世界の枠フレーム”を超えた男の残した記録。

揺り籠こそ世界の理を解明する唯一の鍵だ。

神々のもたらす運命すら打ち破る大いなる希望。

残された時間が少ない僕は、どうしてもその鍵が必要だった。

「提案なのだけど。アナタが手に入れた”荷”を譲っては頂けないかしら？ 石視の届かないこの距離では、ほんのわずかだけどアナタを取り逃がす可能性がある。それは1%にも満たないけど、荷はとても貴重でデリケート……こちらとしても穏便に済ませたいわ」  
「……」

人形のように表情の消えたりシユから探るような視線が向けられた。

HDDは回収済みだが今は手元に無い。近くに停めてある車のダッシュボードの中。三層構造の特殊ラバーで包み油紙を巻いて厳封してある。

「え……何の話？」

事情を知らぬ義兄が僕とリシユを交互に見て困ったような顔をする。

それでいいさ。知らぬが仏。

知らないなら知らないでいる方がずっと幸せなんだ。

義兄が埠頭にフラリと立ち寄る数時間前、回収したHDDを車内のノートパソコンに繋いで内容をチェックしたのだが……最近この付近で発生した謎の電磁波による影響でデータの一部が破損状態にあった。

精密機械は電磁波に弱い……誰でも知っている。

僕が電磁波に干渉する技を行使した時点でHDDを身近に置いて

ないことは自明の理だった。だからリシュは眼で問いかける……”  
例のモノ”は”どこ”にあるのだと。

「うー」

「アッー！！？」

とか何とか考えていたら、低速で目標に到達した蒼炎球が、必殺技発動直後で硬直状態の義兄に直撃　猛烈な勢いで燃え上がっている。

「なんてこった……」

これはひどい。

でも自業自得なので同情の言葉も出ない。

義兄は全身炎に包まれ、ドラクエのフレイムみたくなって熱さに踊り狂っている。

闘気流の保護があるから氣の使い手は火達磨くらいじゃ死なないし、失敗して惑星崩滅球もだいぶ威力を落としていたし……まあ大丈夫だろう。

「うー」

「アッー！！？」

踊る義兄。

「うー」

「……………」

見る義弟。

義兄弟なら踊らにゃソソソソ。

おっと……燃える阿呆を見てつい変な妄想が。

今は任務優先だろ。

「おい”兄貴”！ イタリアのトップチームが集い、世界最高峰といわれるサッカーリーグの名称は、『セリエ』何だ？」

「アッ……！！？」

よし正解。

簡単な質疑応答は出来るようだ。

「これなら特に助ける必要は無いか」

「アッ……！！？」

「あなた、ちよつと黙っててもらえるかしら？」

提案を無視されたまま繰り広げられる義兄弟漫才に痺れを切らしたのか、そう冷徹に言い放つたリシュは、何の躊躇もなく劫火の中に手を突っ込み、150kg以上はあるだろう義兄を片手で軽々と放り捨てた。大きな二等辺三角形を描いて巨漢が子猫のように宙を舞う。

「うわっぷ！ な、何を！？」

ほぼ直角に海へダイブした義兄は、アプアプ言いながら必至に浮き上がるうともがき、その醜態を見ても眉1つ動かさないリシュは、話を区切るようにただ一言、「邪魔」と吐き捨てた。

ゴオオッ！！

その直後のことだ。リシュを中心に猛烈な突風が吹き抜け、海面に数え切れぬほどの無数の波紋が広がった。

「で、デタラメだ……！！？」

凄まじい氣の奔流に肌が痛いほど粟立ち、内臓がその機能を止めたかのように冷たくなる。ぬめるような汗が毛穴という毛穴から大量に噴き出した。

風に煽られながら恐怖に震える膝を必至に押さえる。

心臓が驚掴みにされたような気分。

目の前の現象をどう説明すればいいのかまったく解らない。

リシュの力は闘氣でも戦氣でもない。

ただ圧倒的で……無色透明で……濁りの無い純然とした力だった。目の前のバケモノは、ほんの少しだけ”ソレ”を開放した。固く嚴重に閉めたバルブをソツと少しだけ開いた。それだけで周囲の世界は元の姿を保ってはいられない。大気は雷雲のように鳴動した。

波紋は漣となって水平線まで拡がった。

僕は恐怖に凍りついた。

義兄は溺れた。

とても常識で推し量れるような存在じゃない。

何もかもがこちらとは完全に別次元……規格外だ。

「もういいわ……あなた、邪魔だから今すぐ失せなさい」

「……あ、あは!?! あはは!?! なはは!?!」

義兄は引き攣った笑顔で首をカクカク縦に振り、そのまま海中にブクブク沈んで消えてゆく。

女を見捨てないと言い放った直後に見捨てられる側になるとは哀れな……いや、義兄らしいか。

## ホームアローン

【パク・サンス】

リシユとスンクウの超人バトルに遭遇する二日前。

信濃川親子と韓国への移住契約を結んだ初日の夜。

密偵から埠頭一帯の詳細な情報を受け取った後、信濃川親子に「お休み」を言ってから別れ、あてがわれた部屋へ行き、シャワーを浴び、純白のモコモコフワフワのガウンを着てベットの端っこに座り、柿の種つまみにビールをちびちび呷りつつ、携帯で世界中の愛人達へ連絡を入れる僕。

「ハロー、ジェシー！」

「Shit！」

遠く離れていてもママな連絡でハーレムの維持に努める。これぞ高貴なる者の務めである。

僕は多くの女性に応える愛と財力を持っている。

自慢じゃないが甲斐性もある方だ。

女性の嫉妬やワガママに応える度量もある。

そうだな……恋愛の過程で必然的に起こる問題や障害を面倒だと思わないんだ。それを含めて楽しめる男さ。

彼女達はそんな僕を好きだと言ってくれる。

恋人達と僕を繋ぐ糸はね、実のところお金じゃないんだ。

大切なのは愛……誠意……そして真心さ。

「二ハ才、娘々！！」

「去死！！」

電話連絡を始めてから三時間が経過した。

「おーし、73人全員に電話掛け終わったぞ！」

その内の66人に連絡付かなかったけど、まあ向こうも都合があるしね！ 時差とか！ ハーレムを大切に思うなら”寛容”こそが



”肝要”さ！ シヤレだよ！

「ぬはあ〜！」

僕は一仕事終えた満足感に酔い痴れながら用済みとなった携帯をソファに放り投げ、ベットのの上に大の字になって大きく息をつく。

厳しい連戦で疲弊した筋肉が休養を求め訴えていた。このまま目を閉じれば明日の昼くらいまで泥のように眠れるだろう。一番の心配ごとであった信濃川親子との案件も無事片付いたし、野郎スングウの鼻も存分に明かしてやれた。満足満足である。

（日本か……長いようで短い滞在だったな）

始めは信濃川親子に邪険にされたけど、外交で馴らした辛抱強い交渉で最後には信頼を勝ち得た。

マックで僕のトップ3に入るレベルの女性に出逢った。

MASANOBUと拳を交え友情も芽生えた。

ノンタタンとも戦った。

本当に色々あった。

その結果、僕のせいじゃないけど人死にまで出してしまい（ハイヤーで轢いた人が救急車で搬送途中に死亡した。レカロな襲撃者の1人が道路に投げ出された際に頭部を強く打って死亡した）結構大事になっているし……今度こそは出国まで大人しくしていよう。

実は信濃川親子が韓国へ移住する当たって、既に韓国籍を失効している慈雨様はノアと同様に日本人なので、永住査証のF5を取得する必要があり、その審査には通常1〜2ヶ月くらい掛かるんだが……金と権力で何とかした。

ソン家筆頭であるパクの家名を出せばピザでもピザでも電話一本で余裕である。一本満足だ。やはり世の中お金だ。金に尽きる。

そんなこんなで出立は六日後に決定した。

専用機であつという間に凱旋帰国だ。

もう何も恐くない。

もう……何も……心配……。

暗転。

おっばい！ おっばい！

おっばい！ おっばい！

どこからか懐かしい声が聴こえる。

まるで雲に横たわっているように大いなる安らぎの中、心地よい単語にしばし耳を傾ける。

おっばい！ おっばい！

そうだ。

忘れてたよ。

僕としたことが情けない。

あの貴重なおっばいと、このままお別れするつもりか？

『ソレイユ・リュスカ』……天使の微笑みの女性。

忘れてはいない……忘れられるものか。

だがその貴重なおっばいとやりに執着したのが悲劇の始まりであった。

「ふああ〜」

翌朝になった。

夜中から朝方に掛けて”おっばい”という単語に惑わされ続け、浅い眠りを繰り返していたので……まだ眠い。

カーテンを引いて窓ガラスを開き、さわやかな空気を胸いっぱい  
に吸い込みながら、少し強い陽射しに目をしばたかせる。やはり相  
当疲れていたのだろう。目にうつすらと映る陽は、かなり高い場所  
に昇っていた。

（眠いなあ……）

頭を掻きながら二度目の欠伸をする。

このまま二度寝してしまいたい気分だが、ホストとして客人を放っておくワケにもいくまい。街にも用事があるしな。主にナンパだが。

洗面所で顔を洗い、歯磨きをして、整髪料で髪を整え、頬にアフターシェイブローションを塗って絶叫し、胸元に白い明朝体で”セレブ”と書かれ、その周りにたくさん星を散りばめた襟付きの赤いカッコイイシャツと、いい具合に色落ちしたヴィンテージ・ジーンズと、バスケット・シューズというラフなスタイルで身支度を整え、エレベーターで一階のホールへ降りる。

月桂樹の葉で飾り付けた大きなアーチを潜り、中央ホールの噴水広場から三叉路を右折して、昨晚の状態のまま荒れ果てているゾンビ食堂に着くと、目元を赤く腫らしたノアが独り寂しくテーブルに着き、子リスのようにボソボソ昼食を摂っていた。

「おはよう!」

肩の荷が下りて上機嫌の僕は、手を挙げて元気にあいさつした。

「……」

「おや……?」

でも反応が返って来ない。

ノアは目を伏せたまま機械的にオムライスを口へ運んでいる。そんな一心不乱になるほど美味いのかと思ったが、どう見ても冷めてるし、口元も、味わうというより作業的に上下しているようだ。

「ぬっ……」

ノアの不自然な態度は気になるが、それよりも僕は無視されるのが我慢出来ない性質だった。

僕は少し考え……大きな水槽でユラユラ泳いでいるカラフルな熱帯魚を驚掴みにして飲み込み、腹の身の部分だけ食って頭と尾っぽと中骨だけの状態で水槽に戻し、再び元気に泳がせるといふ芸を披露した。

「モグモグ……どうよ!」

「……」

何の罪もない熱帯魚を犠牲にしたというのに、それでもノアはぼんやりとしたまま、相変わらずつまらなそうにオムライスを切り崩している。やはり様子がおかしい。

これは重傷だな……やむを得ない。

僕は意を決し、氣を集束させた右の震脚で床板を爆砕した。

ドゴオンッ！！

「な、なに……！？」

直撃の瞬間にドリルのように旋回する蹴りは岩盤すら粉碎する。大理石の床板がアイスロックのように砕けて散らばり、さすがのノアも冷や水を被せられたかのように驚き顔を上げた。衝撃でテーブル上の食器や燭台がカタカタと小刻みに揺れている。

「おはよう！」

「え……ああ、アンタか。」遅よう”。あいさつしてたのに気付かなくて悪かったわね……」

「慈雨様は？」

「朝方に出掛けてった。日本を出る前のあいさつ廻りだった」

「で、お前はどうした？ 何か目が赤いけど寝不足か？」

「……まあね」

ノアはあからさまに会話を切りたそうな様子で、まともに目を合わせようともしない。スプーンの手先でオムライスをいじっている。顔は可愛いけど横柄な態度は可愛くない。

「なあなあ、あれ！」

イタズラ心に火がついた僕は、ノアの肩をポンと叩き 先ほどの水槽を指さす。

「何よ……？」

僕の得意気な顔を見て訝しげな目をしたノアは、椅子を引きながら水槽を振り返り見て 「こわっ！？」と叫んだ。

「さあて、慈雨様もいらっしやらないことだし、この暇に街に繰り

出すかね！」

「あ、街の方行くんだ。それじゃ、わたしも連れてってよ」

「え……？ いや悪いけど、重要な用事がある」

「え……仕事あるの？ なら仕方ないかな」

「うむ。ステキなおっぱ……女性を口説きにファーストフードへはせ参じ」

言い終える前にノアからスプーンが飛んで来て僕の額にヒットする。

「あたっ！？ 何をする！？」

額をさすりながら涙目で抗議の声を上げるが、ノアは一瞬だけ殺気の籠った視線を投げつけ、僕が恐怖に息を呑むのを見てからフツと表情を和らげた。

「ねえ、連れてって？」

「……」

少女は可愛らしく小首を傾げて言った。

その笑顔がとても怖かった。

笑顔の裏に秘めた有無を言わせぬ強大な圧力に屈した僕は、ひたすらメトロノームのように首肯を繰り返す他なかった。

パクー族は女こそ恐ろしい……永久凍土も凍りつきそうなくらい冷たいノアの笑みを見て、僕はそれを改めて認識した。

ノアは食事を小さな口でよく噛んで食べる。

食べ終えるまで15分くらい観察してたけど、ノアはこの歳で既にテーブルマナーを一通り習得しているようで、所作の1つ1つに品があり、それは英才教育を施された上流階級の子女と見比べても格段に良かった。

韓国へ行けばパクー家の一員として家紋を背負う身となるので、ものときは礼儀作法に詳しい僕がいろいろと指導しなければ

とも考えていたが、どうやらそれは杞憂だったようだ。これも慈雨様の教えの賜物だろう。

「ごちそうさまでした」

ノアは手を合わせながらおじぎする。

このシーンだけ切り取って観れば普通に良い子だ。

まあ……スプーンは投げるけど。

というか僕にだけヒドイの？ ツンゲロだから？

「お待たせ。行きましょう」

「ああ。じゃあ行こうか」

食後の歯磨きを終え化粧室から出て来たノアは、逸る気持ちを抑え切れず、クルクル回りながら僕の腕を取って玄関へと急かす。

こういつトコはやはり子供っぽい。

先ほど失禁し掛けたことも忘れて自然と顔もほころぶ。

「あ、そういえばさ、お前は街に何の用事あるんだ？」

「……」

何気なく尋ねるとノアは僕の腕を抱えたまま一瞬キョトンとして、それから唇を少しだけ緩め睫毛を伏せた。

「さて……問題です。わたしの目がウサギさんのように赤いのは何故でしょう？ 答え それはね、昨日壊された携帯の中のメモリ

ー全部、徹夜して、記憶を頼りに手書きでメモしてたからに他ならないのです。で、他に何か質問ある？」

「……最新機種弁償しますから勘弁してください」

「なぐんてね。もういいわよ。学校から支給されてた携帯電話だから、そっちの方に弁償しといて頂戴」

「え、そうなの？ 何だ、それなら僕は悪くないじゃないか」

「どういう思考回路してればその発想に到るのよ……。わたしは学校で特待（特待生）扱いだから貸し出しの備品とか大体無料なんだけど、壊した物はさすがに弁償しなきゃなんないの。でも家はピンポーだし、引越し前で今はそんな余裕ないし、だから壊した本人に弁償して貰いたいんだけどね？」

「ふーん……なんか面倒だな。まあいい。それなら、少し早いが支度金を支給しておこう。今手持ちが少ないから、とりあえず二百万

くらいでいいか？」

「……え？ 二百……万？ 何それ？ ジンバブエドルで？」

「なにゆえジンバブエドルで支給すると思った……普通に円でだ！」  
ノアは力が抜けたように僕の腕からスツと離れ、壁際までフラフラあかずさりながら、他人には見えない蝶を追いかけてるような顔で寝惚けたことを言うが、そんなリアクションされると他意を疑われてるみたいで面白くないぞ。

「信じられない金銭感覚だわ……子供にボンと二百万円だなんて。わたしのお小遣いなんて月1200円なのに……なんか人生変わりそう」

「このくらいで驚いてちや身がもたないぞ？ キミの人生は昨日変わったんだ。それはもう劇的にな。僕という運命がもたらした大河の前では、人1人の意志など水滴の1粒に過ぎないのだ」

「カツコイイこと言っているみたいだけど、そのシャツはどうかと思っよ？」

「いや、カツコイイだろう……！」

ギヤキイツ……！！

僕は氣の放出で空間が軋むくらい自信をもって答えた。

「うっん。ダサイ。一瞬、死ねって思った」

「ひどっ!？」

なんとという猛悪な！

だから子供は嫌いなんだ！

子供は精神も美的感覚も未熟でいっさい遠慮などしない！  
辛辣な言葉を投げ掛けて平気で人をなじる！ 傷付ける！

僕のプライドが打ち砕かれた瞬間であつたよ！

「いや、子供に傷付けられるなよ」

「心読まないで!？ フンだ！ お前は子供だから、この”セレブ・ポロシャツ”の良さが解らないんだよ！”セレブ”の良さが理解

出来ないんだよ!」

「あの、それはどうでもいいけど、昨日のハイヤーの運転手さんが捕まってるみたいだけど……?」

「へ……?」

ノアがロビーに備え付けられた薄型ハイビジョンTVを指差してとんでもないことを言うので僕は驚き 思わずTVの方へと視線を彷徨わせた。

そこには 頭に背広を被せられて手錠を填められた高嶋政伸氏の姿があった。雨あられとフラッシュを焚く報道陣を掻き分け、刑事によってパトカーに押し込まれようとしていた。

え? 何?

何があつたのMASANOBU?



## 愛は試練

『俳優でホテルマンの『高嶋政伸』氏が轢き逃げの容疑者として勤務先のホテルよりたつた今連行されました！ 証拠の車両は既に押収され鑑識に回されております！ 死傷者八名を数える白昼の大惨劇！ 犯行現場の住宅地では未だ事件の猟奇性を物語るおびだたしい血痕が残り、まさかこの人が……』という事態に、関係者も動揺を隠せない模様です！』

「……………」  
MASANOBUを乗せたパトカーが走り去り、無駄に深刻な顔した女性レポーターは、視聴者の怒りや不安を煽り誘導するかのようなBGMに乗せ事件を大仰に奉り上げている。

「ほら、昨日の運転手さんでしょ？」

「……………」

僕は驚きのあまりただ呆然と画面を見ていた。

TVでは現場からスタジオにカメラが戻り、そこでは事件の専門家がよくわからない統計グラフを持ち出し、MASANOBUが犯行におよんだ背景には政治腐敗や世界情勢不安への関連が無視出来ない、事件からやや脱線気味な熱弁を奮い、同席していたコメントーターを苦笑いさせていた。

「ど、どうしよう……か、金の力でなんとかならないかな？ 外圧掛けてなんとかならないかな!？」

「いや……飯にそれでなんとかなくても、なんとかしちや駄目ですよ。人として……………」

「そんなことはない！ 僕は特権階級だ！ エリートだ！ 一般人とは命の重さが遙かに違う！ 身を粉にして世界に貢献している分、その責務の重さを天秤に掛け、人よりもより多く優遇されるべきではないか！ でも今日は街へ行くから、TVは観なかったことにするよっ!!!」

「おい」

ノアが心底呆れた顔で僕を睨むが、友情と既得權益を天秤に掛けた結果、リスク回避が上策だと解答が出た。ゆえにやむを得ないのだ。

これでも助ける方策はいくつか考えた。

強敵との為になにか出来ないか、いろいろ考えたんだ。悩んだんだ。その結果……「まあいいや」という結論に到った。

「そんじゃ街へ行こうか！」

「え、本当にいいの？」

「実刑受けてHOTELをクビになっても、”OTSUTOME”  
が終わればデパートに再就職出来るさ！」

「人殺しておいて再起出来るワケないでしょ。日本の法律ナメんな」

僕の希望的観測をノアは鼻を鳴らしながら即座に打ち砕く。

なんて残酷な少女だ。血が通ってねえよ。

僕が深い悲嘆に暮れていると、いきなり画面がパツと替わってワイドショーが昼メロになった。

「え……？」

「お願いやめて！ KAZUYAも、KENJIも、もうやめて！  
私のために争わないで！！」

「危ないぞ！ そこをどいているSAYAKA！」

「そうだ……コイツとは決着をつける運命なんだ！！」

TVでは、肉食系と草食系の若いイケメン二人が1人の女を巡って夕暮れ時の海岸で対峙している。人のことは言えないけど、なんで名前をカタコトで？

「なんだこれ……？」

僕はごく当たり前の疑問を漏らした。

振り返って見ると、掃除のおばちゃんがソファにドツカリ座って、新聞を膝に置きながら食い入るようにTVを観ていた。どうやら手元のリモコンを使ってチャンネルを替えたようだ。

「失せるハウス・メイド！ 権力使って更迭すんぞ！」

「なにさ！ まだ休憩時間だよ！！」

僕は怒りのままに拳を振り上げておばちゃんを追っ払う。

まったく、客の前でサボタージユとは豪気な女だ。

「喧嘩をやめて！ 二人を止めて！」

「と言いつつ女は、”ファイツ！”と両腕を交差させ血みどろの戦闘を煽る。

「どうやら本音が隠せない性分のようなだ。

『ぬがはあっ！？』

『ほくおっ！？』

『争わないでー！ やめてー！』

と言いつつ女は、どこから取り出したのか、「手がすべったー！！」と言つてカイザーナツクルと特殊警棒を二人の間に放り込みさらなる戦闘の激化を煽る。

なんだこの女。ヤバイぞ。

ピッ。

なんか観てられないので僕はTVを消した。

「まあ……ということだ。行こうか」

「いや、ちよつと待ってよ……TVで報道されるくらい事件になってるんだから、首謀者のアンタが今外歩いたらヤバイでしょ」

「む……それはそうなのだが」

さすがの僕でもこの状況で「ナンパしたい！」とは言い難い。言い難いだけで行かない気はサラサラないのだが、それでも言い難い。「うーん……」

正直困ったことになった。

いろいろ方々に手を回したというにあっさり事件が表面化してしまった。面子を潰された僕はいいいツラの皮だ。この失策を下の連中に槍玉に挙げられれば今後の進退にも関わる。こうなったら相撲の

八百長でも盛り上げて、何とか早めに処理しなければ……。

「ちよつと待つてる」

「わかった」

ノアを玄関の前で待たせ、携帯メールで密偵と連絡を取る。

三十秒も待たず返信が来る。着信は電人サボーガー。

ざつと目を通したメールの内容によると……どうやらソン家対抗勢力に組みする局が要求を拒んで報道を強行しているようだ。

嘗めたマネを……どここの派閥だ？

赤子の手を捻るようだと言っていた日本のマスメディアも一枚岩ではないということかよ。まあいい……見せしめだ。ソン・グループ関連企業のスポンサーを一斉に引き揚げてカラカラに干上げやる。ウチ系列の芸能プロからタレントは誰一人番組に呼べないと思え。僕の権力を嘗めるなよ。

密偵に指令を送り反逆者どもを処理する。

数秒後 「すみませんムリでした」という内容の返信が来た。

「なにゆえ!?!」

僕は急ぎメールを送って確認する。

パク・サンス「件名/お願い」

何で駄目だったの!?!

僕が命じてるんだよ!! 絶対なんだよ!!

幾ら掛かってもかまわないからやつちやってよ!!

数秒後に返信。

開く。

密偵「件名/失脚」

数時間前にパク会長が崩御なされました

その機に乗じ、反旗を翻した第二階位の”ソネン家”がパク家を

除く五家をまとめ、次期七家筆頭を強行に主張しました

ピラミッドの均衡を乱し、頂点たるソン家に弓引く行為にもなり兼ねないクーデターにも拘わらず、ソン御大はその手際の良さに大層感心され、ソネン派の主張を御認めに

まことに申し上げ難いのですが今現在、パク家は権力の中核より放逐された状態です

グループの傘から追い出され、後ろ盾を失った……ただのパク家です

「……え？」

僕は手を震わせながら携帯の画面を凝視していた。

とても信じられない内容がそこにはあった。

え？ 何がどうなった？

会長がお亡くなりになられただと？

何だソレ？ 何だよソレ？ ええ？

あとほんの数日で帰国して、慈雨様が新会長の座に就き、パク家はさらなる繁栄を約束されていたはずだった。僕は今まで以上の権力を握るはずだった。

それが……何で？ どうして？

何で異国で僕は訃報を聞かされている？

家が失脚した理由をメールで報らされている？

「……家の留守も……まともに守れないのか……この無能な糞馬鹿どもがツツ！！」

携帯を捻り潰し唇を噛み潰すほど憤激した。

TVの液晶画面を”掌”でミゾレのように引き裂き、壁に何度も拳を打ちつける。

畜生畜生畜生畜生……ツ！！

こん畜生めがツ！！

ブツ殺してやる！！

あの糞どもが！！ 使えねえんだよ！！

ソネンの根暗野郎め…… 図に乗りやがってよお！！

「何これ…… いったいどうしたの……？」

ノアの声がして振り返る。

耐震構造の壁一面を破壊し尽くし肩で息をする僕を前に、惨状を聞きつけて戻って来たノアは心底怯えた顔で立ち尽くしていた。

……。

「な…… 何でもないよお！ ちょっとしたストレス発散だぴよん！  
」！

「ぴ、ぴよん……？ それでこんなに！？」

あー、めんどクセえ。

こんなときでもフェミニスト気質が消えねえや。

まあ要するによ。

もう”俺の”頼りはコイツらしかいないんだな。

ほんの少し、自分の中の怪物が膨らんだような気がした。

マグマ溜まりのように熱を孕む体は息苦しいほどに餓え渴き、自分を含め全てをメチャメチャにして壊してしまいたいという破滅願望が狂気を駆り立てる。

僕の中にはずっと”何か”が潜んでいた。

全国的に面が割れ、警察や官僚の庇護も失い、さらにパク家が御取潰し同然ともなれば、俺に恨みを持つ者はこれ幸いと復讐を果たしに来るだろう。

自慢じゃないが、恨みを買っている数は千や二千じゃ足りない……  
…それも”企業単位”でだ。”人数”にすれば十数万人は下らない  
だろうな。

このままでは確実に殺されてしまう。

だから俺は考えた。

うまくして外へ出る方法を考えた。

そして思いついた。

「お待たーっ！」

「……」

その ” うまい方法 ” を実行した俺を見て、ノアは複雑な……  
何とも名状し難い顔をした。

「どうだ！ スイス軍正規兵仕様のガスマスクだ！ しゅこ〜、これで ” 僕 ” の素性は護られるッ！！ しゅこ〜」

いろいろと考えた結果、俺は顔をガスマスクで覆って正体を隠すことにした。ゴム製のマスクは眼を護る頑丈なゴーグルとタコのよう  
に大きな口をしたフィルターが特徴的で、装着すればすれ違ったり一見するくらいならまず顔は判らない。

これで俺は胸を張って市街を歩ける。

これで勝つる！！ とそう思ったが、ノアの反応はイマイチ  
のよう、

「……それつけて隣歩かれると、わたしの方のありとあらゆるものが護られないのだけど……なんか精神的に」

「なあに気にするな。しゅこ〜、ちよつとしたオシャレだ。しゅこ〜」

「 ” セレポ ” に軍用マスクってどんなオシャレだよ！？ 悪目立ちし過ぎるでしょ！？ すぐに職質されるって！ つーか、アンタの体格じゃ顔隠してもバレバレだ！」

「しゅこ〜、そう状況を悪い風に考えるな。逆境は、辺りを見回せばチャンスボタンでいっぱいだ。前向きに考える！ しゅこ〜、ポジティブに行け！」

俺はノアの肩をぐわしつと掴み説得する。

有無を言わせる気などなかった。

「さあ行こう！ 約束の地へ！！ しゅこ〜」

「いやだー！ 放せエエ！！」

外へ……光あふれる暖かな世界へ！！

ノアは引きずられながら俺のスネをガシガシ蹴ったり背中をポコ

ポコ殴つたり必死に抵抗したが、50mも歩けば反抗する気もなくなつたようで、愛犬が死んだときくらい深くうなだれながら5mほど後ろをついて来ている。

男は少しくらい強引な方がいい。

本に書いてあつたし間違いはない。

「ふん、見る！ しゅこ〜、僕の言ったとおりじゃないか！ しゅこ〜、道を行く誰もが僕と眼を合わせようとはしない！ しゅこ〜、誰も僕に気付いてないんだッ！！僕は安全だッ！！ しゅこ〜」「いやいや、フツーに関わりたくないんだと思うのよ。つか、しゅこしゅこ〜って、うるさいよ」

ノアの皮肉混じりの負け惜しみも、今の俺にはそよ風のように。余裕のある大人の対応ってヤツだ。

さて……まずは口座が凍結される前に出来るだけ金を引き落とさないとな。

永らく筆頭の座に就き、磐石と呼ばれていたパク家……それを瞬く間に追い落とした六家が十全の準備もなしに行動を起こしたとは考え難い。身内の何人かは既に殺されたりし、地位も財産も残らず吸い上げられるだろうよ。……となると、俺の隠し口座も資産も嗅ぎ付けられるのは時間の問題。

今は一路銀行へ。

資金を確保したら本命のナンパ。

問題は山積みだが今日くらいは英気を養おう。

外交で築いてきた人脈もあるし、世界最高峰の情報収集力を持つ密偵もいるし、いざとなりや北の”蛇姉”（バケモノ）を頼ればいい。ぜんぜん慌てることはないんだよ。

明日やればいいさ。

明日から本気出す。

街は平和そのものだった。

高層ビルが林立する都心は雲ひとつない好天に恵まれ、思い思い



に着飾った人波は絶えることなく通りを歩き交っている。

中央交差点を直進に抜け、駅前アーケードに差し掛かる途中で警官もちらほら見掛けたが、何事もなく軽く素通り出来た。

「ふう……」

二人組みの警官が通り過ぎるのを待って、俺はノアの後ろからひよっこり顔を出す。バレやしないかとさすがに肩を竦めたが……何か拍子抜けするくらい誰もこちらを気に留めてないようだ。

(フツ、これなら変装は必要なかったか?)

「ねえねえちよつと……！ 見てよお、”アレ”！」

「あー……今日は熱いからなー！ たまにああいうのが出るんだよー！」

「……」

第一目標の都市銀まであと250mといったところで……俺を携帯のカメラでパシャツと無断撮影し、遠慮も節操もなく陰口を叩き露骨に指差して晒うカップルが何かをのたまった。

天気の良い休日の午後に若い男女が街でデートとくれば浮かれるなどというのは無理な話だろう。無理もない話だろう……が、死ぬ。

悲しみを抱いて死ぬー！

「しゃあああー！ーっ！ー！！」

「ちよ……いやああ！ なんか変なのこっち来るう！？」

「馬鹿、逃げるー！！」

女は男に手を引かれながら逃げようとするも、高そうなブランド物の手提げを肩から滑らせ中身を盛大にバラ撒いた。

「あー！ 待って！ ちよつと！」

煉瓦敷きの石畳に散らばる携帯、化粧品、鏡、メモ帳などなど。

女は男の制止も聴かずにソレをかき集めようと手を伸ばすが 絶望の影はすぐそこまで迫っていた。

「うりゃああー！！」

「ぐふっ！？」

俺は男の鳩尾に一撃入れてから素早く背後に廻り、馬乗りに近い

体勢から肩幅に開いた膝に両足を絡め、チキンウィングのように置んだ両腕を前方に倒す。

ガキッ！！

「うがあああつ！！？」

技が完全に極まると、両腕の骨がミシミシ奇怪な音を立て、男はあられもない悲鳴を上げた。

腕をテコの原理で前倒しにされ、体が深く前傾に沈められた状態では、倒れることも耐えることも脱出することも不可能！

これぞ必殺

「あゝ！！ あれはゝ！！ なんかキン肉マンの、オリンピックでウォーズマンのアレ的なあゝ！！ あゝ！！！」

通りすがりのオタクっぽいバンダナ・デブがこつちを指差しながら何か解説してくれそうな勢いで叫ぶが、記憶が曖昧なのかどうも要領を得ない。なら出てくんと言いたい。

デブに代わって説明するならば、これはソビエト出身のロボット超人『ウォーズマン』が得意とする大技……”パロスペシャル”ッ

！！

「やめて！ ケンジを放してえ！！」

「やだっ！」

女は拾ったカバンをちゃっかり胸に抱き、泣きながら彼氏の解放を懇願するが、それは無理というものだ。

ケンジは俺を愚弄した。

それは赦されざる大罪だった。

ゆえに制裁を加えねばならない。

だが俺は基本的に女子供はやらん。だから女よ……貴様は黙ってそこで観ているがいい。何も出来ぬ己の無力をたっぷりと噛み締めながらな。

「さあケンジ！ しゅこゝ、この体勢から切り返せるかな！？ し

ゆこく、ぬっふっはっはっは！！」

「がんばれケンジ！」

「そこだ！ 負けるな！ ケンジイ！」

俺のガスマスクが余程”悪役”っぽく見えるのか、通行人は声を張り上げてケンジの応援に回る。だが応援なぞ既に無駄なのだ。

抜群の体幹が為すウェイト・シフト・コントロールによって自重170kgのほとんどが両肩に掛かっている状態では、この”フェイバリット（必殺技）”は到底返せるモノではない。可動域限界まで腕を曲げられながら立っていられるのは賞賛に値するが。

「フンッ！」

俺はとどめとばかりに一気に腕を倒す。頭を振り苦悶するケンジの肩の付け根辺りから、靱帯がペリペリと剥離する音が聴こえ始める。

「が……は……！？」

骨が折れる直前 過度の負荷によって意識が途絶えたか、ケンジは糸が切れた人形のようにガクリと膝を落とした。

その直後だった。

弛緩したケンジの股から水溜りが広がったのは。

チヨロチヨロと水が滴る音だけが静寂の中響き その次の瞬間、アーケードを揺るがすような大きな怒号と歓声が渦巻いた。

連れの男の醜態を見た女は関係者と思われなくなかったのか、羞恥に塗れた横顔を残し人込みの中へサツと身を翻す。カップルが破綻した瞬間である。

「うおおっ！ あああっ！！」

地鳴りのような大歓声を浴びながら俺はコロンビアを決め、歓喜に身を震わせて叫んだ。

「うおおっ！！ やたあっ！ しゅこく、カップルが破綻した！ ツー！！」

「……もう何もツッコまないぞ」

大都会のコンクリートジャングルで起きた必然の闘いに勝利し雄

叫びを上げる俺を見て、ノアは無関係を装うように距離を取り、心底冷めた顔でばやいた。

セレブ！！ セレブ！！ セレブ！！

俺の大勝利を称え、群集から鳴り止まぬセレブ・コール。期待に応えようと、セレポの胸元を引つ張って『セレブ』の文字を強調すると、一際大きな歓声が上がった。

セレブ！！ セレブ！！ セレブ！！

いつせいに向けられた携帯のカメラが絶えず俺の雄姿を写す。薄汚い街で真のセレブが誕生した瞬間であった。

「ポーズください！」

「お願いします！！！」

「セレーブ！！ セレーブ！！」

「ハッハッハ！ まかせておきたまえよ！」

俺は交差させた上腕を隆起させ稲妻のように太い血管を浮かび上がらせた。

ついでに三回転の前宙、バク宙、ひとさし指一本での倒立、道路標識の鉄棒を片手で掴んで鯉のぼりのように静止、500円硬貨を指で細く裂いて”こより”にし、蝶結びにして見せた。

そしてついにはシャツをめくり上げ、極限まで鍛えられた後背筋の断層によって錯覚して視得る ”鬼の貌”まで披露する。

「うおお！！ すごええ！！？」

「信じられねえ！！ 化け物だあ！！」

「ありがとう！ みんな応援ありがとう！！」

大きく手を振って声援に応える。

又フフ。

こういふ撮影なら大歓迎なんだけどな。

燃烧系アミノ式を軽く超える絶技の数々で喝采を勝ち得た俺は、多くの民草に惜しまれながらその場をあとにした。

そして銀行は休みだった。

「日曜は銀行休みだよ」

嚴重にシャッターとブラインドが降りた銀行の前でさも当然のように言うノア。

俺はしばらく立ち尽くして、

「や、休みって……何で!？」

「何で」と言われても……銀行法とか、労働基準法とか、公務員法とか、日本の法律で休業日が決まってるからだよ。……というか、自身たつぷりだったからなんかアテでもあんのかと思ったよ」

「そんなモンはない! もうないんだよお! うがあああつ!！」

ちよ……!?!? \ ( ^ o ^ ) / オワタ!?!?

もう笑うしかねえ!!

「へっ! 何かアホっぽいのがいるぜ!」

「ひやはっ! 馬っ鹿じゃねの!! 写メ写メ!」

俺が頭を抱えて悶えていると、その後ろの方で中高生くらいの若造二人がこちらを指差して薄ら笑い。

カチンとくる。

「じゃああああつ!!!」

「うおっ!?! こっち来る!?! なんかマスクつけたのこっち来る!?!」

「逃げる!?!」

「超遅エエエ!!!」

俺は足をもつれされながら必死に逃げ惑う二人組みにダッシュで追いつき、回り込み、「チン」打ちであったという間に昏倒させてやった。

「さまあ!!!」

地べたに這い蹲る小僧どもを踏みつける俺を見て、ノアは半眼に

なつて嘆息する。あまりのカッコ良さに感嘆したのだろう。

「ちなみに”チン”とは、”チンチン”のチンではなく”顎の先”<sup>チン</sup>のことを指す。顎はポピュラーな人体急所のひとつであり、特に顎先への打撃は脳震盪を誘発することがあるので非常に効果的なのだ。以上の説明から、チンは、チンコでもチンポでもオチンチンでもなくチン（顎先）だと理解してもらえただろうか。大切なことなので、くれぐれも間違わないで欲しい。股ぐらのうまい棒とはまったく異なる意味なのだ。絶対に間違わないで欲しい。

俺はノアの肩をポンと叩いてそのことを教えてやる。

「チンコとか関係ないから!!」

「……え？ な、何！？ いきなりナニを言ってるのっ!？」

とても清々しい顔で親指を立てる俺を振り返り見て、ノアは目をパチクリさせたあと、顔を真っ赤にして視線を逸らした。

きつとイケメンが迫ったから戸惑ったのだろう。

女性の顔をジッと見つめていられないなんて……プレイボーイもツライな。

「さてと……どうしたものかね」

悪童どもをチン責めにして少しばかり溜飲は下がったが、そんなことしても現状の根本的な解決にはならない。事態は依然大ピンチのままだ。

だが……もう迷っている暇はない。

さすがに明朝まで待てば口座を嗅ぎつけられる。

ソんに連なる者はそこまで甘い連中ではないのだ。

俺は日本に背水の陣を覚悟して来たので、いつでもトンスラこけるように総資産のほとんどを現金化して都市銀に集中させてある。数十年かけて人を騙くらかして貯めた”2200億ウォン”以上もの資産……有価証券、レアメタル鉱山の採掘権、山林、船上カジノのオーナー権、マンションにホテル　それら全てをお金に換えた。そんな大切なお金が、今こうしている間にも危険にさらされている。「これしかないか……」

俺は少し悩んだ末、近くのATMを廻って他所の銀行口座から下ろせるだけの金を下ろし、口座にアクセスしたことで連中に嗅ぎ付けられ使用不能になったカードは最後にまとめて碎いて破棄した。手元に残ったのはたったの150万。

数十年かけて貯めた金がこれっぽちだ。

搾りカス。捨て銭。ケツ拭く金にもなりやしない。

「いや、まいったまいった!」

「……」

封筒に詰まった札束をポケットに無理やりねじ込みコンビニから戻ると、ノアは俺を無視して早歩きでその場から離れ始めた。頬を桃のように膨らませて眼を合わせようともしない。

ああ、そうか。解る……解るよ。

きつと大好きな伯父さんをみんなに取られた気がして面白くないんだ。だから俺の関心を引こうとして、それでそっけない態度を取っているんだね。

うんうん。解る解る。

俺はノアを追いかけて、背中からギュッと抱きしめた。

小さな背中だ。

何だかとてもいい匂いがした。

「僕が悪かった。さみしかったんだね……?」

耳元でソツと囁いた瞬間、ノアのやわらかそうな髪が突風を受けたように逆立った。

「な……!?!」

ノアを包む光の奔流は黄金色から蒼白く変化し 透明な”無”へと変わる。

と、鬨氣!? いや、戦氣か!?

似てるけど少し違う……? ?

そのどちらでもない……? ?

「なにすんのよ!?!」

面食らって一瞬呆けていると、ノアはキッと目を剥き、抱きかか

えられたまま俺のつま先を力カトで踏み潰した。

「いだっ!？」

さらにノアは、激痛に顔が歪む俺を背中中でグツと突き放し、空いたスペースに放り込むように力カトで股間を蹴り上げた。

「か、かはっ!？」

背筋がゾツと冷たくなるような感覚に俺は思わず呼吸と止めた。

次の瞬間に来るだろう地獄の痛苦に備え股間を押さえた刹那 ノアの裏拳が痛烈に鼻面を打ち上げ、畳み込むように顎に強烈なアツパーをブチ込んでくる。

「ンガ……!？」

緻密に計算された攻撃に俺はたたらを踏む。この時点ですでに勝敗は決したかのように見えるが、ノアは追撃の手を休めず俺の小指を取って背面に廻り、膝裏を蹴って蹴り足を引かぬまま腰椎に力カトを落とし、体勢が大きく崩れる瞬間を狙って左腕の肘関節を極める。

ガキッ!

「うがあああっ!!?！」

後ろ手に回された肘をほぼ直角に曲げられ、電車のレバーのように関節をギリギリ締め上げられ、俺はあられもない悲鳴を上げた。

なんとみごとな!？」

軽量の特性を活かした力を用いないスピーディかつテクニカルな体捌き。巨漢の俺を相手に反撃の暇すら与えず翻弄した少女は、関節をきっちり極めながら「ふんっ」と鼻を鳴らし大層ご立腹の様子。「な、なにをするん……? しゅこ〜」

「ガスマスクで隣歩くわ、いきなり暴れるわ、女の子の前で卑猥なことを言うわ、抱きついてセクハラするわ、もうサイテー!!！」

「え……? そうかな……?！」

身に覚えがない。



「そつだよ！」

「わ、悪かった！ もうしない！ 多分しない！」

「多分……？」

ノアは掴んでいる小指を捻って肘関節をさらに捻り上げた。電流が奔ったような激痛に見舞われる。

悪魔や……悪魔の子や……！

最近の”キレル若者”に散々ボコられた俺は、目を剥いて非難の声を浴びせる。

「ボコツたね！！ お、親父にもボコられたことないのに！！」

「ボコつて何が悪いのよ？ せいせいしたよ？」

「ひどっ！？」

「ああもう！ そーゆーのはいいからさ！ とりあえず携帯の代金だけは確保しておいてよね？」

「ああ……だが今、手持ち合わせて150万とんで32円しかないぞ。あと、各国の最小単位小銭コレクションがちびつと。大変申し訳ないが、お前に渡す約束の200万にも届かないザマだ」

「アンタの財布には32円しかなかったのか……？ じゃあ、わたしの分はいいから、弁償代だけお願い」

「いいの？ マジで？」

「もともとアテにしていなかったわよ。何か大変そうな事情もあるみたいだしね。……でもさ、こんな調子で引越しの方は大丈夫なの？」

「ん……あ、ああ！ それはもう！ 準備万端！ 万事抜かりなし！ し、四面楚歌！」

「四面楚歌！？ ホントに大丈夫なんでしょうね！？」

「だ、大丈夫さ。多分……」

「また”多分”か……あの」

「じゃ、じゃあこれ！」

話が触れて欲しくない方向に向きかけてたのを察した俺は、ポツケから引っ張り出した封筒の札束をノアに押し付け、「これでなん

とかして！」と言ひ残し、何か言われる前に足早にその場を離れた。  
「おい、ちよつとー！」

呼び止めるノアの声を無視して俺は人ごみに紛れる。

見えない聴こえない。

見えない聴こえない。

目を閉じ耳を塞ぎ必死に走る。

ドン！

「いてっ!? おい、兄ちゃん、どこに眼エ付けてんだ!?!」

パンチパーマの強面のおっさんにぶつかって因縁つけられた。

急いでるのに。

「顔に決まってるんだろ!? ポケがアアッ!」

「がふッ!?!」

俺は怒りのままにおっさんをブツ飛ばし、封筒の札束を振りながら追って来るノアを振り払う。

きつと、足りなくて怒っているんだろう。

スマン! 今はそれしか持ち合わせがない!

もう、あと32円くらいか……。

俺は尻ポケットの小銭を握って、せめてもの足しにしてくれと、振り返らずに後ろの方へバツと放った。

「痛っ!?! おい teme エ!?! デカブツ! 何してくれるんだ  
オイ!?!」

投げ銭は、髪を脱色して、ピアスを付け、服を着崩した高校生く  
らいの不良学生グループに当たった。

投げ銭にぶつかって額を赤く腫らしたりーゼントの少年は、粘土  
細工のように顔を歪に変えながら俺に迫り、仲間はそれを逃がさな  
いように取り囲む。今はそんな場合じゃないのに。

「お金を粗末にするなッ!?!」

「ぐはっ!?!」

「ちょ……投げた張本人っ!？」

少年らに踏みつけられた小銭を見て俺の正義に火が点いた。連中を怒りのままにブツ飛ばすと、追っ手がどの辺まで来てるのか一度確認しようと振り返った。

見ると 踵を返し、遠くの方へと走り去って行くノアの姿が。

「????？」

何で急に引き返したんだ？

あんな慌てて？

何だか分からないありがたい。

ぶっちゃけ言っと、今の状況はかなり不利だ。

金も無いし引越しも無理だ。

そこをツッコまれたら俺は為す術もない。

俺はノアの姿が完全に見えなくなるまで見送った後、今後のことを考えるため、近くのオープンカフェで一休みすることにした。

涼しそうな日陰の席を選んで座り、熱気の籠った暑苦しいガスマスクを外してテーブルに置く。

「ぶはっ！」

新鮮な空気が一瞬で肺の中を満たす。汗に濡れた頬を外気がひんやりと撫でた。

よく冷えたおしぼりで丹念に汗を拭い、ついでに湿気の籠ったガスマスクの裏も拭いていると、メニューを持参した壮年のウェイターがほどよいタイミングで接客に来た。

「いらっしやいませ。ご注文をどうぞ」

「水を」

「かしこまりました。ごゆっくりどうぞ」

ウェイターは涼しげな顔で一礼して去っていく。

「ふう……不味い」

都会の水は不味かった。

日本の水道水は世界一おいしいともいわれているが、精神的疲労

が味覚を鈍らせているのだろう、今の俺には何もかもが不味い。氷をバリバリ食いながら思う。

いろいろと模索したが引越しはもう無理だ。

海路も空路も韓国への帰国便はすでに抑えられているだろうし、そもそも引き受け先がなくなってしまっている。

あきらめてここに留まったとしても、血涙流すほど俺を恨んでいる連中が重武装して近日中に大挙して押し寄せて来るだろうし、携帯は捻り潰したから密偵と連絡取れんし、他の携帯や公衆電話からじゃ密偵と繋がらない上、集積された声紋データや特定のキーワードから”エシユロン（通信傍受）”に絡め取られる可能性が高い。要するに八方塞がりだ。

こんなときにナンパなんかしてる場合だろうか？

ふと、そんな考えが脳裏を過ぎる。

だがそのとき 俺の顔にフツと影がかかった。

「あ、あ、あ、あのっ！ こここ、こちらの席、ご一緒してよろしいでひょうかつ！？」

「ああ……どうぞ」

来店した女性客がテンパリ気味に相席を伺ってきたので、フェミニストの俺はメニューを眺めながら快くOKした。ほどなくして先ほどのウェイターがやって来る。

「いらっしやいませ。ご注文をどうぞ」

「え……どうしよ……こ、コーヒー！ コーヒーでお願いします！ すいません！」

女は超合金口ボのように肩肘を張りながら食い入るようにメニューを凝視し、時限爆弾のリード線をカットするが如き決死の声で注文した。

「かしこまりました。以上でよろしいですか？ ただ今お持ち致しますので、ごゆっくりどうぞ」

ウェイターは一礼して去っていく。

俺は一連のやりとりをメニューの上からチラッと覗きつつ、高度

に訓練された日本の店員に感心したりしてた。

ただ者ではないな、あのウェイター。

（ふーん、ガーナ・ホット・チョコレートか……しばらく飲んでねえな。けっこう好きだったけど、大怪我してから甘いのが苦手になったからな。なぜか駄菓子だけは食べるんだけど）

「大丈夫……大丈夫よ……！ がんばって……シウリー、ファイトッ！」

行き詰まった頭を休めるためにメニューのデザート欄をなんとなく流し見していると 女が、独り言にしては少々大きな声で何やらブツブツ呟き出した。

（何だ？ 電波さんか？）

チラッと見た感じ、女の 少女の背格好は15歳くらいか、大きな麦藁帽子を首に提げ、肩までかかるホワツとした亜麻色の髪に、装飾の少ない白いノースリーブのワンピースを着ている。

まあ、この辺はべつに普通だが……注文を終えた後もテーブルに突っ伏し、手をプルプルさせながらメニューで顔を隠しているの、それが怪しいことこの上ない。傷害致死と殺人幫助と暴行と家屋破損と不法侵入と窃盗と電波法違反と公文書偽造と名誉毀損などの冤罪を着せられている俺としては、少々警戒せざるを得ない。

ふむ、どうする？

どっかの組織の見張り役かもしれないぞ？

いつそ逃げるか……思い切って声かけてみるか？

よし。

「ああ、あのっ！」

意を決して顔を上げると 声がハモツた。

俺はギョツとして息を呑むが、少女の方は立ち上がろうとした拍子にテーブルの縁に膝を強打したのでそれ以上に驚いたようだ。

「……だ、大丈夫ですか？」

「はうう……！！？ す、すいません！ ごめんなさいっ！！ 生まれてすいません！？ 勝手に息をしてすいませんっ！！ 細胞が

活動してすいませんっ!!」

「いえ……そんな、そこまで言わなくても……なんか、こっちこそすみません……」

頑なにメニューで顔を隠す少女は痛打した膝をさすりつつペコペコ平謝りを始め、それがあんまりにも必死なので、俺もつられて頭を下げてしまった。

「ちょ、すげえ自虐的過ぎるぞ……」。

尊大なノアとは対照的で相手しづらい。

「い、いいお天気ですねっ!?!」

「そうですね。あの、なぜ顔を隠してるんですか?」

「隠してません!」

「……でも、見えませんけど?」

「そ、それは……紫外線を警戒しているだけですっ! UVカットですっ!」

「は、はあ……そうですか」

「なら、店内の席に着けばいいのでは……?」

そう思ったが、この手の奇怪な行動を執る人種に理路整然とした正論はまったく受け付けないことを俺は嫌というほど知っている。とりあえず追っ手ではなさそうなので適当に相槌を打っておく。

「まあ、今日は陽射し強いですからね」

「そ、そうなのですっ! いや……違うのですっ!」

「どっち!?!」

さすがにツッコミを入れると、女は俺にくるりと背を向け、「がんばれがんばれ!」と怨念のようにまた呟き始めた。

追っ手じゃないとしたら宗教の勧誘か?

「……」

「……ササツ!」

「あやしい。あやしさを大爆発だ。」

何気なく横からのぞきこもつとするとメニューで顔を隠す。反対側からのぞきこもつとしてもまた隠す。……そこまでされると何が

なんでも見たくなくなつてくるぞ。

それにしても、目の前に女性がいるというのに、なぜ俺の心は昂らん？

なぜ？ なぜだ？ ほわいつ？

確かに俺は無頼の輩をブツとばすブツちめる面罵するなどして相当疲れているが、どんなに疲れていても女性を嗅ぎ付けるセンサーの精度が鈍ったことは一度たりとないはず。

もしや……まさか……！？

目の前の少女は男だともいうのか！？

「……………」

脂汗をダラダラ流しながら懊悩している俺に怯え、少女は小動物のようにプルプルと震える。きつと正体を看破されて動揺しているのだろう。

「許さんツ！！」

「ひゃあ！？」

テーブルがヒビ割れるくらい叩いて憤激すると少女はビクツとなつて、その弾みでイスからずり落ちそうになった。

今だ！！

あわてた少女が座席の背もたれに手を掛け腰を浮かせた瞬間俺はメニユーを奪おうと素早く手を伸ばした。

「あ！？」

「やりにい！」

少女からメニユーを奪取し、念願の顔を拝んでやろうと視線を落とすブリツ！

した瞬間、チヨキで目を突かれた。

深々と。

「あああああ！！？ 目が！？ 目があああつ！？」

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ つ、つい！！ 本当にごめんなさい！」

飛行石の直射を浴びたかのような苦痛に悶えていると、目を突い

た悪逆非道なる少女から嵐のような陳謝の言葉を浴びせられる。

「クツ……おそろしい！！キサマア！人の目は突いちやいけな  
いと学校で教わらなかつたのか！？イケナイんだよ！！目は！  
突いたらっ！危ないからっ！！」

クソツタレ！！

油断してたとはいえ俺の目を突くとは……！！

おっかなびつくりしながら俺を気遣う少女はもう顔を隠していな  
いようだが、あふれる涙で視界が歪み、その顔がどうなのか、才力  
マなのか、今の俺にはそれすらまったく判らない。

「い、いいか！人はな、如何なる理由があるうと人の目を決して  
突いてはいけないんだッ！！」

「おいおい、アイツどっかで見たことないか？」

「そっいや、たしかＴＶで指名手配……」

まずい！気付かれた！

熱弁を奮うあまり視線が集まる危険を忘れていた！！

だが俺の体は考えるよりも早く危機に反応し、道行く青年二人に  
襲い掛かっていた。

ぶすりっ

そして気付いたら、中指で相手の鼻筋を滑らせるようにして目を  
突いていた。

深く。

「あっー！？ あーーっ！？ 目が、目があぁ！！？」

「ぎゃああぁっ！！？」

指の第一関節辺りまで指を突き入れられた青年達は、先ほどの俺  
と同様に悶え苦しむ。

悪いことをした。

だけどとっさのことだし、害意はなかったので俺はまったく悪く  
ない。悪くはないのだが……世知辛い世間はそれを認めてはくれな



いだろつ。

俺は振り返り、こんな過ちが二度と起こらぬようにと願い、少女に伝えた。

「人の目を突いたりしちゃいけないんだ!」

「は、はい……すいません。でも今、確か、目を……」

「言い訳をするな!」

「は、はい!?!」

「他人が目を突いたからといって、自分が同じように目を突いていいというのは大きな間違いだ!! 人の目を突いていいヤツはなっ、突かれる覚悟があるヤツだけだつ!!」

「は、はあ……?」

「あああ! 目があ!! 目があああ!!」

「うるせえ!! あっちいつてる!!」

「ひでえ!」

痛い痛いとうつとおしいので、”眼球痛いアピール”を続ける被害者二人の尻を思いつき蹴っ飛ばした。

まったく!

そんなにメガメガ主張したいならメガCDでもくれてやらあ!

代引き送料着払いでなつ!!

「それ単なる通販だろ!」 と吐き捨て、人ごみの中へ揉みく

ちやにされながら消えていった若人達。人の心を読まないで欲しい。

俺は迂闊にも注目を浴びてしまった愚を悔やみつつ、薄いオレンジの掛かったおぼろげな視界の中、ゆっくりと少女に向き直る。

「おや?」

が、居ない。

振り返ると少女が居ない。

そして視界は未だオレンジ色。

フィルターが掛かったように。

これは一体?

妙な胸騒ぎを感じながら不思議に思っていると、また背後から少

女の消え入りそうな声がした。

「あの、すいません……」

「え……？」

俺は冷や水を垂らされたように背筋がゾクリとした。

反射的に振り返ったがそれでも居ない。

（ 迅い！？ ）

少女は人ならざる動きをしている。

呼吸や、体熱や、行動の際にともなう 無機物が静止状態にあつてすら発生する微小な大気の流動変異 それすら寸毫も感じさせない信じ難い身のこなしで視界から 否、”俺の認識外”へと消えた。感覚器官を総動員してさらに深く周辺を探るもまったく感知出来ず、次第に心臓の拍動が高まり額に汗が滲む。

「あの……」

「ひいつ！？」

「ごめんなさい！ ふ、振り返らずに聞いてください！」

何の気配も無かった背後からまたまた、申し訳名無そうな少女の声。俺はパンツの中にハバネロ突っ込まれたくらい驚き、テーブルやイスを蹴散らし地べたに転がるが、そこから振り返ろうとは決してしなかった。

相手ののが確実に格上。

ならば下手に刺激しない方が良いと判断したからだ。

「な、何の御用でしょうか……？」

俺は得体の知れぬ感覚に寒気を覚えていた。自然と敬語になる。

武器の不携帯を確認出来るよう指を開いたまま両手を挙げ、敵意を感じさせないようゆっくりと立ち上がる。

「あの……無理なお願いを聞いていただいてありがとうございます。御眼のフィルムは危険な物ではありませんのでご安心ください」

「……フィルム？」

オレンジ色のこれか？

聞き慣れぬ単語に戸惑いながらソツと角膜をなぞると、確かに指

先に、ツルツとしたプラスチックのような異物感がする。

「それはウチの技術部で特殊加工した架橋高分子フィルムです。えつと……それは光エネルギーによって形状が屈曲する性質を持ち、人体に有害な光を大幅に逸らすことが出来ます。屈曲中は視界がかなり制限されてしまいますが、可視光を照射すると元に戻りますので日常生活する分には差し障りはないはず……」

「何でまた、そんな物を目突きで……?」

「あ、あれは、メニューを無理に引つ張るからで……!! いえ……すいません。わたし……なんというか、その……赤面性でして。だから恥ずかしくて……」

「なかなか豪快な恥ずかしがり方だな」

「すいません……」

「うむ……!」

まだ目が霞んで顔の輪郭しか判らん!

声質からしてカワイイ系だと本能が告げているが……まあ、身によじるようなモジモジとした仕草で恥ずかしがっているのはどうにか判る。

なかなか面倒な性格の少女。

正直あんまり関わりたくないのだが……。

にしても任務だと? 何のだ?

「サンスさん、実はわたし……密偵なんです!」

「何イツ?!」

驚愕の事実には俺は眼を見開いた。

その拍子にフィルムがポロリと落ち、落ちたフィルムを追って視線が下に向けた瞬間　ブスリッ!

また少女に目を突かれた。

「ぎゃあああ!!? 目が!! 目があああつ!!」

「すいませんすいません!!」

「今、顔を見ないように気を付けてたよ!? アッパー気味に目エ突いたよね!? わざとやってないよね!!?」

「ごめんなさいごめんなさい!!」

平身低頭ひたすら謝りはすれど心に武神を宿す少女。性格は気弱なクセになんてアグレッシブなヤツだ!!

「……で、密偵なのキミ?」

「独断で主の前に姿を晒すなど越権行為だというのは十分承知しています。ですが……」

「う、うん……。それはいいけどさ、ずいぶん若いみたいけど?」

「今年で14になります」

「へ、へえ〜! 若いなあ〜!」

俺の密偵が複数名居る。それは予想していたのでさほど驚かないが、こんな年端もいかない少女を構成員に加えていたのはさすがに予想外だった。先の高度な遁術を見た限り資格は十二分にあるだろうが、それにしても若い。目がシヨボシヨボして顔は見えんが。

散乱したイスとテーブルを立て直し、奇異の視線を向ける凡愚どもに中指を立て、俺は詳しい話を訊こうと密偵の少女と向かい合っ  
て座る。騒ぎを聞き付けた警察がうるつきだしたのでガスマスクを  
着け直して。

密偵の少女は”シウリー”と名乗った。

霞む目をしきりにこすりながら名字をたずねると、「ないです」

とのこと。

何でないのかをたずねると、「家名を捨てましたから」  
とのこと。

「しゅこ〜、さっき何か言い掛けたみたいだけど、この、俺の目に  
突っ込んだコレと何か関係あんの? しゅこ〜」

「はい」

目をこすりながらたずねると、シウリーの声に緊張の色が含まれ  
た。

「”リシュ・タエイ”。……サンスさんは、この名に聞き覚えはあ  
りますよね?」

「あるよー」

北朝鮮の紅、台湾の白、中国の金……二つ名に色が付いてるのは関わらない方がいい　　というのは裏世界じゃ常識である。

紅尾の蛇。

白き女帝。

金猴。

金虎。

これらの名立たる化物どもは森羅万象、神に等しい存在として広く認知され、連中を前にして敵前逃亡しても災害に対する緊急避難と同じ扱いになるそう。色付きが1人動くだけで軍事バランスが連鎖的に大きく崩れ、世界中に緊張が走るとまで畏られている。蛇と遭ったことのある俺としては、さすがにそこまでは大げさだと思いが。

「そのリシュ・タエイが先日、日本に上陸しました。尾行に付けた三人から既に連絡が途絶え、突発的な電磁波障害に紛れて監視衛星も姿を見失ってしまい、今現在詳しい位置情報は把握出来ませんが、近くに居ることは間違いありません」

「……その根拠は？」

「リシュ・タエイが所属する”銀輪”は、地球外異種生命体よりもたらされたオーパーツや碑文などを収集管理する狂信的組織です。そしてこの近辺には、銀輪（彼ら）が、スポンサーである国家を捨てても欲する”モノ”が隠されているからです」

「その欲する”モノ”って……？」

「……」神の座”。北朝鮮より流出してから数年、世界中のありとあらゆる諜報機関が血眼になって探し求めている、この世界を意のままに掌握し得る代物です」

「神……だと？」

「……はい。」神の座”は人間を至高の存在へと高め、別次元への扉を開く為の鍵だそうです。”神の座”を手に入れることは銀輪の古くからの宿願です。彼らはそれを手に入れるため、既に領海内に

原潜まで配備し、日本　ひいては大国との戦争も辞さない覚悟で奪取に臨んでいます。特に、リシュ・タエイは見るだけで人を殺害出来る超異能の持ち主で、退路を断った彼らがどんな非常手段に出るかわかりませんし、道端で視線を交わしただけでも死に至らせるような能力を、こんな人通りの多い場所で発現されたら我々でも対処し切れません」

「ンで、眼を護るフィルムというわけか？」

「……はい。サンスさんの眼に取り付けさせて頂いたフィルムは、その力を幾許か逸らすため密偵に配られた物です」

「非常事態……というわけだな」

「はい……ですから、どうかこのまま御戻りください」

俺が確認するように言うと、シウリーは膝元を見て苦虫を噛み潰したように口籠った。

まだ何か隠してるような気がした。

だが　そんなことはどうでもいい。

「言いたいことは大体わかった。しゅこく、だが俺にも言い分がある」

「は、はい」

「お姉ちゃんをナンパしたい」

「……………はい？」

うつむいていたシウリーが「え？」と、とても意外そうに顔を上げた。その反応が意外だったので俺も少し戸惑う。

「わ、わかるよな？　ナンパ！　しゅこく、ナンパ………したいんだ

……………！！」

「……………えっと、それは握り締めた拳をブルブル震わせながら唇の端を噛みちぎるくらいでしょうか……………？」

「それくらいしたいんだッ！」

「ば　お、御命が危ないのですよ!？」

「今、「馬鹿!」とか言おうとしなかった？」

「き、聞き違いですっ！　それよりも、ふざけないでくださいっ！」

シウリーは首と両手をブンブン振って否定するが俺の優れた聴力は聞き逃さなかった。一生忘れないでおく。

「ふざけてなどいるものか。俺の人生は女性を口説き落とすことにある。人生を失ってまで生き永らえて……それで何を得るというのだ？」

「人並みの幸福が得られます」

「人並みじゃ嫌なんだよ！ ゴージャスに生きたいんだ！ 毎日お寿司で毎日ステーキで毎日ゴルフで毎日ジャグジーで毎日お姉ちゃんがいっぱいの人生が俺にふさわしいんだよお！」

「な、何ですかその、小学生が想い描くお金持ちみたいな生き方！？」

「と・に・か・く、危険だからといってナンパをあきらめるような生き方は俺にふさわしくないんだッ！ イキたいんだよ！」

俺は立ち上がり、テーブルをバンバン叩いて熱弁を奮った。

命果てるなら果てよ！ 尽きるなら尽きよ！ と言わんばかりに「……わ、わかりましたから落ち着いて！ そ、そんなに身を乗り出さないでください……じゃないと」

「じゃないと？」

「あ、もう、ダメ えいやっ！」

「じじじきりっ」

シウリーが俺の顔を両手で掴んで横におもいつきし捻った。

首の骨から素晴らしいイイ音がした。

「ぎゃああああッ！！？」

「あ………すみません！」

密偵っ娘シウリーのゴリラのような怪力によって、俺の首はほぼ真後ろを向いていた。

「うぎゃああ！！？ く、首が、首の骨がアアアッッ！！ ありえない方向にイイツッ！！？」

「すみませんすみません!! ごめんなさいごめんなさい!!」

エクソシストに除霊されそうなくらい首がリーガン気味の俺に、シウリーはひたすら頭を下げる。陳謝する。テーブルに額をゴツスンゴツスン叩き付けて謝っているいるようだが、首を捻られた状態ではイマイチ判然としない。

「何すんだよおお!! 首が半分ちよいくらい回つただろおお!! ? とつさに中国拳法で首の骨外さなきや死んでたぞツ!? ” つい” やつていいレベルじゃねえぞ!?”

「すみませんすみません!!」

謝って済むものかつ!

警察から頑強なシルバリングを頂戴するくらいの超暴力だぞ!

許されねえよ!

こ、このアマ……態度こそ控えめで大人しいが、内に秘めた凶悪さはノアの比じゃない。猛獣だ。超魔生物だ。十五で不良と呼ばれ、さわるものみな傷つける、ギザギザハートなヤツだ!

「あの、わたし十四歳ですけど……」

「心読まないで!?”

モノローグにちよくちよく介入されるのは心臓に悪い。ドキリとしてつい、女の子連れの幸せそうな通行人に飛び掛りそうになった。というか飛び掛っていた。

「じゃあああ~~~~っ!!」

俺は猛然と少年の背後から襲い掛かり、相手の両手両足を極めながら地面を背に宙づりにし、風孕む帆のように体をギリギリ弓なりにしならせて苦しめた。

これぞロメロ・スペシャル。

「いやああ!!? サトシを離してええ!!」

「ああん、”サトシ”イ!? ポケモンかつ!? ポケモンゲットですかっ!?”

「うああああつ!!!?”

俺が仕掛けたロメロ・スペシャルによって、黄色いネズミを酷使



してそんな赤帽の若者サトシが苦痛に喘ぎかぶりを振る。それを見た連れの少女は何も出来ずに悲鳴を上げた。

「ちょ、ちょっと！ 何してるんですかっ！？ やめてください！」「やだっ！」

シウリーがびっくりして即座に止めに入るが、熱くなった俺の体はもう止まらない。

セーブポイントが見つからずに約束の時間をオーバーしてファミコンやってると、台所から角を生やしてやって来たお母さんに「取り上げるわよ」とこっぴどく叱られ、お願いだからもうちょっと……一生のお願いだからあとちょっと……そんな、胸が締め付けられそうな心境。

まあはつきり言って、サトシも連れの女の子も初対面だし特に恨みもない。それどころかやってることは暴漢のソレ。だがそれでもざまあ。

超さまあ。

フォーエバーさまあ。

ピンゾロさまあ。

そして十秒ほどそんな悶着が続くと、サトシは激痛に耐えかねて失神。

チヨロロロ……

そして失禁した。

下にいる俺にも生温かい被害が……でもっ！！

「うおっしゃあああっ！！！」

俺はサトシを放り捨て、両腕を振り上げ全身で喜びを表現した。その場に膝を着き、勝利に感涙し咽び泣く。

「……………」

「馬鹿っ！ 馬鹿馬鹿っ！」

おや？

せつかく勝利したというのに周囲から得られる賞賛の反応は薄く、連れの女の子なんか泣きながらバックで俺の背を叩いてくる。

「む、むう……」

予想外の反応に俺は戸惑った。

俺は過去に2728回くらい道行くカップルに戦いを挑んで、その内の1499回くらいは失神させ失禁に追い込んだ。このパターンに入ると大抵の女の子はコソコソ逃げるはずなのだが……？

認めなくはない。

断じて認めたくはないが、認める他にあるまい。

失神失禁程度では二人の強い絆は離れなかったようだ。

俺は喫茶店のマスターに頼んで油性ペンを拝借し、気を失っているサトシの額に、太い方で「勝者」と書き記しておいた。栄光のサインである。

「ちよっ……まだやりたいの!？」

「いや、負けたよ……」

ナワバリに侵入して来た敵を威嚇するネコのように目を剥く少女にサインペンを放り、俺は背を向けた。

さらば時代の勝者。

おめでとうサトシ。我の強い少女。

俺は負けた。

敗者はただ黙って去るのみだ。

決して警察の姿がチラツと見えたからではない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0499ba/>

---

ひどい人・改

2012年1月1日00時48分発行